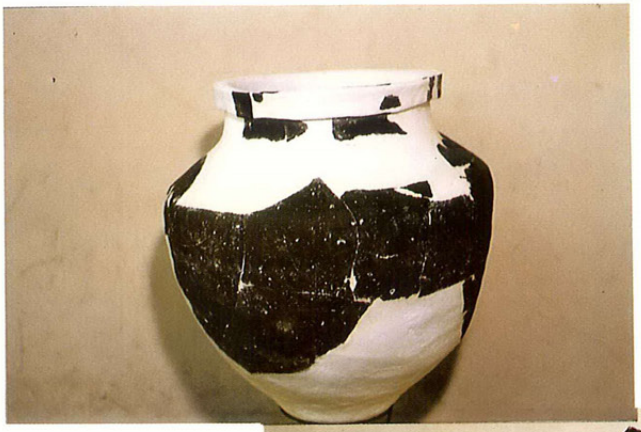
都城市文化財調査報告書　第７集

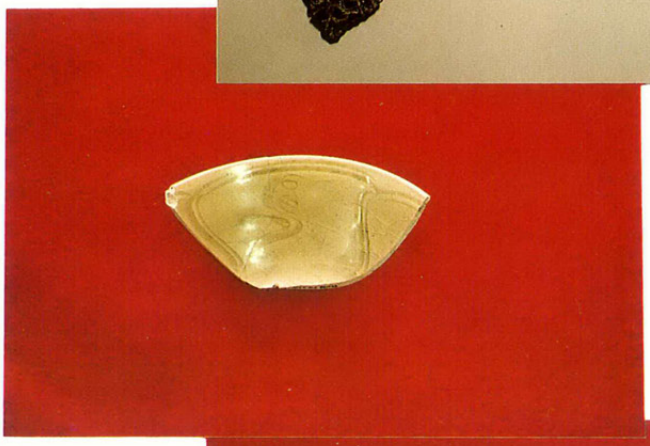
松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡

（祝吉・郡元地区区画整理事業に伴う発掘調査）

1989．3

都城市教育委員会





序

この報告書は都市計画事業郡元・祝吉地区区画整理事業に伴い、都城市教育委員会が都城市区画整理課の依頼を受けて緊急発掘調査をおこなった遺跡の調査成果です。

当地の区画整理に係る発掘調査は昭和55・56年にひきつづき当報告書である第３次調査が昭和60年７月より12月までの約５か月間、第４次調査が昭和61年７月より10月までの約３か月間実施し、中・近世を中心とした貴重な遺構・遺物を検出し、現在まで現地での第６次の発掘調査を完了したところであります。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究資料として活用していただければ幸いです。

また、発掘調査から出土資料の整理・報告書作成に至るまで県文化課や出土資料指導を賜った先生方をはじめ、発掘調査に従事していただいた地元の人々に御指導・御協力を賜り厚く御礼申し上げます。

平成元年３月

教育長　久味木　福　市

例　　言

1．本書は、都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．掲載した遺跡は，都城市郡元町所在の松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡である。なお、松原地区第Ⅰ・Ⅱ遺跡については本報告であるが、松原地区第Ⅲ遺跡については概要報告である。

3．本書の執筆は、各遺跡の調査担当者が協議分担して行ない、総編集は都城市教育委員会社会教育課主事 矢部喜多夫 があたった。

総　目　次

口絵カラー

口絵１．　空中写真

口絵２．　大溝・１号溝・２号溝(上)　東側ピット群(下)

口絵３．　大溝セクション(上)　２号井戸セクション(下)

口絵４．　松原第Ⅰ・Ⅲ遺跡出土遺物

松原地区第Ⅰ遺跡……1

松原地区第Ⅱ遺跡……207

松原地区第Ⅲ遺跡……229

付論　松原地区の遺跡より出土した木材及び木材炭火物……257

松原地区第Ⅰ遺跡出土の鉄滓、刀鐔の金属学的調査……267

松原地区第Ⅰ遺跡

例　　言

1．本書は都市計画事業祝吉・郡元区画整理事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査である。

2．遺跡の所在地は松原地区第Ⅰ・Ⅱ遺跡が都城市郡元町字松原である。

3．調査期間は昭和60年７月15日から昭和60年12月６日まで実施した。

4．出土遺物（陶磁器類）に関しては佐賀県立陶磁文化館　大橋康二氏の指導を得た。
　また、炭化物及び鉄滓の同定についてそれぞれ宮崎大学農学部教授　大塚誠氏、新日本製鉄株式会社　大澤正巳氏に玉稿をいただいた。

5．遺物の実測・トレースは、重永、矢部が行ない桒畑光博氏の協力を得た。写真・編集は矢部があたった。また、本文執筆は分担しておこないそれぞれ文末に記した。

6．出土遺物は都城市教育委員会が保管している。

7．調査組織は下記のとおりである。

発掘調査の組織

発掘調査主体者	都城市教育委員会	
発掘調査責任者	都城市教育長	久味木　福市
発掘調査事務局	都城市教育委員会	
	都城市立図書館・郷土館長	宮田　基久
	同　館長補佐	永山　勝美
	同　主　事	穎川　孝生
発掘調査担当者	都城市文化財専門員	重永　卓爾
	図書館・郷土館　主事補	矢部喜多夫
発掘調査補助員	鹿児島大学考古学専攻卒	上田　耕
	同　（試掘）	坪根　伸也
	同　４年	吉本　正典

発掘調査指導　宮崎県教育庁文化課　面高　哲郎
同　永友　良典
同　長津　宗重
同　北郷　泰道
同　日高　孝治
調査協力者　都城市文化財調査委員　児玉　三郎
宮崎県教育庁文化課　谷口　武範
鹿児島県職員　東　和幸

発掘作業員
藤井良政　楠見信利　野口虎男　浜田寛　白浜兼利　柳橋秀冶　下田代清海　岩切始広
上村弘幸　坂元啓助　児玉厚郎　東憲章　田中浩志　田中健児　森山浩　黒木鉄也
園田耕平　池田ユキ　岩切ユキエ　岩切ユキ子　岩切ミキ　大盛祐子　蒲生ミツ子
黒田朝子　坂元トミ子　白浜スミ子　白浜トヨ子　杉尾イツエ　高橋光子　立山ミヨ子
立山キミ子　長友キヨミ　長友ミチ子　中村ミヤ子　野口チエ子　浜田幸子　松崎みえ子
宮元キミエ　宮元カズ子　安丸チズ子
重機　長友

整理作業
大盛祐子　藤崎久美代

昭和62年度　整理作業

都城市教育委員会
社会教育課　課　長　池田　正敏
課長補佐・文化係長　藤崎　儀彰
都城市文化財専門員　重永　卓爾
主　事　矢部　喜多夫

整理作業員　大盛祐子　児玉信子　猪俣幸千代　奥登根子

目　　次

例　　言
本文目次
図版目次
写真図版目次
表　目　次

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経過…… 1
Ⅱ．1　遺跡の位置と環境…… 2
　　2　都城市の主要遺跡…… 5
Ⅲ．層　序…… 9
Ⅳ．調査の概要…… 15
Ⅴ．遺構・遺物
　　1　縄文時代　　縄文土器…… 16
　　2　中世・近世の遺構、遺物…… 17
　　（1）大溝…… 17
　　（2）溝状遺構…… 33
　　（3）掘立柱建物…… 51
　　（4）井戸遺構…… 68
　　（5）竪穴遺構…… 73
　　（6）土壙…… 77
　　（7）その他の遺物…… 91
　　（8）出土遺物観察表…… 109

Ⅵ．まとめ…… 120

図　版　目　次

Fig1　松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡調査区グリッド図……3・4
Fig2　松原地区遺跡分布図（1／25,000）……2
Fig3　都城市内主要遺跡分布図……7・8
Fig4　松原第Ⅰ遺跡東西方向土層断面図……11・12
Fig5　松原第Ⅰ遺跡南北方向土層断面図……13・14
Fig6　松原第Ⅰ遺跡出土縄文土器（1／3）……16
Fig7　松原第Ⅰ遺跡大溝（1／100）……27・28
Fig8　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－1（1／3）……20
Fig9　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－2（1／3）……21
Fig10　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－3（1／3）……22
Fig11　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－4（1／3）……23
Fig12　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－5（1／4）……24
Fig13　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－6（1／3）……25
Fig14　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－7（1／3）……26
Fig15　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物分布状況図（1／50）……29・30
Fig16　松原第Ⅰ遺跡大溝セクション……31・32
Fig17　松原第Ⅰ遺跡1号溝内出土遺物（1／3）……35
Fig18　松原第Ⅰ遺跡2号溝（1／100）……37・38
Fig19　松原第Ⅰ遺跡2・3・4・5・6・7号溝……39・40
Fig20　松原第Ⅰ遺跡2号溝出土遺物（1／3）……36
Fig21　松原第Ⅰ遺跡6・13号溝内出土遺物（1／3）……41
Fig22　松原第Ⅰ遺跡4号溝内出土遺物（1／3）……42
Fig23　松原第Ⅰ遺跡3・5号溝内出土遺物（1／3）……43
Fig24　松原第Ⅰ遺跡7号溝内出土遺物（1／3）……44
Fig25　松原第Ⅰ遺跡7号溝内出土遺物－2（1／4）……45
Fig26　松原第Ⅰ遺跡7号溝内出土遺物－3（1／4）……46
Fig27　松原第Ⅰ遺跡9号溝……47
Fig28　松原第Ⅰ遺跡8・9・11号溝内出土遺物（1／3）……48
Fig29　松原第Ⅰ遺跡溝セクション……49・50
Fig30　松原第Ⅰ遺跡1号掘立柱建物……53・54
Fig31　松原第Ⅰ遺跡2号掘立柱建物……57

Fig 32　松原第Ⅰ遺跡３・４・５号掘立柱建物……55・56
Fig 33　松原第Ⅰ遺跡６号掘立柱建物…… 58
Fig 34　松原第Ⅰ遺跡７号掘立柱建物…… 59
Fig 35　松原第Ⅰ遺跡８号掘立柱建物…… 60
Fig 36　松原第Ⅰ遺跡９号掘立柱建物…… 61
Fig 37　松原第Ⅰ遺跡９号掘立柱建物柱穴内出土遺物（１／３）…… 62
Fig 38　松原第Ⅰ遺跡掘立柱建物柱穴内出土遺物（１／３）…… 62
Fig 39　松原第Ⅰ遺跡10号掘立柱建物（１／３）…… 63
Fig 40　松原第Ⅰ遺跡10号掘立柱建物柱穴内出土遺物（１／３）…… 64
Fig 41　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－１（１／３）…… 65
Fig 42　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－２（１／３）…… 66
Fig 43　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－３（１／３）…… 67
Fig 44　松原第Ⅰ遺跡１号井戸及び出土遺物（１／３）…… 68
Fig 45　松原第Ⅰ遺跡２号井戸（１／３）…… 69
Fig 46　松原第Ⅰ遺跡３号井戸（１／３）…… 70
Fig 47　松原第Ⅰ遺跡３号井戸内出土遺物（１／３）…… 71
Fig 48　松原第Ⅰ遺跡５号井戸内出土遺物（１／２）…… 72
Fig 49　松原第Ⅰ遺跡４号井戸(１／３）及び出土遺物(１／３）…… 72
Fig 50　松原第Ⅰ遺跡１号竪穴遺構(１／３）及び出土遺物(１／３）…… 74
Fig 51　松原第Ⅰ遺跡２号竪穴遺構(１／３）及び出土遺物(１／３）…… 75
Fig 52　松原第Ⅰ遺跡３号竪穴遺構(１／３）及び出土遺物(１／３）…… 76
Fig 53　松原第Ⅰ遺跡特殊土壙（１／３）……79・80
Fig 54　松原第Ⅰ遺跡特殊土壙内出土遺物（１／３）…… 78
Fig 55　松原第Ⅰ遺跡１号土壙（１／２）…… 81
Fig 56　松原第Ⅰ遺跡１号土壙内出土遺物（１／４）…… 82
Fig 57　松原第Ⅰ遺跡20(下)・23(上)号土壙（１／３）…… 84
Fig 58　松原第Ⅰ遺跡18(地下式)・19 号土壙(１／３)及び出土遺物…… 85
Fig 59　松原第Ⅰ遺跡29号土壙（１／３）…… 86
Fig 60　松原第Ⅰ遺跡30号土壙及び出土遺物（１／３）…… 87
Fig 61　松原第Ⅰ遺跡31(下)・32(上)号土壙（１／３）…… 88
Fig 62　松原第Ⅰ遺跡土壙内出土遺物（１／３）…… 89
Fig 63　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁１（１／３）…… 91
Fig 64　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁２（１／３）…… 92
Fig 65　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁３（１／３）…… 93

Fig 66　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁４（１／３）…… 94
Fig 67　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―白磁（１／３）…… 95
Fig 68　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青花・染付（１／３）…… 96
Fig 69　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―染付（１／３）…… 97
Fig 70　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―瀬戸・常滑・東播系（１／３）…… 98
Fig 71　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―備前（１／４）…… 99
Fig 72　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―土師器１（１／３）……100
Fig 73　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―土師器２（１／３）……101
Fig 74　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―在地系土器１（１／４）……102
Fig 75　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―在地系土器２（１／４）……103
Fig 76　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―金属製品（１／３）……104
Fig 77　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―石製品１（１／３）……105
Fig 78　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―石製品２（１／３）……106
Fig 79　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―石製品３（１／３）……107
Fig 80　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―古銭（１／２）……108

写真図版目次

ＰＬ．１　松原第Ⅰ遺跡土層断面図（カラー）…… 9
ＰＬ．２　松原第Ⅰ遺跡出土縄文土器…… 16
ＰＬ．３　松原第Ⅰ・Ⅱ遺跡航空写真（１／3000）……135
ＰＬ．４　松原第Ⅰ・Ⅱ遺跡航空写真（１／750）……136
ＰＬ．５　松原第Ⅰ遺跡大溝全景及び側壁落込み……137
ＰＬ．６　松原第Ⅰ遺跡大溝内遺物出土状況…… 138
ＰＬ．７　松原第Ⅰ遺跡大溝・１号・２号溝全景…… 139
ＰＬ．８　松原第Ⅰ遺跡大溝・溝検出状況…… 140
ＰＬ．９　松原第Ⅰ遺跡西側地区溝検出及び完掘状況…… 141
ＰＬ．10　松原第Ⅰ遺跡西側地区土壙及び柱穴出土状況…… 142
ＰＬ．11　松原第Ⅰ遺跡東側地区柱穴出土状況…… 143
ＰＬ．12　松原第Ⅰ遺跡２号井戸…… 144
ＰＬ．13　松原第Ⅰ遺跡３号井戸…… 145
ＰＬ．14　松原第Ⅰ遺跡４号井戸…… 146
ＰＬ．15　松原第Ⅰ遺跡１号竪穴遺構…… 147
ＰＬ．16　松原第Ⅰ遺跡２号竪穴遺構…… 148
ＰＬ．17　松原第Ⅰ遺跡３号竪穴遺構…… 149
ＰＬ．18　松原第Ⅰ遺跡特殊土壙…… 150
ＰＬ．19　松原第Ⅰ遺跡１号土壙及び遺物出土状況…… 151
ＰＬ．20　松原第Ⅰ遺跡22号・20号・23号・24号土壙…… 152
ＰＬ．21　松原第Ⅰ遺跡23号・24号・18号土壙…… 153
ＰＬ．22　松原第Ⅰ遺跡30号・31号・32号土壙…… 154
ＰＬ．23　松原第Ⅰ遺跡西側地区柱穴出土状況…… 155
ＰＬ．24　松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況－１…… 156
ＰＬ．25　松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況－２…… 157
ＰＬ．26　松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況－３…… 158
ＰＬ．27　松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況－４…… 159
ＰＬ．28　松原第Ⅰ遺跡大溝セクシェン…… 160
ＰＬ．29　松原第Ⅰ遺跡２号溝セクション…… 161
ＰＬ．30　松原第Ⅰ遺跡２号溝…… 162
ＰＬ．31　松原第Ⅰ遺跡２号・３号及び４号・５号溝切り合い状況…… 163
ＰＬ．32　松原第Ⅰ遺跡２号・３号溝セクション…… 164

ＰＬ．33　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－１…… 165
ＰＬ．34　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－２…… 166
ＰＬ．35　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－３・４…… 167
ＰＬ．36　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－５…… 168
ＰＬ．37　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－６…… 169
ＰＬ．38　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－７…… 170
ＰＬ．39　松原第Ⅰ遺跡溝１号溝内出土遺物…… 171
ＰＬ．40　松原第Ⅰ遺跡溝２号溝内出土遺物…… 172
ＰＬ．41　松原第Ⅰ遺跡溝４号溝内出土遺物…… 173
ＰＬ．42　松原第Ⅰ遺跡溝３号・５号溝内出土遺物…… 174
ＰＬ．43　松原第Ⅰ遺跡溝６号･13号溝,５号井戸,21号･26号土壙及び西側ピット群内出土遺物 175
ＰＬ．44　松原第Ⅰ遺跡溝７号溝内出土遺物－１…… 176
ＰＬ．45　松原第Ⅰ遺跡溝７号溝内出土遺物－２…… 177
ＰＬ．46　松原第Ⅰ遺跡溝７号溝内出土遺物－３…… 178
ＰＬ．47　松原第Ⅰ遺跡溝８号･９号･11号溝内出土遺物…… 179
ＰＬ．48　松原第Ⅰ遺跡掘立柱建物柱穴及び１号井戸内出土遺物…… 180
ＰＬ．49　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－１…… 181
ＰＬ．50　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－２…… 182
ＰＬ．51　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－３…… 183
ＰＬ．52　松原第Ⅰ遺跡３号井戸内出土遺物…… 184
ＰＬ．53　松原第Ⅰ遺跡４号井戸内出土遺物…… 185
ＰＬ．54　松原第Ⅰ遺跡１号･２号･３号竪穴遺構内出土遺物…… 186
ＰＬ．55　松原第Ⅰ遺跡特殊土壙内出土遺物…… 187
ＰＬ．56　松原第Ⅰ遺跡土壙内出土遺物…… 188
ＰＬ．57　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－青磁１…… 189
ＰＬ．58　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－青磁２…… 190
ＰＬ．59　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－青磁３…… 191
ＰＬ．60　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－青磁４…… 192
ＰＬ．61　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－白磁…… 193
ＰＬ．62　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－青花・染付…… 194
ＰＬ．63　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－染付…… 195
ＰＬ．64　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－瀬戸・常滑・東播…… 196
ＰＬ．65　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－備前…… 197
ＰＬ．66　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－土師器１…… 198

ＰＬ．67　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－土師器２……199
ＰＬ．68　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－在地系……200
ＰＬ．69　松原第Ⅰ遺跡出土金属製品……201
ＰＬ．70　松原第Ⅰ遺跡出土石製品－１……202
ＰＬ．71　松原第Ⅰ遺跡出土石製品－２……203
ＰＬ．72　松原第Ⅰ遺跡出土石製品－３……204
ＰＬ．73　松原第Ⅰ遺跡出土古銭……205

表　目　次

表１　都城市の主要遺跡地名表……6
表２　土壙一覧表……90

Ⅰ．調査に至る経緯

祝吉・郡元地区区画整理事業は、昭和54年より毎年実施されてきており、昭和60年度までに約２０㌶の土地が区画整理されている。昭和55年７月祝吉地区で区画整理造成中に弥生土器が出土し、遺跡発見届が提出され遺跡の存在が明らかになった。このことにより昭和55年、翌56年と祝吉遺跡の発掘調査を実施している。また、昭和57年には区画整理による道路拡幅の際古墳時代の土器４点がほぼ完形で出土し、都合３ケ所で遺跡の存在が確かめられている。昭和60年４月、市区画整理課より60年度の事業計画区域における埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。計画区域は昭和56年発掘調査の祝吉遺跡から小川をはさんで東側隣接地約３㌶で、調査区域は台地の縁辺部を含んでいるため遺跡の可能性が十分考えられた。同年４月30日より３日間事業計画内外約10地点で試掘調査を実施した。結果４地点において御池ボラ層上面で、溝状遺構・柱穴等の遺構や青磁・土師器片などの中世から近世にかけての遺物が出土した。これらの遺跡は字名をとり松原地区遺跡群として一括して把えることにした。

昭和60年５月末、松原地区の区画整理事業の決定により２地区で遺跡の現状保存が困難となったため区画整理課と協議した結果、同年７月末より約４ケ月間、松原地区第Ⅰ遺跡（約6500㎡）・松原地区第Ⅱ遺跡（約2000㎡）の発掘調査を都城市教育委員会が実施し記録保存の措置をとった。

（矢部）

Ⅱ．１．遺跡の位置と環境

松原地区遺跡群は、宮崎県都城市郡元町字松原に所在する。

都城市は宮崎県の南西部にあり、東に鰐塚山地、西には霧島山地に囲まれた盆地状の地形である。北は高原町、山田町、高崎町、高城町と向かい、東は三股町、日南市、串間市と接し、南は鹿児島県曽於郡末吉町、財部町と境界をなす海岸線のない内陸部に位置している。都城市の標高は市街地で150m最も高い標高は1,200mで、市の広がりは東西約30.5km、南北約20.4km、周囲約100km、面積は306.70km²程である。市の環境は平均気温が夏は26°(最高36°）冬は5°(最低－8°)で、降水量は冬期100mm以下夏期400～600mm程で、冬は“霧島おろし”という季節風が吹き夏は盆地特有の暑さである。

松原地区遺跡群は大淀川支流の沖水川左岸、鰐塚山地より北へせりだした都城市街地を形成する台地の縁部の標高約150m程に立地し、沖水川左岸の低地水田面との比高差が約10m程ある。周辺には小川をはさんで西へ50～60m程離れたところに祝吉遺跡（昭和56年発掘調査）があり、その他昭和61年度遺跡群細分布調査によって本遺跡の東側に久玉遺跡・白拍子遺跡などがある。また、これらより269号線をはさんで東へ1kmほどの三股町境に、島津家発祥の地とされる『祝吉御所跡』がある。これらのことから、沖水川左岸沿いの台地縁辺部はかなり広い範囲にわたり中世から近世にかけての遺跡が分布しているようである。

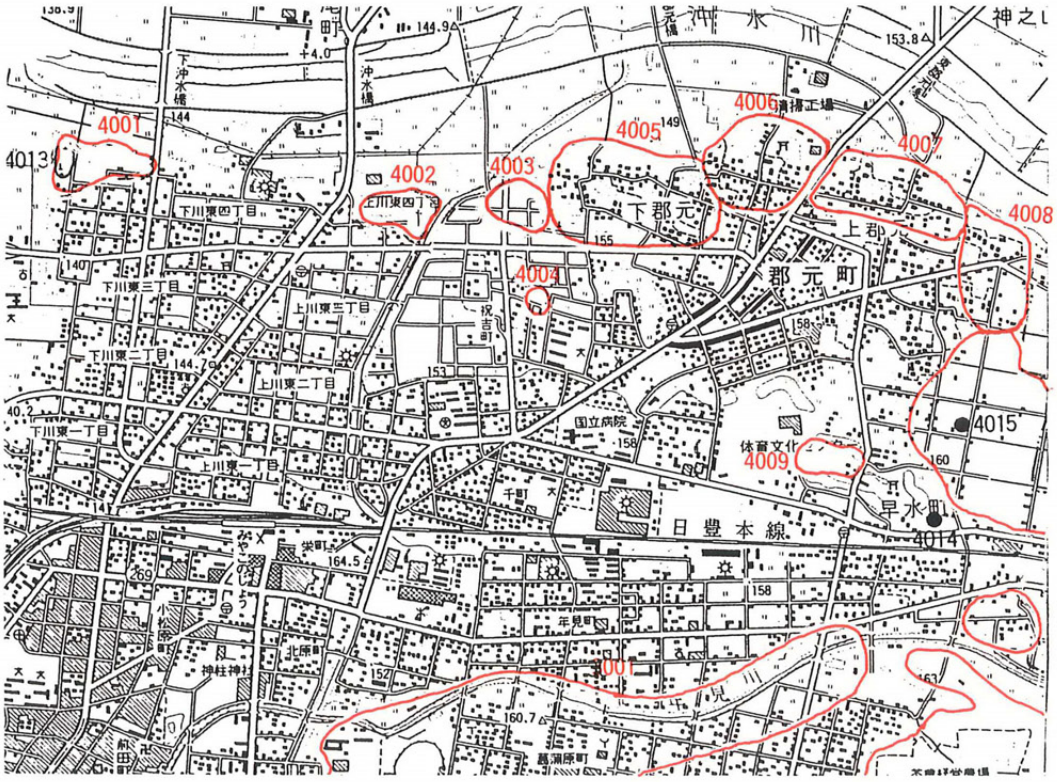


Fig2　松原地区遺跡分布図（1／25,000）

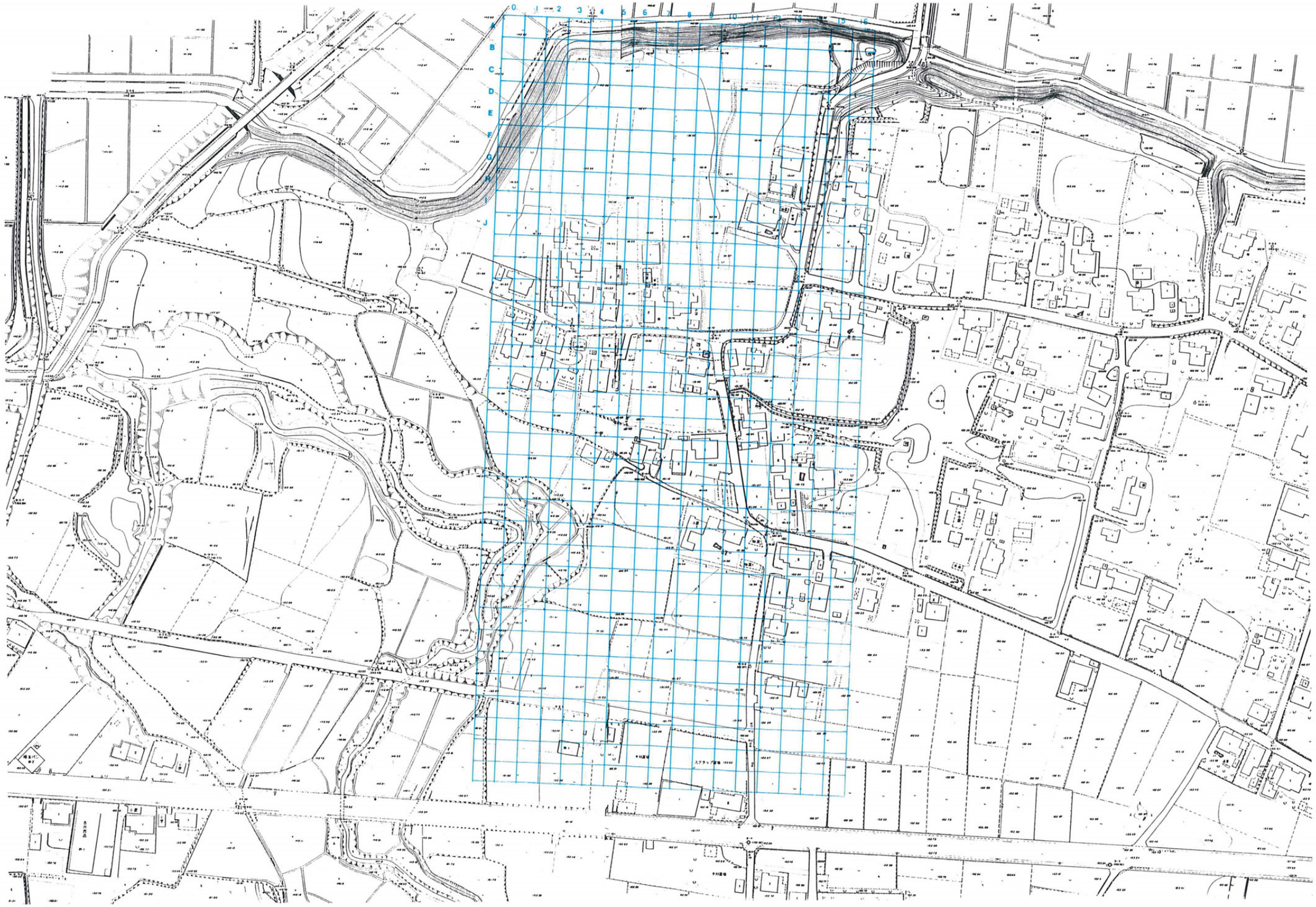


Fig1　松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡調査区グリッド図（1／2000）

２．都城市内の主要遺跡

先ず、都城市内の史跡関係の指定文化財をみると、国指定の史跡に今町一里塚、天然記念物に関之尾の甌穴、県指定の史跡に尾平野（二俣）洞窟、都城古墳、志和池古墳、沖水古墳、祝吉御所跡があり、市指定の史跡では都城（鶴丸城）跡、志和池城跡、安永（鶴翼城）跡、野々美谷城跡、平田かくれ念仏洞、五十市式縄文土器等があり、古墳時代と中・近世が中心となっている。

ところで、都城市内の遺跡の把握については昭和61年度より４ケ年計画で市内全域の詳細な分布調査を実施しているところであるが、２ケ年終了時点で遺跡数は179に上っており全域では相当の遺跡数に達すると考えられる。また、都城盆地では通称御池ボラ(降下軽石)が１～２ｍの厚さに堆積しているため縄文時代中期以前の遺跡は表面調査だけでは発見しづらいようである。

次に、市内の遺跡発掘調査をみると、[注1)]昭和12年に小林行雄によって尾平野（二俣）洞窟の調査が行われ縄文時代後・晩期の土器や獣骨等が出土し紹介されている。この洞窟は市内南東部に横たわる鰐塚山地のほぼ中央に位置し、洞窟眼下拾米程に安楽川が西流している。この山麓には他に押型文や貝殻文系の早期の土器も出土している。[注2)]昭和32年九州縦貫自動車道に伴い県教育委員会によって丸谷第１・２遺跡が発掘され、弥生時代終末の住居址が２基出土している。これが市内における最初の発掘調査である。昭和37年国道269号線の道路拡幅工事の際、アカホヤ層下の黒色土層内より器面全体に斜縄文を施した円筒型土器（いわゆる五十市式土器）が出土し縄文時代早期の遺跡まで確認された。また、当遺跡は昭和62年度遺跡詳細分布調査において試掘確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されず遺跡の中心は既に破壊されているようである。同じく、[注3)]県教育委員会によって昭和39年に発掘された弥生時代後期の方形周溝墓(？)や竪穴住居址等が出土した年見川遺跡がある。また、市内の４か所に古墳（高塚墳・地下式横穴）が群集している。[注4)]牧ノ原地下式横穴群は昭和41年県教育委員会が発掘調査したもので、遺跡は市街地を形成している台地に沿って西と東からそれぞれ流れこむ横市川と沖水川が合流する同台地縁部に立地し、地下式横穴25基が出土している。他、庄内・菓子野古墳群や志和池古墳群も昭和48年より随時地下式横穴の発掘調査を実施しており、この３地域の地下式横穴より各々蛇行剣が一振ずつ出土している特色がある。

（矢部）

注１）『宮崎県北諸県郡中郷村二俣尾平野洞窟住居址』「考古学」第８巻５号1937

注２）「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」（３）

注３）『宮崎県の考古学』石川恒太郎1968

注４）『地下式横穴の研究』石川恒太郎1973

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	松原地区遺跡	都城市郡元町字松原	縄文(晩) 中世～近世	昭和60・61年発掘
2	祝吉遺跡	都城市郡元町字祝吉	弥生(末)～古墳(初)	昭和55・57年発掘
3	沖水古墳	都城市早水町3886の1	古墳	
4	牧ノ原地下式横穴群	都城市川東4丁目字牧ノ原	古墳	昭和41年発掘
5	祝吉御所跡	都城市郡元町3420	鎌倉(中世)	県指定
6	年見川遺跡	都城市年見町	弥生・古墳	昭和39年発掘
7	成山遺跡	都城市豊満町字成山	縄文(後)	昭和43・47年発掘
8	尾平野洞窟	都城市安久町字下尾平野	縄文(後・晩)	県指定
9	下尾平野第2遺跡	都城市安久町字下尾平野	縄文(早)	平栫式，押型文
10	安久・中原遺跡	都城市安久町字中原	縄文(早)	昭和61年試掘調査
11	宮尾・立野遺跡	都城市今町字宮尾・立野	縄文(早)	五十市式縄文土器
12	都城古墳	都城市鷹尾1丁目3984番地	古墳	県指定
13	中尾山・馬渡遺跡	都城市蓑原町字中尾・ 馬渡・江内谷	縄文(晩)・弥(中)・古 古墳・中世	昭和61年発掘
14	加治屋遺跡	都城市南横市町字加治屋	弥(末)～古(初)	昭和63年発掘
15	母智丘原遺跡	都城市南横市町6691	弥(中)・平安・中世	昭和63年発掘
16	丸山遺跡	都城市関之尾町字丸山	縄文(早)	昭和49年発掘
17	庄内古墳	都城市菓子野町	古墳	昭和60年指定解除
18	菓子野地下式横穴群	都城市菓子野町	古墳	昭和57・59年発掘
19	丸谷第1遺跡	都城市丸谷町字榎木原	弥生(後)	昭和32年発掘
20	志和池古墳群	都城市下・上水流町	古墳	県指定
21	堂山遺跡	都城市丸谷町字堂山	縄文・古墳・平安	昭和63年発掘
22				
23				

表 1　　都城市の主要遺跡地名表

21
19
20
17・18
4
1
2
3
5
3
6
16
15
13
14
7
12
11
9
8
10

Ⅲ．層　　序

松原第Ⅰ遺跡は、沖水川左岸の都城市街地を形成している台地の北側最縁部の標高約148ｍ程に位置している。この台地と沖水川両岸にひろがる沖積低地（氾濫原）との比高差は８～10ｍ程であり、遺跡は東から西へ、また北側崖にむかって緩やかに傾斜している。

当遺跡の基本土層層序は次のとおりである。

第Ⅰ層：耕作土　　灰黒色砂質土層
調査区内で約20～30㎝の厚さである。

第Ⅱ層：灰白色降下火山軽石層（通称：白ボラ）
桜島を起源とする文明期(1469～1487)の降下火山軽石 Hue7.5Y18／2
自然堆積では中央部から東側地区で５～10㎝のブロック状で部分的に存在する。

第Ⅲ層：暗黒褐色弱粘質砂質土層（遺物包含層）
西側地区で約20㎝前後を測り東に進むにつれ30～40㎝と厚くなる。Hue10YR3／1

第Ⅳ層：暗黄褐色降下軽石層（通称：御池ボラ）
霧島火山系墳出の軽石で粒子径は１～２㎝で厚さは１ｍ程である。Hue2.5YR8／8

第Ⅴ層：漆黒粘質腐植シルト層　厚さ20㎝
Hue7.5YR1.7／1

第Ⅵ層：黄橙色ガラス質火山灰層
（通称:アカホヤ）厚さ30㎝
Hue10YR3／1

第Ⅶ層：灰黒色弱粘質細粒腐植土層　厚さ10㎝
Hue10YR3／1

ＰＬ１　松原第Ⅰ遺跡土層断面

第Ⅷ層：黒褐色硬質パミス混土層(通称:カシワバン)
（矢部）

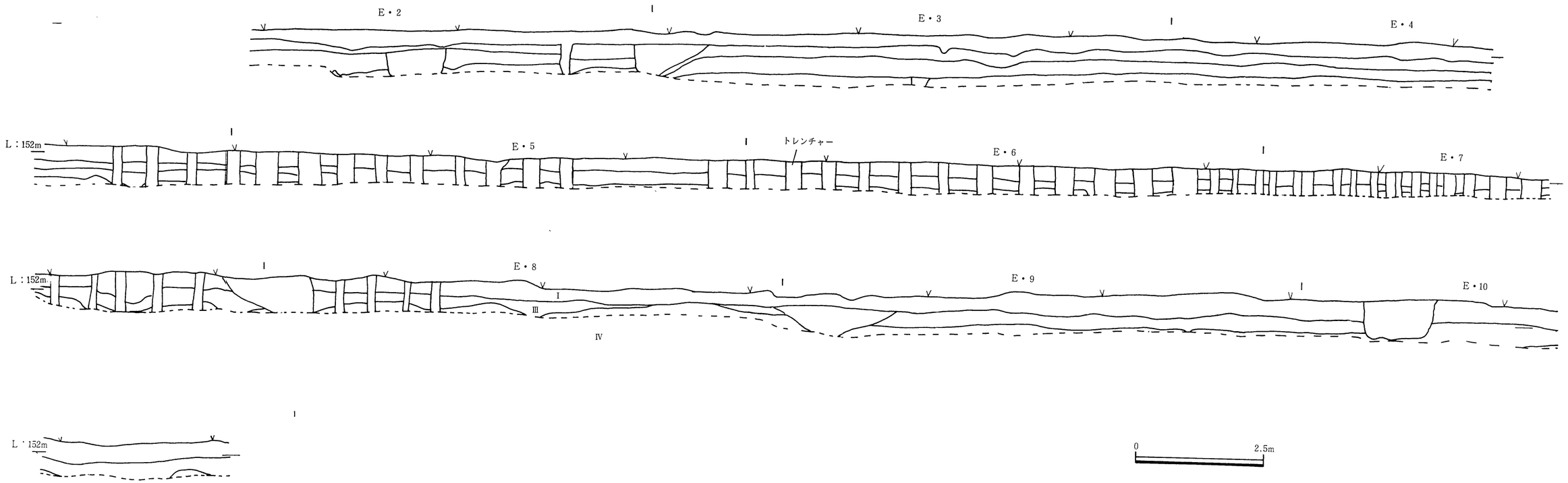


Fig4　松原第Ⅰ遺跡東西方向土層断面図

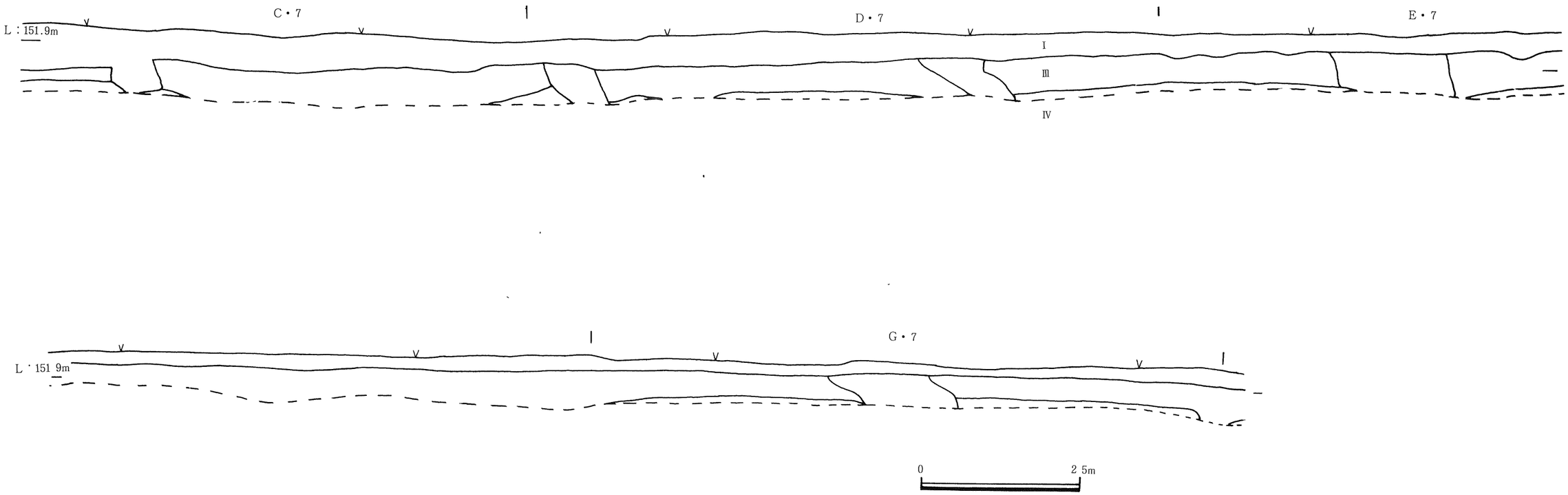


Fig5　松原第Ⅰ遺跡南北方向土層断面図

Ⅳ．調査の調査

松原地区遺跡群は、松原地区第Ⅰ遺跡・同第Ⅱ遺跡・同第Ⅲ遺跡と細分されるが、基本的には松原第Ⅰ遺跡と第Ⅲ遺跡は遺構に繋がりがあることから同一の遺跡としてとらえることができる。発掘調査が昭和60年・昭和61年と２回実施されているため、便宜上分けて取扱うことにする。

松原地区第Ⅰ遺跡の本調査は昭和60年７月15日から12月６日まで、松原地区第Ⅱ遺跡の本調査を昭和60年11月２日から11月14日まで実施した。調査はグリッド方法による10×10mのメッシュに区割し、またメッシュはN・S線に一致している。松原地区第Ⅰ遺跡は西から東に向かって（Fig１の左から右に）０～12まで、北から南に（Fig１の上から下に）A～Gの記号を付し、A・1，B・1，・・・・，G・12と呼称した。

遺跡の現状は畑地であったため、調査区内の農作物の補償や代替地の選定を区画整理課がおこなったのち調査にはいった。先ず、試掘調査により遺構確認面（御池ボラ層）まで浅いところで20㎝、深いところで80㎝を測った。遺物は遺構検出レベルより上位から出土し始めているが、第Ⅰ層（耕作土）からの出土はほとんどなかったため地表より約20～25㎝（耕作土）は重機により削平した。また、６区と７区の南北グリッド線とE区とF区の東西グリッド線を十文字に１m幅の土層観察用の畦を残した。表土剝ぎ・手掘り作業は、調査区中央の６・７区から東進し東側終了後西側にはいった。排土は調査区外に搬出することができないため周囲に積み上げていった。結果、最終的に遺跡を全掘することができなかった。

遺構の検出状況は、７区で南北に走行する２条の溝状遺構を検出し８区では第３層で幅４m程の自然礫(焼け石)や鉄滓等を含んだ第２層の落ち込みが南北方向に延びていた。遺構の性格が不明だったのでE・８区とF・８区、F・８区とG・８区のセクションに１m幅のトレンチを設けたところ深さ２m20㎝程の大溝であり、H・７区で西に屈曲していることもわかった。北東調査区では７条の溝状遺構が東西に錯綜し、他掘立柱建物跡１棟、井戸遺構１基、特殊土壙を確認した。南東区では切り合っているかなりの数のピット、竪穴遺構３基、井戸遺構３基が検出された。西側の大溝に囲まれた調査区では、掘立柱建物跡が数棟、井戸遺構２基、溝状遺構５条、土壙32基が出土した。これらの遺構は、遺物・埋土・切り合い等によりおおよそ３時期に区分できると思われる。

（矢部）

Ⅴ．遺構・遺物

１．縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、Ｃ・９区第Ⅲ層より出土した１点のみである。001は、鉢形土器の口縁部から胴上部の破片で推定口径10.8㎝を測る。胴部から頸部にかけて反りぎみに立ち上がり頸部で弱く『く』の字に屈折し、口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。口唇部はフラットで口縁部に６条、内面頸部にやや太い１条の凹線を施している。口縁部内外面は横方向の丁寧なナデ、頸部下の内外面では研磨されている。また、外面にはススの付着がみられる。

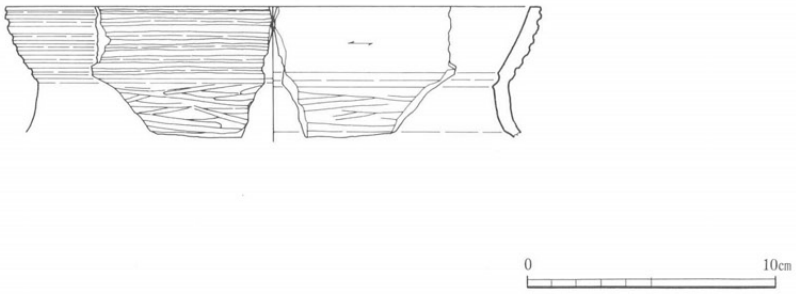
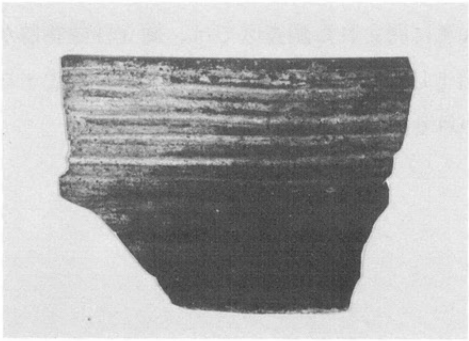


Fig6　松原第Ⅰ遺跡出土縄文土器（１／３）



ＰＬ．２　松原第Ⅰ遺跡出土縄文土器

2．中世・近世の遺構・遺物

（1） 大　溝（空掘）

当遺跡の主体をなす遺構である。８・９区をほぼ南北に走り、Ｈ・７区で西に屈曲しＨ・２～７区を西方に延びている。遺構は排土を周囲に積み上げたり家屋の関係で全掘することができなかった。北側はＡ・９区において台地縁である崖に達し、Ｈ・２～６区は排土や家屋等によってトレンチ法により大溝の走行を確認するのみに終った。さらにＨ・２区で大溝は西と南方向に分岐し、西方向に延びる方は同じく西側台地縁の崖に達するようで、他方は民家によって調査できずその後の方向はつかめていない。つまりこの大溝遺構は南北約70m、東西約80mの「⌋」型をなし、自然地形である北・西側崖（標高差約10m）を利用し方形（平行四辺形）に空間を区画している。この区画された面積は5,600㎡と推定される。

遺構は一部第Ⅲ層において落ち込みラインを確認することができるが、全体的な検出面は第Ⅳ層の御池ボラ層である。遺構は検出レベルにおいて幅380～440㎝、深さ200～220㎝を測り北側及び西側にいくほど浅くなっている。また、大溝の床面は第Ⅳ層、第Ⅴ層の漆黒粘質土を貫いて、第Ⅵ層のアカホヤ層まで達している。検出面からの落ち込み傾斜角は約45°であり、形状は基本的には断面逆フラスコ型であるが、三角形を呈しているところもある。

Ｄ・８～９区、Ｅ・８区、Ｆ・８区において、ボラ層の両傾斜壁に方形や楕円形の断面「Ｌ」字型の落ち込みがある。Ｄ・８区Fig７№２は長さ約330㎝、幅50㎝、奥行き50㎝の細長い方形プランである。Ｅ・８区 Fig７№８は長さ120㎝、幅65㎝、奥行き60㎝の楕円形プランである。これらがボラ壁の自然的な崩壊でないことは奥行きの深さと断面がほぼ垂直に立ち上がることなどからうかがえ、例えば、昇降用などの何らか機能をもっていたと考えられる。またＥ・８区Fig７№３は大溝の東側斜面の落ち込み際に、長さ300㎝、幅50㎝の長方形に近いプランの両端部に深さ70㎝、径50㎝のピットを含む掘り込みがある。これは大溝に渡す橋脚穴でないかと思われる。この外側に長さ20m程にピットが並んでおり柵列の存在も考えられる。また、大溝と１号構の間に遺構が存在していないことから土塁が存在した可能性もある。

大溝の埋土は基本的には第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層であり、これらと斜面から崩壊した御池ボラのの混ざり度合によって細分できる。当遺跡の鍵層である第Ⅱ層の白ボラ（文明期の降下火山軽石）が、溝の最上部から80㎝（検出面から上位３分の１）程のところに自然に流れ込むようにレンズ（半円弧）状に堆積している。

遺物は検出面よりやや上位から人頭大から拳大の焼け石を含む自然礫がかなりまとまって白ボラ層まで出土し、他青磁・白磁・染付・陶器・古銭・石鍋などもほぼ同一レベルより出土し下位にすすむほど遺物の量は減少している。また、最深部からは東播系須恵質の捏鉢が出土し、大溝の存在時期の下限を知る資料となっている。

大溝内出土遺物

青　磁

碗

002 は口縁部の破片で復元口径14.8㎝を測る。内面体部に画花文を有し、明緑色の釉で胎土は暗灰色である。004 は口縁端反りで復元口径は 8.8㎝を計る。内面体部に印花文を施している。釉は淡緑灰色で胎土は濁灰色である。005 は内面体部に画花文を施す。釉は明茶緑色で胎土は濁灰色である。006 も内部体面に画花文を有する破片で、釉は淡緑色で胎土は灰色である。007 は蓮弁文が施され、内外面とも二次的焼成を受け器表に細かい凹凸がある。釉は青緑色で胎土は濁灰色である。008 はヘラ描きによる蓮弁を有している。釉は明茶緑色で胎土は灰色である。009・010は端反り口縁、009 は復元口径17.4㎝、釉は淡緑色で胎土は暗灰色で貫入がある。010 は復元口径15.6㎝、釉は暗茶緑色で胎土は暗灰色である。011 は復元口径12.2㎝、線描による蓮弁が施される。

皿

003 は復元口径 9.4 ㎝で釉は淡緑灰色で胎土は灰色である。

012 は復元口径31.6㎝で、口縁は稜花をなし見込みは折枝花文が施されている。高台内部に砂の付着が見られる。釉は二次的焼成を受け、大部分黄緑色に変色し細かい気泡痕の凹凸がある。胎土は灰色で高台畳付まで施釉され高台内は釉がかき落とされている。器全体に貫入がある。

白　磁

碗

018・020・021はいずれも玉縁の口縁片である。018は淡白色の釉で胎土は淡灰色である。020 は胎土が灰白色で濁白色の釉が外部体面上位までわりと厚く施釉されている。

021 は釉が淡灰白色で、胎土は灰色である。

019 は体部中位でやや屈曲し立ち上がっており、体部外部の下位に弧状の浮文を有する。釉は灰緑色で、器壁は薄く、胎土は灰色である。

022～024は底部の破片で、022は復元口径が3.5㎝で、高台は削り出しが荒い。体部から底部は無釉である。

023は復元口径が6.4㎝で、内面体部下位に沈線上の段を有する。体部から底部は無釉である。

024は復元口径が3.8㎝で、内面見込みは蛇ノ目に釉がかきとられている。外部体面下位まで施釉されている。

染　付

025(H・3区)は伊万里天目釉（内面は透明釉）碗である。外面体部下位まで施釉され、高台

は無釉である。
026(Ⅰ・7区)は内部体面に山水文様を施した伊万里染付皿である。復元底径は5.5㎝である。
028(F・8区、E・8区)は復元底径10.7㎝で、内面体部にボタン花文様を施した伊万里（有田窯系）染付碗である。
029(Ⅰ・7区)は伊万里染付碗蓋である。外面に松竹文様を施し、口縁は無釉である。口径10.2㎝、器高3.6㎝である。

備　前

擂鉢

038 は復元口径26.0㎝を測り、7条の沈線を一組とした櫛目が推定7組ある。擂鉢面は斜めの刷毛目（条痕)、口縁部は内外とも横ナデが施されている。器壁は外面体部で巻き上げ成形による凹凸がみられ、胎土は5㎜大前後の砂粒をかなり含んでいる。外部から口縁部にかけて、ススの付着がみられる。
039は038同様、口縁部が肥厚せず立ち上がる口縁部の破片で内面は条痕が施されている。胎土に砂粒を含み色調は明灰色である。
040 は復元口径28.6㎝、器高11.8㎝、復元底径14.4㎝を測る。口縁部はつまみ出しの荒い突帯（断面三角形）を形成している。内外面とも横ナデが施され、内面はそのあと8条の沈線を一組とした櫛目が下から上へと掘り込まれている。器壁には胎土に砂粒を含むため、小さなヒビ（破裂痕）がはいり、色調は灰緑色を呈す。
041 は復元口径29.0㎝、器高11.0㎝、復元底径6.7㎝である。口縁部はつまみ出しのしっかりとした断面四角形の突帯を成している。内面は丁寧な横ナデ後、6条の沈線一組の櫛目を下から上へ施している。胎土に2㎜大前後の砂粒を多く含む。色調は灰褐色である。
042 も白ボラ層内出土で、口縁部は荒いつくり出しの突帯を形成し、内外面とも横方向のナデ仕上げである。胎土に1㎜～10㎜大の砂粒を含む。色調は灰色である。
043 は復元口径37.8㎝の大形の擂鉢である。口縁部直下に断面台形の突帯を廻し、口縁部は垂直に立ち上がる。内外面とも横方向のナデ仕上げで器壁はわりと薄い。色調は赤褐色を呈す。
044 は口縁部片で口縁直下に断面三角形の突帯を廻り、口縁は垂直に立ち上がる。内外面とも横方向のナデ仕上げで、色調は赤褐色である。
045・046・047 は胴部片である。045は外面にススの付着がみられる。046は白ボラ層内出土で内外とも横方向のナデ仕上げがされ、色調は灰色である。

東播系須恵質捏鉢

048 はF・8区大溝の最深部より出土していることから大溝の存在時期の下限を考えるうえで重要な遺物である。復元口径は32.0㎝で、底部は欠損し不明で、なだらかに立ち上がり口縁部は折り返し断面が三角形に肥厚している。胴部は内外ともナデ仕上げであるが、口縁肥厚面

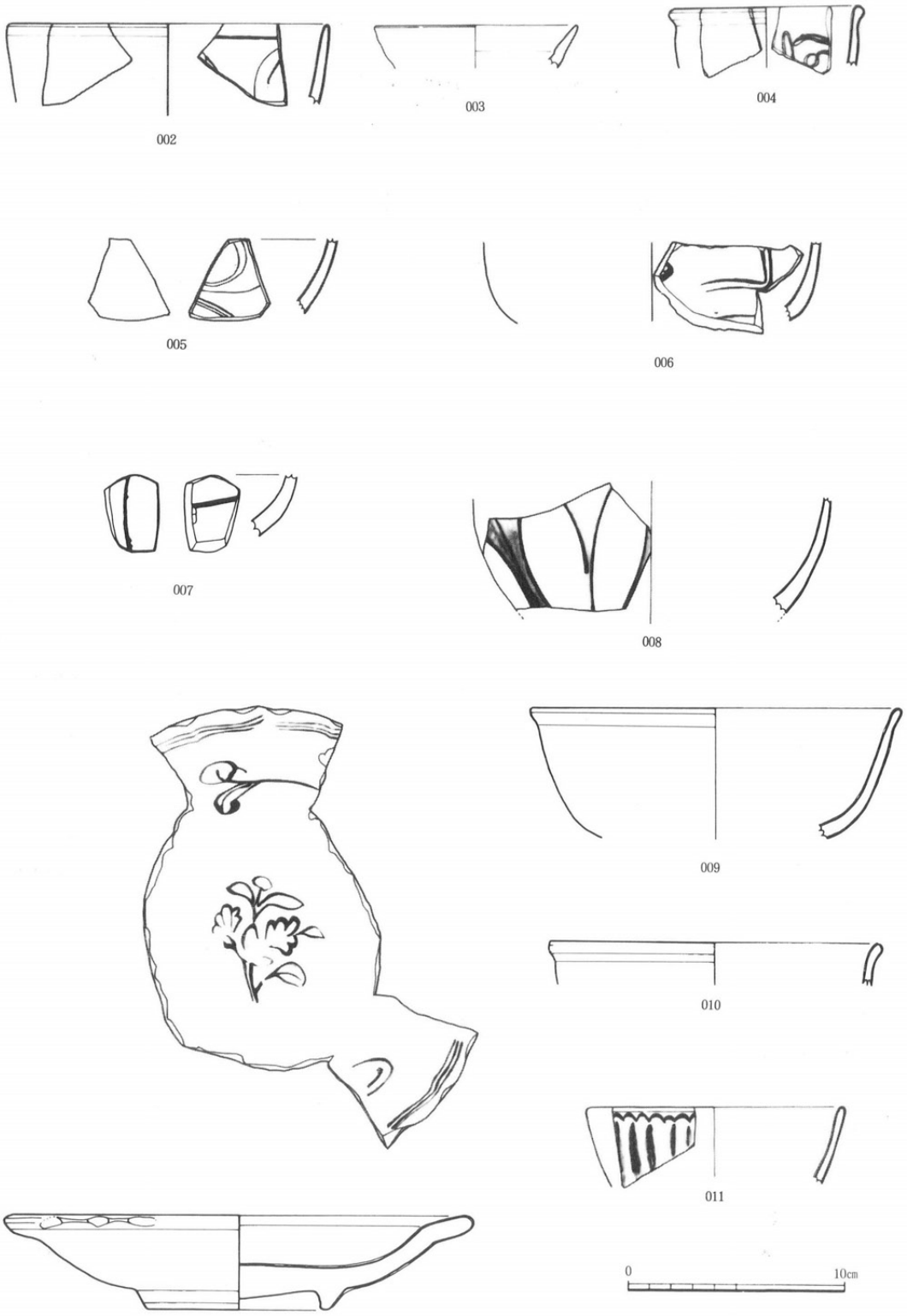


Fig8　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－1（1／3）

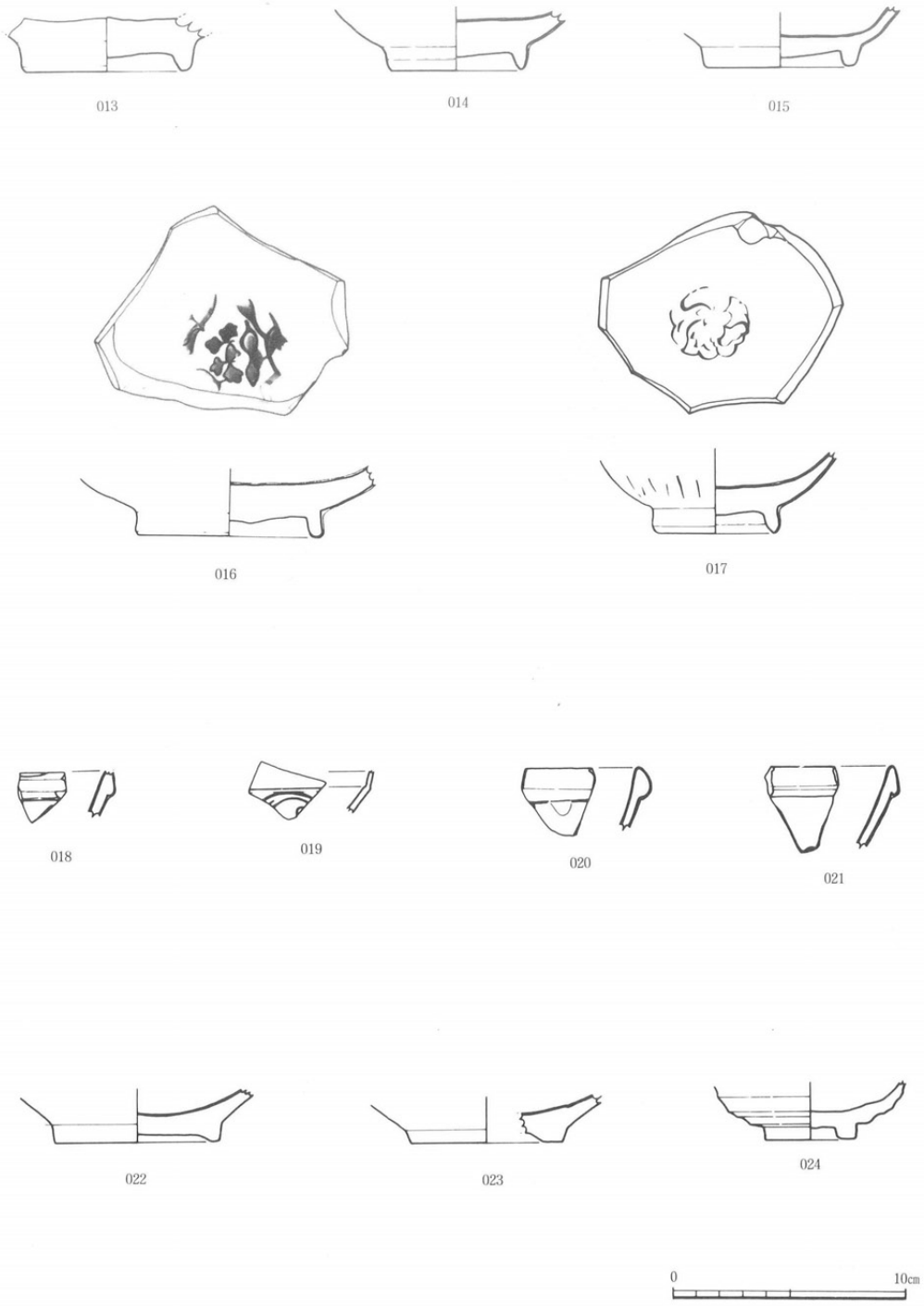


Fig9　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－２（１／３）

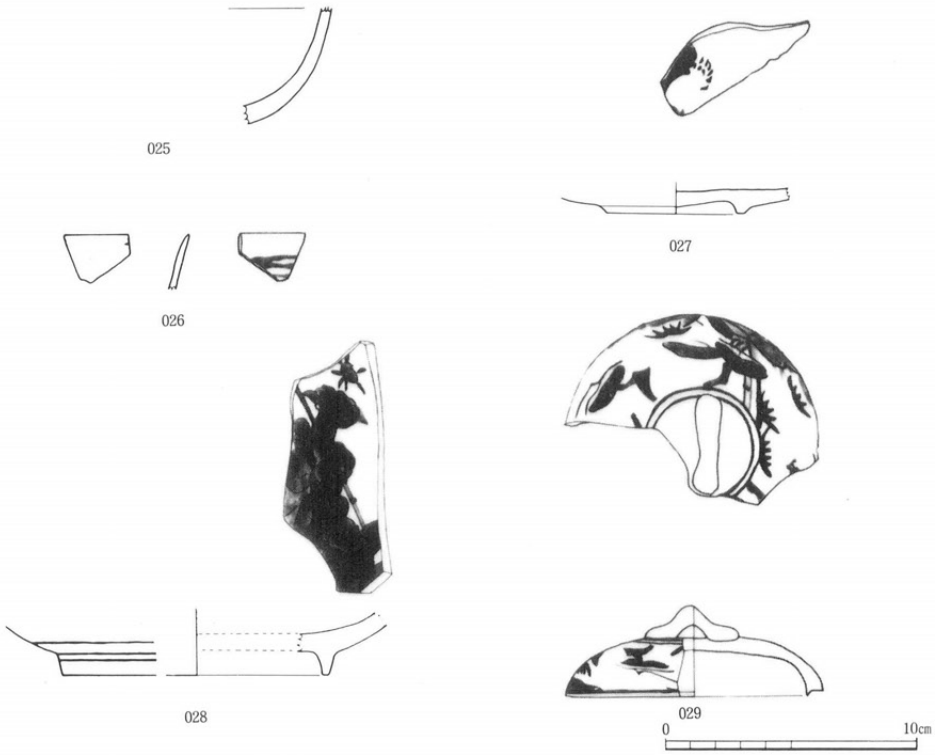


Fig10　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－３（１／３）

のみ無調整である。胎土にかなり砂粒を含むため、焼成時の破裂痕があり器壁は薄いが凹凸がある。色調は青灰色である。

049 も口縁部が断面三角形に肥厚し、内外面とも横方向のナデ調整があり、焼成は堅緻である。

050 は口縁部が「く」字型に折れ、内面は鈍い稜線を描き、直線的に立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げで焼成は堅緻である。

常　滑

甕

030 は底部直上の体部破片である。器壁は凹凸があり一様の厚さではない。胎土は暗灰茶褐色を呈し、１㎜～２㎜大の砂粒を含む。体部外面は緑白色の釉が底部直上まで施釉されている。

031 は（Ｄ－９区）白ボラより出土の体部下位の破片である。体部外面は板目状の施文具でタタキ調整がおこなわれた後、縦方向にナデ消されている。胎土に１㎜～５㎜大の砂粒を多量に含んでいる。焼成温度が低温だったのか、器表は茶褐色であるが、器内は黒灰色を呈し生焼けの状態である。

033 は口縁直下の肩部破片である。口縁は垂直に近く立ち上がり、体部中位よりやや上位でゆるやかに屈曲すると考えられる。肩部に４、５条と、屈曲部に現存で２条の浅い沈線が廻らされている。体部内外ともナデ調整されている。035 は７条の凹線が施され、(体部）内外とも横方向のナデ調整がある。036 も７条の凹線が施され、内外面ともナデ調整である。

（矢部）

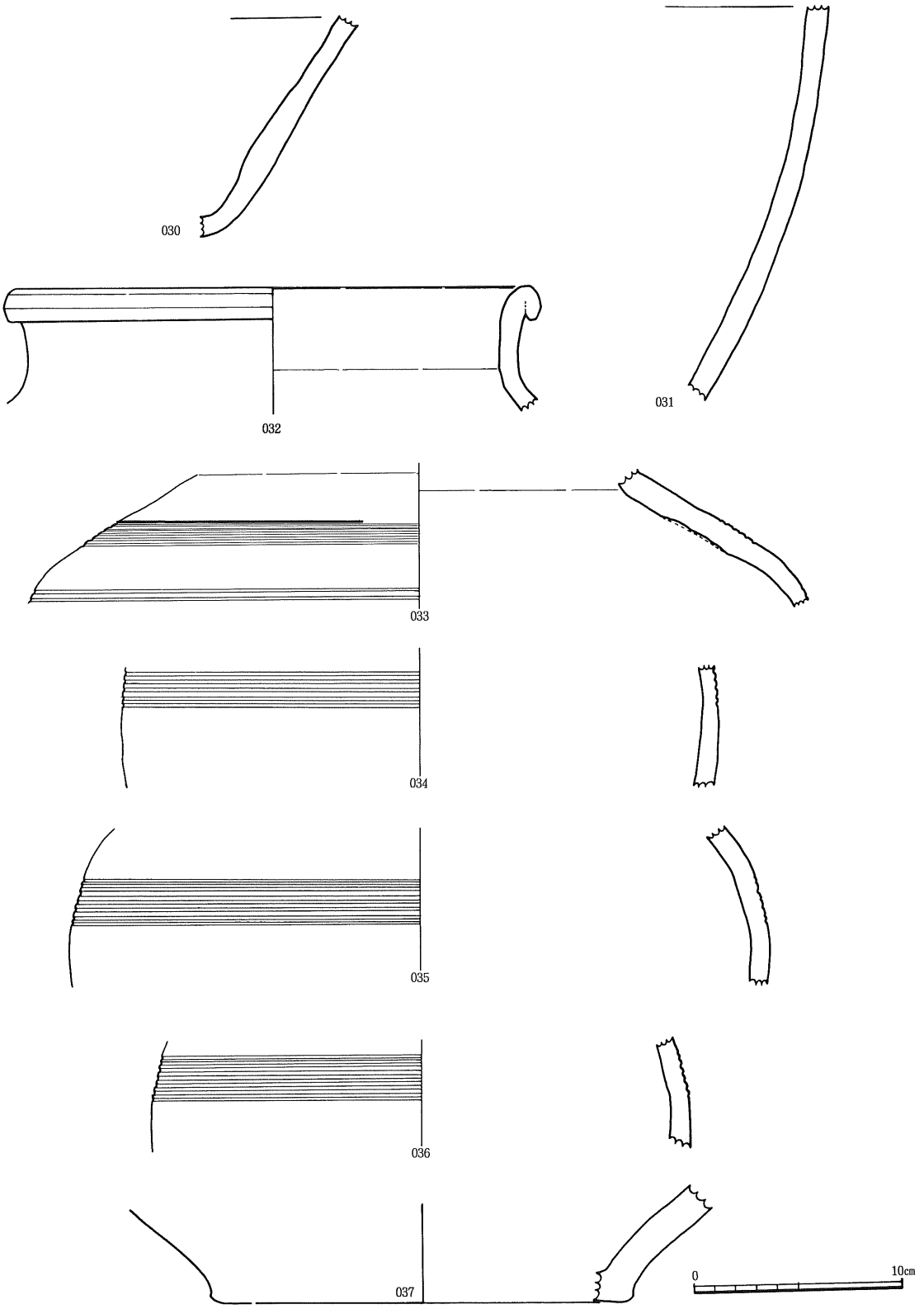


Fig11　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－４（１／３）

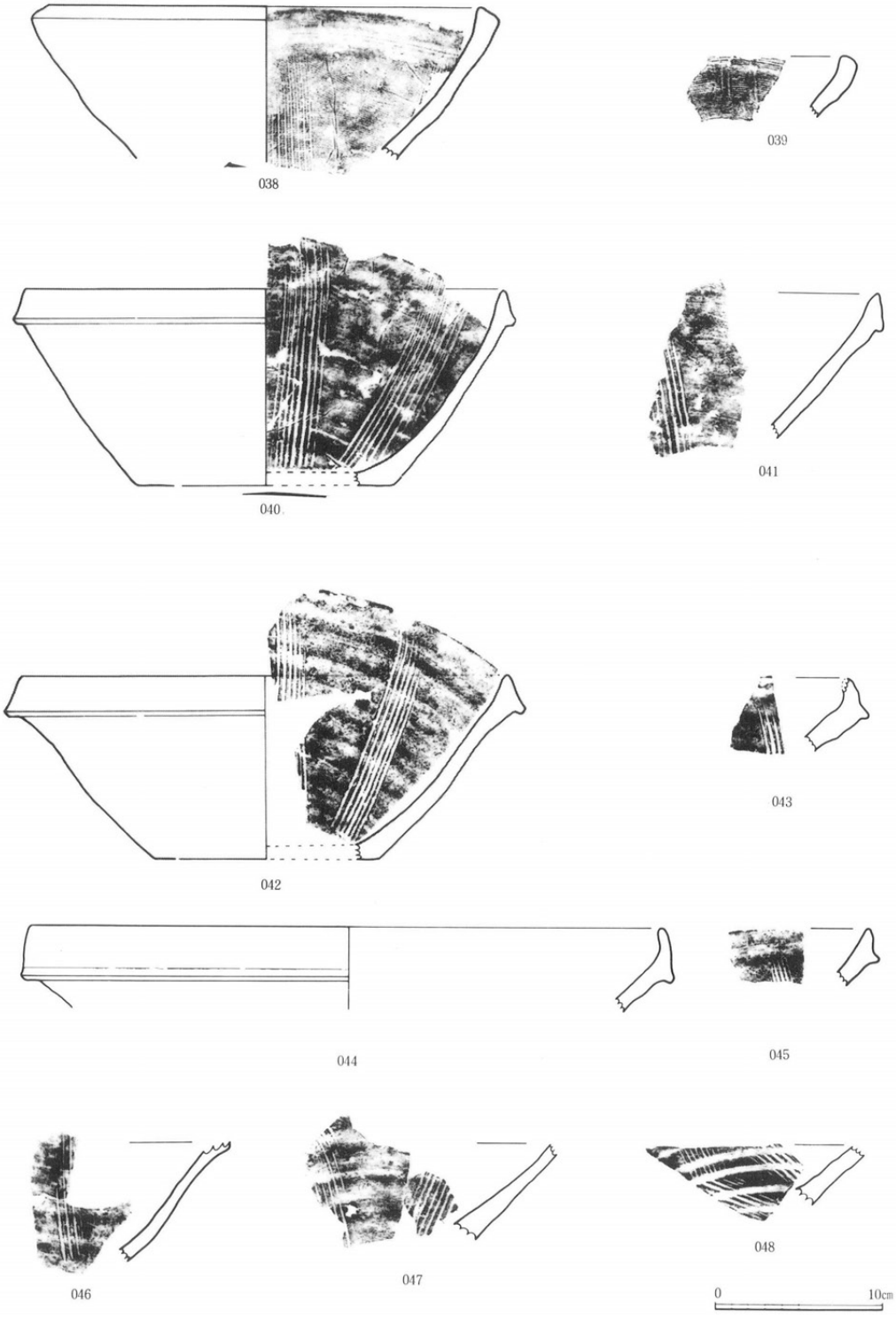


Fig12、 松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－５（１／４）

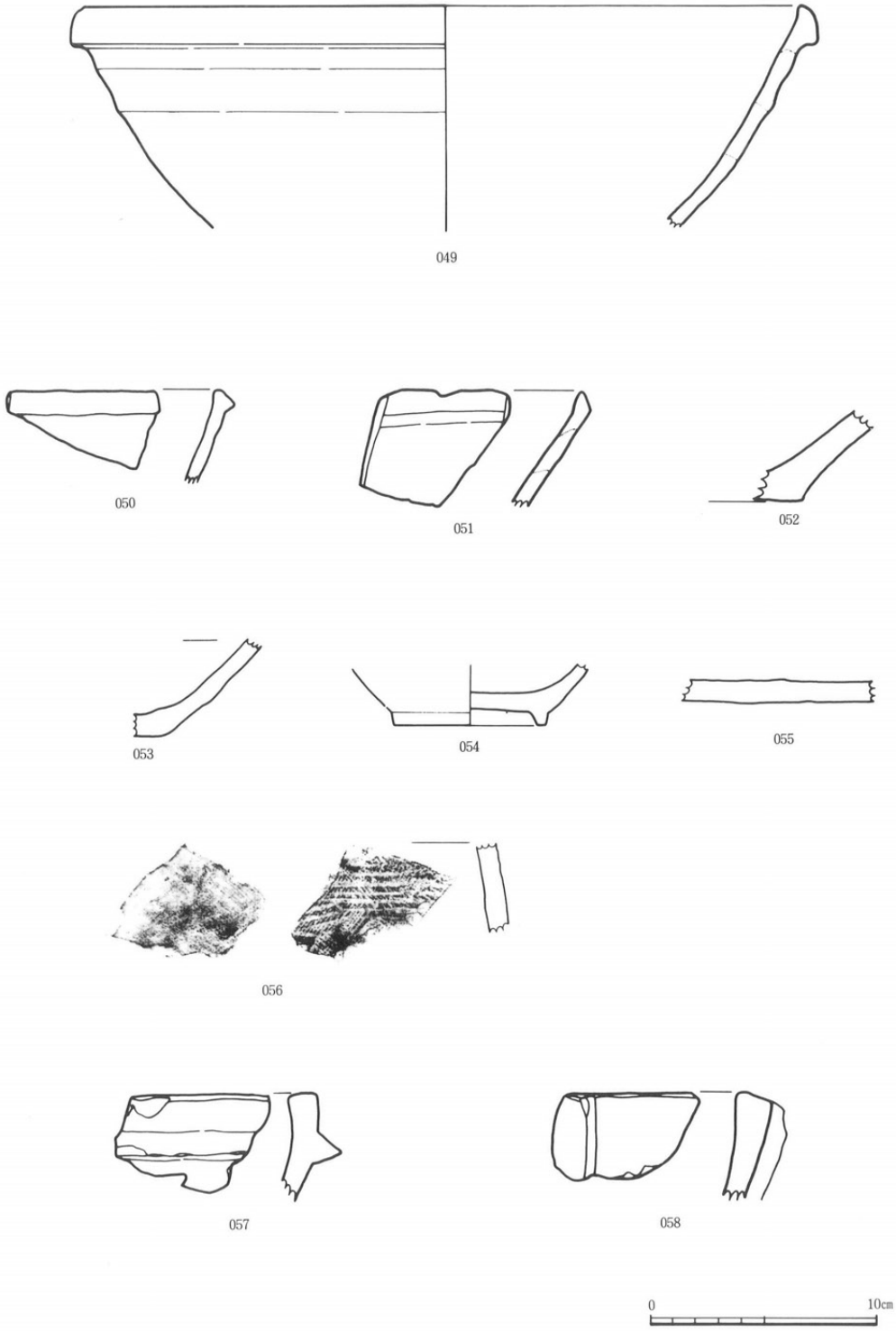


Fig13　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－６（１／３）

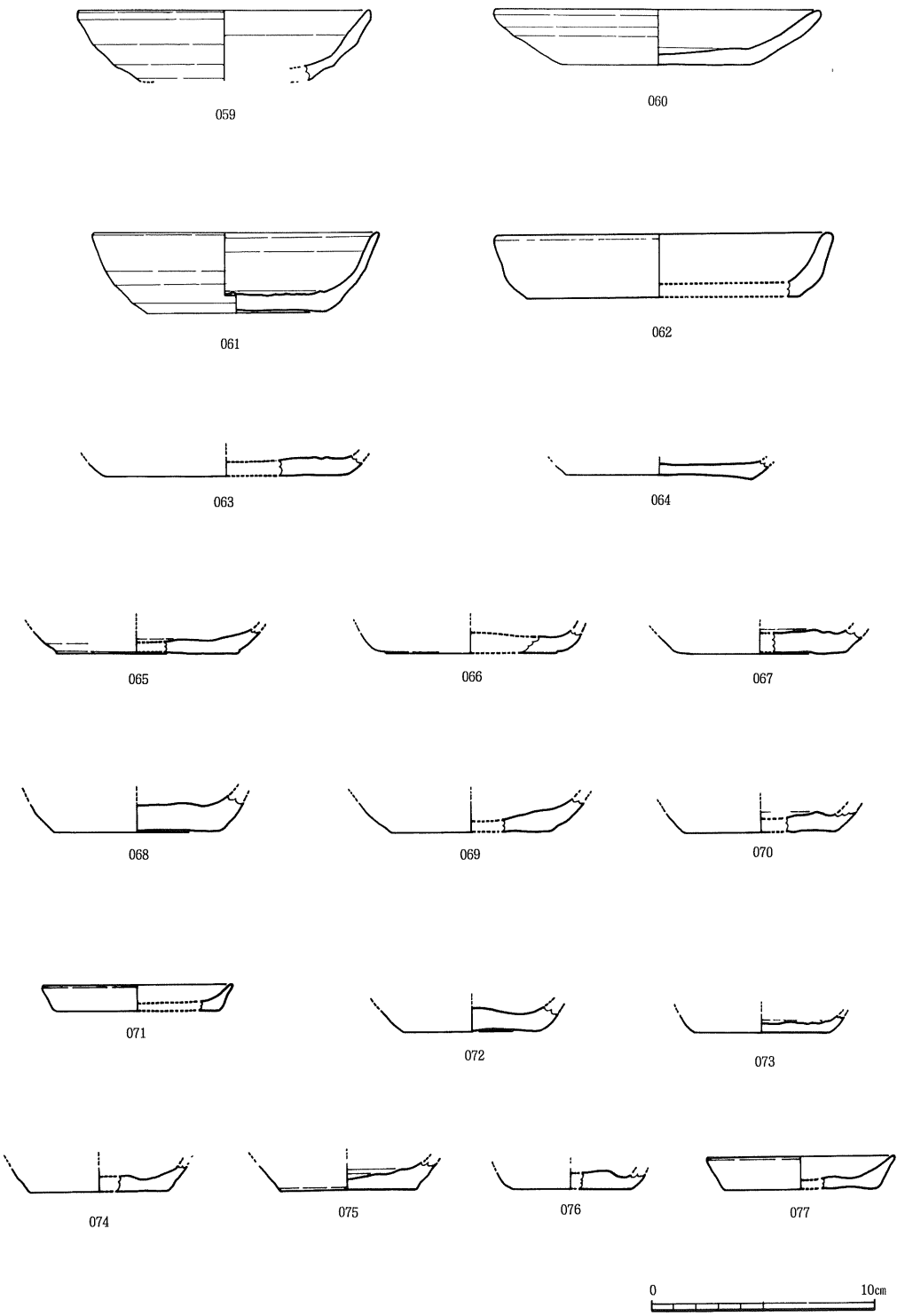


Fig14　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物－７（１／３）

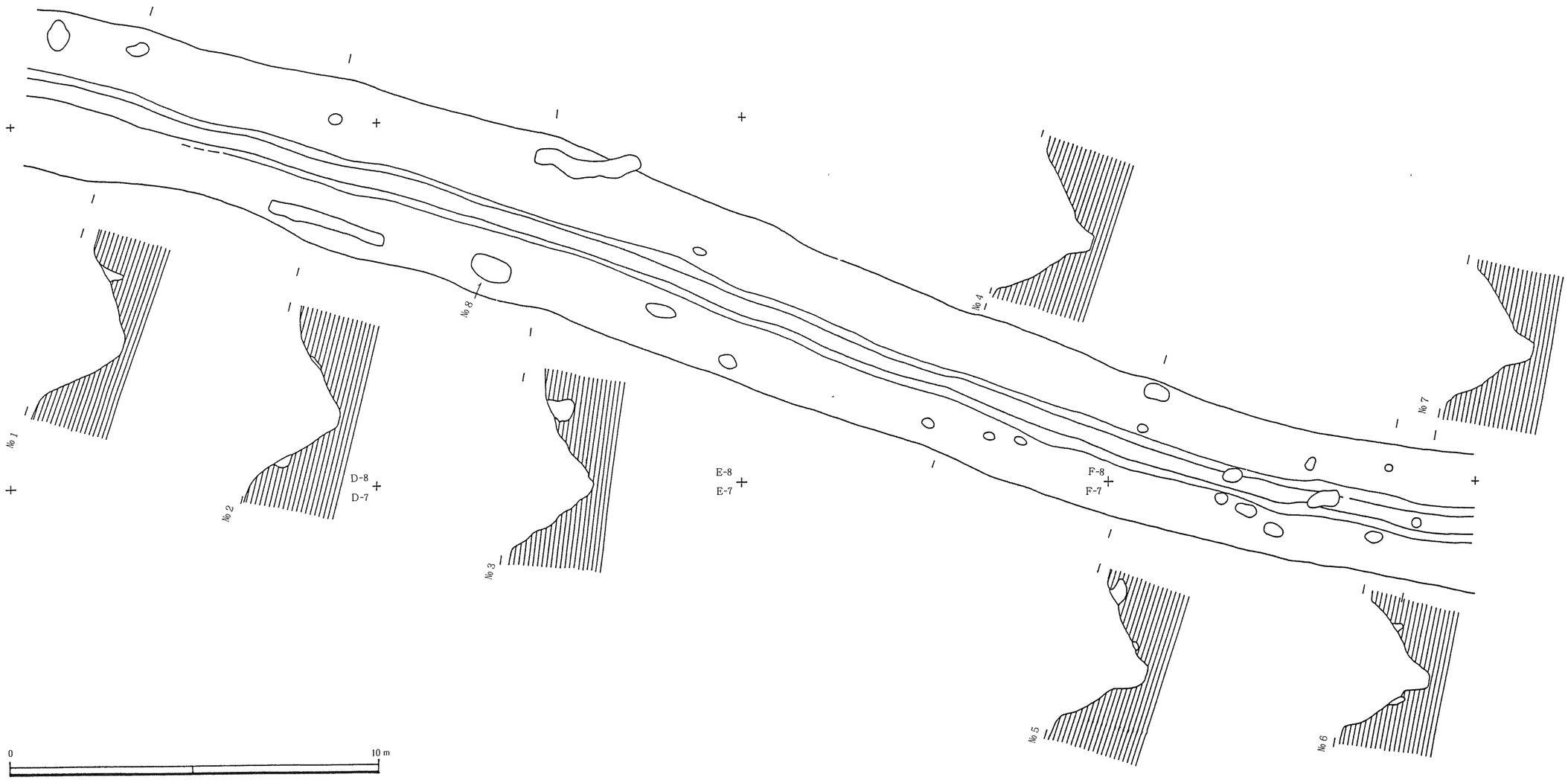


Fig7　松原地区第Ⅰ遺跡大溝（1／25）

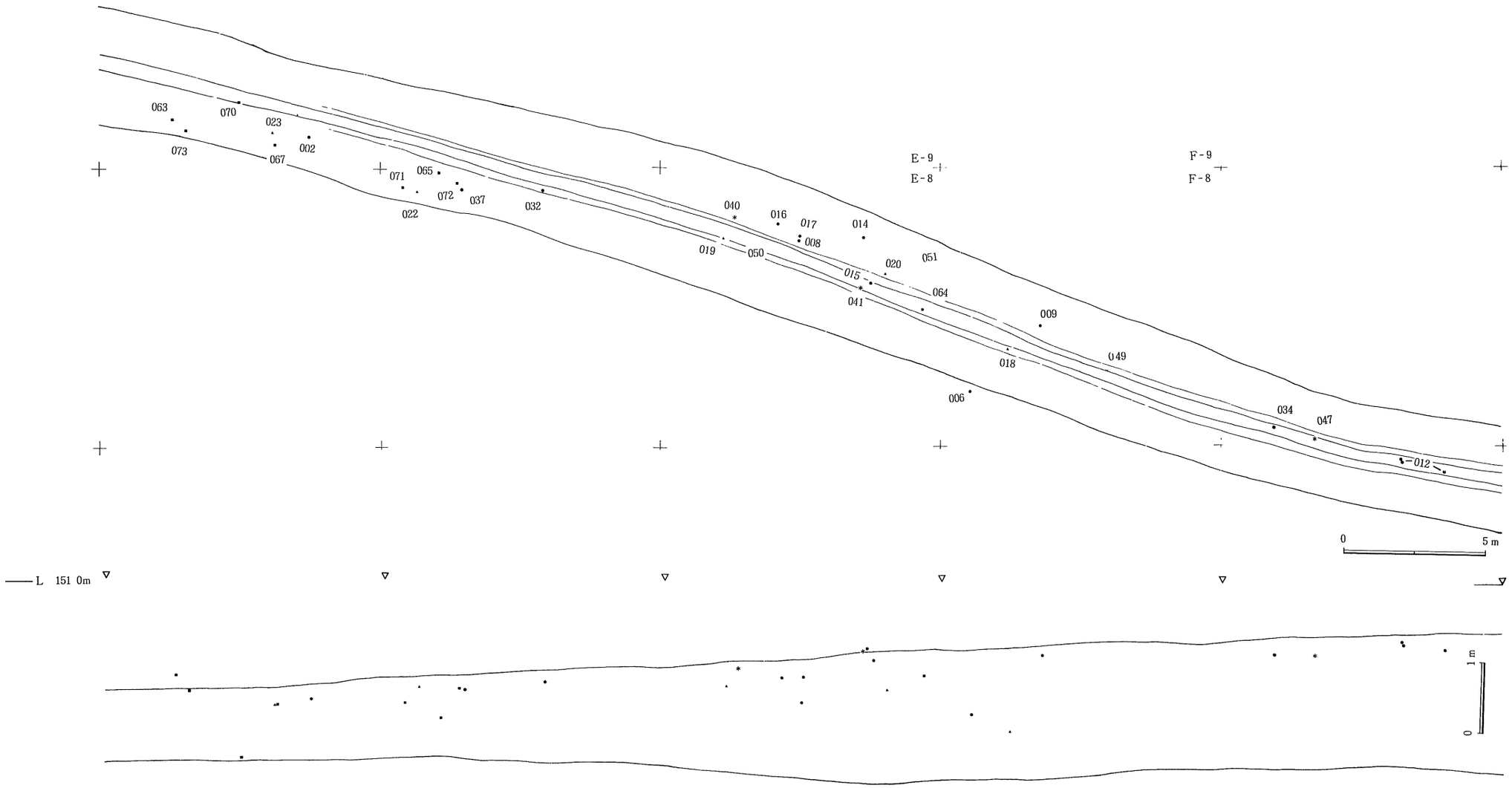
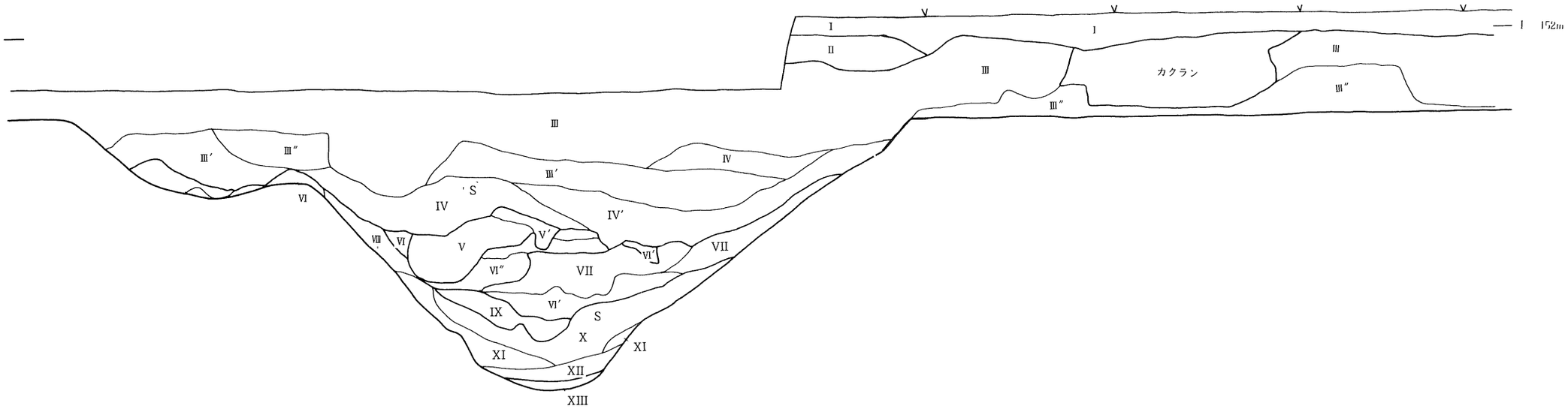
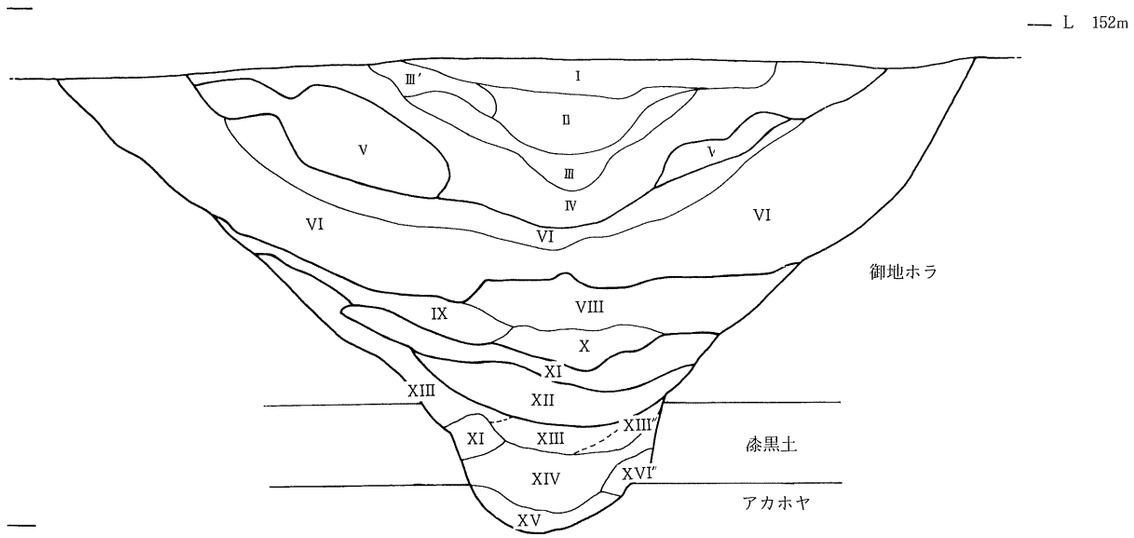
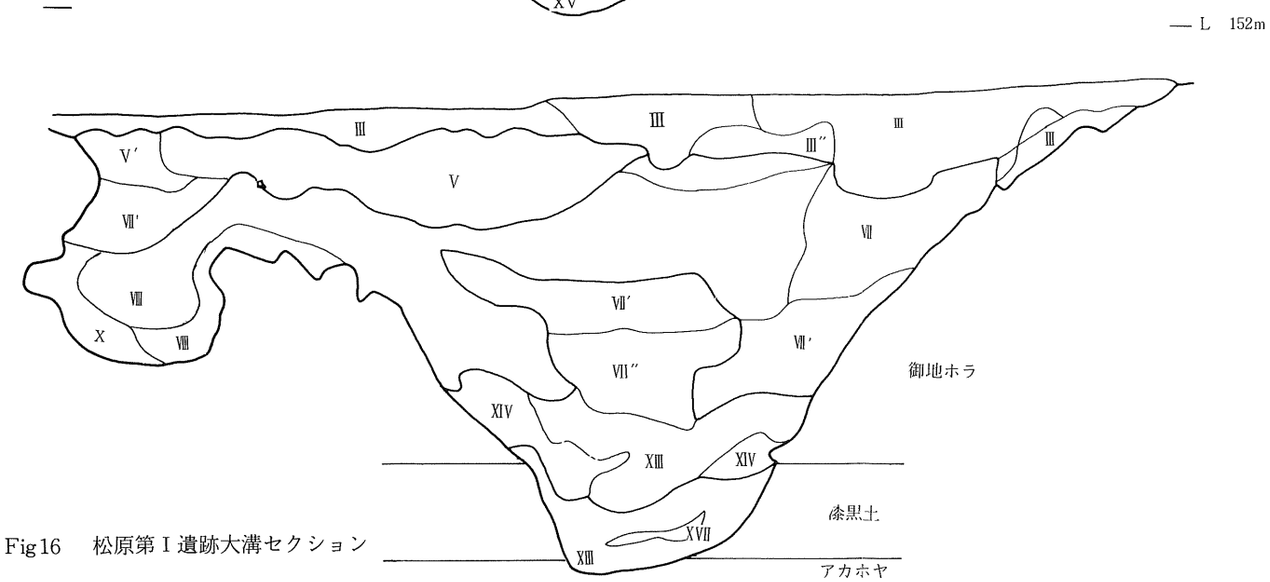


Fig15　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物分布状況図（1／50）







Ⅰ：暗灰黄色砂質土層（2.5Y 4／2）
Ⅱ：黒褐色砂質土層（10YR 3／1）
Ⅲ：黄灰色砂質土層（2.5Y 4／1）
Ⅲ′：（Ⅲ層より白ボラを多く含む）
Ⅳ：黄灰色砂質土層（2.5Y 5／1）
Ⅴ：灰色砂質土層（7.5Y 8／2）〔白ボラ〕
Ⅵ：灰色砂質土層（7.5Y 4／1）
Ⅶ：オリーブ黒色砂質土層（7.5Y 3／1）
Ⅷ：黄褐色砂質土層（2.5Y 5／4）
Ⅸ：　　〃
Ⅹ：灰オリーブ色砂質土層（5Y 4／2）
Ⅺ：黒褐色砂質土層（10YR 3／1）
Ⅻ：黄褐色砂質土層（2.5Y 5／3）
XIII：黄橙色砂質土層（10YR 7／4）
XIV：にぶい黄橙色砂質土層（10YR 7／8）
XV：浅黄色砂質土層（2.5Y 7／4）
XVI：灰黄色砂質土層（2.5Y 6／2）
XVII：黄褐色砂質土層（2.5Y 5／3）
XVIII：黒褐色砂質土層（2.5Y 3／1）

Fig16　松原第Ⅰ遺跡大溝セクション

(2) 溝状遺構

1号溝

1号溝は当遺跡の主体をなす大溝に並行に内走する溝である。大溝とほぼ同じく7・8区を南北に走り北側は自然地形である崖に達し、H・6，7境界で西方に屈曲し、G・1～7区をほぼ直線に西走するものである。当遺構は検出面において幅1.0～1.2m、底幅0.5～0.7mの深さ0.3mである。埋土は第3層の黒褐色土である。また、大溝と1号溝の間は南北の走行方向では約7～8m、東西の走行方向では約5mの間隔がある。この2条の溝によって内区された範囲には同時期の遺構が存在しないことなどから、土塁が築かれていた可能性が考えられる。

出土遺物　078・079は青磁碗で078は口縁にヘラ描きによる雷文帯を体部外部に蓮弁文を施している。080・081は白磁で080は玉縁口縁、081は端反り口縁である。086～092は土師器の坏で086は完形であるが整形が雑であるため口径・器高に歪みがある。底部は糸切りのち板状の圧痕がある。087・088はヘラ切り底で底部から体部への立ち上がりに若干段を有しやや丸みをもって立ち上がる。092 は小皿でやや器肉が厚く底部から丸みをもって急峻に立ち上がる。

2号溝

2号溝は6・7区を南北にほぼ直線に走行しC・7区で二叉に分岐し、一方はそのまま北側崖に進み、他方は東で折れて直線的に東進している。D・7区で2条に分岐し東側小溝はD・8区で消失している。2号溝は検出面において幅1.0m、底幅0.5m、深さ0.3～0.5mを測る。また、南側では1号溝を切り大溝を貫き延びている。昭和61年度の発掘調査により2号溝は、I・6区で東へ屈曲し東進している。このことから2号溝は南北約70m、東西（推定）約65～70mの長方形（平方四辺形）を区画する3辺を形成し、東側は現況の道路まで達していると考えられる。この溝と道路によって約4,500～5,000㎡の面積が区画されている。

出土遺物　093～096は青磁で093・094は推定復元のため口径に疑問が残る。095は体部外面にヘラによる蓮弁を施す。097～099は白磁で099は底部に釉が塗布されておらず玉縁の口縁か櫛描文と思われる。100・101はE・7区の溝内上部に敷石状に廃棄されて石内から出土したものである。

4号溝

D・9区を南北に走りC・9区で東へ屈曲し、そのまま東方へ延びている。溝の幅は0.8～1.0m、底幅0.2～0.5m、深さ0.2～0.3mで、埋土は第I層の灰黒褐色土である。また、溝内は自然礫が溝に廃棄されるように堆積している。

出土遺物　116・117は青磁小皿・碗で高台内底部中心はケズリ出しによる釉が残っている。123は瓦質の土風炉で体部外面には線刻による模様が施されている。色調は灰黒色である。124は素焼きの糸切り底の底部片で器形は不明である。

３号溝

調査北東区域Ｃ・９，10，11，12区を東西に走行し、Ｃ・９区で緩やかに右カーブし北に延び崖に達するものと思われる。Ｃ・11，12区で溝の北側壁が２段に立ち上がって溝の幅が広くなっている。溝の幅は0.5～0.6m、底幅は0.2～0.3m、深さ0.4m、Ｃ・11，12区では幅が1.0m前後、底幅0.4m、深さ0.3mで東へ向かうほど浅くなっている。埋土は第Ｉ層の明灰黒褐色土で、Ｃ・９，10区においても２号溝を切っている。溝内にはＣ・９，10区で自然礫がまとまって出土し、他陶磁器片も出土している。

出土遺物　129 は青磁碗で見込みに花弁文を有し高台内の底部中心はケズリ出しによる釉が残る。焼成温度が低いため胎土が酸化し色調は黄緑色を呈している。130 は口縁が稜花型を呈する小皿である。131 は口縁が端反りの白磁碗である。136～138は土師器の坏で推定底径 9.0㎝、137は推定底径9.6㎝を測り体部にはロクロ整形による明瞭な稜が残る。139・140は小皿で140は底部から体部にかけての立ち上がりに段を有し、やや内湾ぎみに立ち上がる。139は底部から体部へ急峻に立ち上がる。140はヘラ切り底139は糸切り底である。

５号溝

調査北区域を東西に走行する溝である。検出面において幅0.6m、底幅0.3m、深さ0.2～0.3mを測る。

６号溝

調査北区域を５号溝に並行にほぼ東西に走行する溝である。幅0.9～1.0m、底幅0.4～0.6m深さ 0.2ｍで埋土はは黒褐色土である。５号溝と同時期頃と考えられる。

７号溝

Ｇ・９、Ｆ・９、Ｅ・９区を南北へ延びＤ・９区で東へ屈曲し、D•11区で大きく蛇行しそのまま東進する。幅1.1～1.3m、深さ 0.5ｍで埋土は第Ｉ層の灰黒褐色である。

出土遺物　142・143は青磁碗と小皿で体部内外面に櫛描文を施す。144・145は玉縁口縁の白磁碗である。146～153は伊万里染付で 146 はいわゆる輸出用の扶蓉手の大皿である。149・150は波佐見窯系の染付皿で 149 は体部内面に割筆による二重網目文様を施し、両方とも見込みは蛇目釉ハギである。 154 は唐津（内野山窯）の皿で体部外面は透明釉、内面は銅緑釉が塗布されている。

８号溝

７号溝と同様にＧ・９、Ｆ・９、Ｅ・９区を南北へ延びＥ・９区で東へ折れ、そのまま東進している。幅0.7m、深さ0.3mで埋土は第Ｉ層の灰黒褐色土である。７号溝と時期的には同じか８号溝が若干古いと思われる。

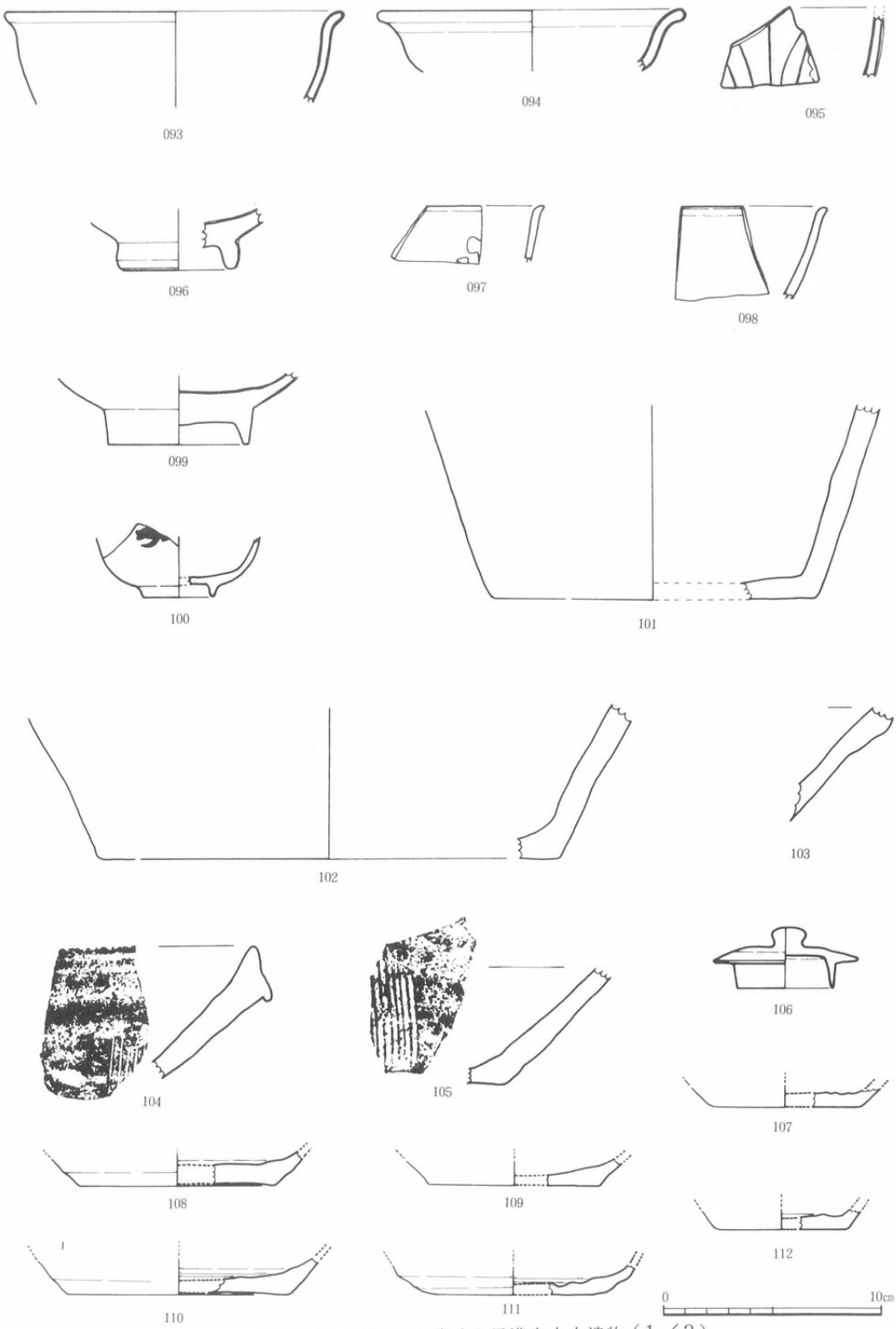


Fig 17　松原第Ⅰ遺跡１号溝内出土遺物（１／３）

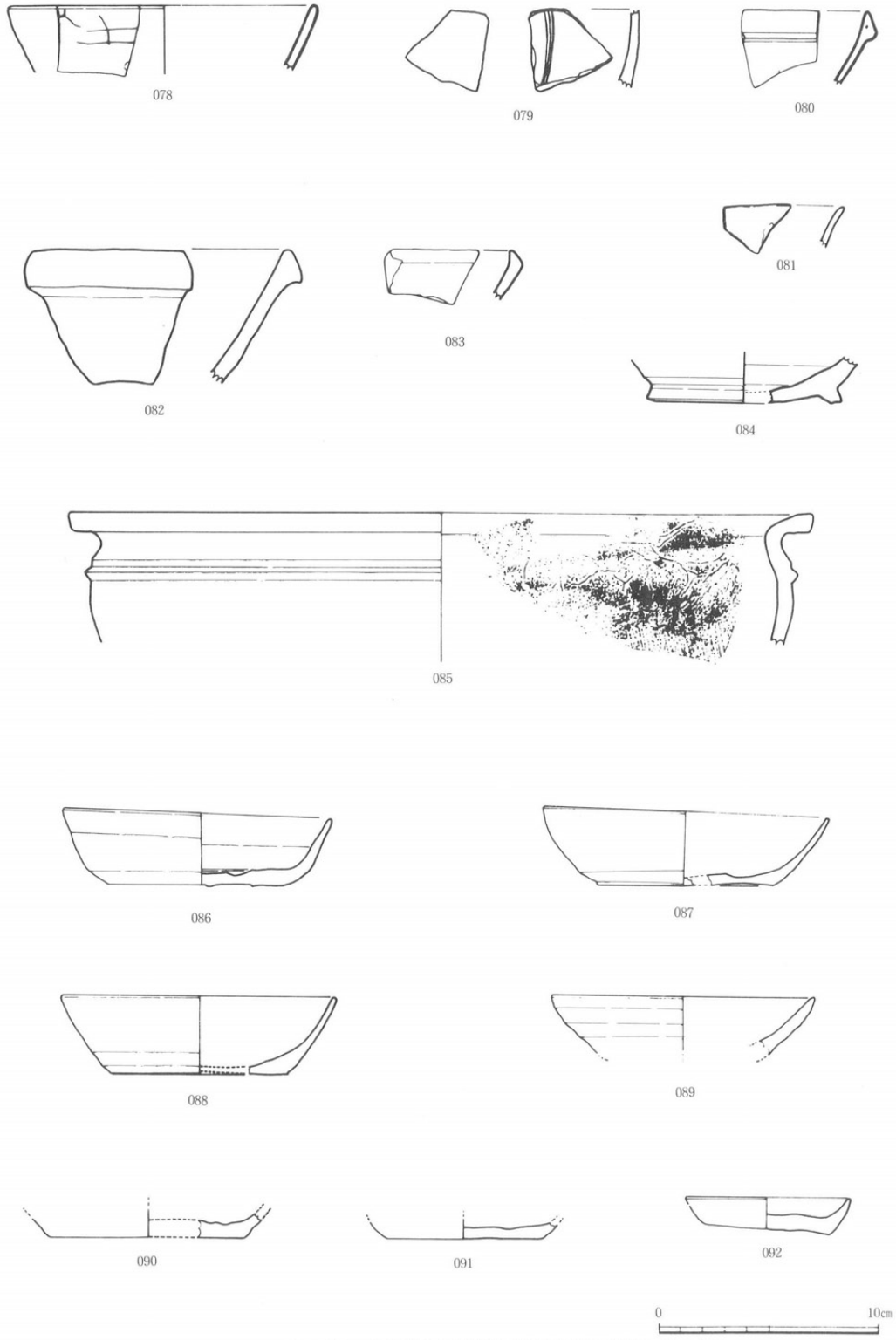


Fig 20　松原第Ⅰ遺跡２号溝内出土遺物（１／３）

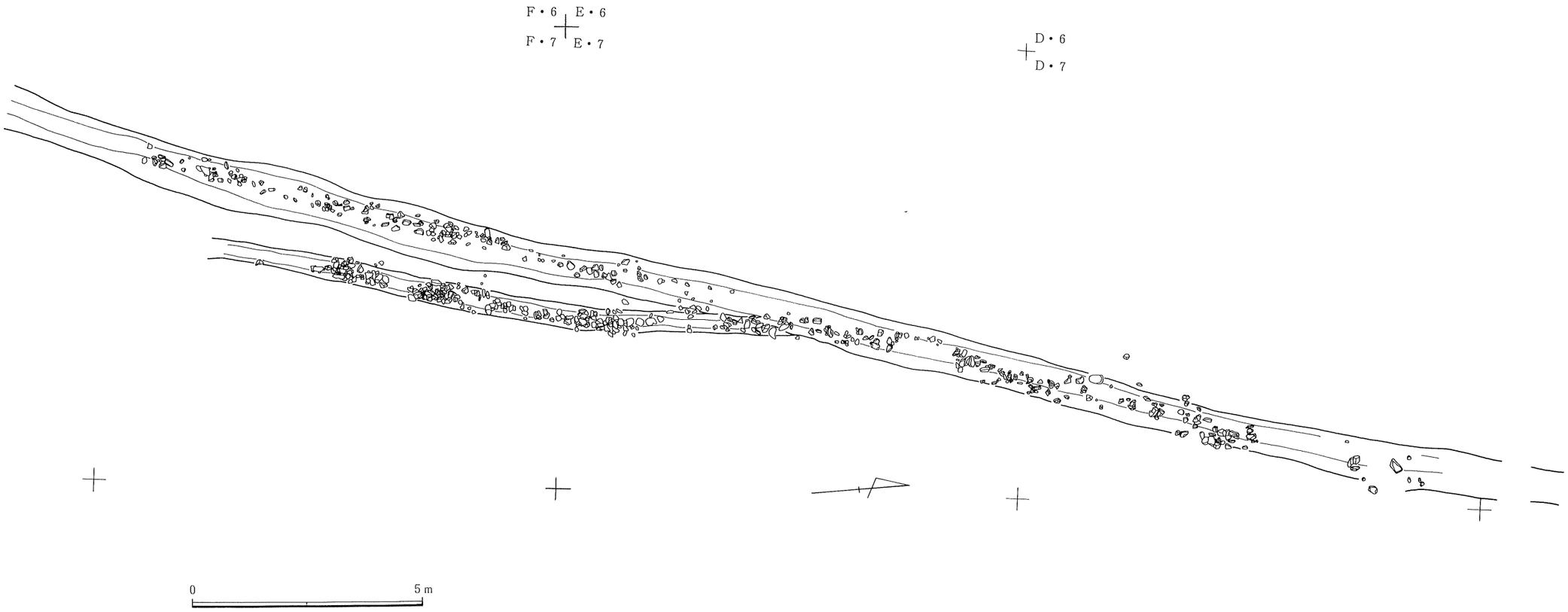


Fig 18　松原第Ⅰ遺跡溝２（１／100）

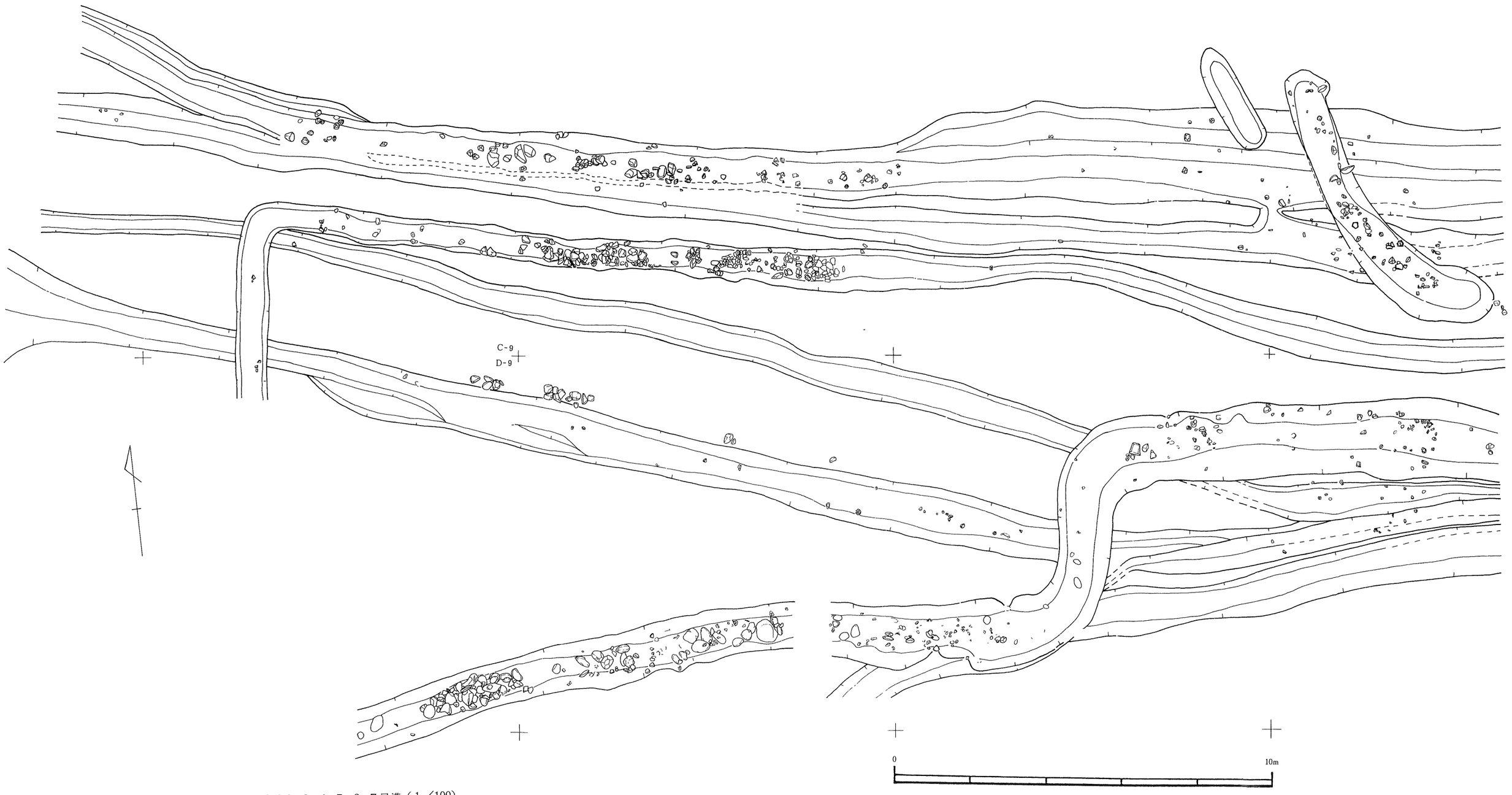
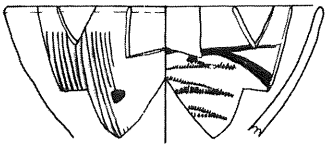
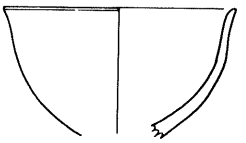


Fig 19　松原第Ⅰ遺跡2・3・4・5・6・7号溝（1／100）



113



114

115

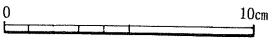


Fig 21　松原第Ⅰ遺跡溝６･13内出土遺物（１／３）

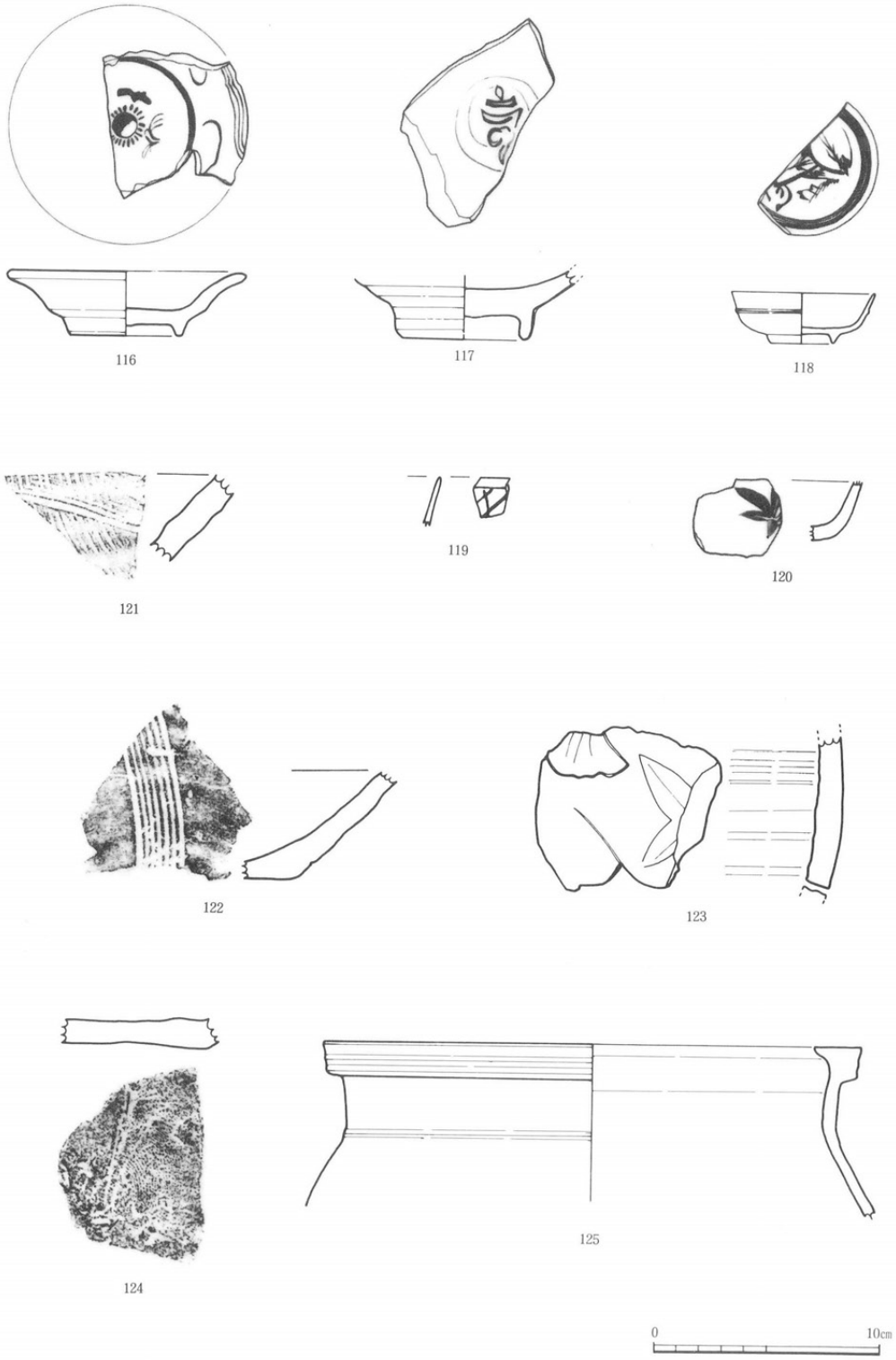


Fig 22　松原第Ⅰ遺跡４号溝内出土遺物（１／３）

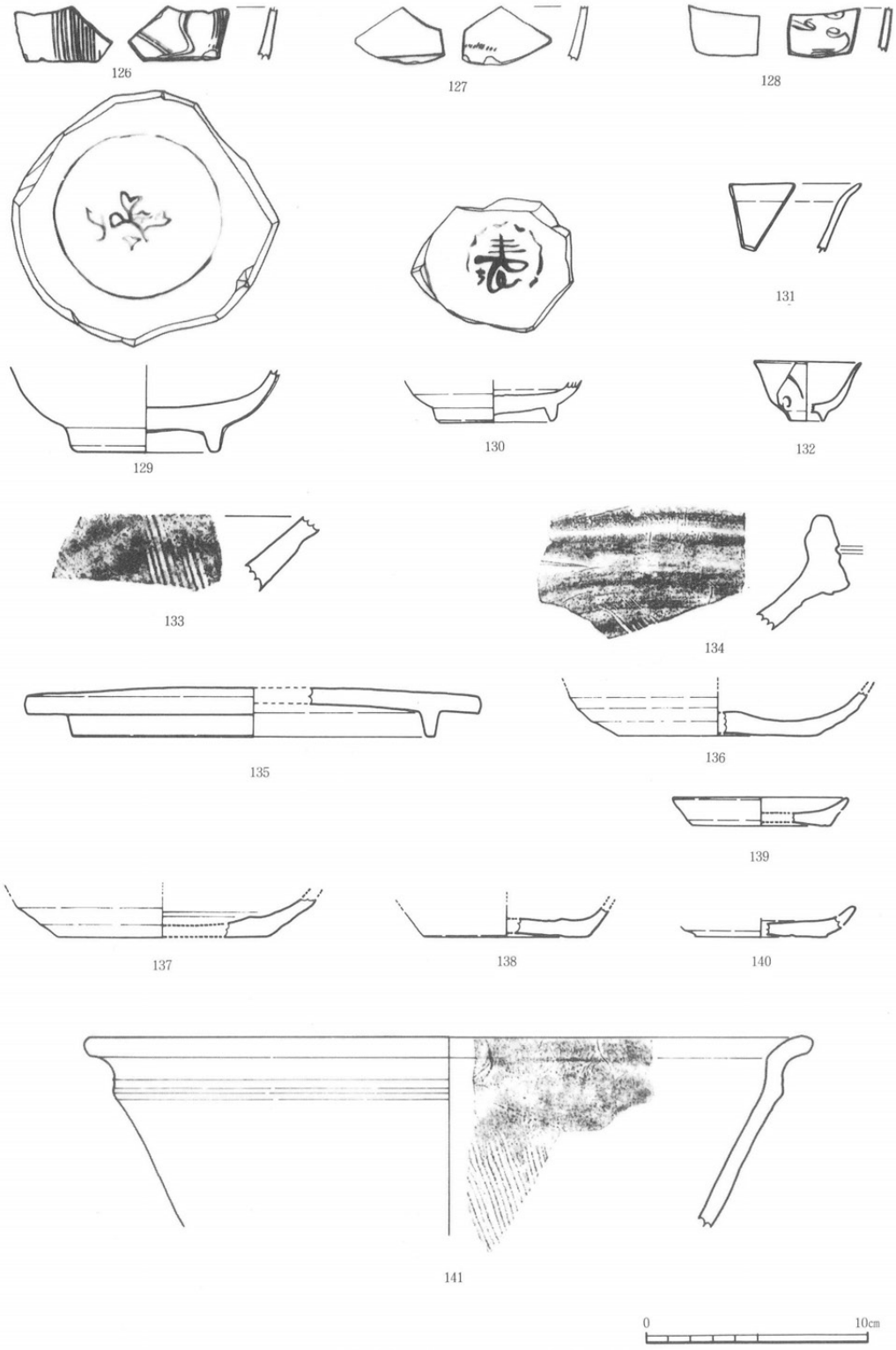


Fig 23　松原第Ⅰ遺跡３号・５号溝内出土遺物（１／３）

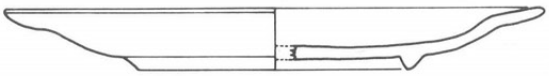
142

143

144

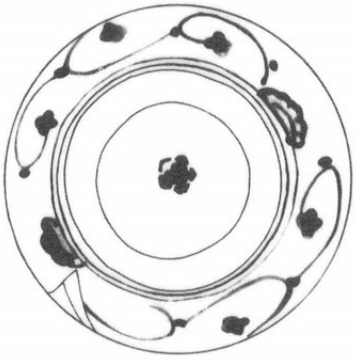
145

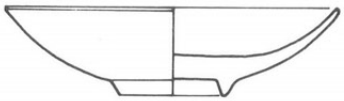
147



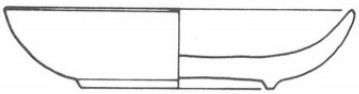
146

148

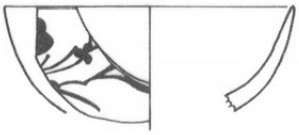




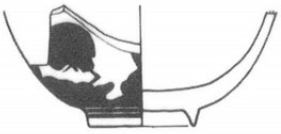
149



150



151



152

153

0 10cm

Fig 24　松原第Ⅰ遺跡７号溝出土遺物－１（１／３）

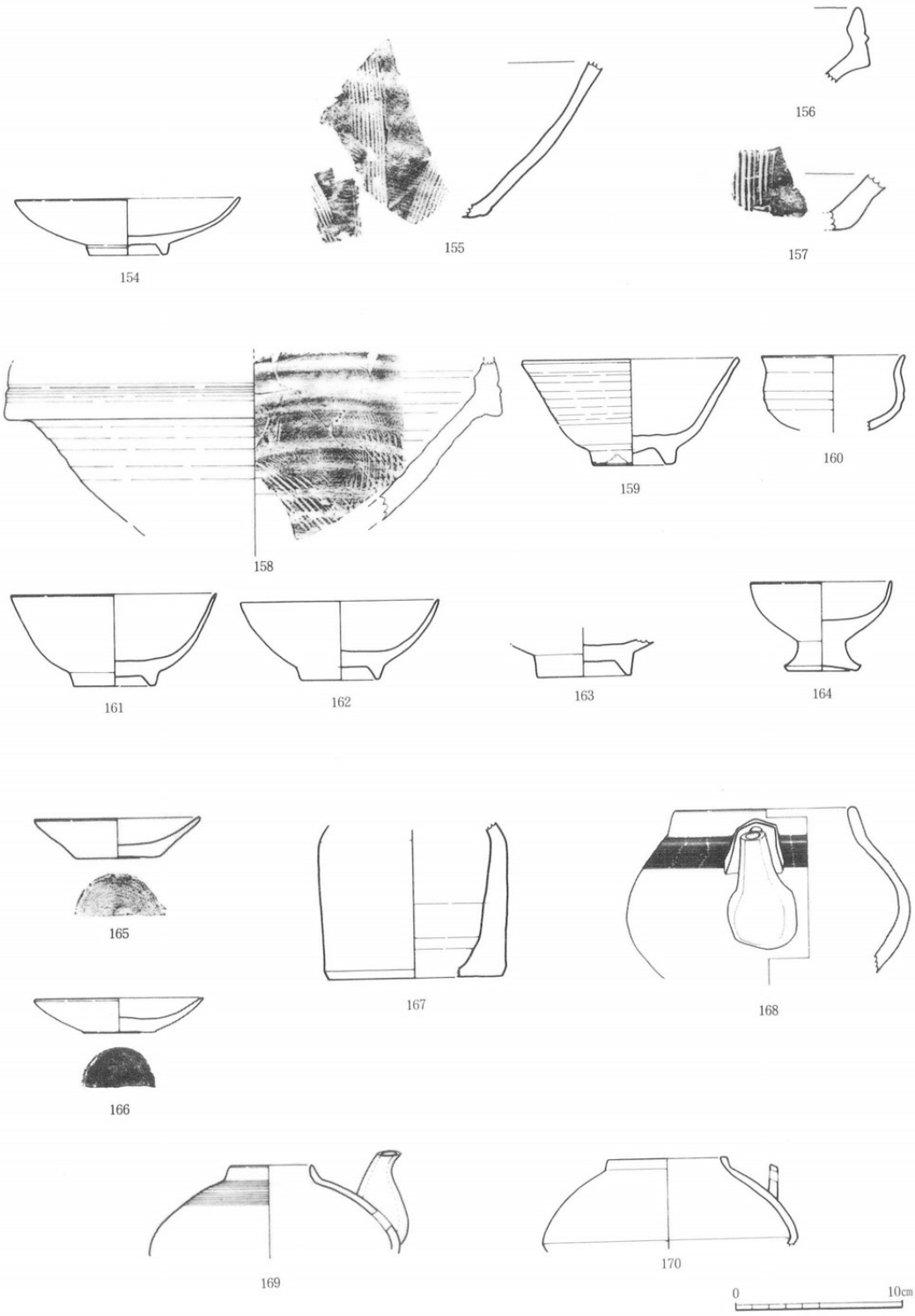


Fig 25　松原第Ⅰ遺跡7号溝内出土遺物－2（1／4）

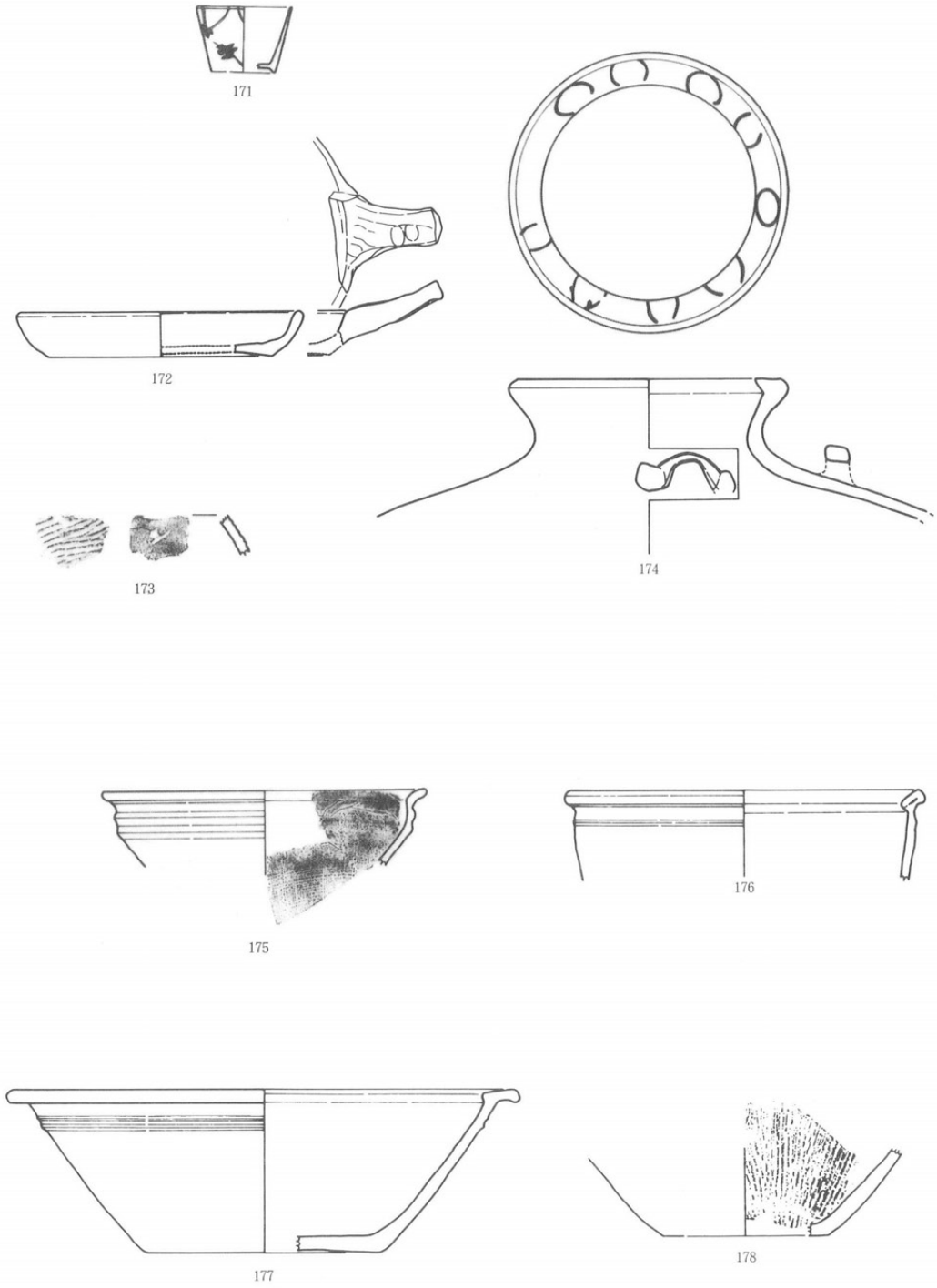


Fig 26　松原第Ⅰ遺跡７号溝内出土遺物－３（１／４）

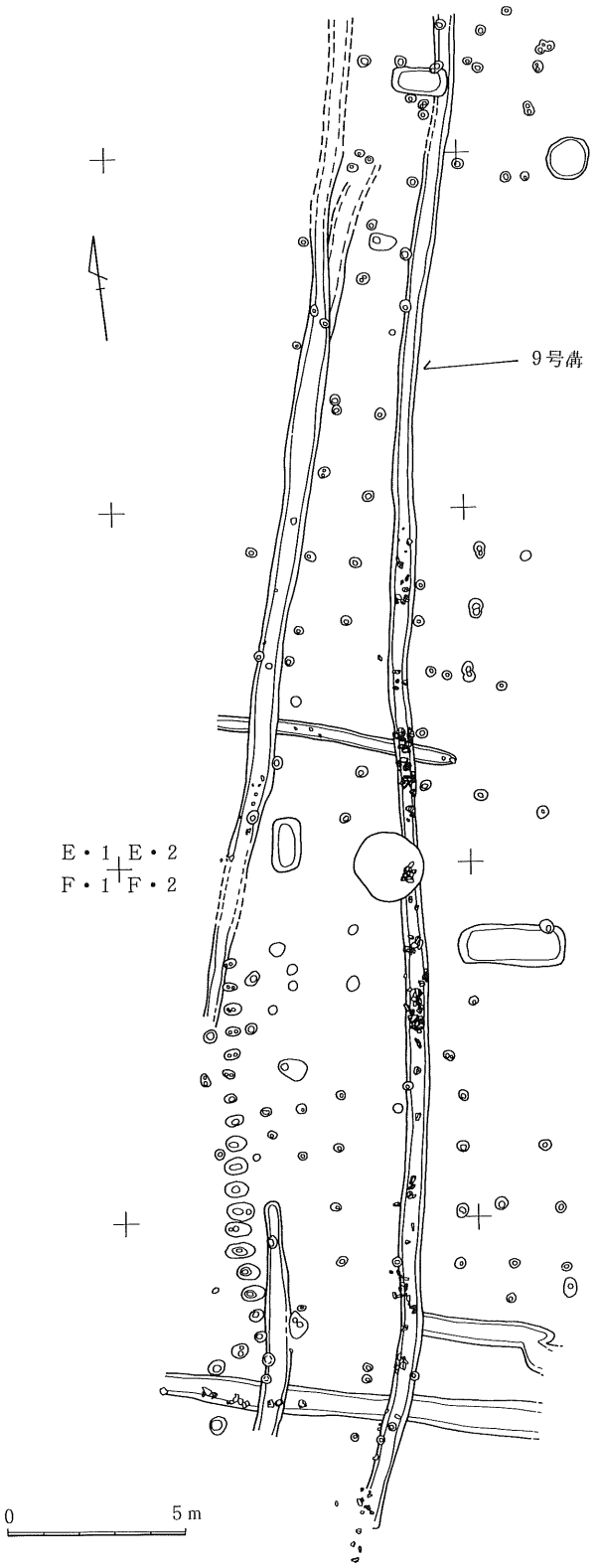


Fig 27　松原第Ⅰ遺跡9号溝　（1／50）

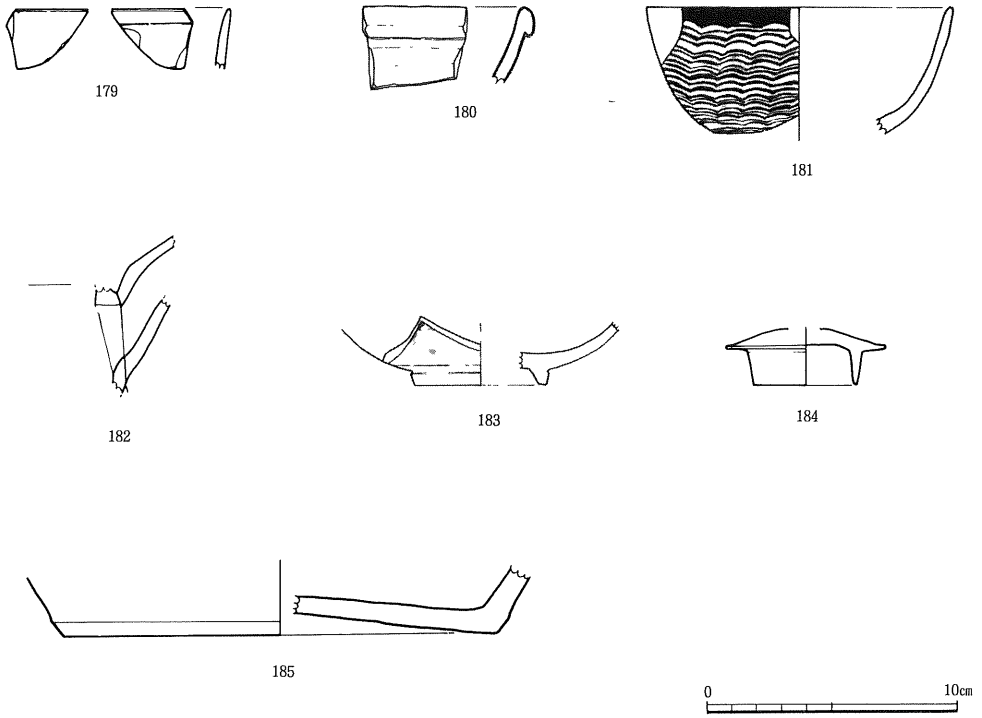


Fig 28　松原第Ⅰ遺跡溝8・9・11内出土遺物（1／3）

9号溝

調査区域西G・2区からB，C，D，E，F・2区を北へ走行している。溝幅0.6～0.7m、底幅0.3～0.4m、深さ0.15mで、埋土は明灰黒褐色土である。E・2区からG・2区では頭蓋大から拳大の自然礫が廃棄されるように堆積している。

11号溝

9号溝の西側を南北に走行する溝でF・2区西端で消失している。溝幅0.7～0.8m、底幅0.5～0.6m、深さ0.1m で埋土は明灰黒褐色土である。

13号溝

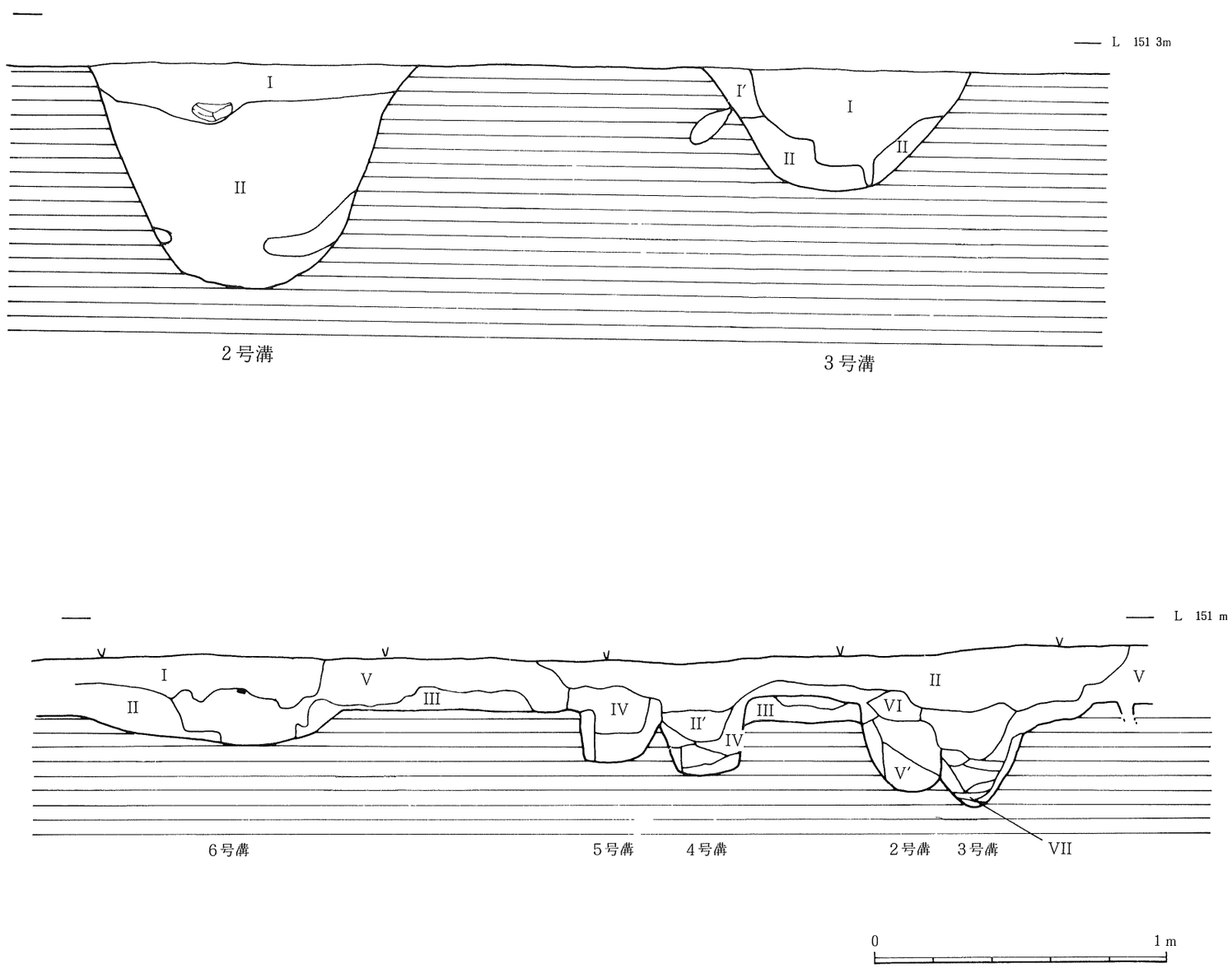
調査区域西側中央E・2区東端を起点として西方へ走行しており、その後は排土のため推定であるが、直線的に西側崖に達していると思われる。溝幅0.5m、底幅0.3m、深さ0.1～0.4mで、溝の幅が狭く、深い特徴がある。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 115は土師器坏で底径7.3㎝で体部への立ち上がりに回転ヘラ切りによる段を有する。

14号溝

G・3区からG・2区にかけて東西方向に走行し9号溝に合流ないし切られている（時期差は不明）溝幅0.6～1.0m、底幅0.3～0.6m、深さ0.1～0.15mとたいへん浅い。埋土は明灰黒褐色土である。

（矢部）



Ⅰ　：白ボラ（Ⅰ′：白ボラ混土）

Ⅱ　：黒褐色御池ボラ混土

Ⅰ　：黒褐色白ボラ混土

Ⅱ　：明黒褐色白ボラ混土（ⅠとⅡは、基本的には同一層）

Ⅲ　：黄褐色御池ボラ混土

Ⅳ　：暗褐色御池ボラ混土

Ⅴ　：極暗褐色御池ボラ混土

Ⅵ　：白ボラ

Ⅶ：砂　層

（注：Ⅴは基本的にはⅣと同一層）

Fig 29　C・9区(上)・B・10区(下)溝セクション

(3) 掘立柱建物

(1) 1号掘立柱建物

大溝内のほぼ中央部E・4区で検出され、東西2間、南北3間床張りで東と西と北の三方に庇がつく。方位はN12°Eである。柱間寸法は桁行西側で南より2.4m－2.3m－2.4m、東側で南より2.3m－2.4m－2.4m、梁行西側で南より2.4m－2.3m－2.4m、南妻は中央柱がはっきりせず全長4.3mを測る。庇部は東側では柱列より0.9mのところに柱が並び、北から0.7m－2.3m－2.6mで南側柱は不明である。北側でも柱列より0.9mのところに柱が並び、西から1.0m－2.1m－1.95m－1.1mである。東側では柱列より1.0mのところに柱が並び南から2.2m－2.3m－3.3mである。柱穴は大きさが20cm～40cm、深さ30cm～70cmとばらつきがある。pitから土師器片が出土している。

(2) 2号掘立柱建物

大溝内の北西C・3区で検出され、桁行3間以上梁行1間の南北棟である。方位はN26°Eである。柱間寸法は桁行が東側柱列で南から2.0m－1.9m－2.0m、梁行が南側で3.2mである。柱穴の大きさは30cm前後、深さ15cm～30cmとばらつきがある。2号井号を覆う形で建物が築かれている。

(3) 3号掘立柱建物

大溝内の西側中央C・4区で検出され、桁行2間、梁行1間の南北棟である。方位はN15.5°Eである。柱間寸法は桁行が東側柱列で北から1.8m－1.8m、梁行が南側で3.6mを測る。柱穴の大きさは30cm～40cm、深さ20cm～50cmとばらつきがある。

(4) 4号掘立柱建物

3号掘立柱建物の南側に隣接し、5号掘立柱建物の南側柱穴と切り合っている。桁行2間、梁行1間の南北棟である。方位はN21°Eである。柱間寸法は桁行が東側柱列で北から1.9m－2.1m、梁行が南側で3.5mを測る。柱穴の大きさは30cm～40cm、深さ12cm～30cmとばらつきがある。

(5) 5号掘立柱建物

4号掘立柱建物の西側に隣接している。2×2間の建物跡である。方位はN13°Eである。柱間寸法は桁行が東側柱列が1.7m－1.8mである。

（6） 6号掘立柱建物

5号掘立柱建物の南側に隣接している。桁行3間、梁行1間の東西棟である。方位は70.5°Wである。柱間寸法は、桁行が南側柱列で東から1.8m－1.6m－1.9m、梁行が東側で3.3mを測る。柱穴の大きさは20㎝～30㎝、深さ15㎝～30㎝と幅がある。13号溝の走行と建物の方位が一致している。

（7） 7号掘立柱建物

大溝内の西南F・2区とG・2区で検出され、南北3間、東西2間の床張りの建物跡である。方位はN10° Eである。柱間寸法は桁行東側で北より1.5m－1.8m－1.5m、西側で北より1.5m－1.65m－1.5m、梁行南妻で東より1.85m－1.6mである。

（8） 8号掘立柱建物

大溝内の南西G・3区で検出され、2×2間の建物跡である。方位はN88° Wである。柱間寸法は東側柱列で北より2.2m－2.1m、北側柱列で西より2.3m－2.4mである。柱穴の形状は円形または楕円形をなし、深さは15㎝～45㎝と幅がある。

(10) 9号掘立柱建物

調査区の北東B・10区とC・10区で検出された。南北3間、東西2間の床張りの建物跡で方位はN81° Wである。柱間寸法は桁行南側で東より2.2m－2.45m－1.8m－1.4m、梁行東側で南より1.95m－1.8m－(2.3m)で、柱穴列は直線的に並ばず少々無理がある。柱の形は円形または方形を呈し、大きさは円形で20㎝～30㎝、方形で30㎝×34㎝、深さは10㎝～40㎝とばらつきが大きい。ピットより土師器片及び青磁片が出土している。

出土遺物　186は体内部・外面に櫛描文を施す青磁碗でC・10区ピットから出土している。187～190は土師器の小皿で187は推定口径8.9㎝同底径6.9㎝とやや大きめであるが、器高は1.3㎝と低く口縁にかけて立ち上がりは緩やかに丸みを帯び器壁も薄く全体に平面的である。186は青磁と同じくC・10区から出土している。191は土師器の坏で推定復元ではあるが底径に対して口径が大きく底部から口縁にかけて直線的に広がっている。器壁は一様で内・外面ともロクロ成形による稜がみられる。

その他西側地域の柱穴より出土した遺物(Fig38)として192～196の土師器がある。193・195は底部からの立ち上がりに鈍い段を有し、器壁は薄くヘラ切り底である。194・196もヘラ切り底で194は底部から口縁へ急峻に立ち上がる。

（矢部）

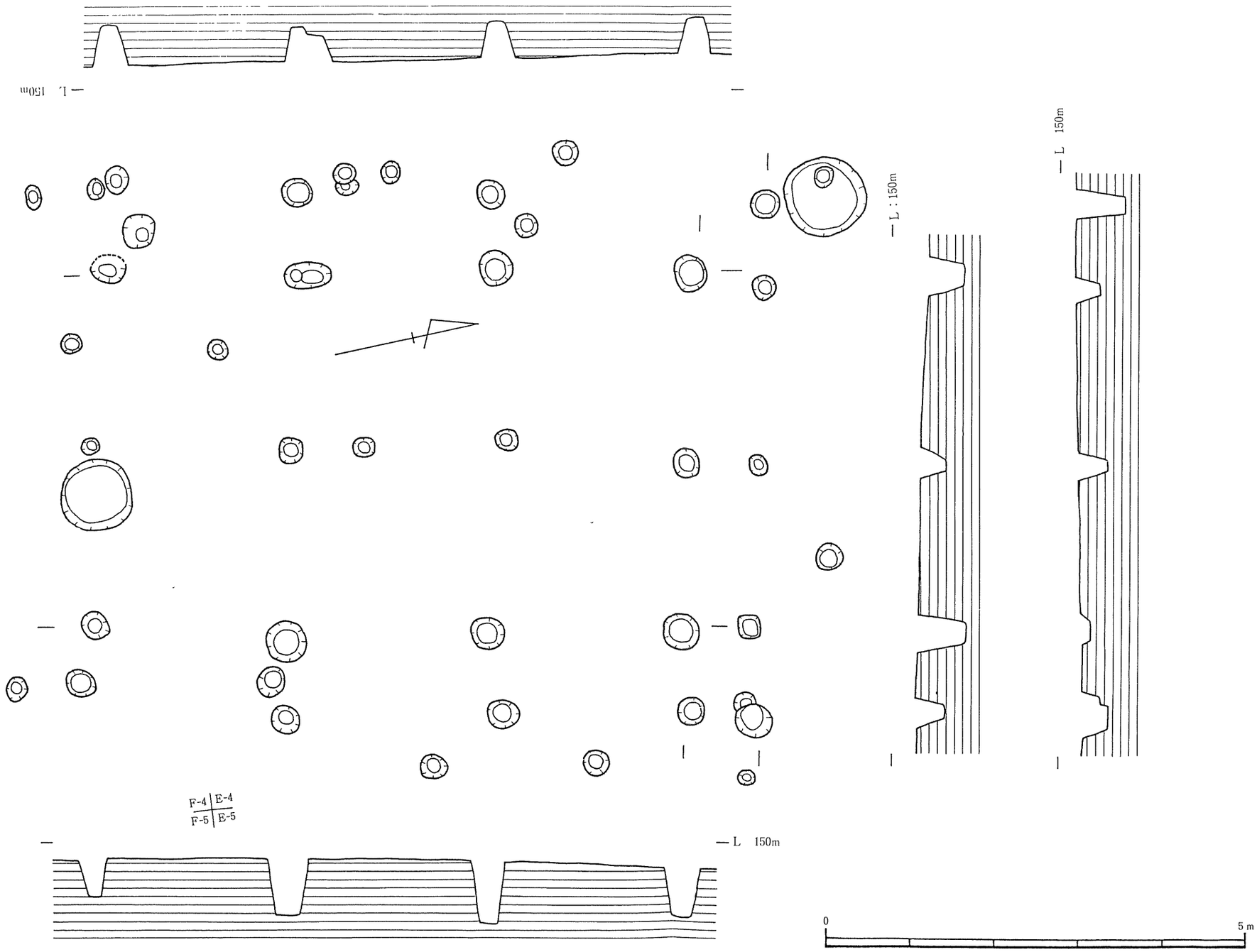


Fig 30　松原第Ⅰ遺跡１号掘立柱建物

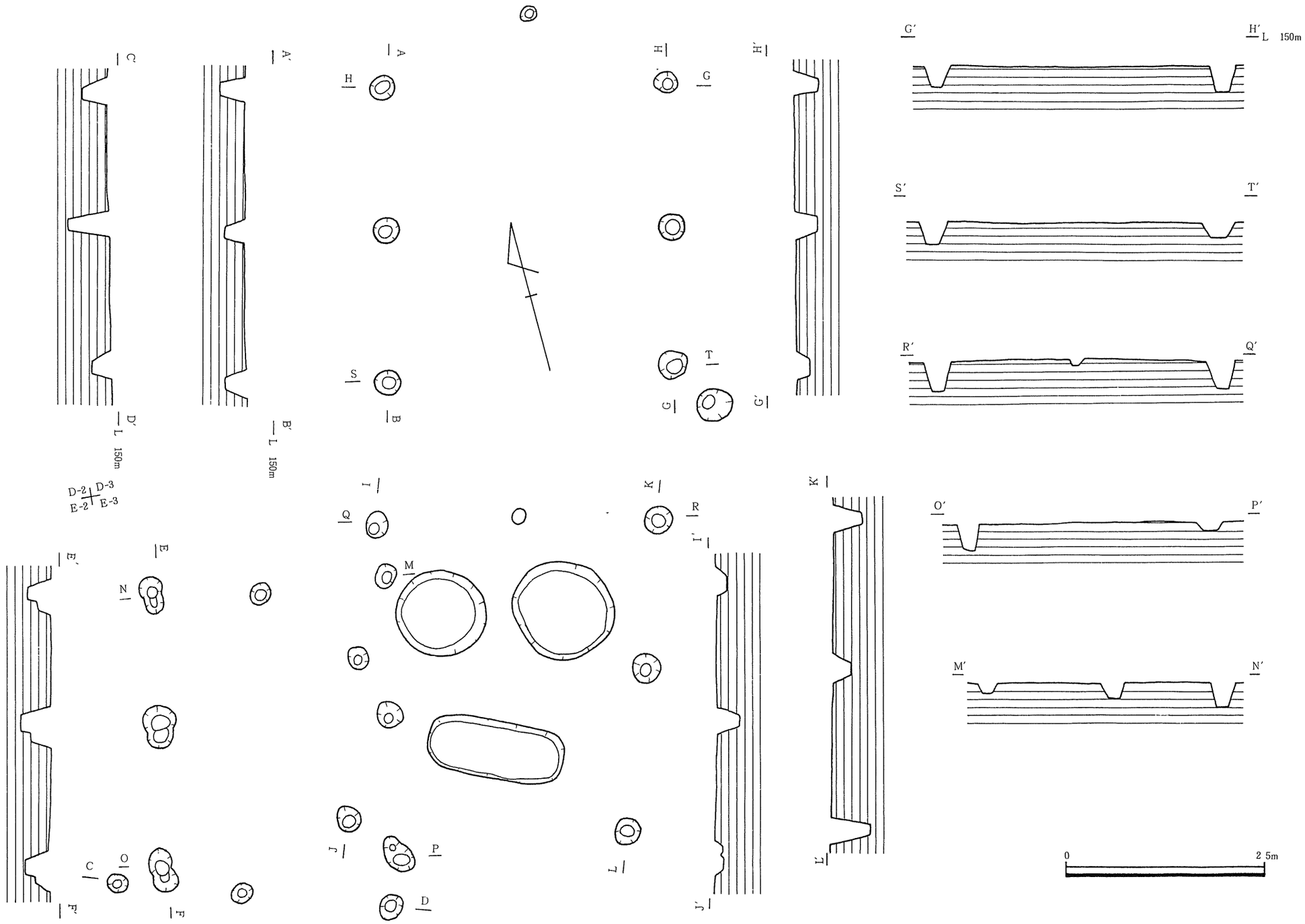


Fig 32　松原第Ⅰ遺跡3・4・5号

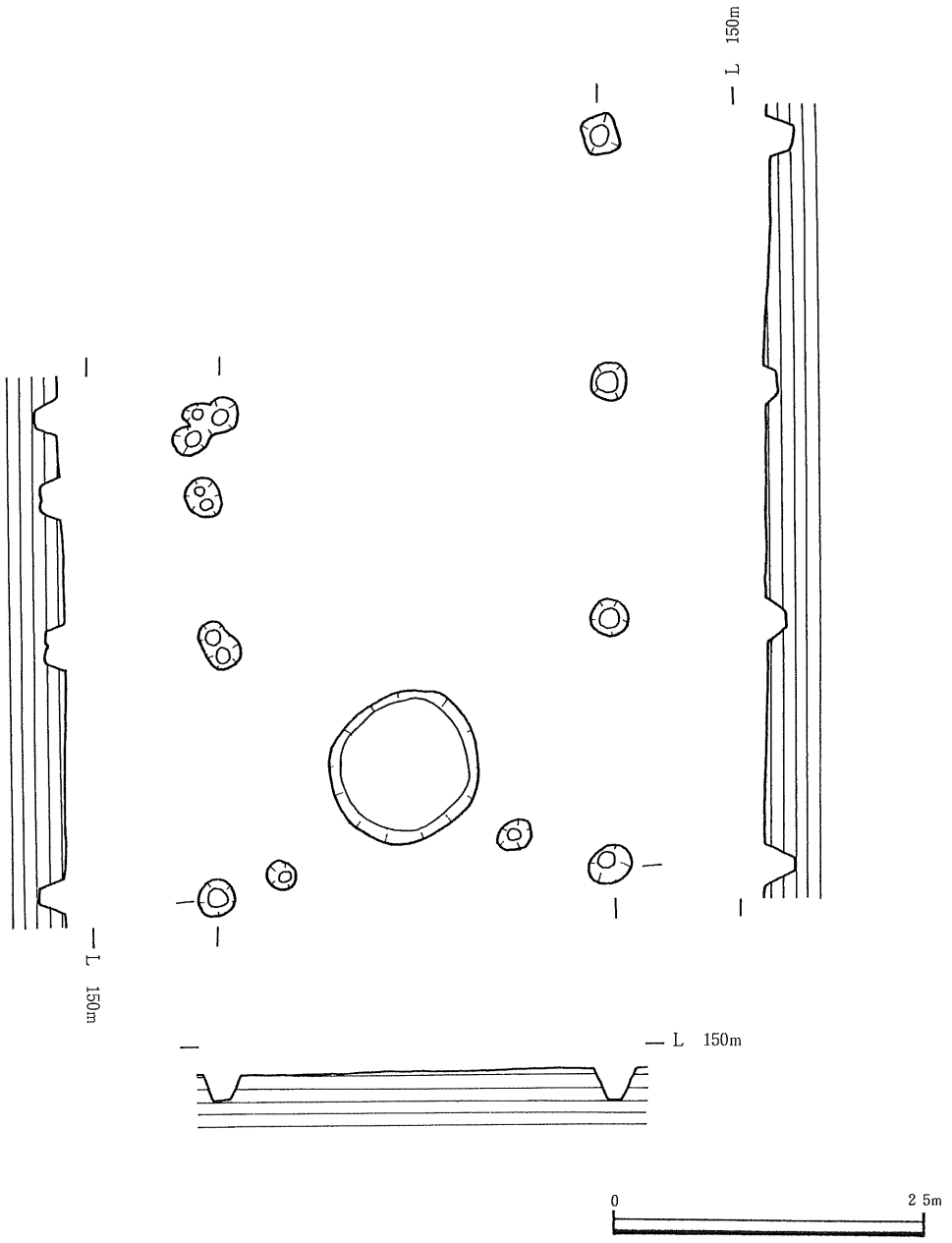


Fig 31　松原第Ⅰ遺跡２号掘立柱建物

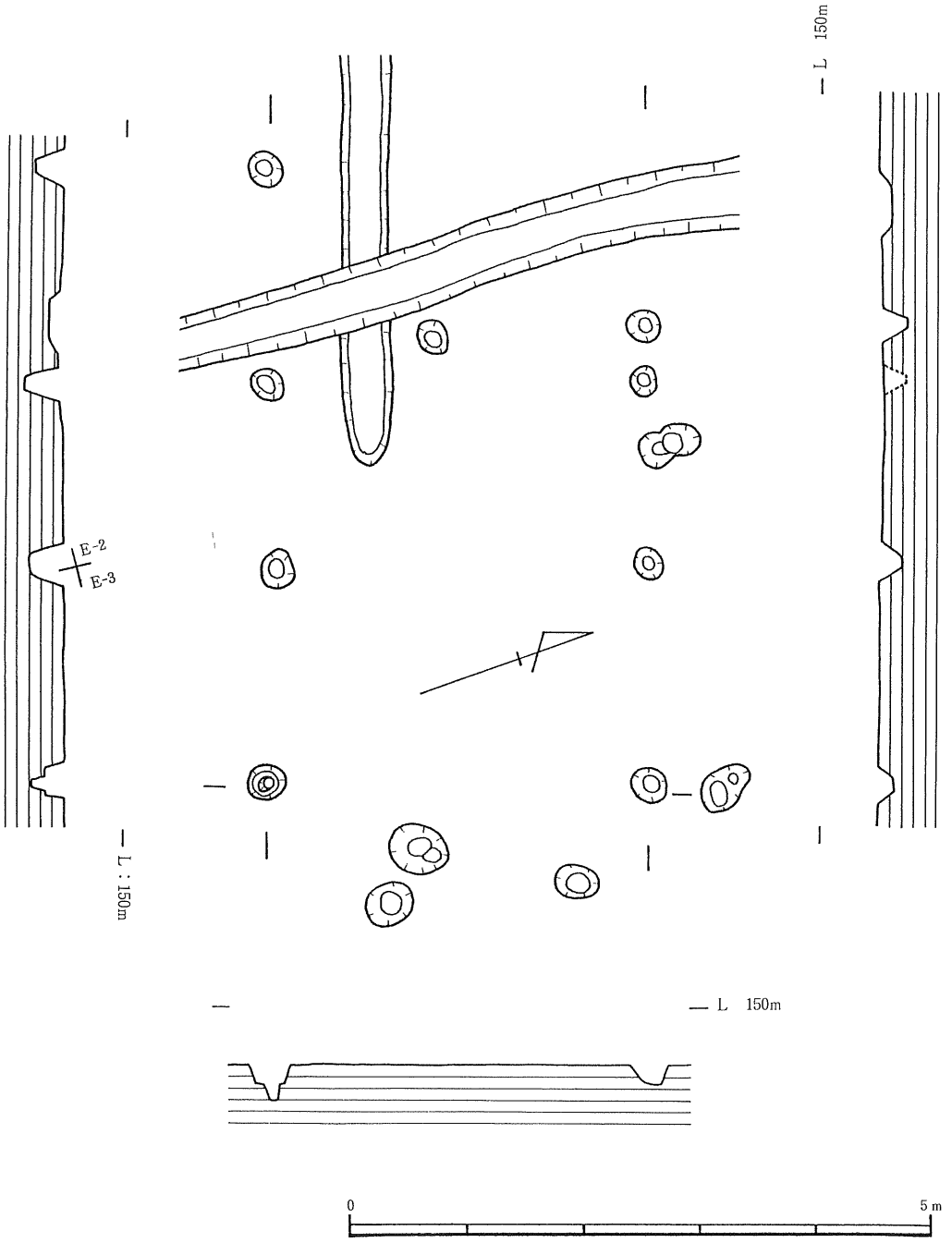


Fig 33　松原第Ⅰ遺跡６号掘立柱建物

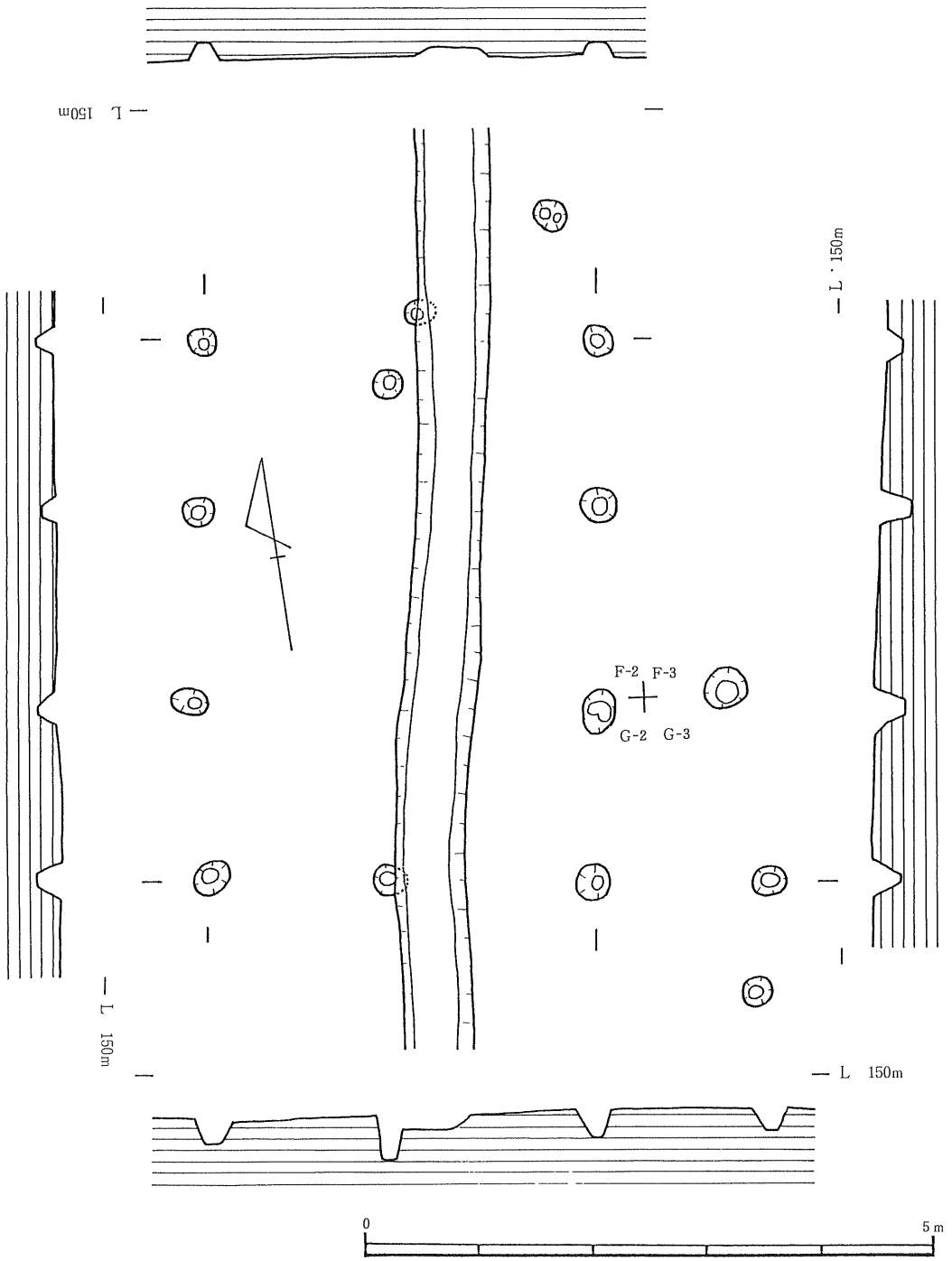


Fig 34　松原第Ⅰ遺跡７号掘立柱建物

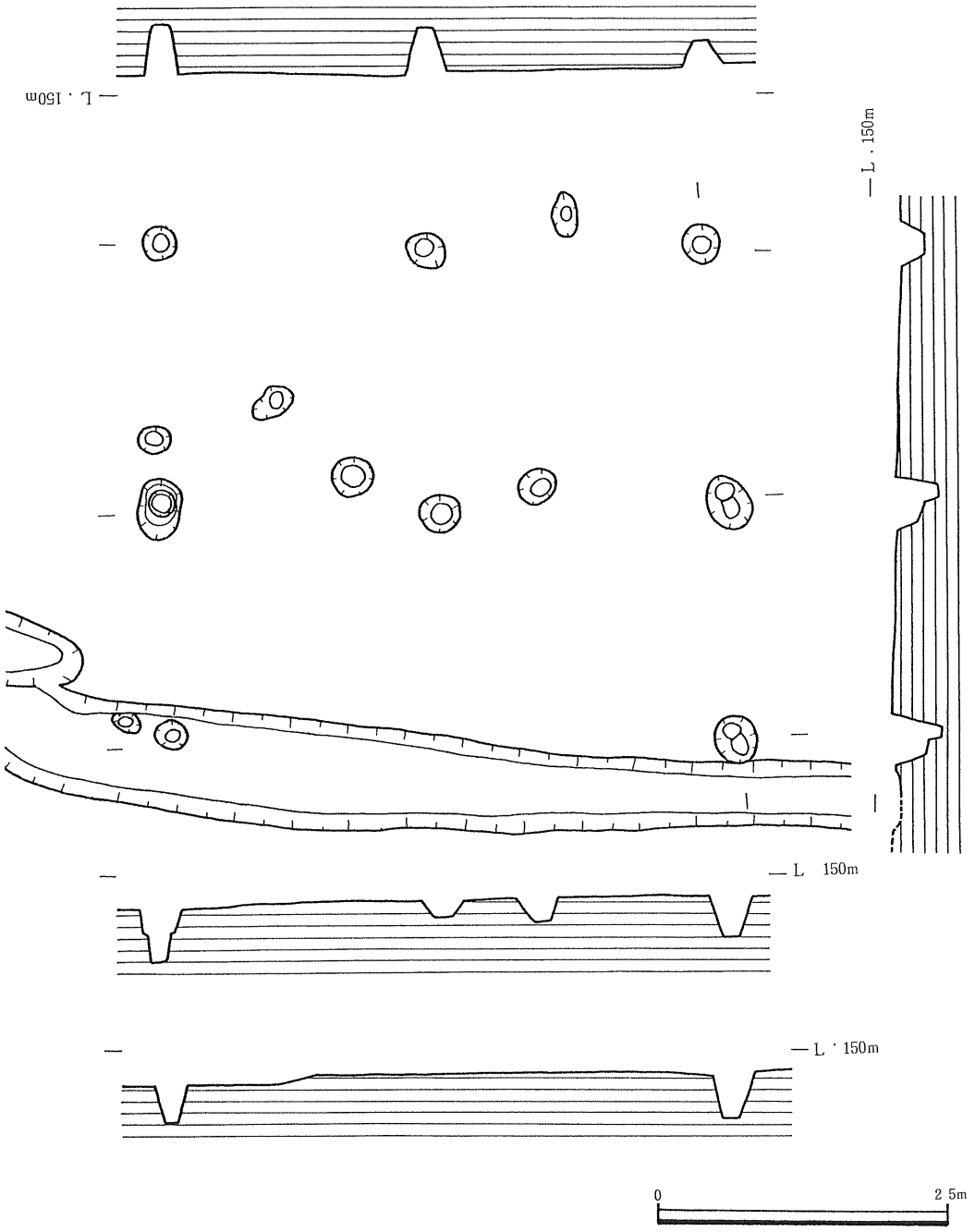


Fig 35　松原第Ⅰ遺跡８号掘立柱建物

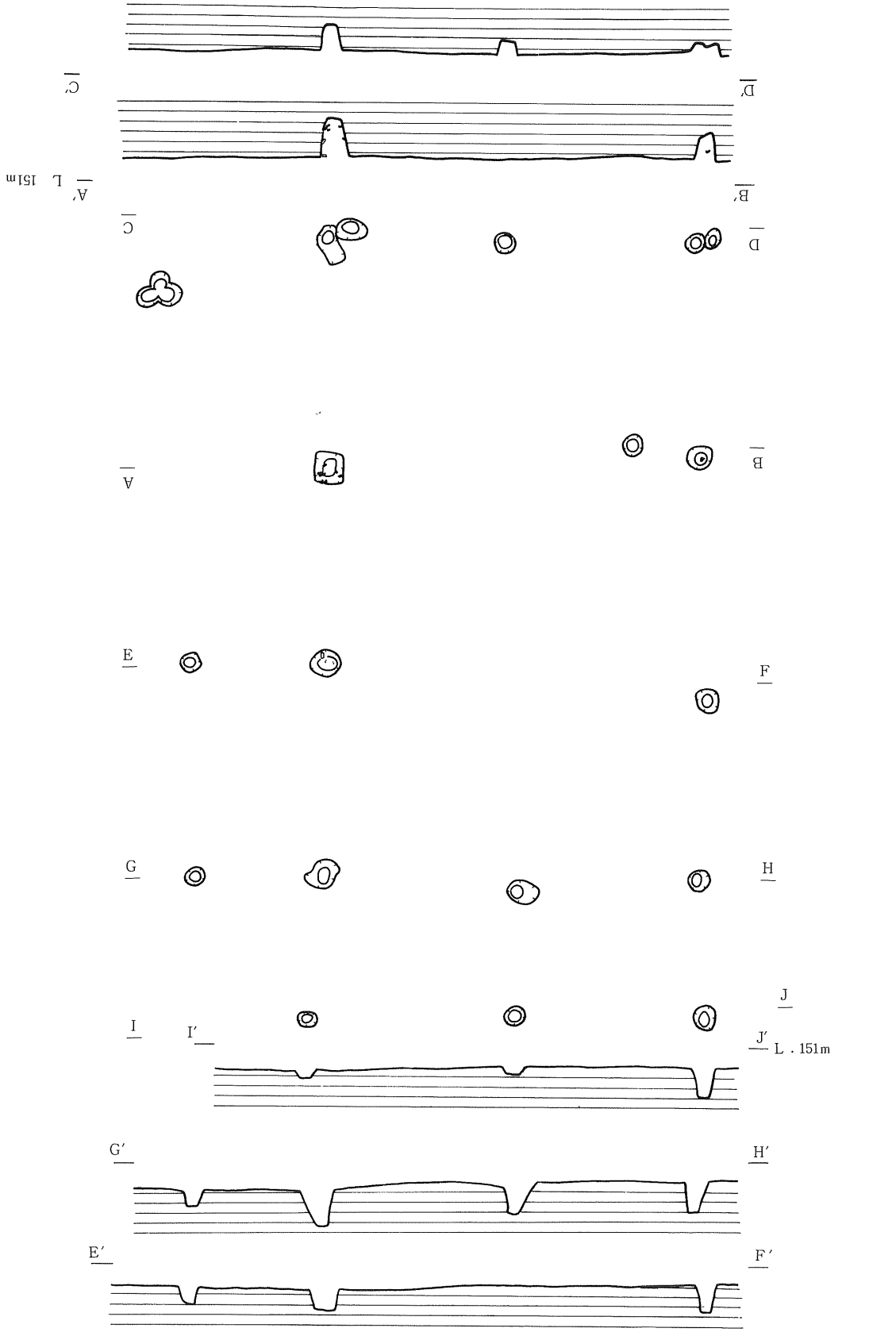


Fig 36　松原第Ⅰ遺跡９号掘立柱建物

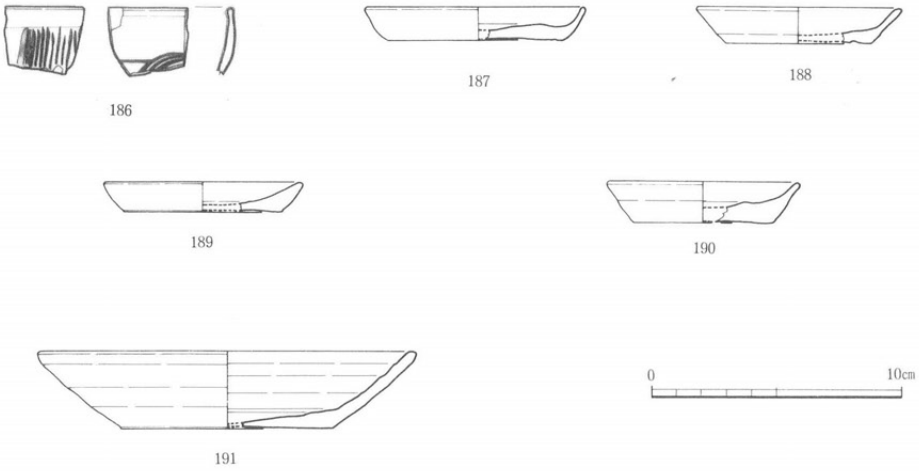


Fig 37　松原第Ⅰ遺跡９号掘立柱穴内出土遺物（１／３）

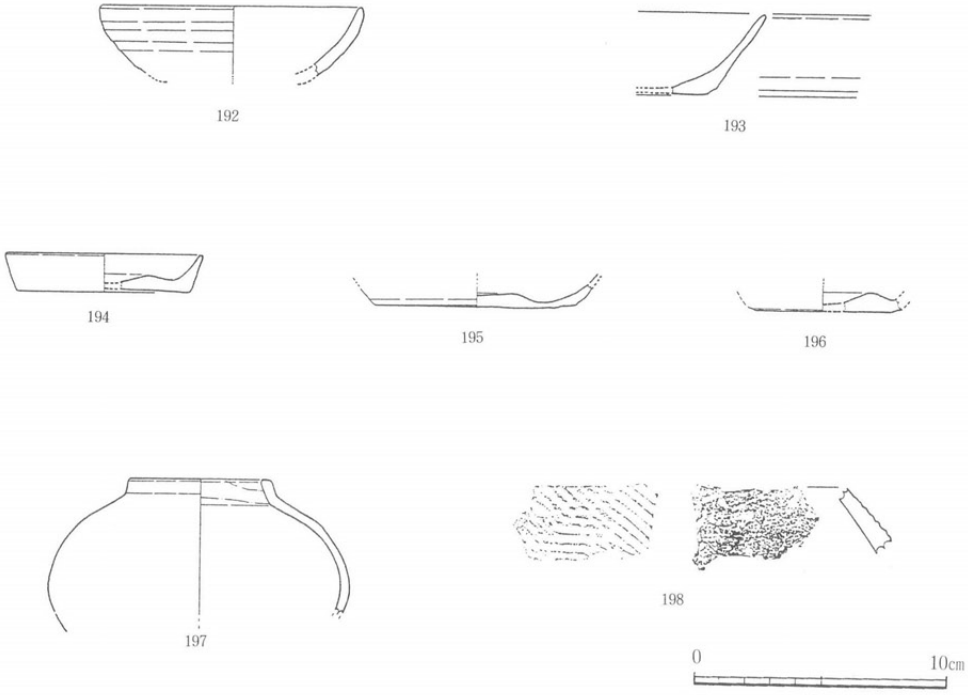


Fig 38　松原第Ⅰ遺跡掘立柱穴内出土遺物（１／３）

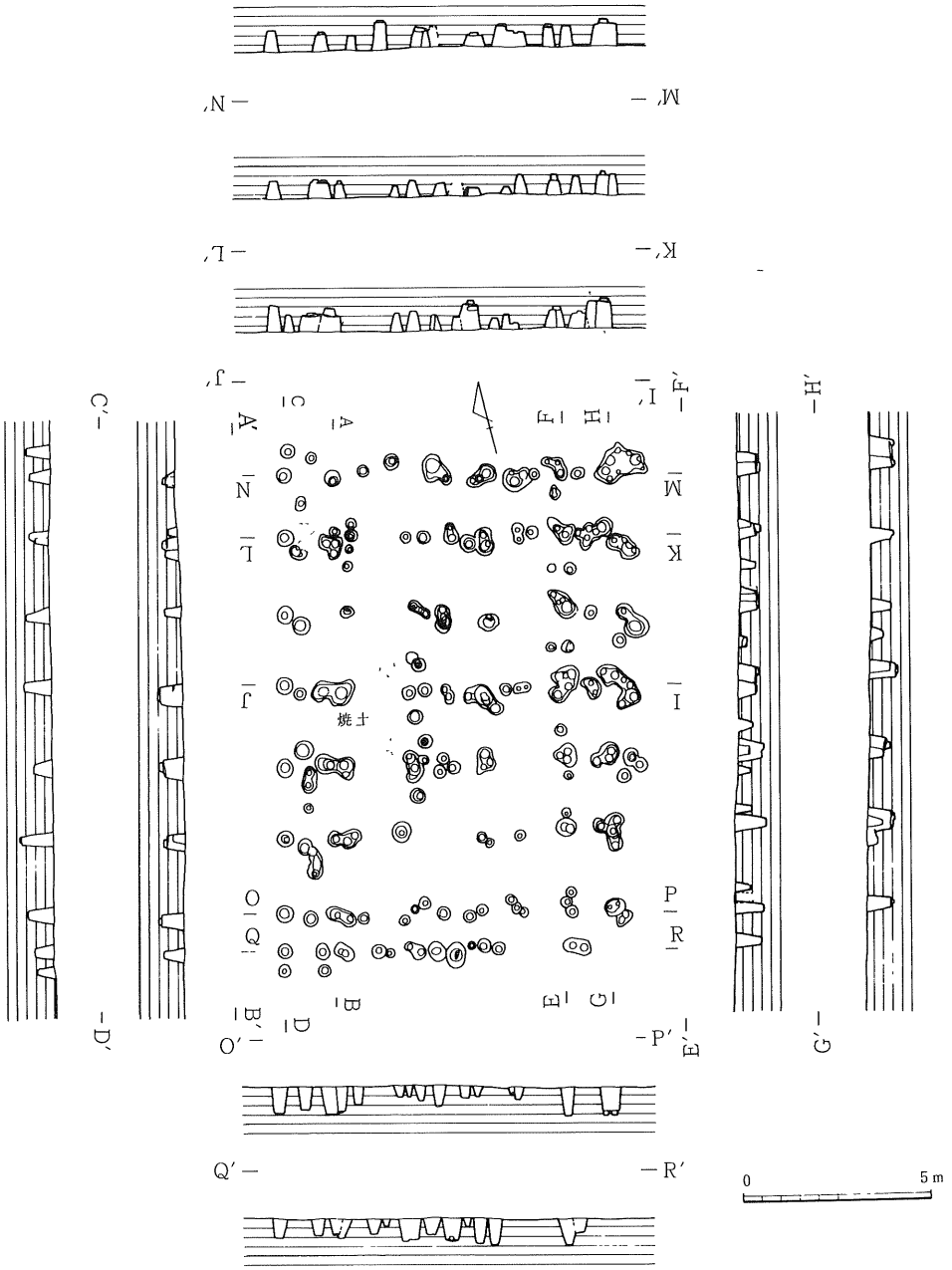


Fig 39　松原第Ⅰ遺跡10号掘立柱建物

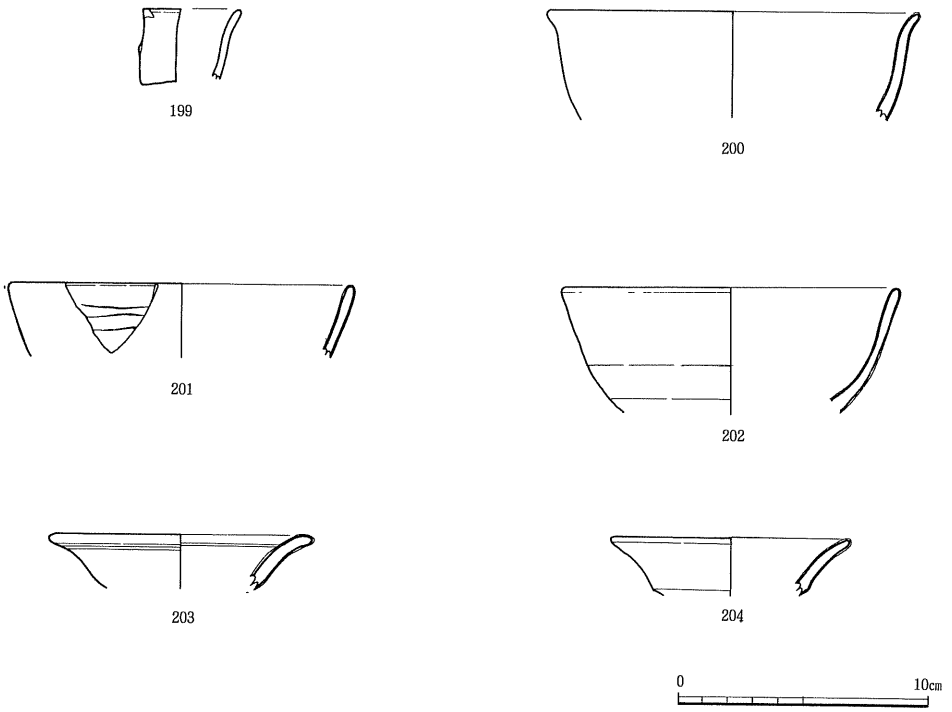


Fig 40　松原第Ⅰ遺跡10号掘立柱穴内出土遺物（1／3）

10号掘立柱遺構　(Fig39)

棟の方向はN13°E、柱間4間×6間、桁行11.65m、梁行7.65m、柱間寸法桁行2.0m～1.65m、同梁行1.0m～0.9mを測る。主屋と南側・東側に廂を有する建造物の跡と思われる。柱穴は確認面でほぼ70cmを数えるが、基底部に河原石を埋設するものと、石礎状のものが認められ、また粘土を底に敷いたものも若干存していた。前者は掘立柱の根固の石と推測される。また柱穴より至大通宝8枚、また最深部よりも同種2枚が出土した。これは建前儀礼に関係するものと思われる。推定主屋の床面積およそ89.12㎡でほぼ26坪強を数え、これにほぼ3尺の廂が附属する建造物であったものと思われる。

（重永）

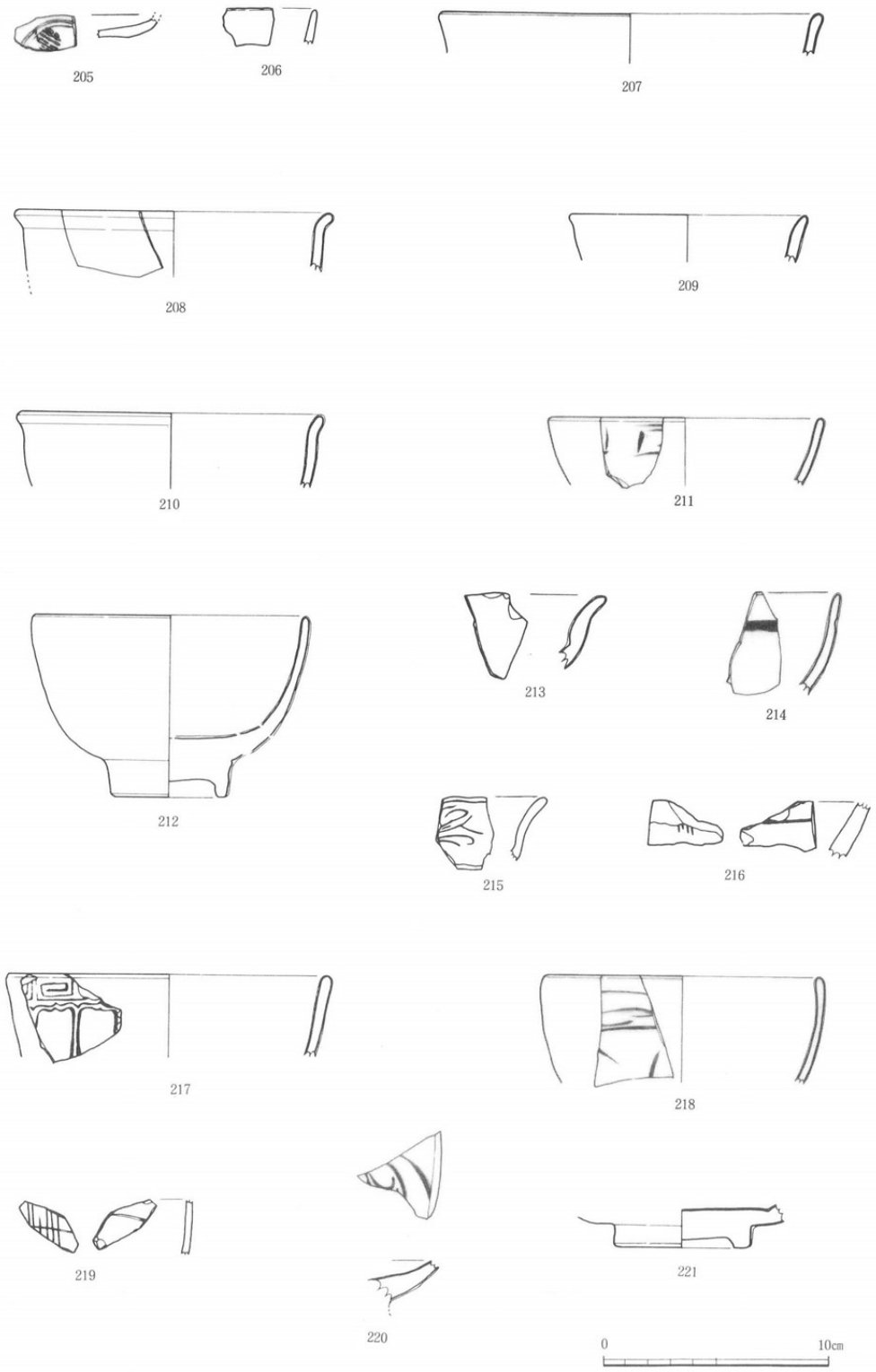


Fig 41　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－1（1／3）

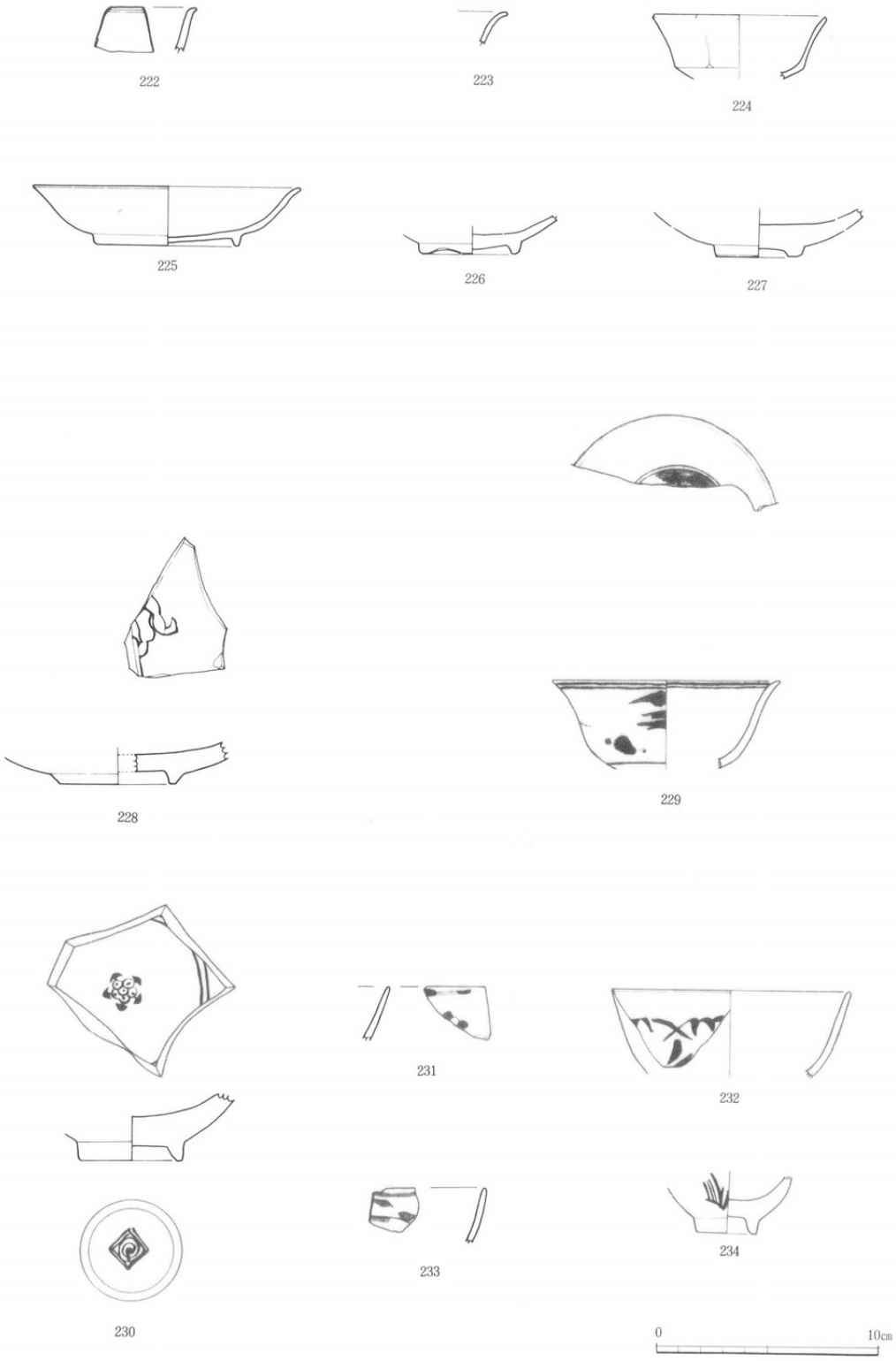


Fig 42 松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－２（１／３）

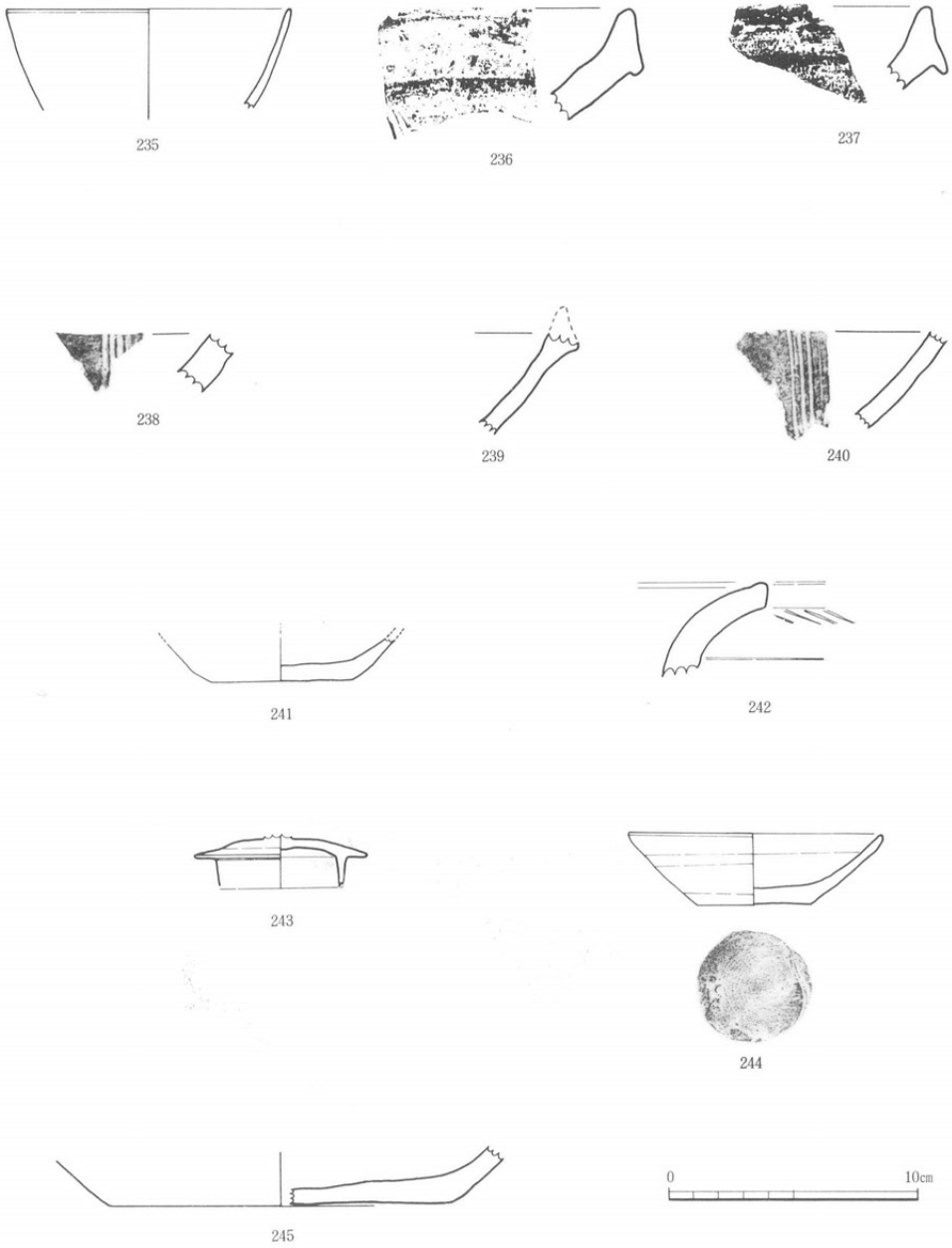


Fig 43　松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物－３（１／３）

(4) 井戸遺構

1号井戸

調査区域北西D・3区の北側に位置している。確認面で直径1.2m床面で0.7m、深さ2.0mを測る。遺物は埋土内より土師器が2点出土している。

246は坏で形状は不明、247はヘラ切り底の小皿で底部から直線的に立ち上がる。

2戸井戸

調査区域西E・2区とF・2区にまたがり、9号溝に切られている。形態は検出面で直径1.8m床面で0.9mと先細りし、深さは検出面である御池ボラ層より3.5mと出土した5基の井戸で一番深い。床面より1mほどから勇水がある。出土遺物はない。

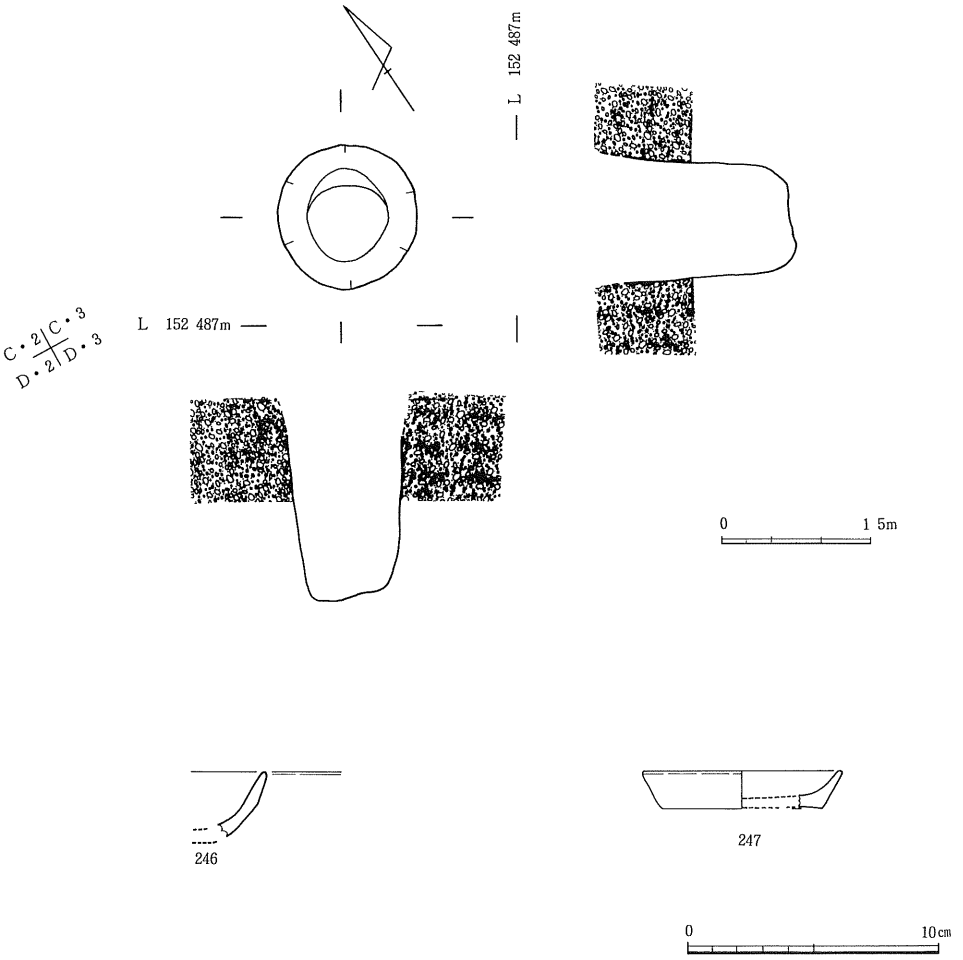


Fig 44 松原第Ⅰ遺跡1号井戸及び出土遺物（1／3）

３号井戸

調査区域北東Ｂ・11区とＣ・11区の境界で検出した。遺構確認面は第Ⅳ層の御池ボラで検出、平面プランは東西方向2.3ｍ、南北方向1.5ｍの不定形を呈している。当遺構の原型は直径0.6～0.7ｍ、深さ約 2.70ｍ の円形型の素掘りの井戸と思われるが、検出面である御池ボラ層は廃棄後御池ボラの崩壊により、検出面では不定形を断面では抉れた状況を呈していた。また、検出面下約2.7ｍ程で勇水があった。遺物は検出レベル付近および最深部より0.5～0.7ｍ 上位で頭蓋大から拳大の自然礫、陶磁器片や土師器片等が出土している。

出土遺物　248は青磁碗で検出面より出土し推定復元口径16.0㎝ を測り体部外面には画花文を施している。色調は淡黄緑色である。250 は常滑の壺で頸部上部及び底部が欠足し肩部径は16㎝ である。262は土師器の小皿で底部は糸切りのち板状の圧痕が付いており、底部から口縁にかけて内湾ぎみに立ち上がる。器壁は体部は均一であるが底部はロクロ成形による同心円の凹凸がある。また、250 と262 は井戸の最深部付近より出土していることからほぼ同時期のものと考えられる。

４号井戸

調査区東側のＥ・12区で南北方向が長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍの円形に近い楕円形の井戸である。検出面は第４層の御池ボラ層で検出面より床面までの深さは約1.7ｍ程で、御池ボラ層・漆黒土層を貫きアカホヤ層まで達している。床面には20～40㎝大の自然礫が廃棄されたように積み重なって堆積している。現状はボラ面の崩壊の恐れがあるため重機によりかなりの部分を

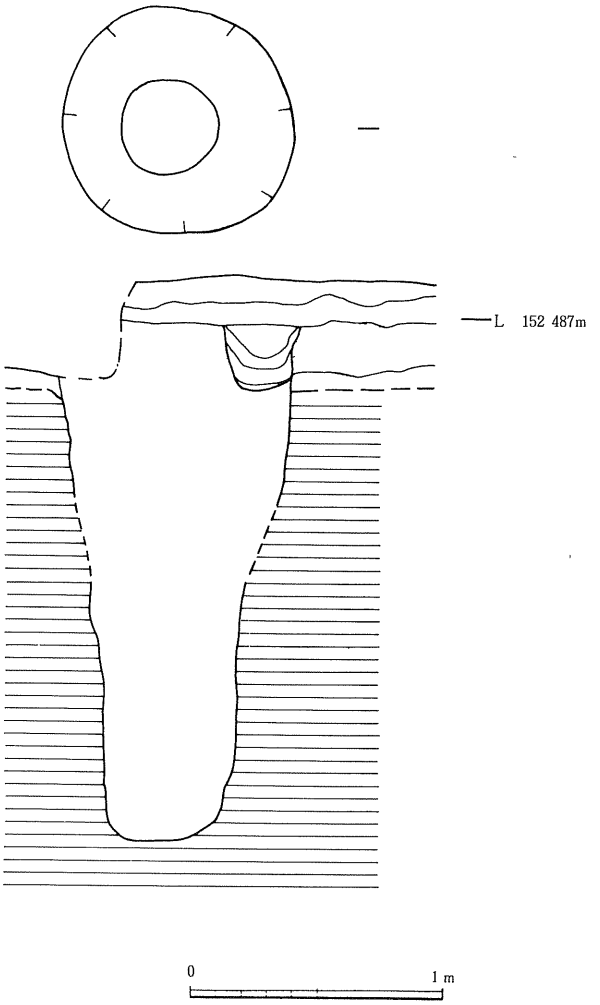


Fig 45　松原第Ⅰ遺跡２号井戸（１／３）

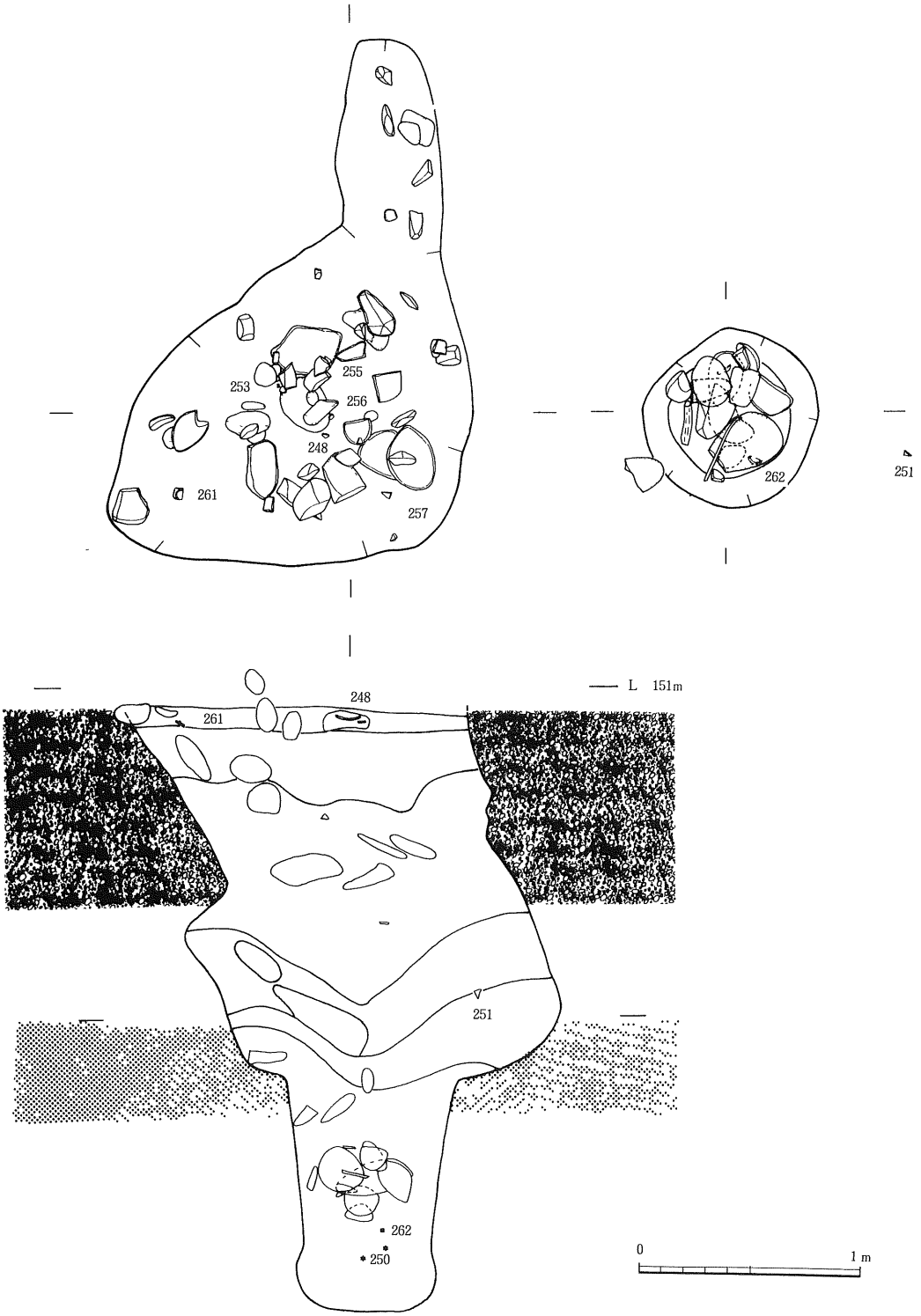


Fig46　松原第Ⅰ遺跡３号井戸（１／３）

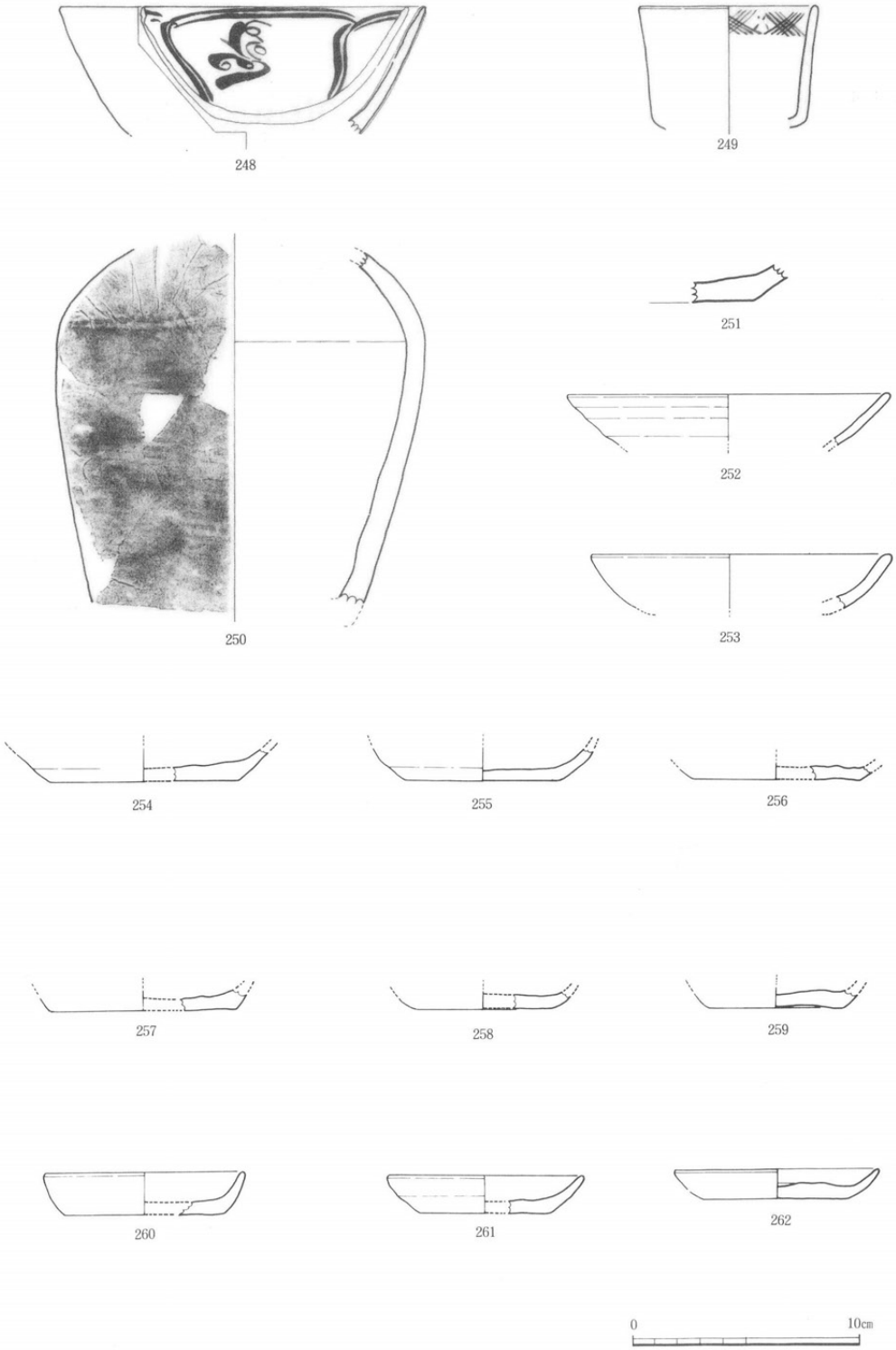


Fig 47　松原第Ⅰ遺跡３号井戸内出土遺物（１／３）

剝ぎとった。当遺構の形態は素掘りの井戸と思われるが、自然礫の堆積から石積み枠の井戸である可能性も考えられる。

（矢部）

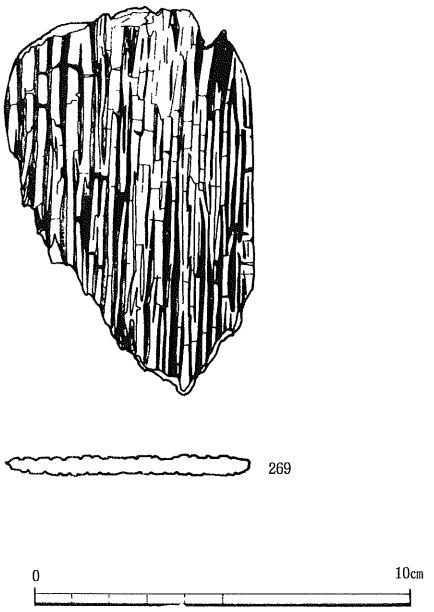


Fig 48　松原第Ⅰ遺跡 5号井戸内出土遺物

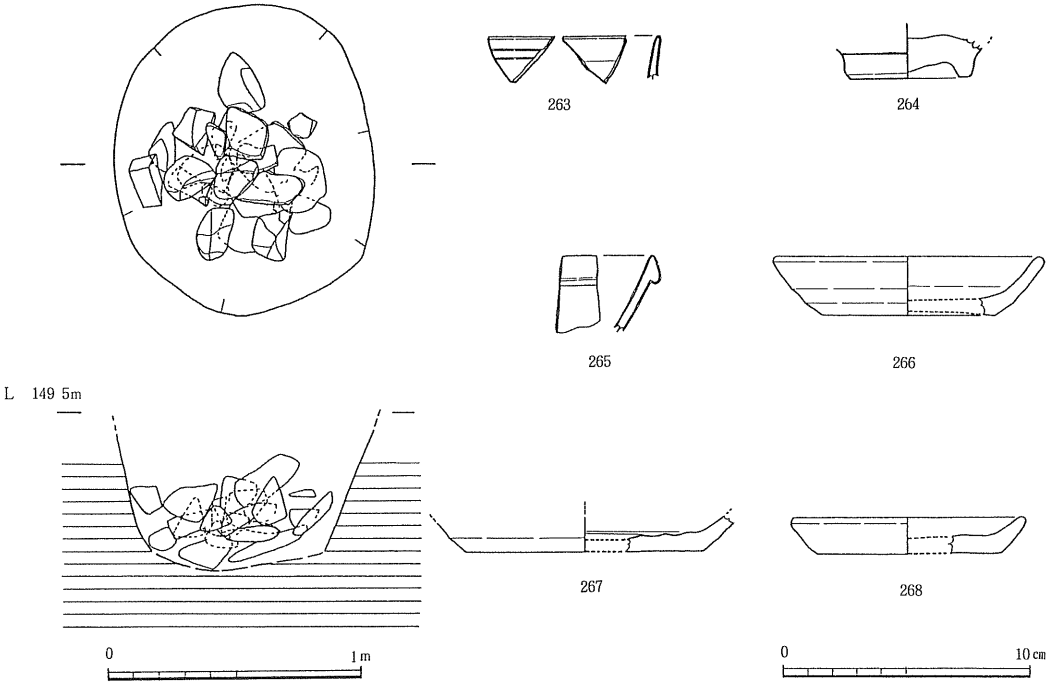


Fig 49　松原第Ⅰ遺跡4号井戸（1／3）及び出土遺物（1／2）

(5) 竪穴遺跡

1号竪穴遺構（Fig50）

プランはややゆがんだ方形で、主軸はN79°W。規模は2.75m×2.70mを測り、床面積は2.6m×2.55m（壁面下）を数える。また南側と東側の壁下に幅15cm～30cm、深さ10cm内外の壁帯溝が遺存する。床面内の主柱穴は北側が15cm～30cm、南側は25cm～30cmを計る。屋外に煙道を思わせるような溝状の遺構が存し、その先端のピットは30cmの深さを有する。この竪穴遺構は柱間3間×3間、桁行2.17m、梁行2.15m、柱間寸法桁行80cm～60cm、同梁行25cm～30cmを測り、およそ2.0坪となる掘立建物といえよう。検出面よりの覆土はほぼ5層よりなるが、各層に河原石、焼土灰が混入されており、自然遺物では遺構の西北偶、南西の床面より炭火籾や加工された竹・木の炭化物が検出された。また床面直上より磁器片若干が出土した。これらの事実より本遺構の存立期、廃絶の素因、過程、性格などが窺知されよう。

2号竪穴遺構（Fig51）

1号同様いびつな方形プランで、2.80m×2.70mを測り、主軸はN77.5°Wである。床面積は2.6m×2.6mで、北側の柱穴の深さは0.16m～0.36m、東側は0.13m×0.28mの範囲である。遺構内の覆土は単純な2層であった。床面より木灰や籾の炭化物などの自然遺物の外、永楽通宝2枚、磁器片が検出された。この遺構もほぼ1号同様の規模性と性格をもつものであろう。

3号竪穴遺構（Fig52）

平面プランは2.20m×2.05mの方形をなし、底面積は1.95m×1.90mを測る。確認面よりの深さは1.03m～1.08mである。覆土はほぼ7層で、いずれも軟質の混土層であった。この土層（深さ103cm）のピット中より河原石を配し、西面を向く恵比須像が埋置されていた。この像は素焼でにぶいレンガ色を呈し、胎土も精で焼成も割と良好である。技法は割り型に依って作製されたものと考えられ、像の両側面にその痕跡が明瞭である。像形は烏帽子をかぶり、狩衣指貫・括り袴を着け履をはいている。なお狩衣の中央（腹部）に三つ拍の印がみられる。岩（台座）に右脚を却踞し、左脚で地を踏みおろし、右手に釣竿を持し（一部欠失）左腕で魚を（鯛）を抱えている。総高7.30cm（2寸4分）座高5.6cm（1寸8分）肘巾4cm（1寸3分）厚さ1.8cm（6分）を測る。また岩座の裏に0.3cmの円孔が焼成前に穿たれ、その奥行は3.35cm（1寸1分）を数える。これは像の乾燥台か台座固定のために機能したものであろう。

（重永）

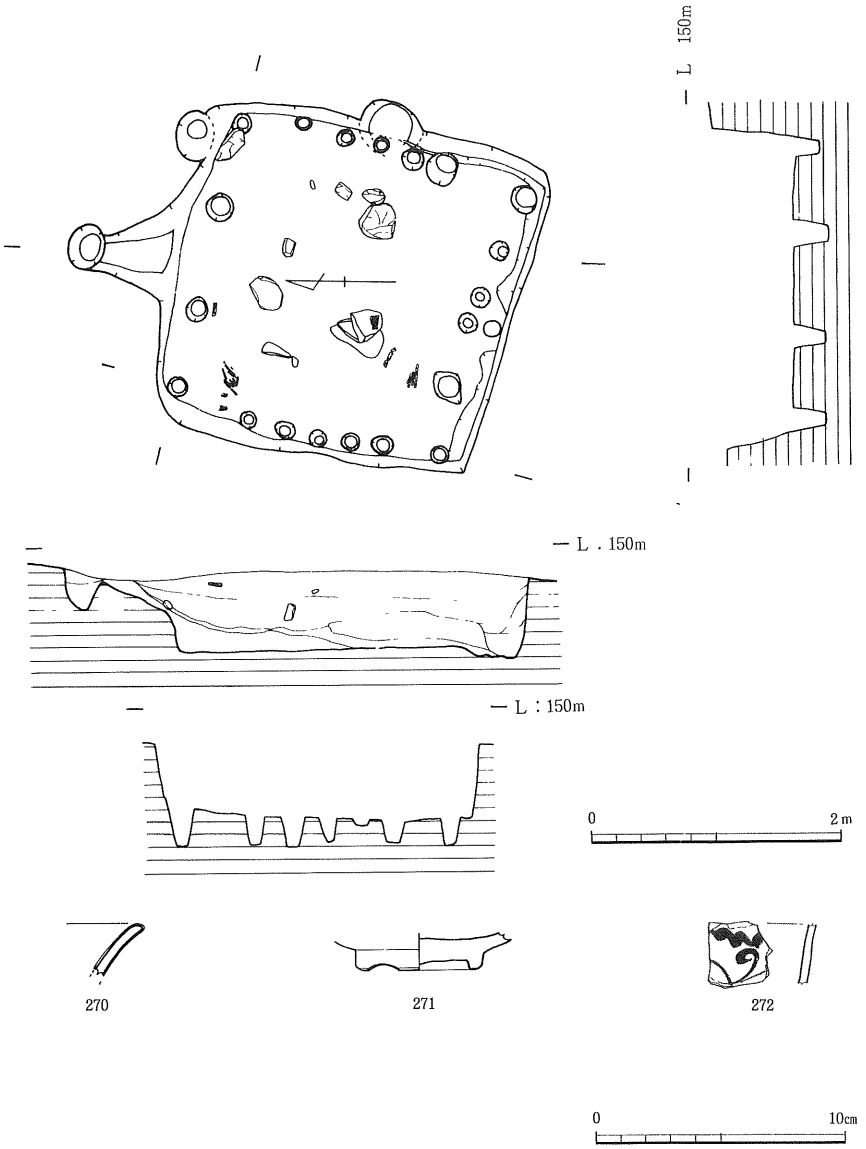


Fig 50　松原第Ⅰ遺跡１号竪穴遺構（１／３）及び出土遺物（１／３）

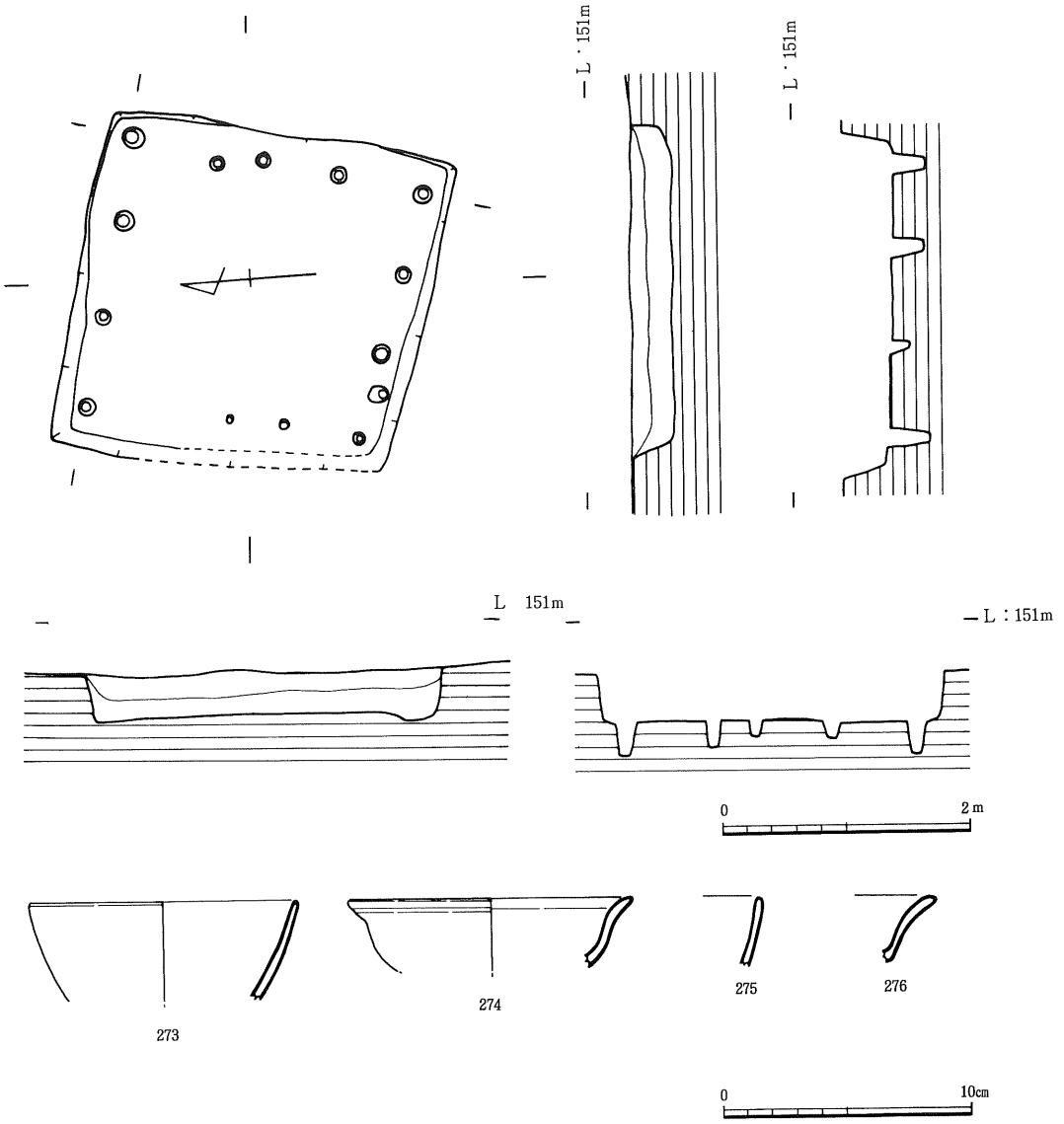
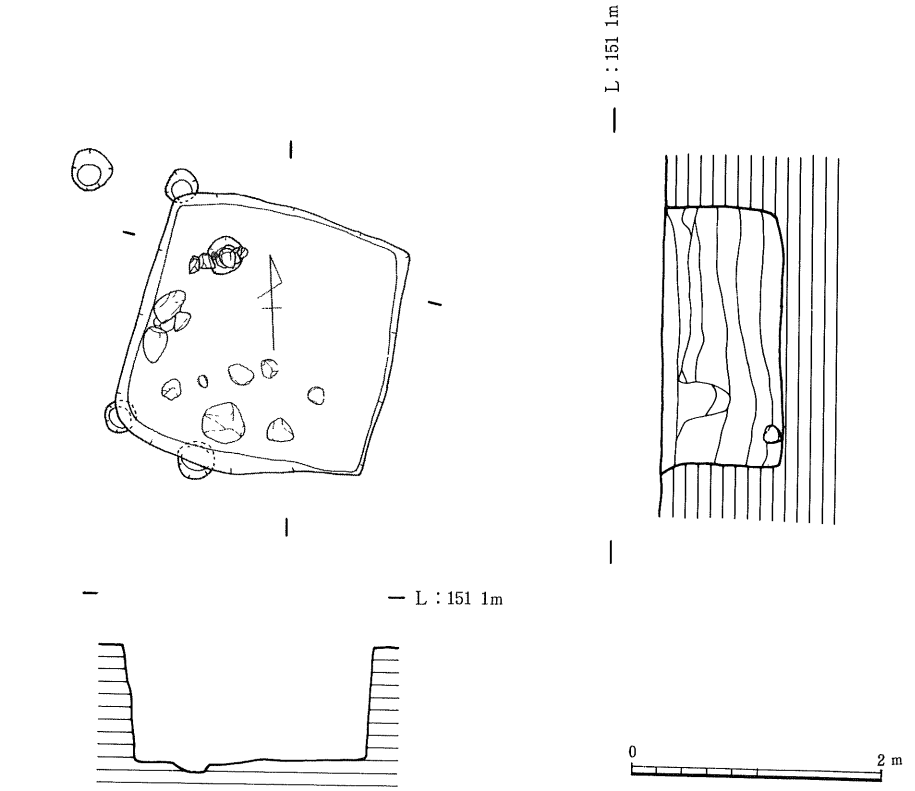
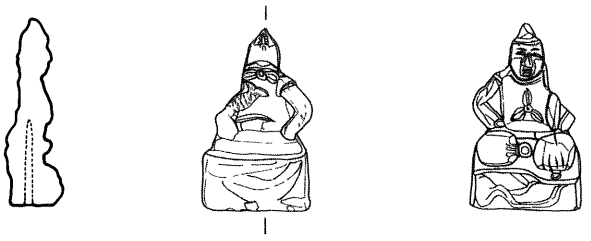


Fig 51　松原第Ⅰ遺跡２号竪穴遺構（１／３）及び出土遺物（１／３）



277

278



279

Fig 52　松原第Ⅰ遺跡３号竪穴遺構（１／３）及び出土遺物（１／３）

(6) 土　壙

松原第Ⅰ遺跡の西側調査区域で検出された土壙は32基である。C・11区とC・12区にまたがって出土した土壙状遺構（遺構の性格が不明なため特殊土壙と呼ぶ）、常滑の大甕の出土した1号土壙がある。他、地下式横穴（状土壙）・円形・方形などの形態があり、さらに平面形態では類似していても深度が著しく異なるものがある。これらの土壙は埋土の違いなどからもかなり時期幅があると思われるが一括して扱うことにする。

特殊土壙（Fig53）

調査区北東C・11区で2号溝（？）、3号溝、4号溝に切られた状態で検出された。当遺構は2つの土壙からなり、西側土壙は長軸1.2m、短軸0.35m の楕円形を呈し深さは1.1m である。埋土は第3層で遺物の出土はなかった。もう一方の東側土壙は全長3m幅0.5mで¼周程の円弧形をした特殊な土壙で、深さ1.0～1.1m で床面からほぼ垂直に立ち上がっている。遺構は第Ⅳ層の御池ボラ層を貫き第Ⅴ層の漆黒土層の上位まで掘りこまれている。埋土は第Ⅲ層黒褐色土である。当遺構は特殊な形状をした土壙で、用途・機能については貯水的または貯蔵的な機能を果たしていたと考えられるが確証はない。遺物はかなり出土しているが床面またはその附近で出土しているものは少ない。遺物の種類はスラグ（鉄滓）、軽石が多く、他土師器も多い。

出土遺物　282・281 は白磁碗で高台内底部は無釉で口縁は玉縁ないしは櫛描である。282は鍔付の滑石製の石鍋で外面にススの付着がみられる。283～293は土師器で283は口径15.2㎝、底径8.8㎝器高2.9～3.0㎝、284は推定口径14.7㎝底径9.1㎝器高2.9～3.0㎝を測る大型の坏で内・外面ともロクロ成形による明瞭な稜が残っている。290・292 は小皿で口径と底径が大きい割りには器高が低く、直線的に立ち上がり全体に平面的である。底部は糸切りのち板状の圧痕が付いている。（矢部）

1号土壙（Fig55）

D・4区より検出され、確認面からの平面観は不整形の円形である。上面の東西径 100、南北径 110 ㎝を測る。その深さは30㎝～39㎝の間で、覆土は2層をなしていた。覆土中より陶質の大甕の破片が出土した。これは上部または横位よりの物理的破壊と近年の農耕機械に依る損傷破壊をうけていた。

大甕（Fig56）

陶質の大甕で褐色を呈し焼成も堅緻であるが、肩部に気泡（火ぶくれ）が残る。総高（既存部）53.6㎝、口径35.7㎝縁帯の巾4㎝、胴径55.5㎝を計る。口唇を引きあげ、強く垂れ下ってN字をなす。いわゆる折端の口縁とそれに続く短頸部、肩の張った胴部へと移行する器形をもつ。技法は作り出しの裏に対する頸部および内面に輪積みの手法か木べら状のもので撫であげた跡、描掻きなどが明瞭に看取される。この大甕は形態よりも広く常滑第三型式の範疇に属するものである。（重永）

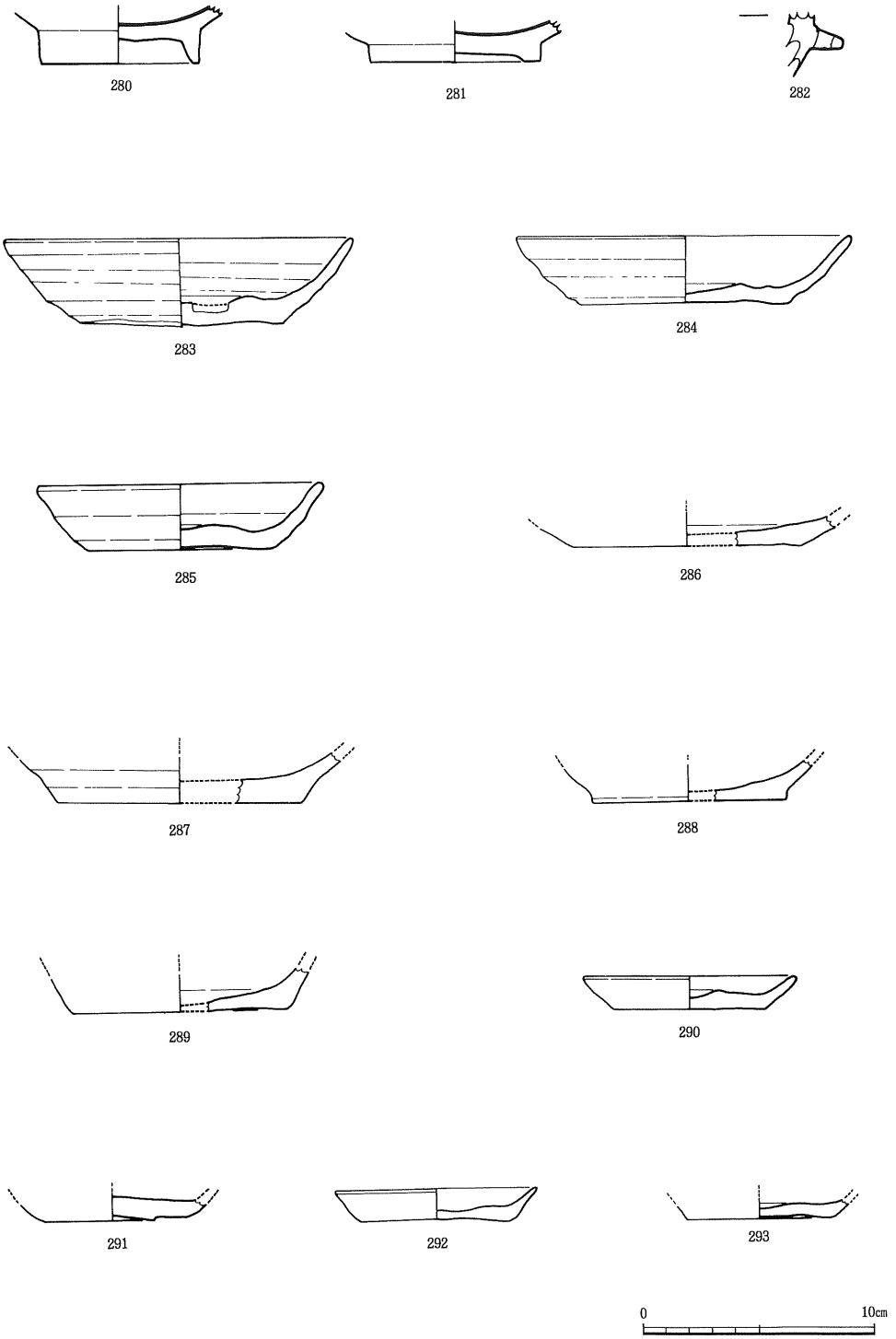


Fig 54　松原第Ⅰ遺跡特殊土壙内出土遺物（1／3）

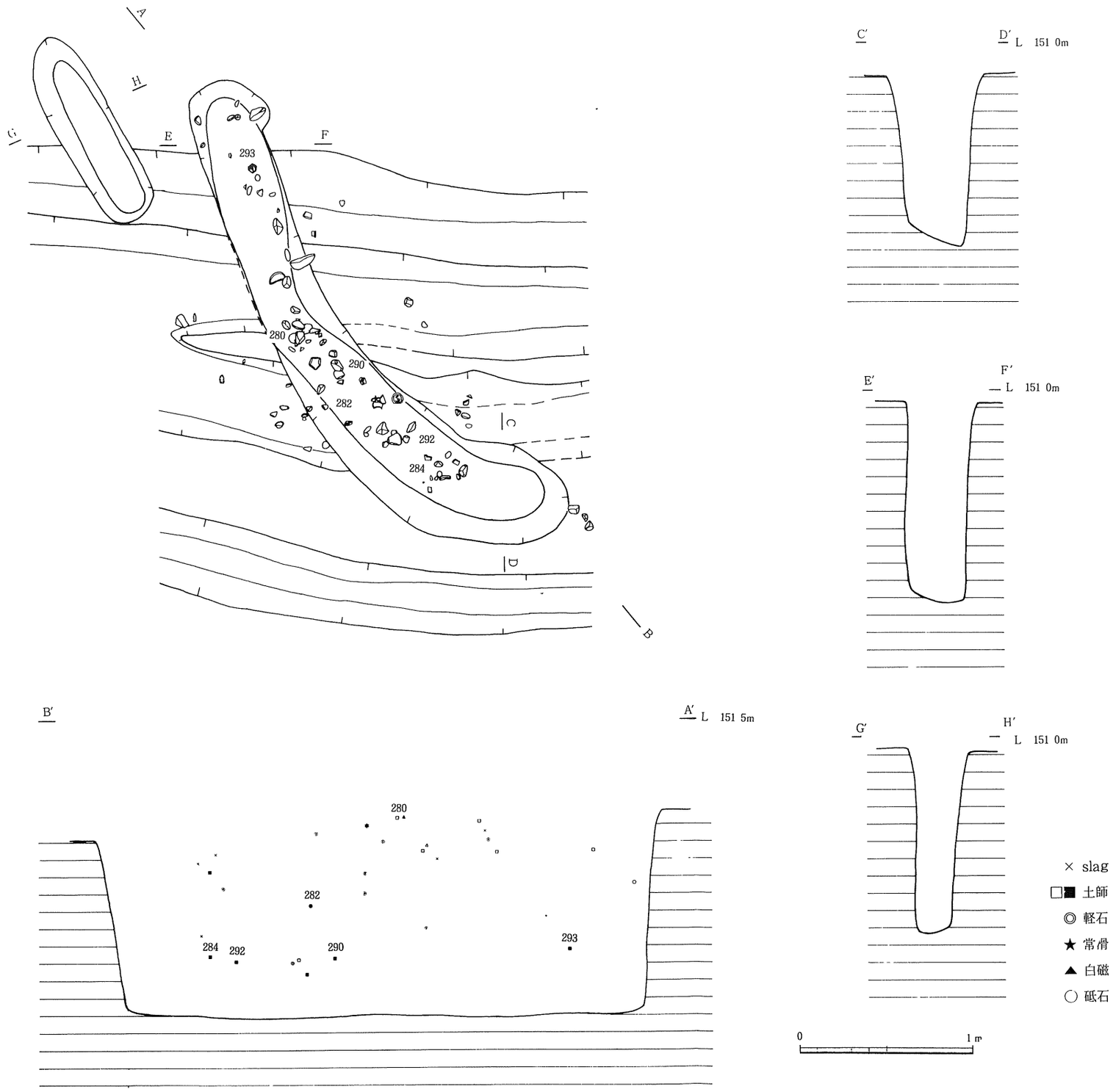


Fig 53 松原第Ⅰ遺跡特殊土壙（1／3）

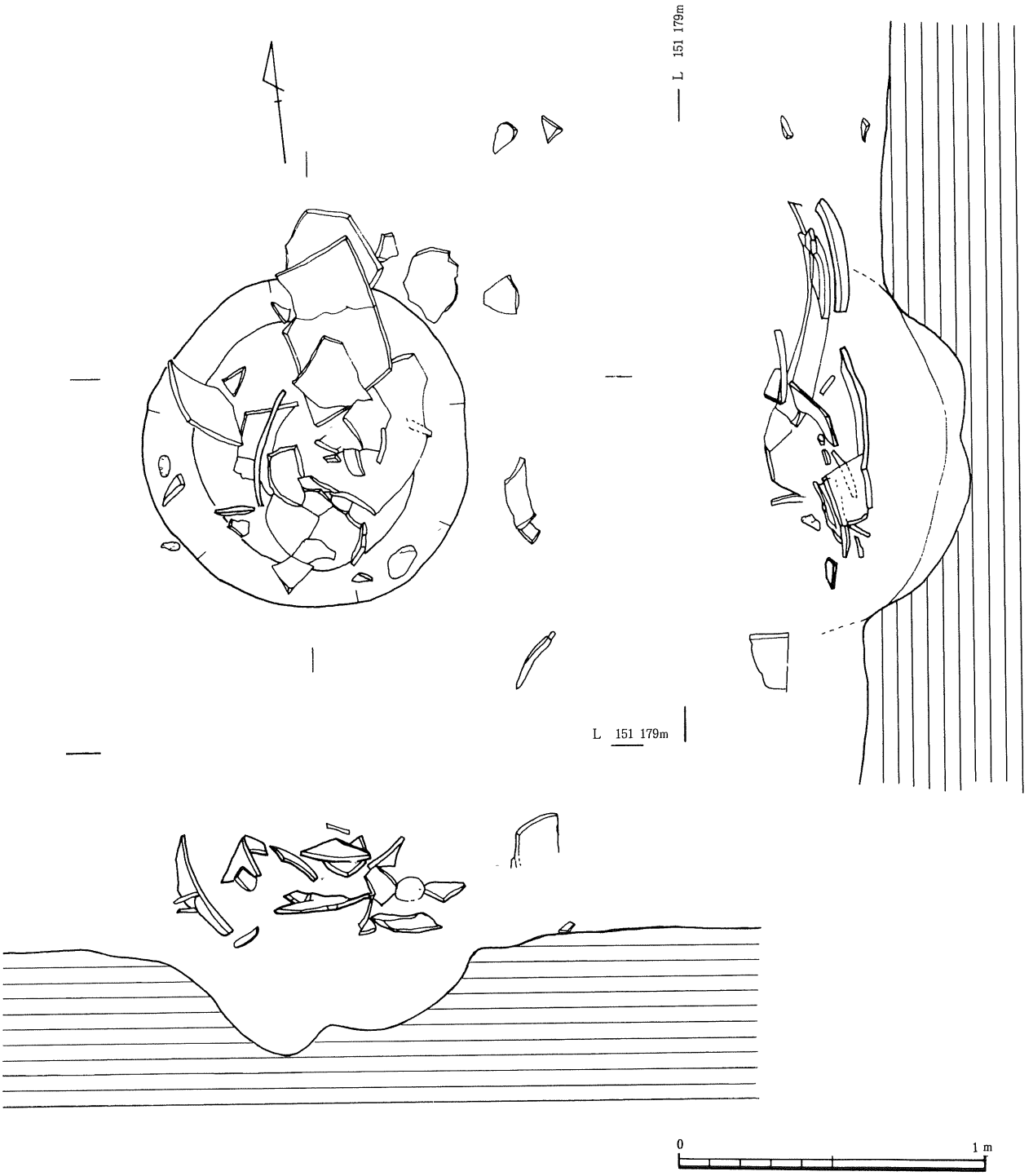
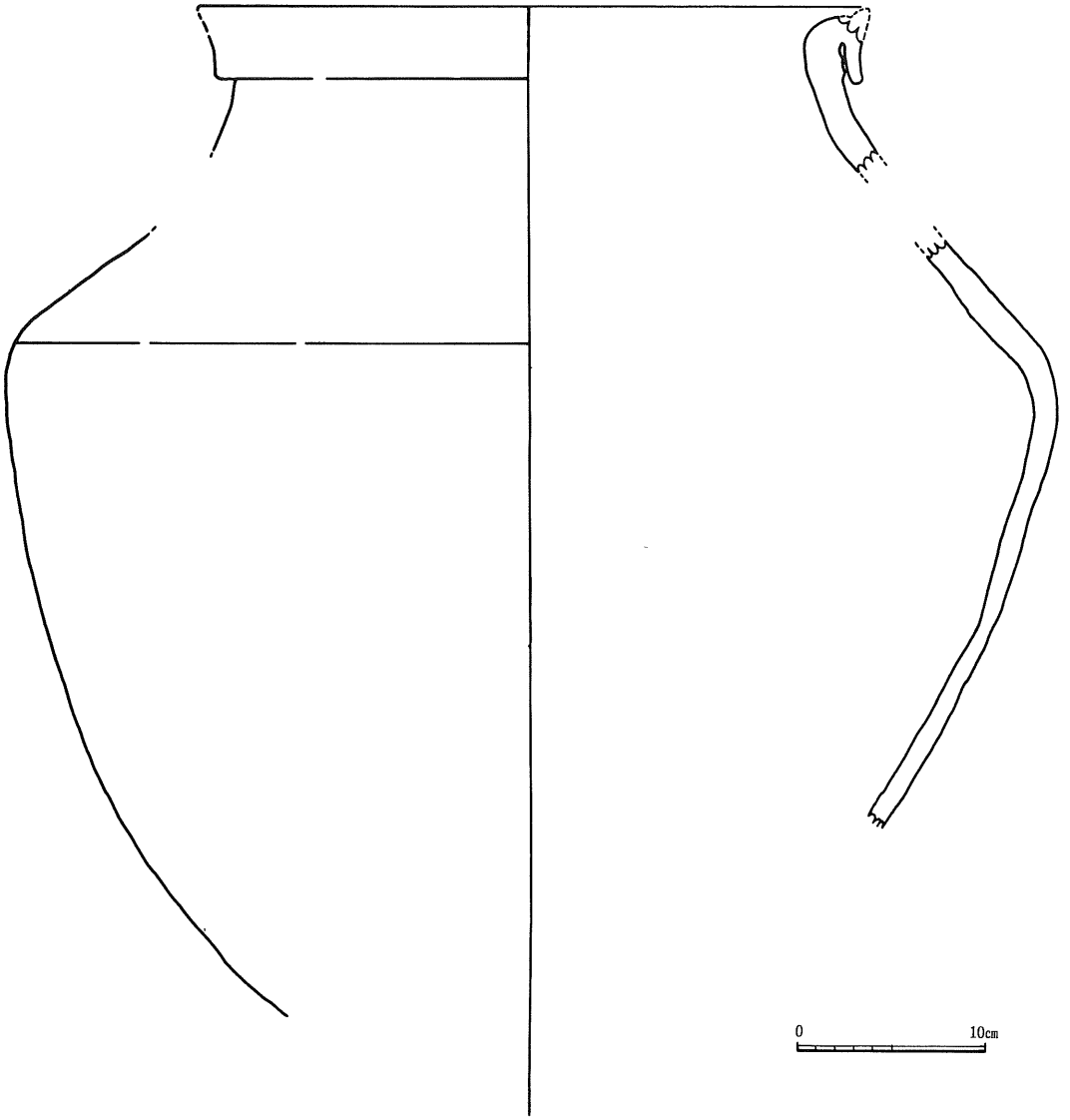


Fig 55　松原第Ⅰ遺跡１号土壙（1／2）



294

Fig 56　松原第Ⅰ遺跡１号土壙内出土遺物（1／4）

20号土壙

E・5区北側に位置し、形態は直径1.1～1.2m深さ0.5mで床面が2段に落ち込んでいる。検出面レベルで遺構の中央附近にかけて厚さ10cmほどの粘土が敷きつめられている。埋土は灰黒色土である。

23号土壙

F・4区北東側に位置し、形態は長軸1.7m短軸1.2mでトレンチャーにより攪乱を受けているが楕円形にちかい隅丸方形を呈していると思われる。深さは0.6mである。遺構内北側で20～30cm大の軽石が検出面附近から出土している。埋土は黒褐色土である。

29号土壙

G・5区北側に位置し、主軸方向N42°Wで長軸3.6m短軸3.4mのほぼ円形を呈し、深さは0.6mを測る。埋土は灰黒色土である。

31号土壙

G・4区南東側に位置し1号溝を切っている。主軸方向N77°Wで長軸0.7m短軸0.5mの隅丸方形を呈し、深さ（確認面より）0.35mを測る。埋土は黒褐色土である。

32号土壙

G・4区とG・5区の境界に位置し、主軸方向がN20°Eで長軸0.85m短軸0.5mの方形を呈し、深さは0.55mを測る。埋土は黒褐色土である。

18号土壙

E・5区北側に位置し、18号の形態は地下式状を呈している。竪坑は1.87×1.28mの南北が長軸の楕円形状をなし、床面は1×0.7m程を測る。深さは検出面より1.3mで横穴入口（羨門）で20cm程の段を有す。横穴の形状は妻入り型を呈し奥行2.2m幅1.2mである。遺物は竪坑内に頭蓋大から拳大の自然礫や軽石が出土している。295・296は検出面付近からの出土である。また、18号土壙と19号土壙の切り合いについては不明である。

30号土壙

G・4区に位置し、30・31・32号土壙は形態や位置関係から一対のものと考えられる。主軸方向がN75°Wで長軸1.7m短軸1.0mの方形を呈し、深さは1.01mでほぼ垂直に掘り込まれている。遺物は検出面より1／3程の深さに頭蓋大から拳大の焼石や軽石が出土し、297・298は検出面付近からの出土である。埋土は黒褐色土である。

（矢部）

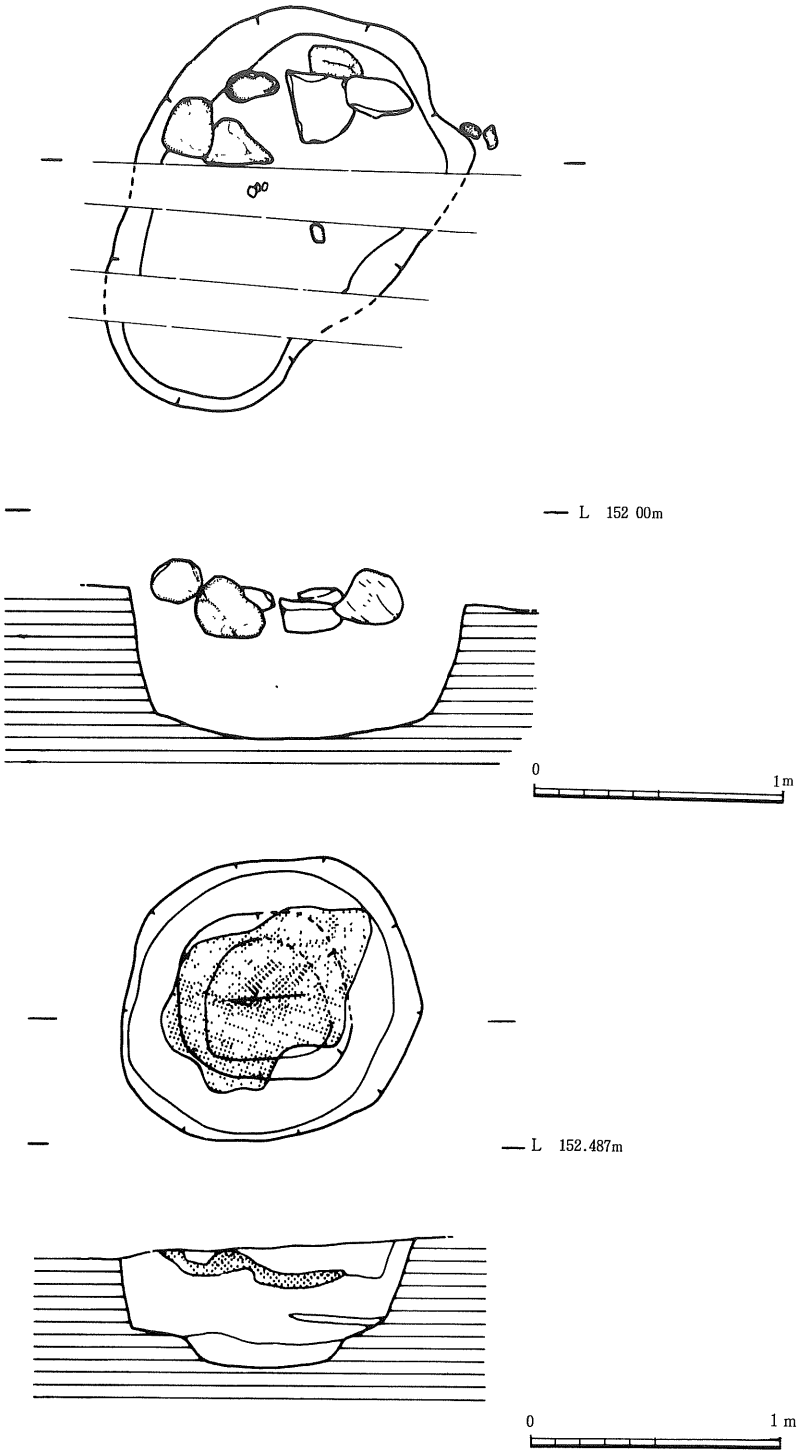


Fig 57　松原第Ⅰ遺跡20(下)・23(上)号土壙（1／3）

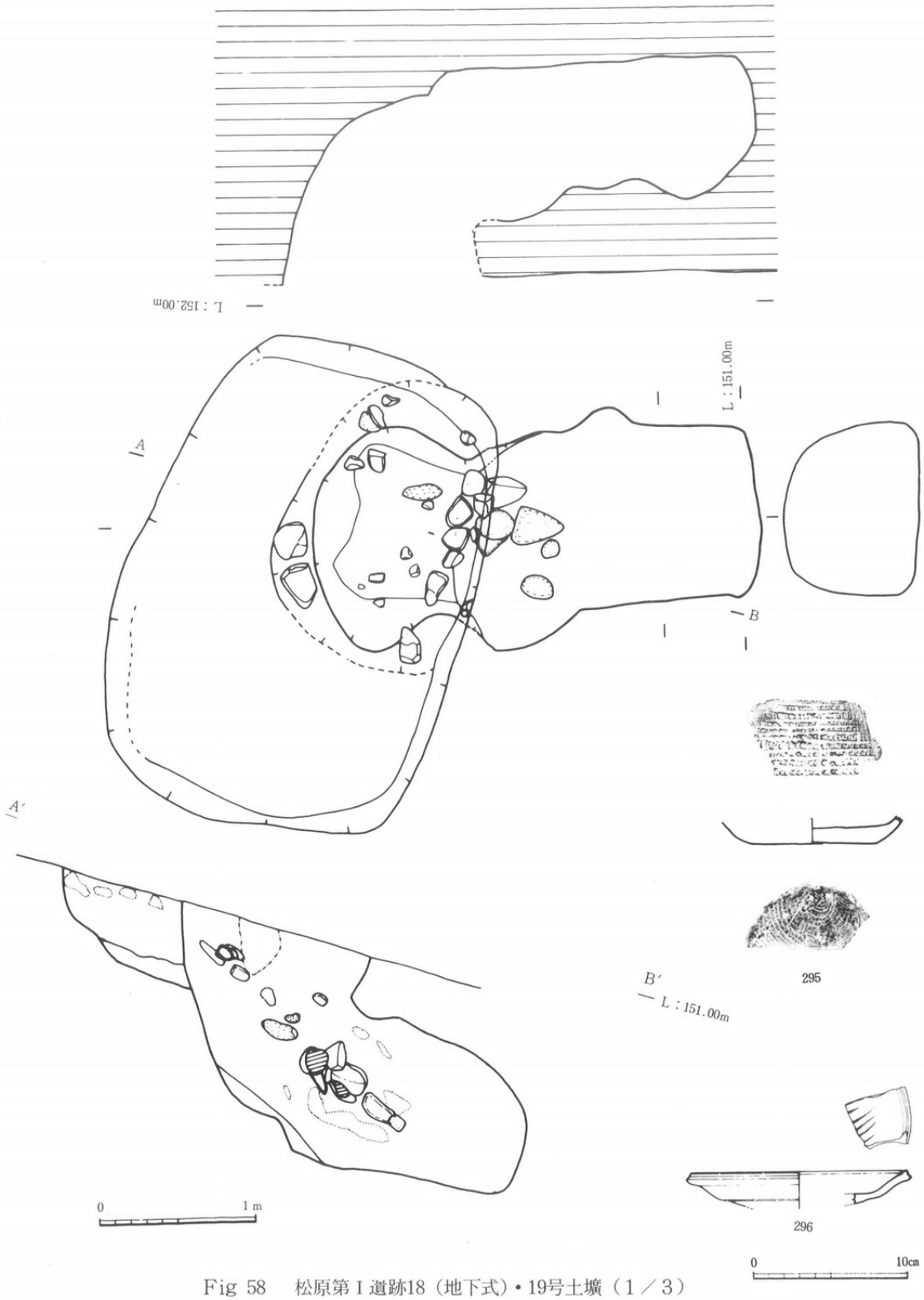


Fig 58　松原第Ⅰ遺跡18（地下式）・19号土壙（1／3）

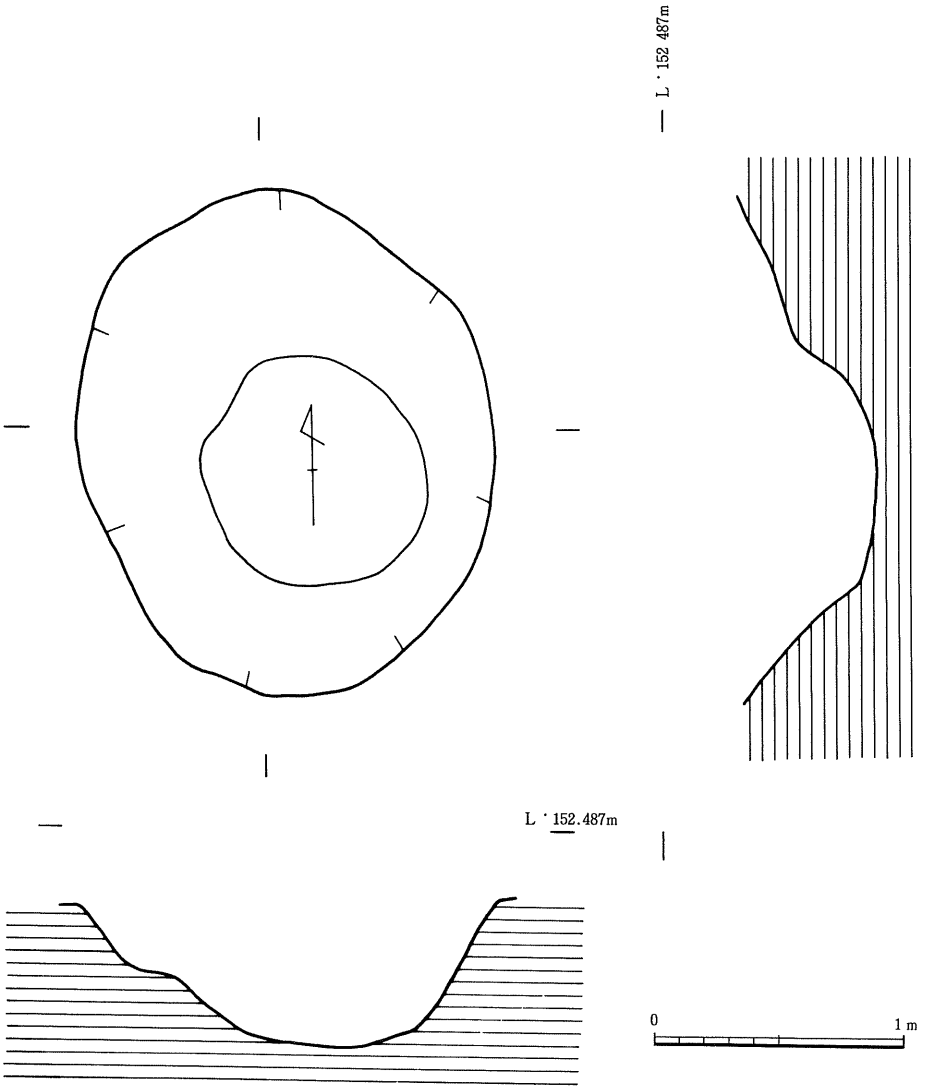


Fig 59　松原第Ⅰ遺跡29号土壙及び出土遺物（1／3）

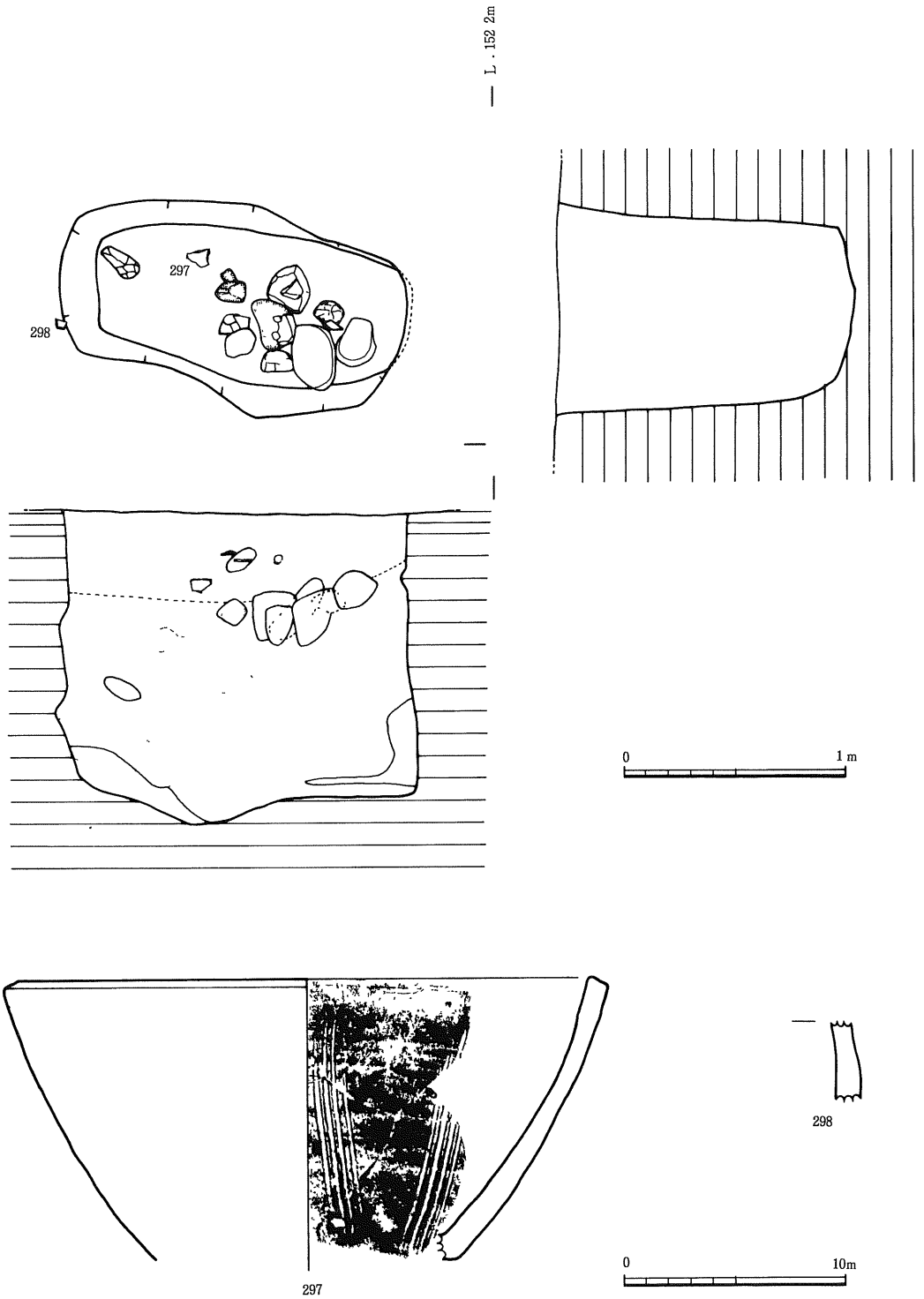


Fig 60　松原第Ⅰ遺跡30号土壙及び出土遺物（1／3）

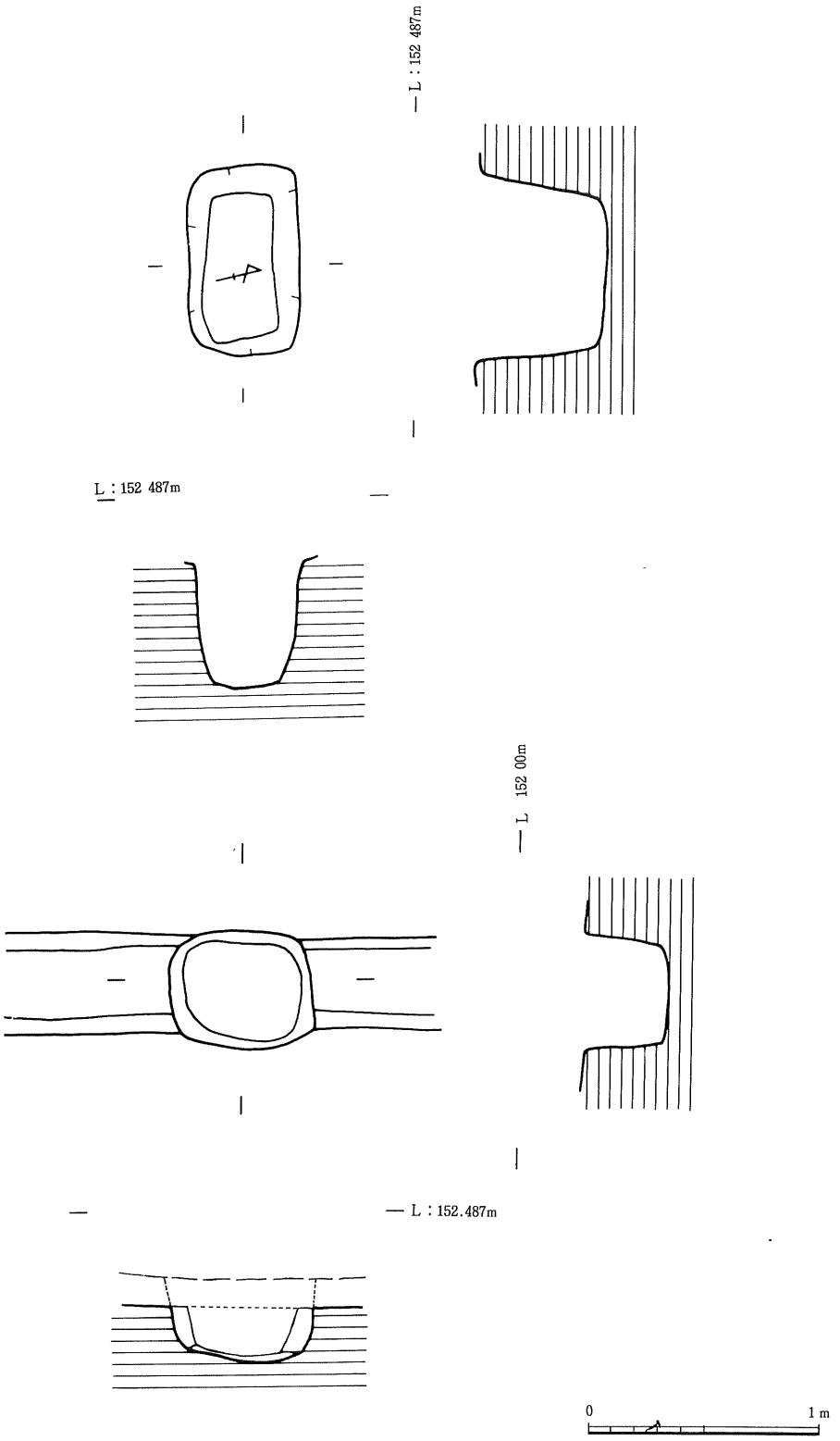


Fig 61　松原第Ⅰ遺跡・31号（下）・32号（上）土壙（1／3）

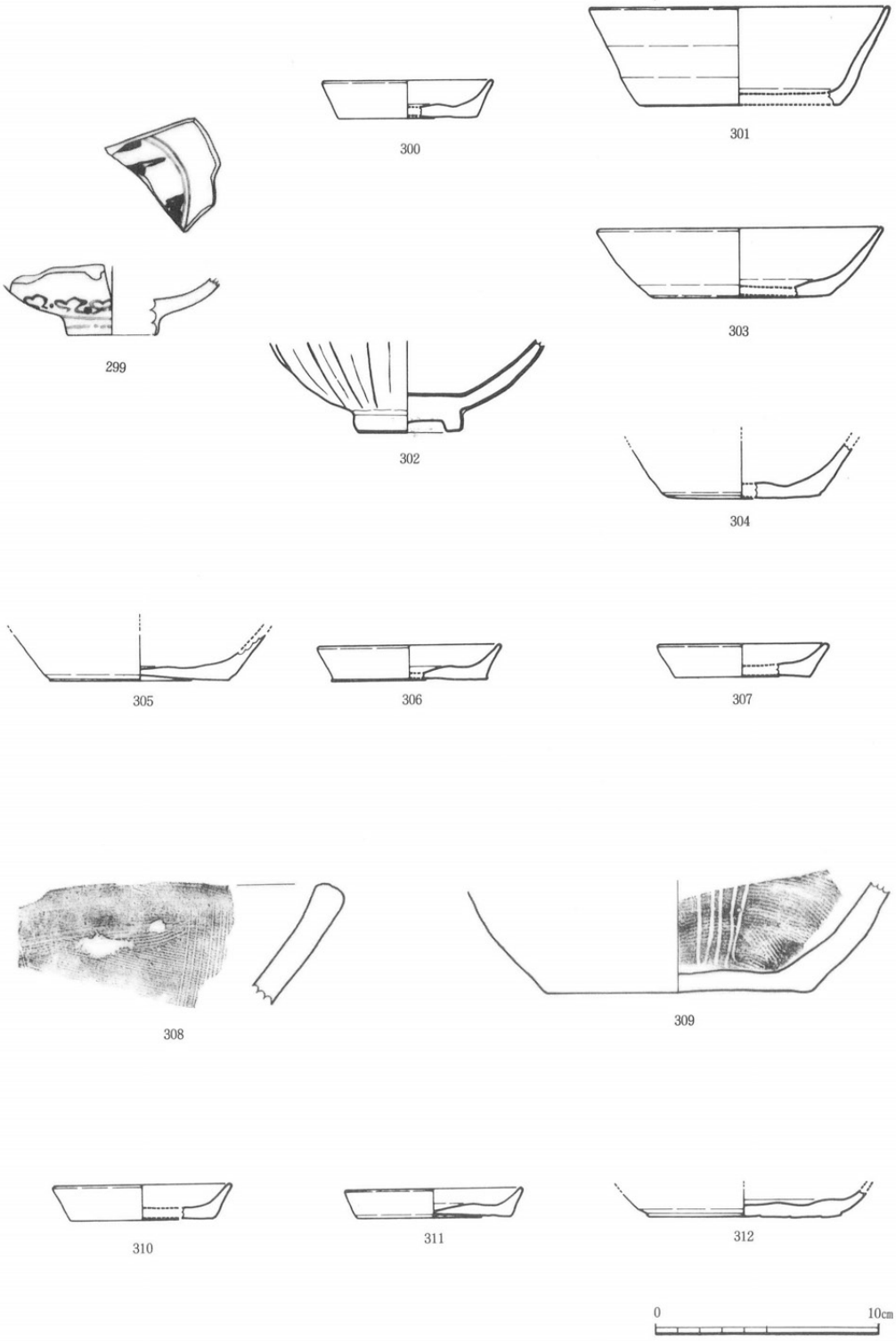


Fig 62　松原第Ⅰ遺跡・土壙内出土遺物（1／3）

（　　）は推定

遺構番号	区	平面形態	規　模（m）	方　位	出土遺物
002	C－2	方　形	1.60×0.76×0.36	N75° W	
003	E－2	〃	1.50×0.82×1.02	N13° E	
004	E－3	円　形	1.13×1.08×0.27	N17° E	
005	E－3	〃	1.28×1.26×0.21	N17° E	青花-299
006	E－3	方　形	1.73×0.74×0.13	N67° W	
007	F－3	〃	3.30×1.17×0.17	N81° W	
008	C－5	円　形	1.5 ×1.46×0.46	N17° E	
009	C－4,5	隅丸方形	2.0 ×0.9 ×0.25	N69° W	
010	C－6	〃	1.08×0.82×	N76° W	土師-300
011	D－4	〃	2.03×1.03×0.5	N84° W	
012	D－5	円　形	1.03×0.93×0.32	N17° E	
013	〃	隅丸方形	1.55×1.11×0.18	N23° E	土師-301
014	〃	〃	0.89×0.59×1.03	N12° E	青磁-302
015	〃	円　形	0.92×0.68×0.17	N57° E	
016	〃	楕円形	1.48×0.85×0.18	N56° W	
017	E－5	円　形	1.64×1.40×0.51	N 2° E	
018	〃	方形(地下式横穴)	1.87×1.28×	N88° E	瀬戸-296
019	〃	大形方形	3.2 ×2.2 ×0.49	N11° E	
020	〃	円　形	2.37×2.22×0.87	N30° W	粘　土
021	〃	〃	1.62×1.56×0.72	N13° E	
022	〃	隅丸方形	1.92×1.19×0.87	N12° E	
023	F－4	円　形	1.73×1.24×0.71	N39° W	
024	F－5	方　形	×0.95×0.78	—	土師-311
025	〃	〃	1.26×1.14×0.21	N 9° E	
026	〃	大形方形	3.2 ×2.02×0.65	N12° E	土師-312
027	〃	大形円形	(3.07)×2.66×0.18	N52° W	
028	G－5	〃	2.07×1.61×0.26	N88° E	
029	〃	不定円形	3.5 ×3.3 ×0.93	N42° W	
030	G－4	方　形	1.7 ×1.0 ×1.01	N75° W	
031	〃	〃	1.59×0.97×0.78	N77° W	
032	〃	〃	1.21×1.05×0.64	N20° E	

表2 土 壙 一 覧 表

(7) その他の遺物

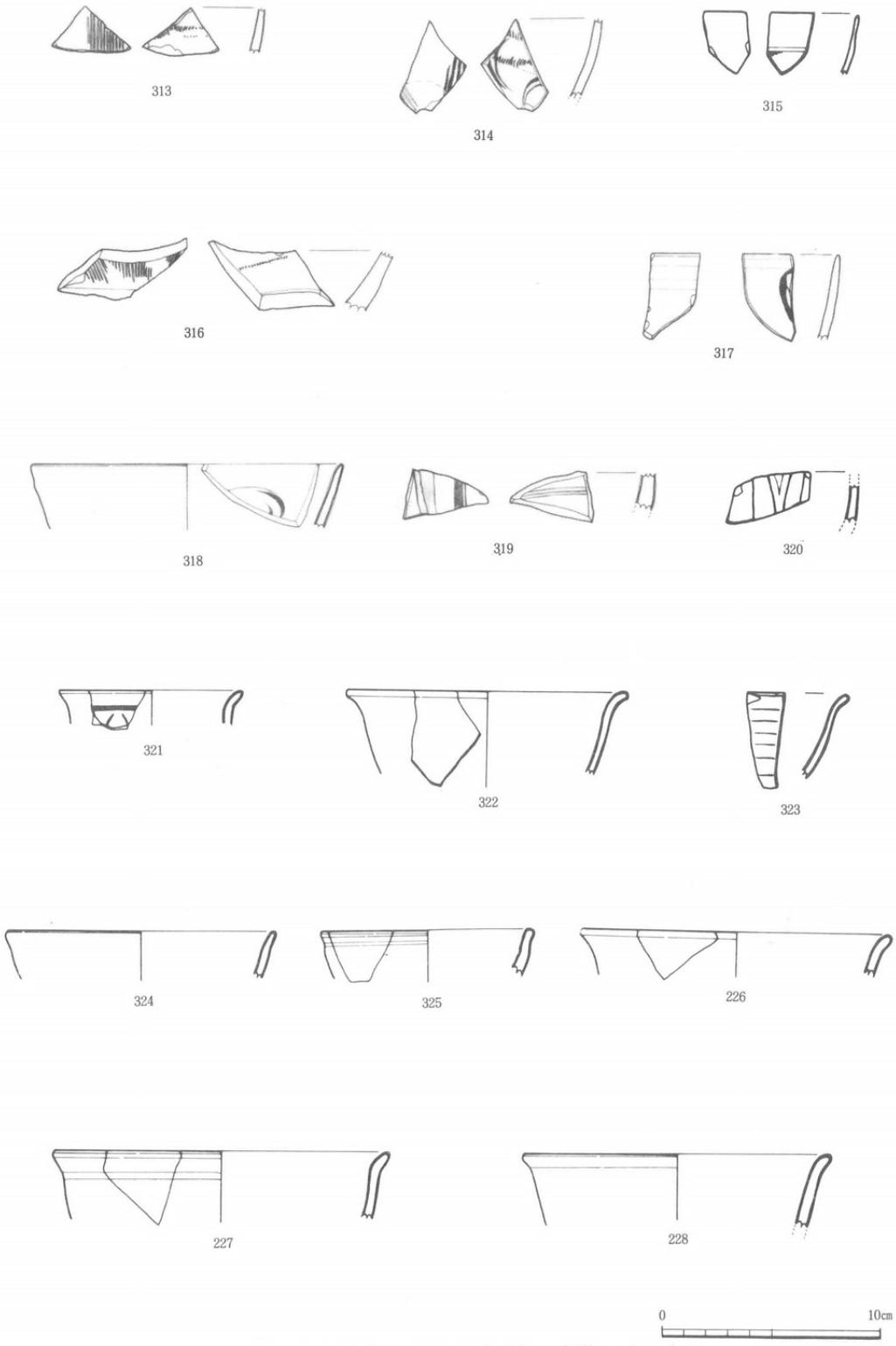


Fig 63　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁１（１／３）

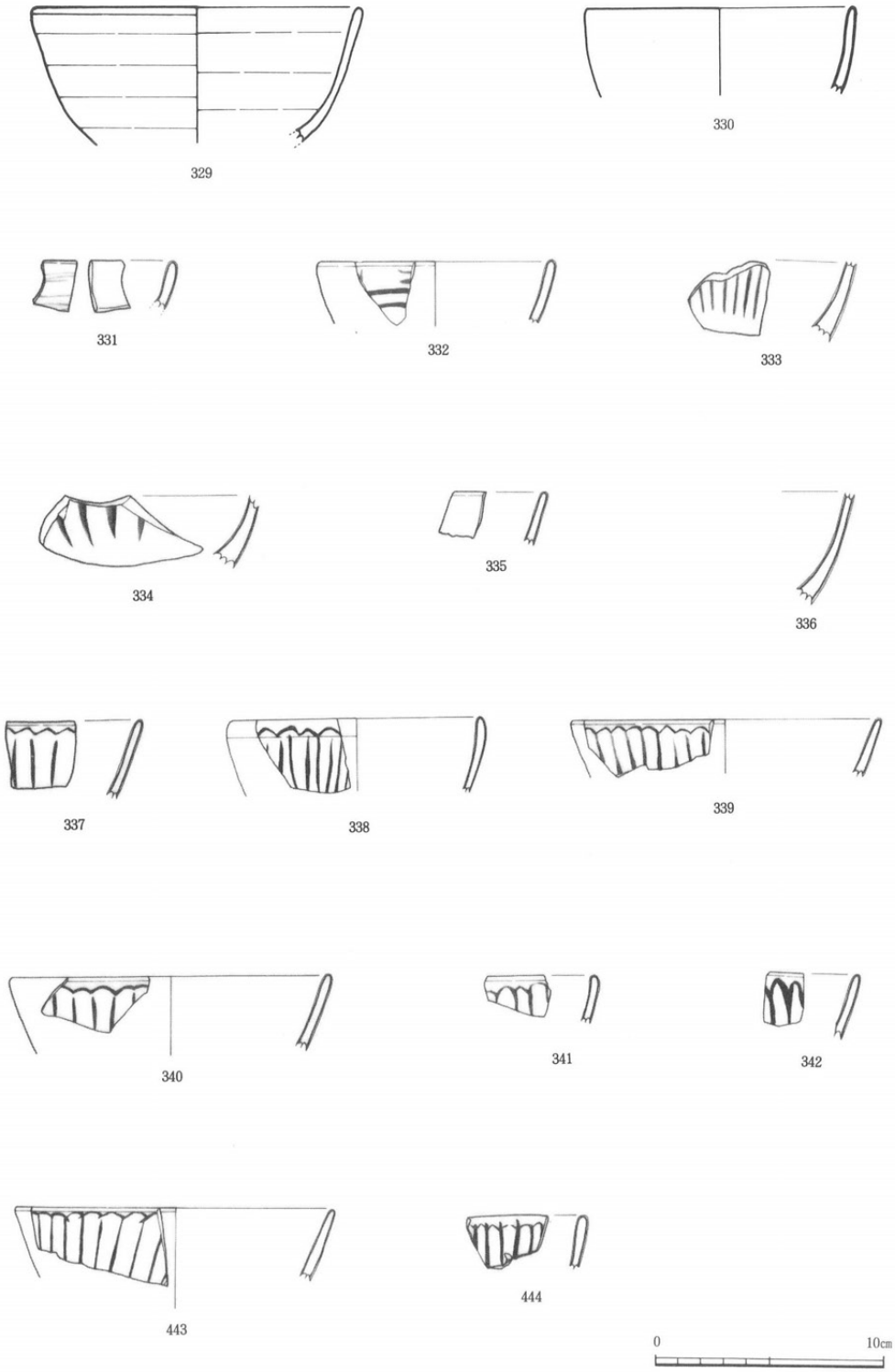
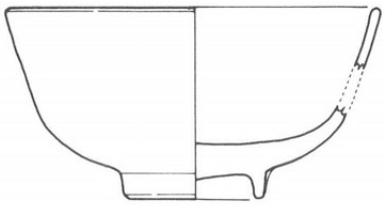
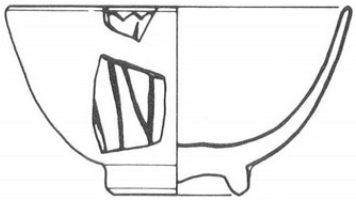


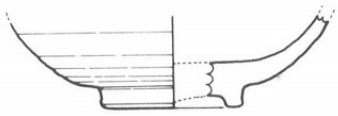
Fig 64　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁２（１／３）



345

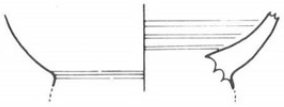


346

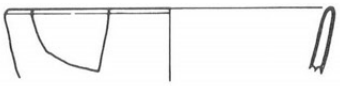


347

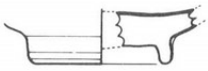
348



349

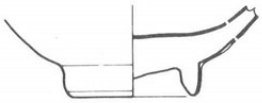


350



351

352



453

454

Fig 65　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁３（１／３）

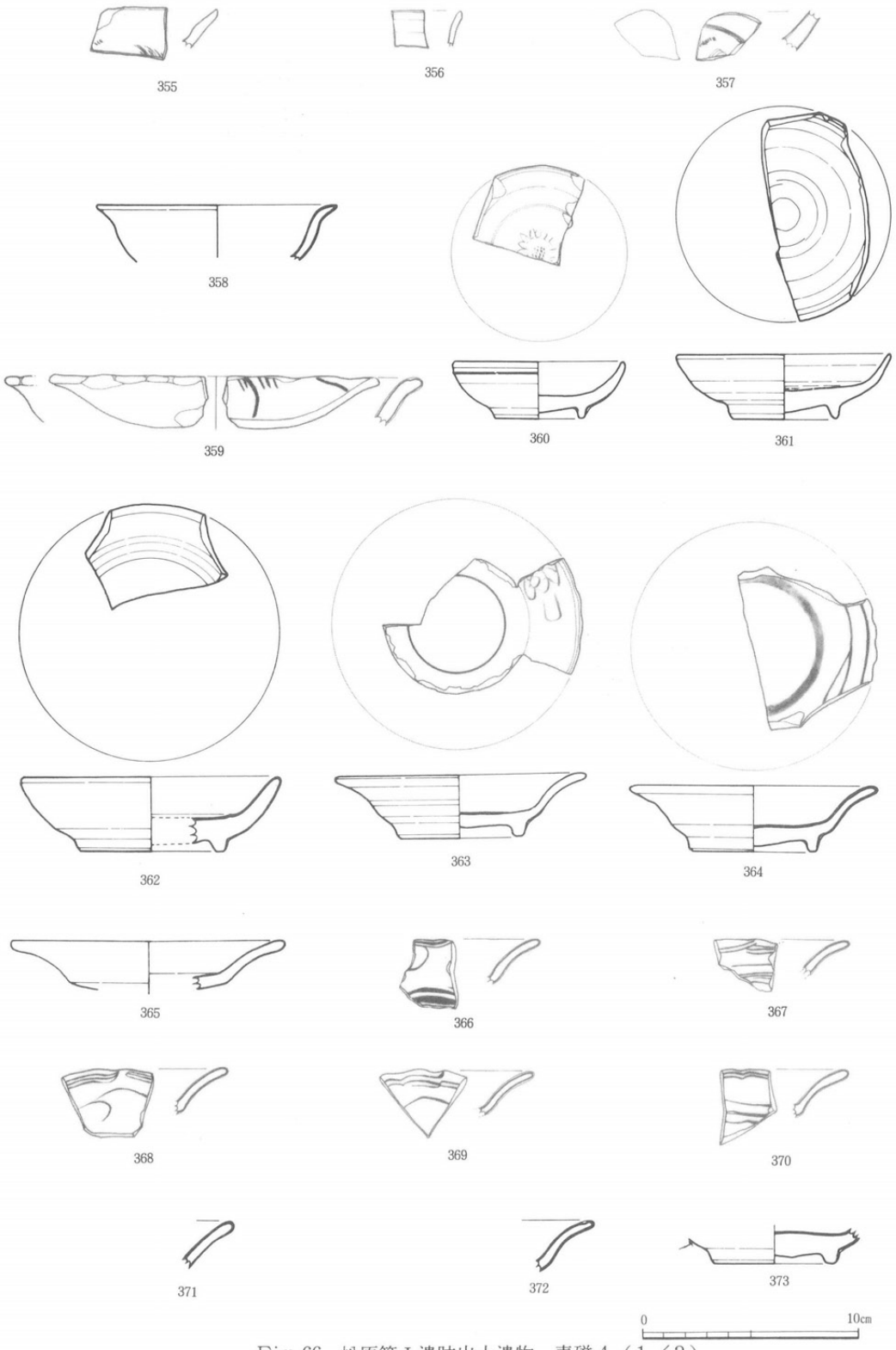
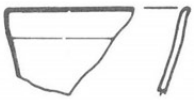
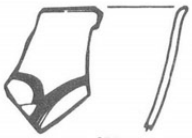


Fig 66　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青磁４（１／３）


374

375


376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

Fig 67　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―白磁１（１／３）

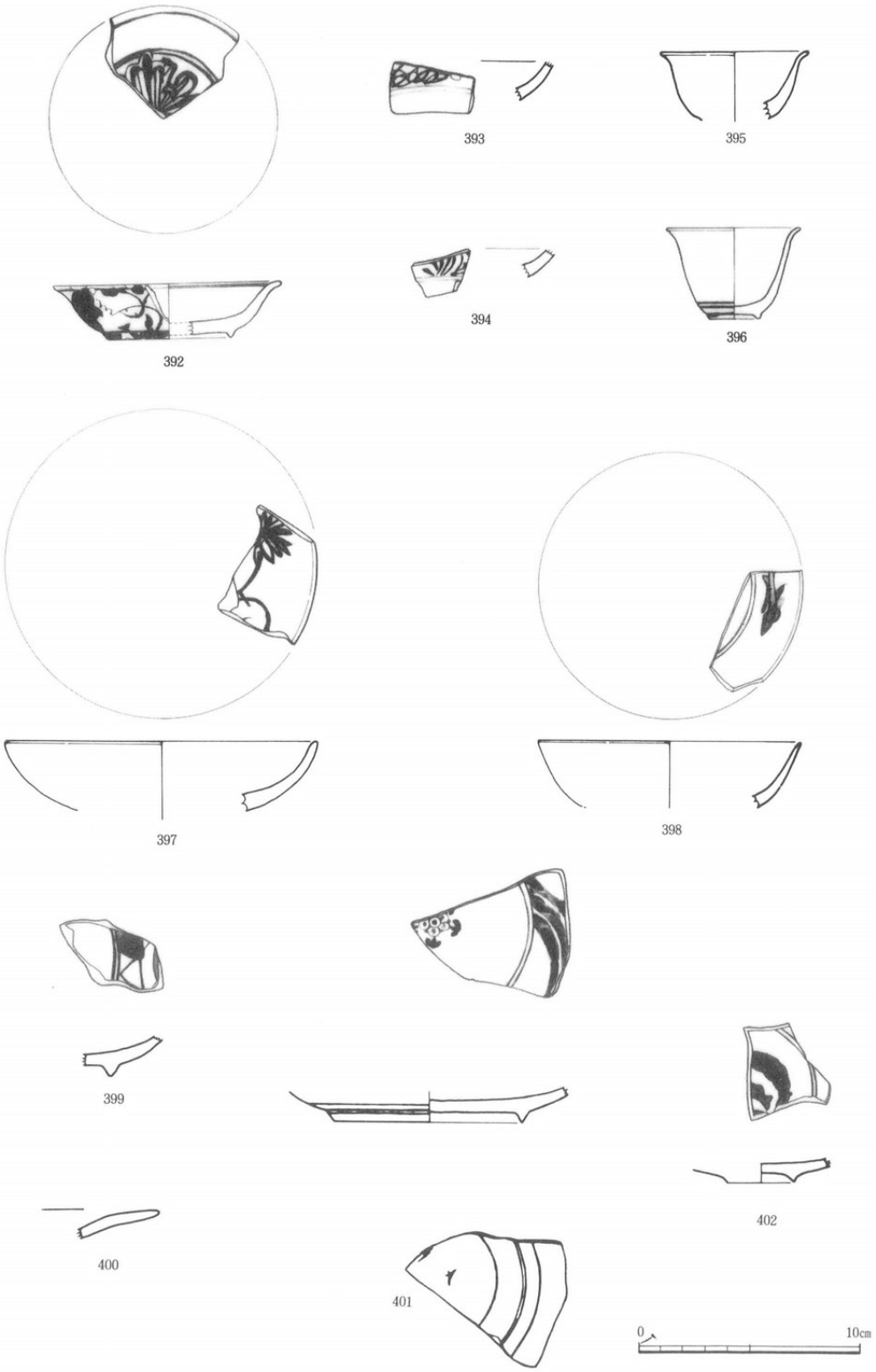


Fig 68　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―青花・染付（1／3）

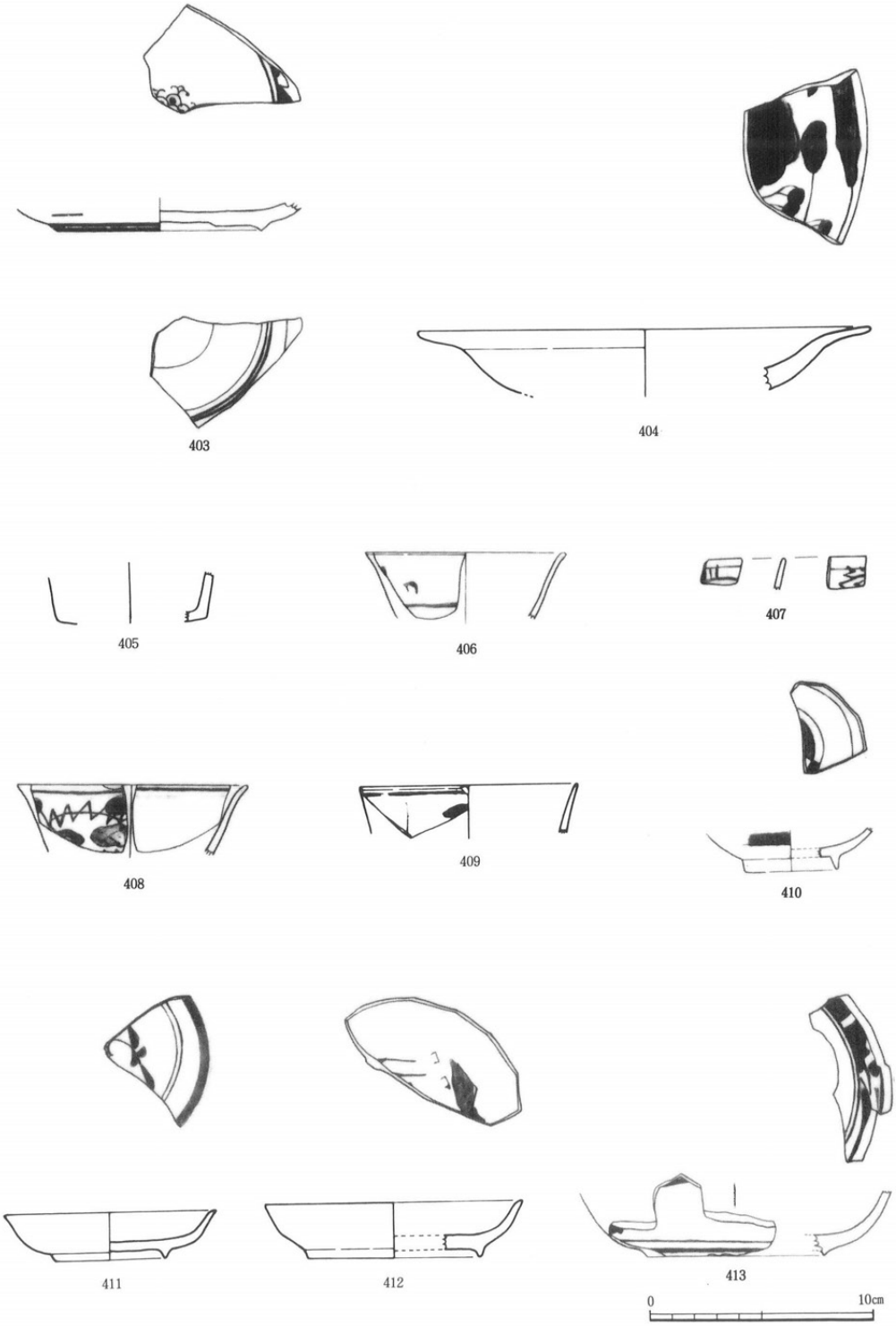


Fig 69　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―染付（1／3）

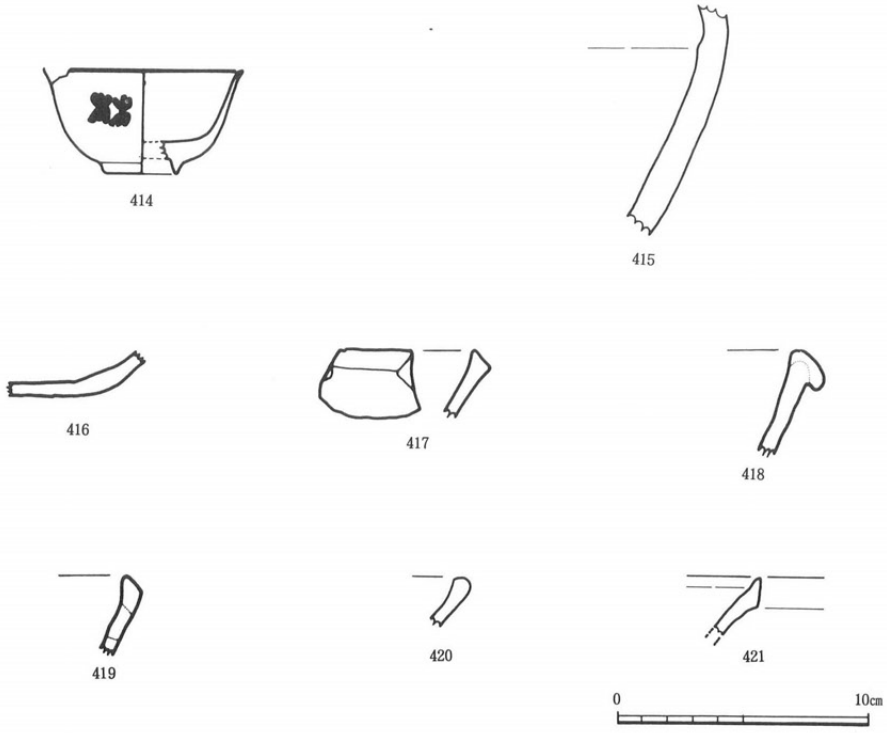


Fig 70　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―瀬戸・常滑・東播系（1／3）

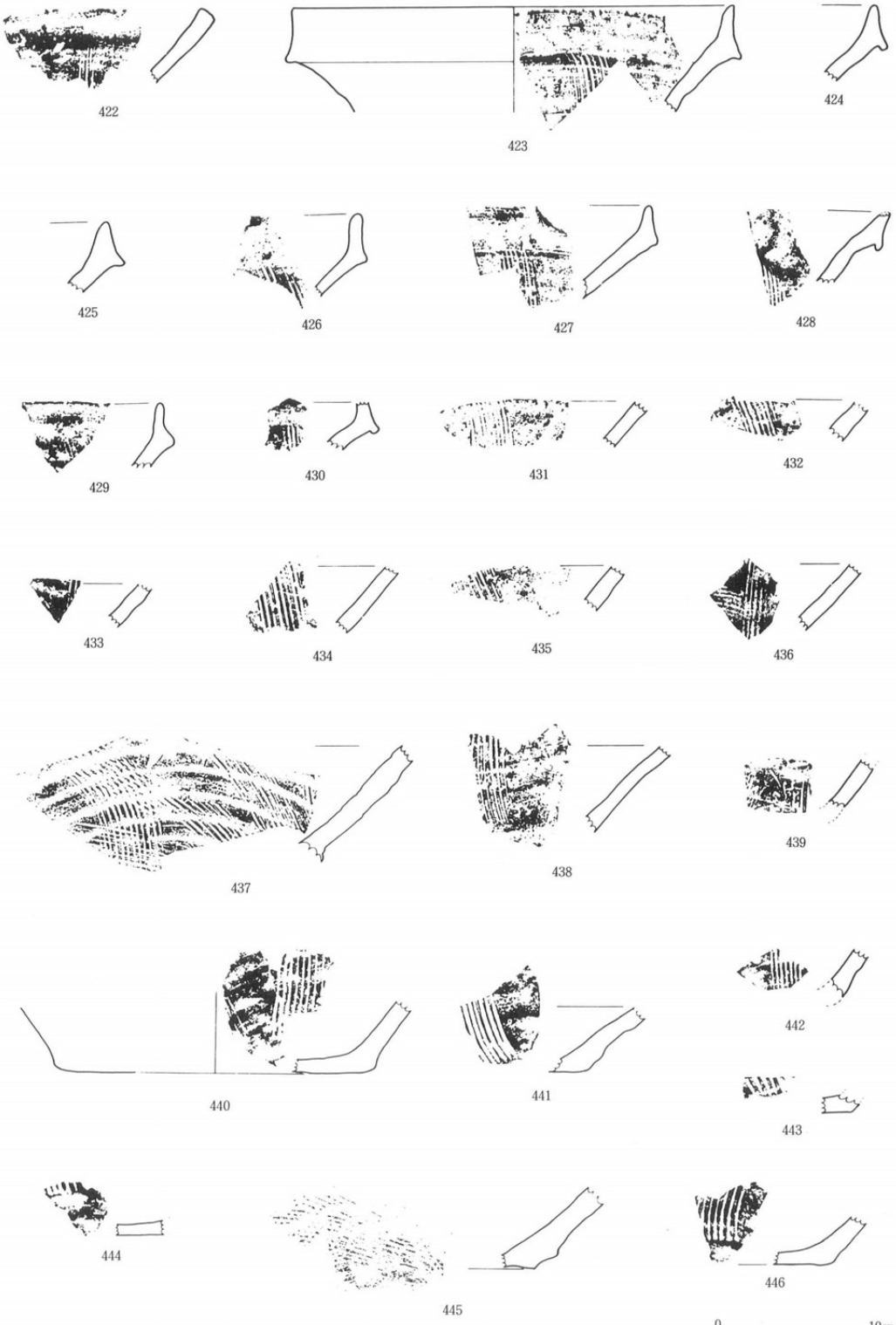


Fig 71　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―備前（1／4）

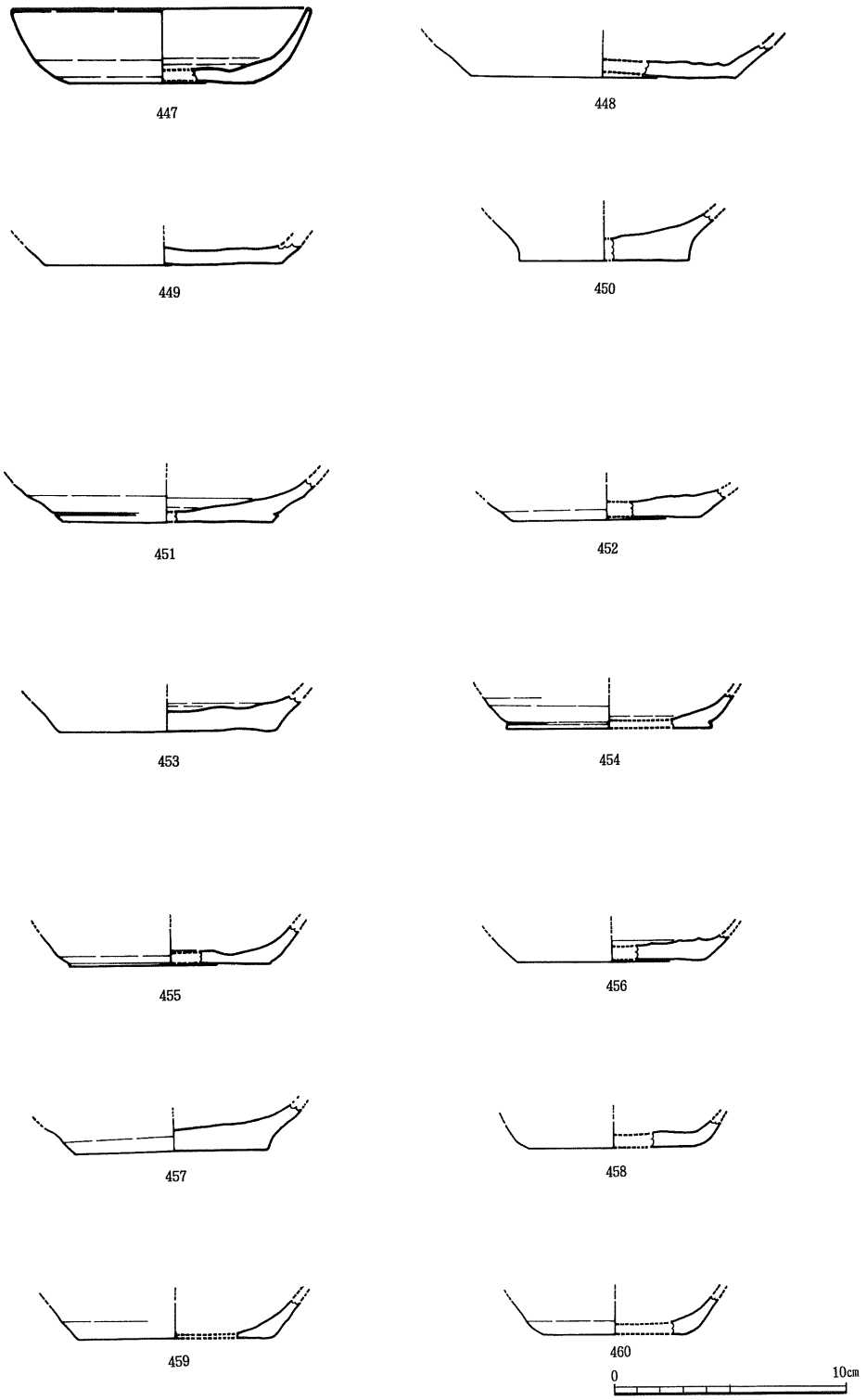


Fig 72　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―土師器１（１／３）

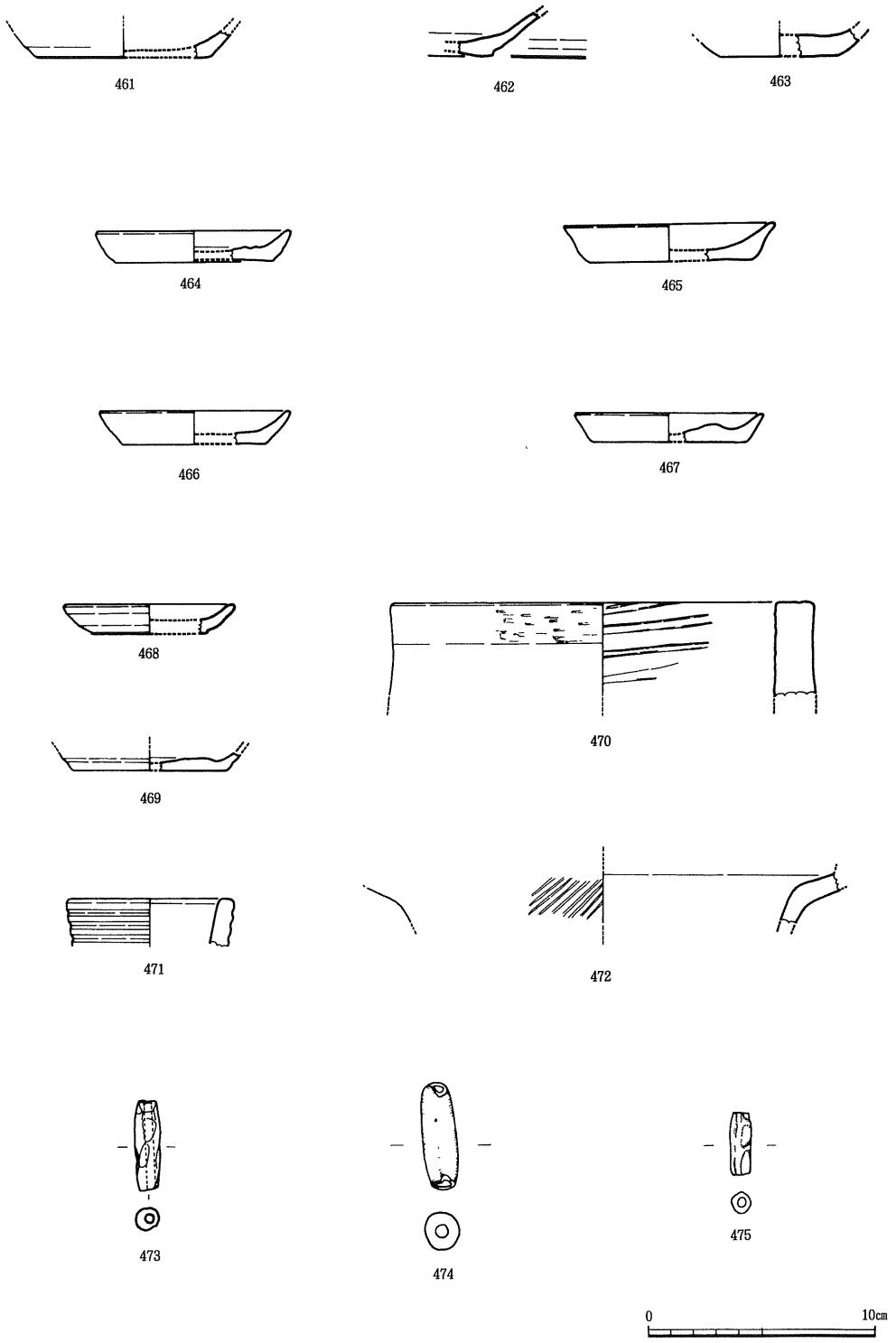


Fig 73 松原第Ⅰ遺跡出土遺物―土師器２（1／3）

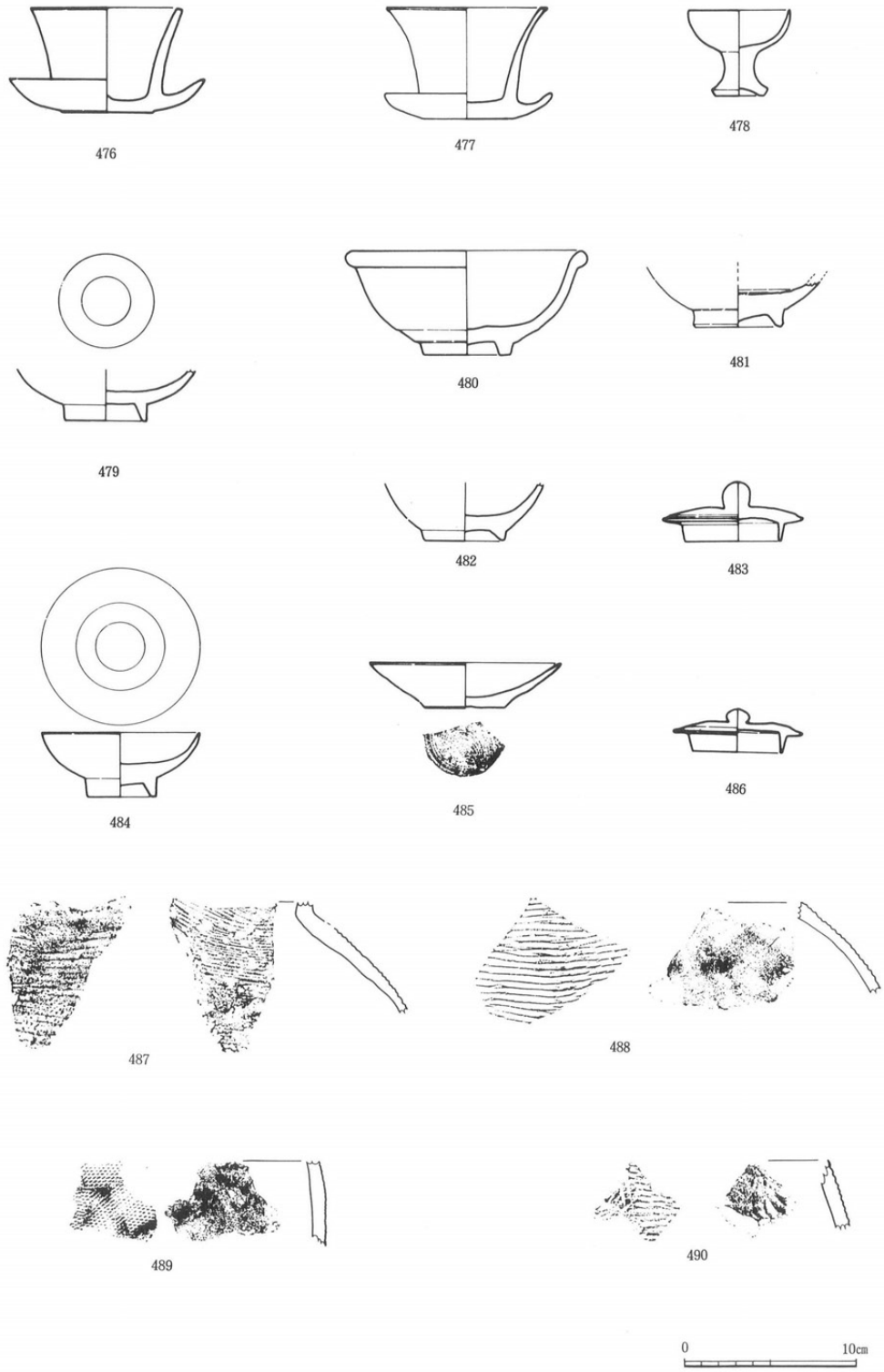


Fig 74　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―在地系土器１（１／４）

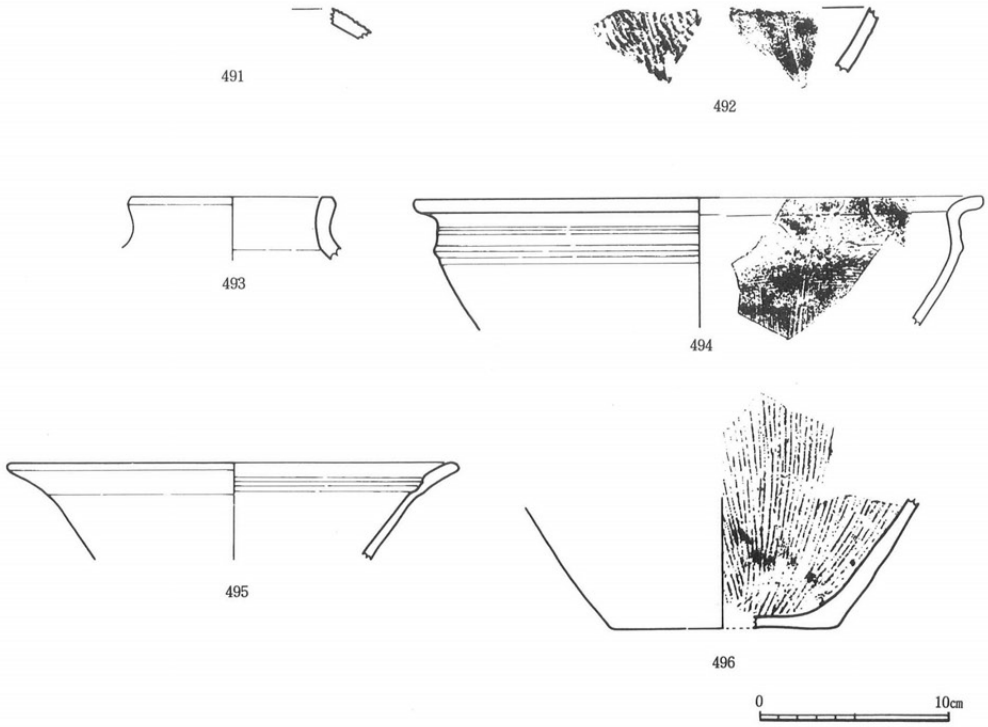


Fig 75　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―在地系土器２（１／４）

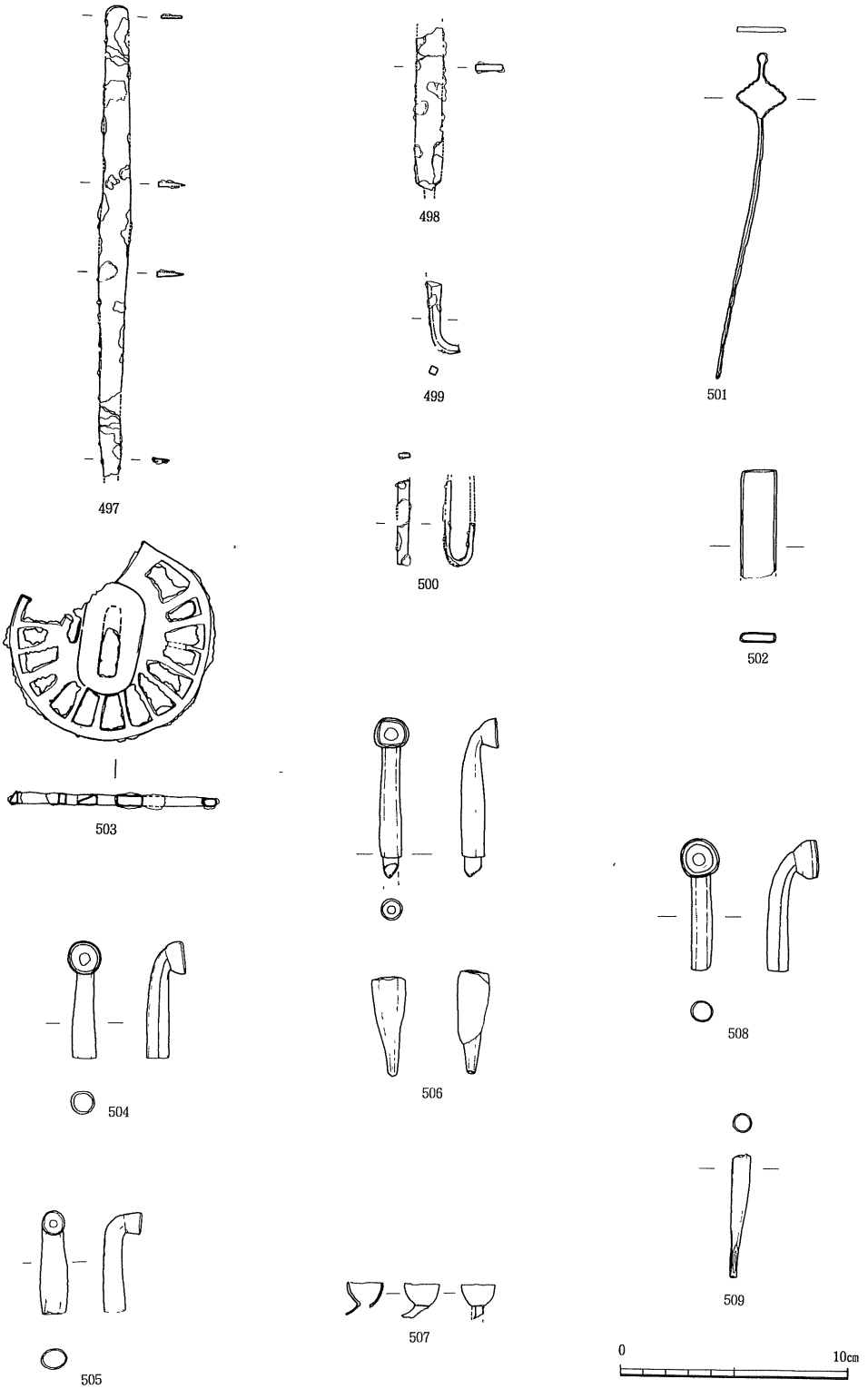


Fig 76 松原第Ⅰ遺跡出土遺物—金属製品（1／3）

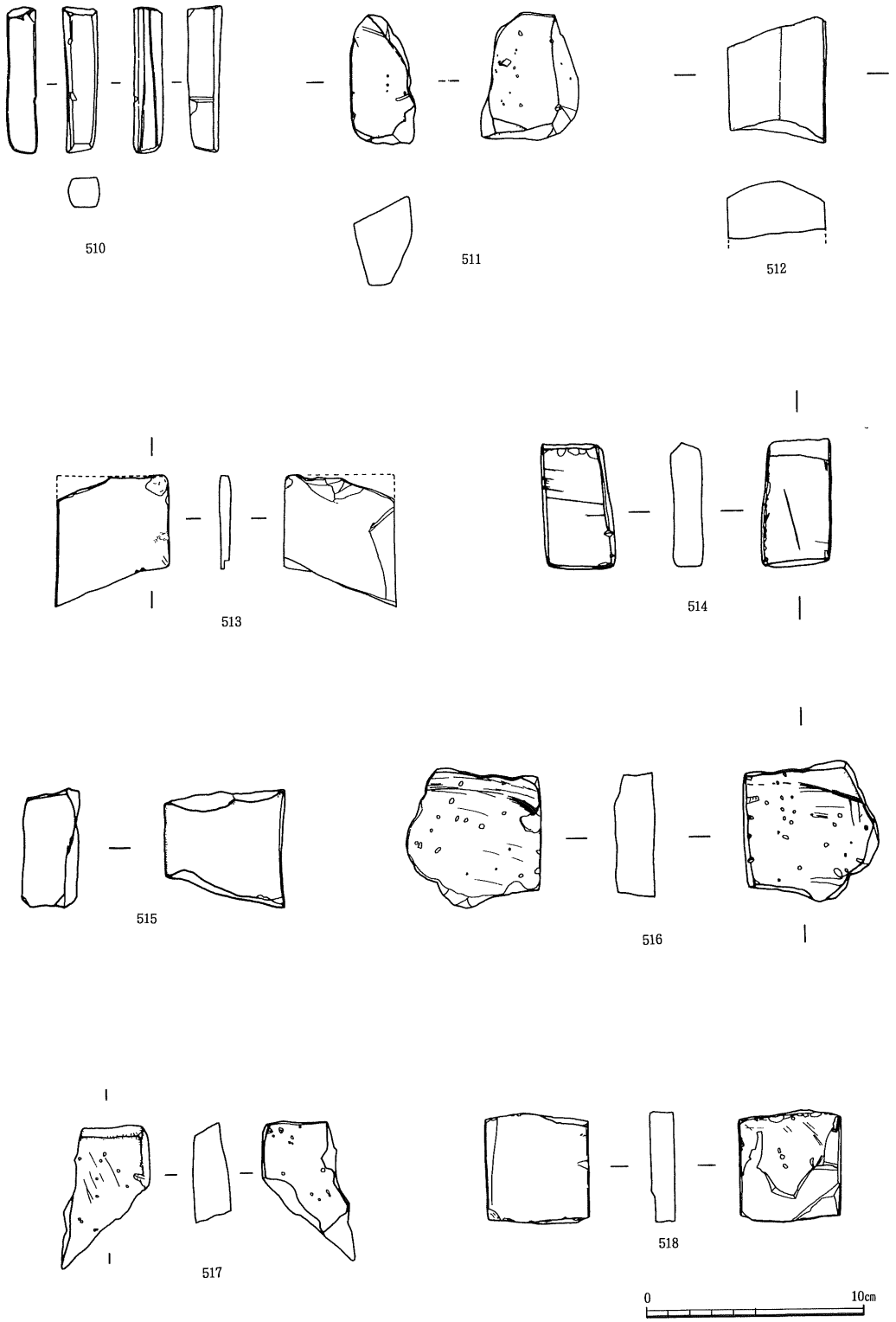


Fig 77　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―石製品１（１／３）

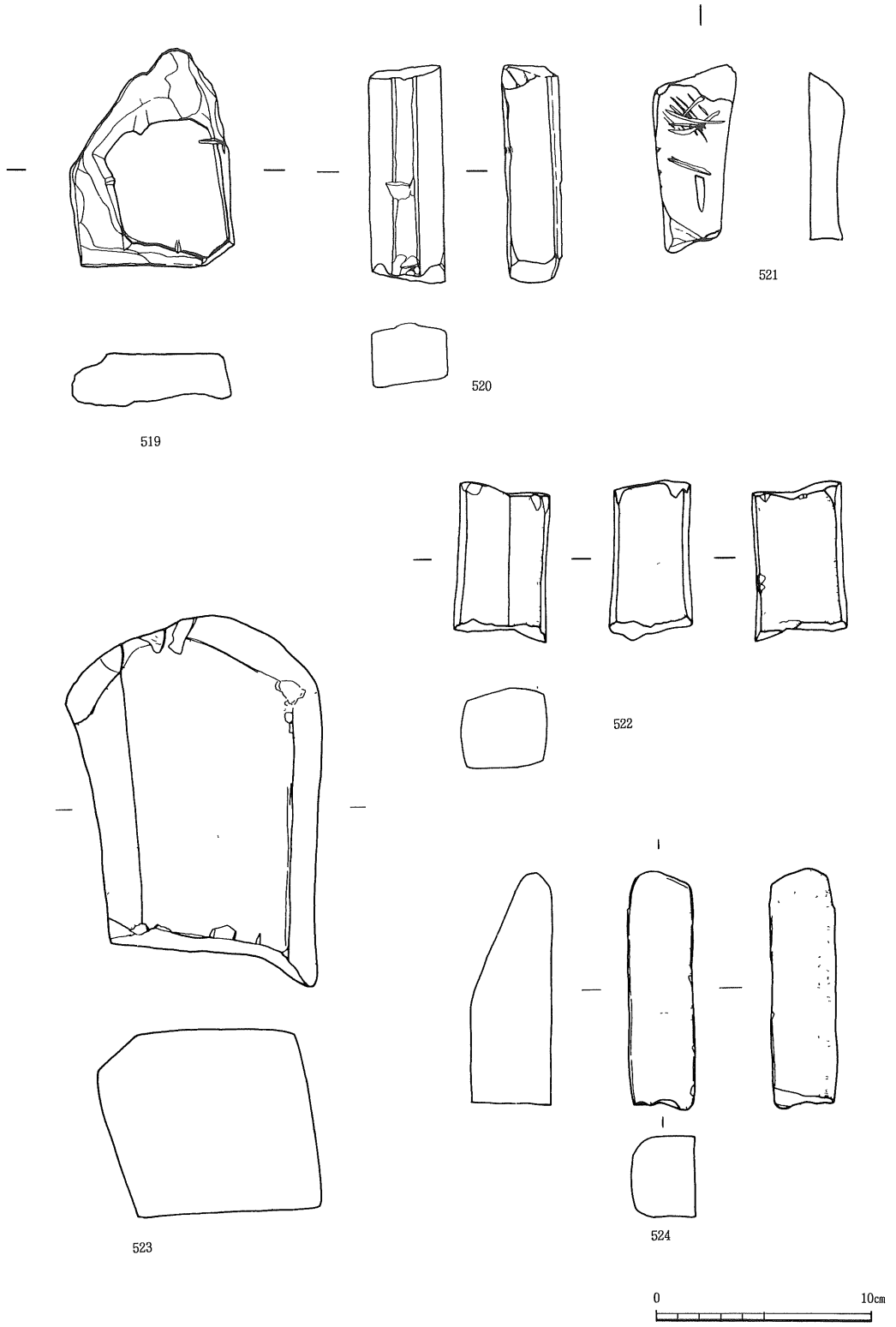


Fig 78　松原第Ⅰ遺跡出土遺物―石製品２（１／３）

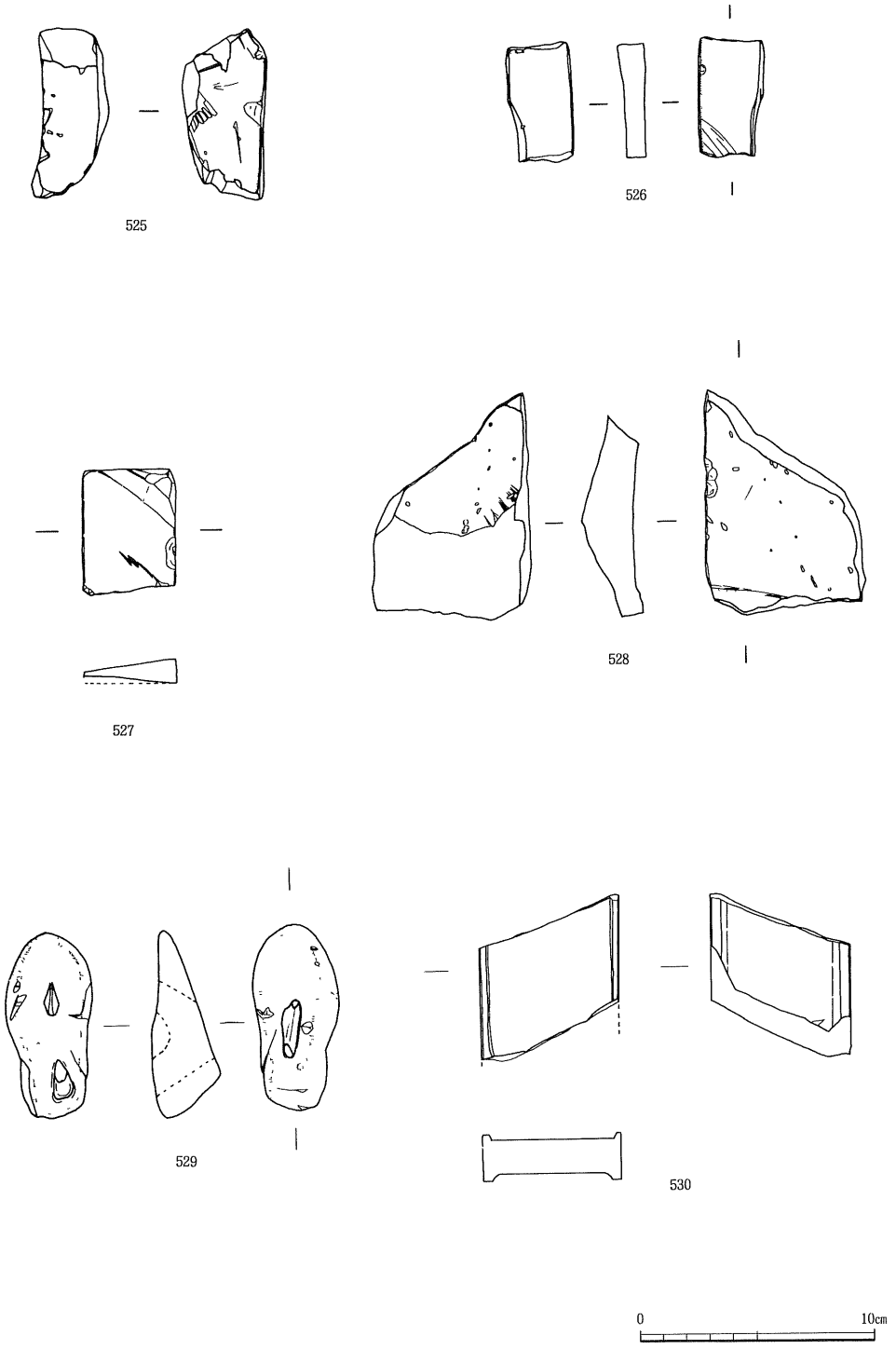
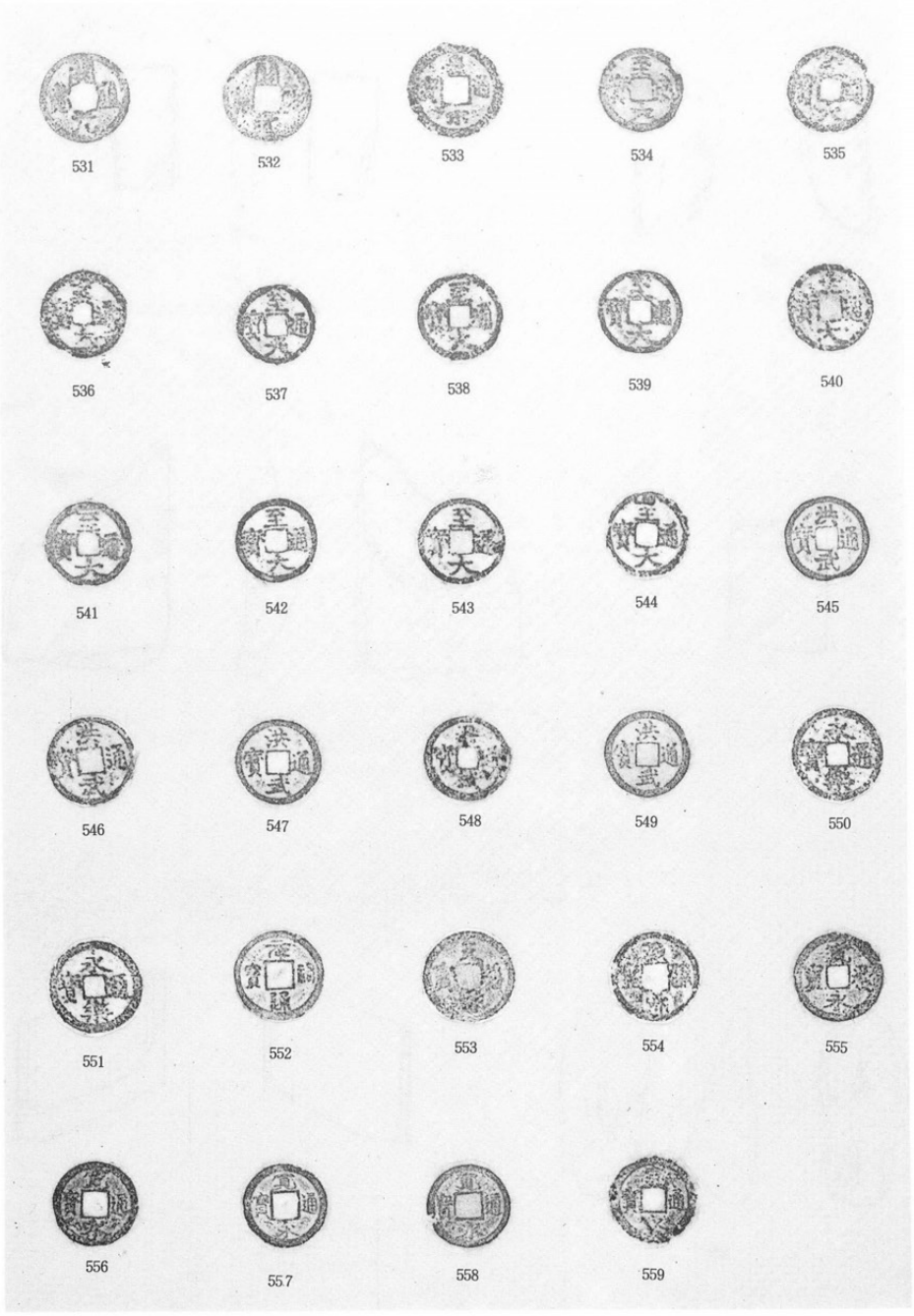


Fig 79　松原第Ⅰ遺跡出土遺物－石製品３（１／３）



0 5 cm

Fig 80 松原第Ⅰ遺跡出土古銭

(8) 出土遺物観察表

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 低径	法量(cm) 器高	特徴	備考
002	青磁	碗	14 8	—	—	内 画花文、黄緑色 貫入有		029	伊万里染付	碗蓋	12 4	／	3.6	内 松竹文	
003	〃	〃	9.4	—	—	内 櫛描文、黄緑色		030	常滑	甕	—	—	—	内 ナデ 外 釉薬、淡緑色	
004	〃	〃	8 6	—	—	内 印花文、淡緑色 端反り口縁、貫入有		031	〃	〃	—	—	—	内 ナデ 外 タタキ、砂粒含	
005	〃	〃	—	—	—	内 画花文、黄緑色 貫入有		032	〃	〃	24 8	—	—	内外 ナデ、砂粒含 淡灰色	
006	〃	〃	—	—	—	内 画花文、淡緑色		033	〃	〃	—	—	—	砂粒含	
007	〃	〃	—	—	—	外 蓮弁文（ヘラ）	二次的焼成	034	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、砂粒含	
008	〃	〃	—	—	—	外 蓮弁文（ヘラ） 黄緑色、貫入有		035	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、砂粒含	
009	〃	〃	17 2	—	—	端反り口縁		036	〃	〃	—	—	—	内 ナデ、砂粒含	
010	〃	〃	17 4	—	—	端反り口縁、淡緑色 貫入有		037	〃	〃	—	20 4?	—	内 ナデ 外 ケズリ、砂粒含	
011	〃	〃	11 6	—	—	外 線描蓮弁文、淡緑色	龍泉窯系	038	（?）備前	擂鉢	26.0	—	—	内 ナデ、刷毛目 外 ナデ　乳白色	
012	〃	(盤)皿	21 8	8 4	4.4	内 見込に折枝花文 口縁稜花	二次的焼成	039	〃	〃	—	—	—		
013	〃	碗	—	6 8	—	淡緑色 貫入有	高台施釉	040	〃	〃	28 6	15.2	11 7	内外 ナデ、灰色 砂粒含	
014	〃	〃	—	5 6	—	内 見込に花弁文	高台施釉	041	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、明灰色 砂粒含	
015	〃	皿	—	6 4	—	白緑色	高台施釉	042	〃	〃	28 8	13 2	11 0	内外 ナデ、白褐色 砂粒含	
016	〃	碗	—	7 8	—	内 見込に花弁又 外 線描蓮弁文、明緑色	龍泉窯系	043	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、白褐色 砂粒含	
017	〃	〃	—	5.0	—	内 見込に折枝蓮弁文 外 線描蓮弁文、明緑色	高台施釉	044	〃	〃	27 6	—	—	内外 ナデ、白褐色 砂粒含	
018	白磁	〃	—	—	—	玉緑口縁		045	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、白褐色 砂粒含	
019	〃	〃	—	—	—	外 浮文、白色		046	〃	〃	—	—	—	内 ナデ、茶褐色 外 ナデ、暗灰色、砂粒含	
020	〃	〃	—	—	—	玉緑口縁、淡乳白色 貫入有		047	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、暗灰色 砂粒含	
021	〃	〃	—	—	—	玉緑口縁、淡白色		048	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、淡茶褐色 砂粒含	
022	〃	〃	—	7 0	—	淡白色 底部無釉		049	東播系	捏鉢	31 8	—	—	内外 ナデ、青灰色 砂粒含	
023	〃	〃	—	6 4	—	淡白色 底部無釉		050	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、淡灰色 砂粒含	
024	〃	〃	—	3 8	—	内 見込に蛇目釉ハギ 青白色、底部無釉		051	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、淡灰色 砂粒含	
025	伊万里天目	〃	—	—	—	内 透明釉 外 天目釉		052	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、淡灰色 砂粒含	
026	染付	〃	—	—	—		19C	053	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、灰色 砂粒含	
027	伊万里染付	皿	—	5.6	—	内 山水文		054	在地系	碗	—	6 6	—		
028	伊万里染付	(大)皿	—	10.6	—	内 ボタン花文	有田窯系	055	〃	壺OR甕の底	—	—	—		

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考
056	在地系	甕の胴部	—	—	—	内 ナデ 外 平行タタキのちカキ目		083	東播系	捏鉢	—	—	—	内外ナデ、暗灰色 砂粒含	
057	石製品	石鍋	—	—	—	内外ケズリ スス付着	滑石製	084	在地系	壺(?)	—	8 2	—	内外ナデ 外 灰釉	
058	〃	〃	—	—	—	内外ケズリ スス付着	滑石製	085	〃	甕	34.0	—	—		
059	上師器	坏	(13.2)	—	—	内外ナデ 切り離し不明		086	土師器	坏	12 3	7 6~8	3 3	内外ナデ 系切りのち板状圧痕	
060	〃	〃	(14 8)	(18 6)	2 5	内外ナデ 系切り底		087	〃	〃	13 2	8 1	3 4	内外ナデ 回転ヘラ切り底(左まわり)	
061	〃	〃	(12 9)	8 0	3 6			088	〃	〃	12.5	8 5	3 5	内外ナデ ヘラ切り底	
062	〃	土鍋	(14 4)	(11 8)	2 9	内外丁寧なナデ 系切り底		089	〃	〃	(12 0)	—	—		
063	〃	坏	—	(10 8)	—	系切り底		090	〃	〃	—	(8 8)	—	系切り底	
064	〃	〃	—	8 4	—	内外ナデ 系切り底		091	〃	小皿	—	(7 0)	—	内外ナデ ヘラ切り底	
065	〃	〃	—	(7 2)	—	ヘラ切り底 (?)		092	〃	〃	7 6	5 8	1 5	内外ナデ 系切り底	
066	〃	〃	—	(7 9)	—	系切り底		093	青磁	碗	15 4	—	—	端反り口縁、暗緑色 貫入有	
067	〃	〃	—	(7 8)	—	系切りのち板状圧痕		094	〃	皿	14.4	—	—	端反り口縁、明緑色	
068	〃	〃	—	(7.6)	—	系切り底		095	〃	碗	—	—	—	外 しのぎ蓮弁文 青白色	
069	〃	〃	—	(7 2)	—	系切り底		096	〃	碗(底)	—	5 0	—	淡緑色 貫入有	高台施釉
070	〃	小皿	—	(7 0)	—	系切り底		097	白磁	碗	—	—	—	端反り口縁、乳白色	
071	〃	〃	(8 6)	(7 2)	1 2	切り離し不明		098	〃	〃	—	—	—	端反り口縁、乳白色	
072	〃	〃	—	6 2	—	系切り底		099	〃	碗(底)	—	6 6	—	乳白色	高台無釉
073	〃	〃	—	(6.2)	—	系切り底 内 底に指頭痕有		100	瀬戸	染付碗	—	3 4	—		19C
074	〃	〃	—	(6 4)	—	系切り底		101	常滑	甕	—	(14 8)	—	内外ナデ、茶灰色 砂粒含	
075	〃	〃	—	(6 2)	—	系切り底		102	〃	〃	—	(21 0)	—	内外ナデ、褐色 砂粒含	
076	〃	〃	—	(7 4)	—	系切り底		103	備前	擂鉢	—	—	—		
077	〃	〃	(8.5)	(7 0)	1 5	内外ナデ 系切り底		104	〃	〃	—	—	—	内外ナデ、赤褐色 砂粒含	
078	青磁	碗	13 8	—	—	内 口縁雷文・胴部蓮弁(ヘラ)、 明緑色.		105	〃	〃	—	—	—	外 ナデ、暗赤褐色 内 黄白色	
079	〃	〃	—	—	—	内 画花文、黄緑色 貫入有		106	在地系	蓋	4 4	—	2 8		
080	白磁	〃	—	—	—	玉緑口縁、淡乳白色		107	土師器	坏	—	(7 0)	—		
081	〃	皿	—	—	—	端反り口縁、淡乳白色 貫入有		108	〃	〃	—	(7 8)	—		
082	東播系	捏鉢	—	—	—	内外ナデ、灰白色 砂粒含		109	〃	〃	—	(8 0)	—	系切り底	

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考
110	土師器	坏	—	(12 2)	—	系切り底		137	土師器	坏	—	(9.6)	—	系切り底	
111	〃	〃	—	(7 0)	—	系切り底		138	〃	〃	—	7 4	—	内外ナデ 系切り底	
112	〃	小皿	—	(6 2)	—	ヘラ切り底(?)		139	〃	小皿	8 0	6 3	1 3	内外ナデ 系切り底	
113	青磁	碗	12 6	—	—	内外 櫛描文、青白色		140	〃	〃	—	6 0	—	ヘラ切り底	
114	唐津	〃	9 2	—	—			141	在地系	擂鉢	33 0	—	—		注口有
115	土師器	坏	—	7 3	—	内外 ナデ、内底不定方向のナデ、ヘラ切り底		142	青磁	碗	—	—	—	内 櫛描文、明緑色	
116	青磁	小皿	10 2	5 0	2 35	口縁稜花、青緑色 内 見込に花弁文、貫入有	高台施釉	143	〃	小皿	—	—	—	内 櫛描文、明緑色	
117	〃	碗	—	5 2	—	口縁稜花、青緑色 内 見込に梵字	高台施釉	144	白磁	碗	—	—	—	玉縁口縁、白色	
118	染付	小坏	6 3	2 7	2 3	内 上絵付	19c	145	〃	〃	—	—	—	玉縁口縁、白色	
119	〃	碗	—	—	—		19c	146	伊万里染付	大皿	21 6	11 0	2 5	内 芙蓉手	
120	染付	〃	—	—	—		18後半～19c前半	147	〃	皿	—	—	—		18c前半
121	備前	擂鉢	—	—	—	外 ナデ、赤褐色 砂粒含		148	伊万里青磁染付	蓋	8 9	—	—	内 口縁四方襷文帯	西有田広瀬山窯系
122	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ赤褐色 砂粒含		149	伊万里染付	皿	15 4	4 2	3 5	内 割筆による二重網目文 見込に蛇目釉ハギ	波佐見窯系
123	在地系瓦質土器	土風炉	—	—	—			150	〃	〃	14 0	7 8	3 2	内 見込に蛇目釉ハギ 見込に五弁花コンニャク判	〃
124	在地系陶器	壺(?)の底部	—	—	—	系切り底		151	〃	碗	11 6	—	—	外 梅花文	18c
125	〃	甕	24 0	—	—			152	〃	〃	—	4 2	—	外 鳥文 底中心「大明手製」	有田窯系
126	青磁	碗	—	—	—	内外 櫛描文、明緑色		153	〃	小坏	5 0	3.6	4 5	外 矢羽根文	18c末
127	〃	〃	—	—	—	内外 櫛描文、明緑色		154	唐津	皿	15 6	4 4	4 4	内 銅緑釉、見込蛇目釉ハギ 外 透明釉	内野山窯
128	〃	〃	—	—	—	内 画花文、黄緑色 貫入有		155	備前	擂鉢	—	—	—	内外 ナデ、茶色 砂粒含	
129	〃	〃	—	6 2	—	内 見込に花弁文	低温焼成胎土酸化	156	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、赤紫色	
130	〃	小皿	—	5 2	—	口縁稜花、明緑色 内 見込に吉祥文 貫入有	高台施釉	157	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、暗灰色 砂粒含	
131	白磁	碗	—	—	—	端反り口縁、乳白色		158	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、茶褐色 砂粒含	
132	染付	小坏	4 9	1 4	2 7		19c	159	在地系	碗	13 2	4 8	6 4		
133	備前	擂鉢	—	—	—	外 ナデ、暗赤褐色 内 乳白色、砂粒含		160	〃	〃	8 7	—	—	内 見込蛇ノ目釉ハギ	
134	〃	〃	30 5	(8 5)	(16 5)	内外 ナデ、赤褐色 砂粒含		161	〃	〃	12 4	5 0	5 5		
135	在地系	蓋	上 20 4	下 16 2	2 2			162	〃	〃	12 0	4 8	4 8	内 見込蛇ノ目釉ハギ 砂トメ跡	
136	土師器	坏	—	(9 0)	—	系切り底		163	〃	〃	—	5 7	—		

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考
164	在地系	(高)不)仏飯碗	8 6	4.2	5.5		
165	〃	皿	10 0	5 0	2 5	系切り底	
166	〃	〃	10.2	4.3	2 1	系切り底	
167	瓦質土器	土風炉(?)	10 6	—	—	灰白色	
168	在地系	茶家	11.0	—	—		
169	〃	茶家	5 0	—	—		
170	〃	〃	7.2	—	—		
171	伊万里染付	小坏	5.6	3.8	3 9		
172	土師器	土鍋	16.7	13.0	2 7	把示　指オサエのちナデ ㋔㋖ ナデ	ススの付着
173	在地系	甕の胴部	—	—	—	㋔ ヨコ方向のナデ ㋖ 平行タタキ	
174	〃	甕	15 8	—	—		
175	〃	擂鉢	19 0	—	—		
176	〃	甕(?)	21 2	—	—		
177	〃	鉢	30 0	13 8	9.6		
178	〃	擂鉢	—	9 4	—		
179	青磁	碗	—	—	—	㋔ 画花文、淡緑色	
180	白磁	〃	—	—	—	玉縁口縁、白色 貫入有	焼成不良
181	唐津	〃	12.2	—	—		
182	(陶器)在地系	茶家	—	—	—		
183	青花	碗	—	5.2	—	青白色	広東、福建窯系
184	在地系陶器	蓋	—	4 2	—		
185	〃	甕または壺	—	17 2	—		
186	青磁	碗	—	—	—	㋔㋖ 櫛描文、淡緑色 貫入有	
187	土師器	小皿	(8 9)	(6 9)	1 3	㋔㋖ ナデ 系切り底	
188	〃	〃	(8 2)	(5 8)	1.5	㋔㋖ 丁寧なナデ 系切り底	
189	〃	〃	(8 0)	(6 3)	1 2	㋔㋖ ナデ 系切りのち板状圧痕	
190	〃	〃	(7 8)	(5.6)	1 7	㋔㋖ ナデ 底部切り離し不明	

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考
191	土師器	坏	(15 2)	(8 5)	9.0	㋔㋖ ナデ 系切りのちナデ	
192	〃	〃	(10 6)	—	—	㋔㋖ ナデ	
193	〃	〃	—	—	—		
194	〃	小皿	(7 9)	(6 8)	1 5	㋔㋖ ナデ ㋔㋕ 不定方向ナデ、系切り底	
195	〃	坏	—	8 1	—	㋔㋖ ナデ 右回転ヘラ切り底	
196	〃	小皿	—	(5 6)	—	系切り	
197	在地系	茶家	5.8	—	—		
198	〃	甕の胴部	—	—	—	㋔ ナデ ㋖ 平行タタキ	
199	青磁	碗	—	—	—	端反り口縁、白緑色 貫入有	
200	〃	〃	14 8	—	—	端反り口縁、淡緑色 貫入有	
201	〃	〃	13 6	—	—	口縁雷文（ヘラ）、淡緑色	
202	〃	〃	13 6	—	—	淡緑色 貫入有	
203	〃	小皿	10.5	—	—		
204	〃	〃	9 8	—	—		
205	青磁	皿	—	—	—	㋔ 櫛描文、淡緑色	
206	〃	〃	—	—	—	㋔ 櫛描文、淡緑色 貫入有	二次的焼成
207	〃	碗	17 0	—	—	端反り口縁、明緑色	龍泉窯系
208	〃	〃	14.0	—	—	端反り口縁、淡緑色 貫入有	
209	〃	〃	10 6	—	—		
210	〃	〃	13 4	—	—		
211	〃	〃	12 0	—	—		
212	〃	〃	12.0	4 8	8 2		
213	〃	皿	—	—	—		
214	〃	碗	—	—	—		
215	〃	小皿	—	—	—		
216	〃	碗	—	—	—		
217	〃	〃	14 3	—	—		

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考
218	青磁	碗	12 0	—	—	外 口縁雷文（ヘラ） 明緑色、貫入有		245	石製品	石鍋	—	13 6	—		
219	〃	〃	—	—	—	内外 櫛描き文 明緑色		246	土師器	坏	—	—	—		
220	〃	〃	—	—	—	内 画花文 緑色		247	〃	小皿	8 0	6 4	1 5	内外 丁寧なナデ ヘラ切り底	
221	〃	〃	—	5 6	—	内 画花文 黄緑色、貫入有	高台無釉	248	青磁	碗	16 2	—	—	内 画花文、淡緑色 貫入有	
222	白磁	〃	—	—	—	白緑色		249	伊万里染付	筒形碗	7 8	—	—	内 四方襷文	18C後半
223	〃	皿	—	—	—	端反り口縁 白色		250	常滑	壺	肩径 15 0	—	—	暗灰色 砂粒含	
224	〃	小坏	7 8	—	—	八角面取口縁 底部切高台、白色		251	東播系	捏鉢	—	—	—	内外 ナデ、灰色 砂粒含	
225	〃	皿	12 1	6 4	2 7	端反り口縁 白色	景徳鎮	252	土師器	坏	(14 4)	—	—	内外 ナデ	傾き疑問
226	〃	小皿	—	4 6	—	底部切高台 内 見込窯詰跡		253	〃	〃	(12 4)	—	—	内外 ナデ	
227	〃	(?) 碗	—	4 0	—	白色		254	〃	〃	—	(8 2)	—	系切り底	
228	伊万里染付	皿	—	5 2	—	内 見込型打陽刻文		255	〃	〃	—	(6 8)	—	系切り底	
229	青花	碗	10 4	—	—	口縁虫喰い 外 山水文		256	〃	〃	—	(7 4)	—	系切り—切り離し雑	
230	伊万里青磁染付	(蓋付) 碗	—	4 4	—	内 見込五弁花（手書き） 外 高台中心滑福文		257	〃	〃	—	(8 2)	—		
231	染付	碗	—	—	—		19C	258	〃	小皿	—	(6 2)	—	系切り底	
232	〃	〃	10 8	—	—		19C	259	〃	〃	—	(6 0)	—	系切り底	
233	伊万里染付 or 中国(青花)	碗	—	—	—			260	〃	〃	(8 8)	(7 0)	1 9	内外 ナデ 系切り底	
234	伊万里染付	小坏	—	3 6	—			261	〃	〃	(8 8)	(5 8)	1 7	内外 ナデ 系切り底	
235	唐津	碗	11 4	—	—	内 透明釉 外 銅緑釉	内野山窯	262	〃	〃	9 1	6 3	1 3	内外 ナデ 系切りのち板状圧痕	
236	備前	雷鉢	—	—	—	内外 ナデ 粗砂粒含、淡灰色		263	青磁	碗	—	—	—	内 画花文、淡黄緑色	
237	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 粗砂粒含、茶褐色		264	〃	〃	—	4 8	—	内 画花文、黄緑色	高台無釉
238	〃	〃	—	—	—	外 ナデ、灰色 内 乳白色、砂粒含		265	白磁	〃	—	—	—	玉縁口縁、白色	
239	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、淡茶褐色 砂粒含		266	土師器	小皿	(11 0)	(7 0)	2 4	内外 ナデ 系切り底	
240	〃	〃	—	—	—	内 ナデ、淡赤褐色 外 ナデ、暗灰色、砂粒含		267	〃	坏	—	(9 6)	—	系切り底	
241	土師器	小皿	—	5 6	—	系切り底		268	〃	小皿	(9 6)	(7 4)	1 5	系切り底	
242	在地系	甕	—	—	—			269	木片		—	—	—		
243	〃	蓋	5 0	—	—			270	青磁	小皿	—	—	—	口縁稜花、淡緑色 内 線描文、貫入有	
244	〃	皿	10 0	4 6	2 9	系切り底		271	白磁	〃	—	5 0	—	切高台、白色 内 見込に窯詰跡	底部無釉

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考
272	青花	碗	—	—	—		
273	青磁	〃	10.8	—	—	㋐ 線描蓮弁 淡緑色、貫入有	龍泉窯系
274	〃	深皿(洗)	11 6	—	—	端反り口縁、明緑色 ㋐ 蓮弁文（ヘラ）、貫入有	
275	〃	碗	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 明緑色、貫入有	龍泉窯系
276	〃	小皿	—	—	—	口縁稜花、緑色 貫入有	
277	〃	碗	—	—	—	緑色 貫入有	
278	伊万里染付	蓋	10 6	—	—	㋑ 四方襷文	西有田 広瀬山窯系
279	えびす	〃	—	—	—		
280	白磁	碗	—	6 8	—	灰白色	高台(内) 無釉
281	〃	〃	—	7 4	—	灰白色	高台(内) 無釉
282	石製品	石鍋	—	—	—	㋐ 鍔に穿孔 スス付着	滑石製
283	土師器	坏	15 2	8 8	3 8	㋑㋐ ナデ 系切りのち板状圧痕	
284	〃	〃	(14 7)	9 1	2 9 〜 3.0	㋑㋐ ナデ 系切り底	
285	〃	〃	(12 4)	8 2	2 8	系切り底	
286	〃	〃	—	(10 0)	—	系切り底	
287	〃	〃	—	(10 6)	—	系切り底	
288	〃	〃	—	(8 4)	—	㋑㋐ ナデ 系切り底	
289	〃	〃	—	(9 4)	—	系切り底	
290	〃	小皿	(9 3)	6 8	1 45	㋑㋐ ナデ 系切りのち板状圧痕	
291	〃	〃	—	(6 6)	—	ヘラ切り底(回転)	
292	〃	〃	8 8	6 5	1 3	㋑㋐ ナデ 系切りのち板状圧痕	
293	〃	〃	—	6 7	—	系切りのち板状圧痕	
294	常滑	甕	—	—	—		
295	古瀬戸	おろし皿	—	8 0	—	㋐ ナデ、淡灰黄褐色	系切り底
296	〃	〃	14 0	—	—		
297	備前	擂鉢	26 0	—	—		
298	常滑	甕	—	—	—	㋑ ナデ、茶褐色 ㋐ ナデ、明緑色、砂粒含	

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考
299	青花	碗	—	4 0	—	㋐ 波濤文	土壙
300	土師器	小皿	7 6	6 2	1 7	㋑㋐ ナデ 系切りのちナデ	土壙9
301	〃	坏	13 6	9 0	4 5	㋑㋐ ナデ 底部切り離し不明	土壙11
302	青磁	碗	—	4 4	—	㋐ 鎬蓮弁、淡緑色	土壙
303	土師器	坏	13.0	6 8	3.1	㋑㋐ ナデ ヘラ切り（?）	土壙14
304	〃	〃	—	7 1	—	㋑㋐ ナデ 内底 不定方向のナデ、ヘラ切り底	土壙14
305	〃	〃	—	8.0	—	㋑㋐ ナデ 系切り底	土壙14
306	〃	小皿	8 2	7 0	1 6	㋑㋐ ナデ、内底 不定 方行のナデ、系切り底	土壙14
307	〃	〃	7 8	6 0	1 5	㋑㋐ ナデ 系切り底	土壙14
308	(?) 備前	擂鉢	—	—	—		土壙
309	(?) 〃	〃	—	11 8	—		土壙
310	土師器	小皿	8 0	6 4	1 6	㋑㋐ 丁寧なナデ ヘラ切り底	土壙16
311	〃	〃	8 0	7 6	1 3	㋑㋐ ナデ 系切り	土壙20
312	〃	坏	—	8 8	—	㋑㋐ ナデ ヘラ切りのち板状圧痕	土壙22
313	青磁	碗	—	—	—	㋑㋐ 櫛描文 黄緑色	
314	〃	〃	—	—	—	㋑㋐ 櫛描文 黄緑色	
315	〃	〃	—	—	—	㋑㋐ 櫛描文 黄緑色	
316	〃	〃	—	—	—	㋑㋐ 櫛描文 黄緑色	
317	〃	〃	—	—	—	㋑ 画花文 淡黄緑色	
318	〃	〃	14 2	—	—	㋑ 画花文 青緑色	
319	〃	〃	—	—	—	㋐ 鎬蓮弁 明緑色	二次的焼成
320	〃	〃	—	—	—	㋐ しのぎ蓮弁 明緑色	
321	〃	小皿 (?)	8 4	—	—	端反り口縁 ㋐ 蓮弁（ヘラ）黄緑色	
322	〃	碗 (深皿先)	13 0	—	—	端反り口縁 青緑色、貫入有	
323	〃	〃	—	—	—	端反り口縁 淡緑色	
324	〃	〃	12 0	—	—	端反り口縁 黄緑色、貫入有	
325	〃	〃	9 8	—	—	端反り口縁 黄緑色	

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特考	備考
326	青磁	碗(?)	14 2	—	—	端反り口縁 淡緑色、貫入有		353	青磁	碗	—	5 0	—	㋐ 線描蓮弁、黄緑色 ㋑ 見込に花弁文	龍泉窯系 高台内無釉
327	〃	〃(?)	15 2	—	—	端反り口縁 黄緑色		354	〃	〃	—	4 2	—	明青緑色	高台内無釉 胎土不良
328	〃	〃(?)	14 0	—	—	端反り口縁 黄緑色		355	〃	〃	—	—	—	㋐㋑ 櫛描文 明青緑色	
329	〃	〃	14 0	—	—	黄緑色 貫入有		356	〃	皿	—	—	—	㋐ 櫛描文 黄緑色、貫入有	
330	〃	〃	11 8	—	—	青緑色 貫入有		357	〃	〃	—	—	—	㋐ 櫛描文 明緑色	
331	〃	〃	—	—	—	淡緑色 貫入有		358	〃	(底) 深 皿	11 0	—	—	端反り口縁、明緑色 ㋑ 蓮弁(ヘラ) 貫入有	龍泉窯系
332	〃	〃	10 2	—	—	㋐ 口縁雷文 (ヘラ) 胴部蓮弁、黄緑色、貫入有		359	〃	皿(?)	19 2	—	—	口縁稜花 淡緑色	
333	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 黄緑色、貫入有	龍泉窯系	360	〃	小 皿	7 8	4 2	2 7	㋑ 見込に花弁文 淡黄緑色	高台内釉ハギ
334	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 黄緑色	龍泉窯系	361	〃	〃	10 0	4 8	3 0	㋑ 見込に釉ハギ 淡黄緑色、貫入有	高台内無釉
335	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 淡黄緑色、貫入有	龍泉窯系	362	〃	〃	11 8	6 6	3 5	淡緑色	
336	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 淡緑色、貫入有	龍泉窯系	363	〃	〃	11 4	5 6	3 0	口縁稜花、淡緑色 ㋑ 線描文、貫入有	高台内釉 ハギ
337	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 黄緑色、貫入有	龍泉窯系	364	〃	〃	11 2	5 8	3 1	口縁稜花、淡緑色 ㋑ 線描文、貫入有	高台内釉 ハギ
338	〃	〃	11 0	—	—	㋐ 線描蓮弁 淡黄緑色	龍泉窯系	365	〃	〃	12 6	—	—	口縁稜花 乳白色	焼成不良
339	〃	〃	13 6	—	—	㋐ 線描蓮弁 淡緑色、貫入有	龍泉窯系	366	〃	〃	—	—	—	口縁稜花、淡緑色 ㋑ 線描文、貫入有	
340	〃	〃	13 8	—	—	㋐ 線描蓮弁 淡黄緑色、貫入有	龍泉窯系	367	〃	〃	—	—	—	口縁稜花、淡緑色 ㋑ 線描文、貫入有	
341	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 青緑色、貫入有	龍泉窯系	368	〃	〃	—	—	—	口縁稜花、深黄緑色 ㋑ 線描文、貫入有	
342	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 黄緑色、貫入有	龍泉窯系	369	〃	〃	—	—	—	口縁稜花、明青緑色 ㋑ 線描文、貫入有	
343	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 淡緑色、貫入有	龍泉窯系	370	〃	〃	—	—	—	口縁稜花、明緑色 ㋑ 線描文、貫入有	
344	〃	〃	—	—	—	㋐ 線描蓮弁 黄緑色、貫入有	龍泉窯系	371	〃	〃	—	—	—	口縁稜花、橙色	低温焼成 の為酸化
345	〃	〃	14 8	5 4	7 7	淡緑色	高台内 無釉	372	〃	〃	—	—	—	口縁稜花、淡緑色 ㋑ 線描文、貫入有	二次的焼成
346	〃	〃	13 6	5 2	7 5	㋐ 線描蓮弁 黄緑色、貫入有	龍泉窯系	373	〃	〃	—	5 6	—	口縁稜花、淡緑色 貫入有	高台内釉ハギ
347	〃	〃	—	5 4	—	青灰色	窯詰跡 高台内無釉	374	白磁	碗	—	—	—	㋑ 櫛描文、灰白色 端反り口縁	
348	〃	〃	—	—	—	㋑ 見込に花弁文 淡青緑色		375	〃	〃	—	—	—	端反り口縁 ㋑ 櫛描文、灰白色	
349	〃	〃	—	—	—	端反り口縁 深緑色、貫入有		376	〃	〃	—	—	—	端反り口縁 ㋑ 櫛描文、灰白色	
350	〃	〃	13 0	—	—	㋐ 線描蓮弁 深黄緑色、貫入有		377	〃	〃	—	—	—	工縁口縁 灰白色	
351	〃	〃	—	5 4	—	明青緑色	高台内無釉	378	〃	〃	—	—	—	工縁口縁 灰白色	
352	〃	〃	—	5 0	—	淡緑色	高台内無釉	379	〃	〃	—	—	—	玉縁口縁 灰白色	

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考
380	白磁	皿	—	—	—	明灰色		407	染付		—	—	—		19C（幕末）
381	〃	〃	—	—	—	端反り口縁 白色		408	〃		10 0	—	—		19C（幕末）
382	〃	碗	—	—	—	端反り口縁 灰黄色		409	〃		9 6	—	—		19C（幕末）
383	〃	小皿	10 2	3 6	2 6	白色	高台(内) 無釉	410	〃		—	4 2	—		19C（幕末）
384	〃	〃	7 8	3 4	2 1	切高台、白色 ㋙ 見込に窯詰跡	高台(内) 施釉	411	伊万里染付	小皿	9 4	4 8	2 1	㋚ 折松葉文様	18C
385	〃	碗	—	6 4	—	灰白色	高台(内) 無釉	412	染付	〃	11 4	7 8	2 5	口縁口紅	19C（幕末）
386	〃	〃	—	6 2	—	灰白色	高台(内) 無釉	413	〃		—	8 0	—		19C（幕末）
387	〃	〃	—	4 4	—	灰白色	高台（内） 無釉 焼成不良	414	瀬戸	碗	8 0	2 8	4 2		19C（幕末）
388	〃	小皿	—	3 4	—	切高台、灰黄色 ㋙ 見込に窯詰跡	高台(内) 無釉	415	常滑	甕	—	—	—	㋙ ナデ、暗褐色 ㋚ 黄緑色、砂粒含	
389	〃	坏	—	2 6	—	㋙ 見込蛇目釉ハギ 白色	高台(内) 無釉	416	東播系	捏鉢	—	—	—	㋙㋚ ナデ 灰色、砂粒含	
390	〃	小皿	—	—	—	切高台、灰黄色 ㋙ 見込に窯詰跡		417	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 明灰色、砂粒含	
391	〃	碗	—	—	—		高台(内) 無釉 焼成不良	418	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 青灰色、砂粒含	
392	青花	皿	10 2	5 4	2 5	端反り縁、㋚ 唐草文 ㋙ 見込に渦磨文(十字架文)		419	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 灰色、砂粒含	
393	伊万里染付 OR青花	皿(?)	—	—	—			420	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 青灰色	
394	〃	〃(?)	—	—	—			421	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 灰黄褐色	焼成良好
395	伊万里染付	小坏	6.8	—	—	㋙ 蘭文様	高台無釉 1630～50	422	備前	擂鉢	—	—	—		
396	〃	〃	6 0	2 2	4 1		17C後半	423	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 灰黒色、砂粒含	カキ目一組（8本）
397	〃	皿	14 0	—	—		17C前半	424	〃	〃	—	—	—	㋙ ナデ、黄白免 ㋚ ナデ、暗赤褐色	砂粒含
398	〃	小皿	11 8	—	—	㋙ 魚文様	17C後半	425	〃	〃	—	—	—	㋙ ナデ、黄白色 ㋚ ナデ、暗赤褐色	砂粒含
399	〃	皿	—	—	—		17C後半 ～18C初	426	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 灰黒色、砂粒含	
400	〃	〃	—	—	—	㋙ 芙蓉手	輸出用 17C末 ～19C初	427	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 暗灰色、砂粒含	櫛目一組（8本）
401	〃	〃	—	8 8	—	㋙ 見込に五弁花 高台内「大明年製」	18C	428	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 暗赤褐色、砂粒含	
402	〃	〃	—	3 0	—		18C後半 ～19C前半	429	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 灰色、砂粒含	
403	〃	〃	—	9 2	—	蛇目大型高台（ハリ使用） ㋙ 見込五弁花	18C	430	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 灰色、砂粒含	
404	〃	〃	20 2	—	—		18C後半 ～19C前半	431	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 暗赤褐色、砂粒含	
405	〃	筒形碗	—	—	—		19C（幕末）	432	〃	〃	—	—	—	㋙ ナデ、黄白色 ㋚ ナデ、灰色、砂粒含	櫛目一組（8本）
406	〃	〃	8 8	—	—	口縁口紅	19C（幕末）	433	〃	〃	—	—	—	㋙㋚ ナデ 赤褐色、砂粒含	

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	特徴	備考
434	備前	〃	—	—	—	内外 ナデ 青灰色、砂粒含	櫛目一組 （8本）	461	土師器	坏	—	(76)	—	不明のち板状圧痕	
435	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 赤灰色、砂粒含		462	〃	〃	—	—	—	ヘラ切り底	
436	〃	〃	—	—	—	内 ナデ、乳白色 外 ナデ、暗灰色、砂粒含		463	〃	小皿	—	(62)	—	糸切り底	
437	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ、赤褐色	櫛目縦 及び斜め	464	〃	〃	(86)	(70)	14	内外 丁寧なナデ 糸切り底	
438	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 暗灰色、砂粒含		465	〃	〃	(94)	(7.0)	165		
439	〃	〃	—	—	—			466	〃	〃	(84)	(6.4)	15	内外 ナデ 糸切り底	
440	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 赤褐色、砂粒含	櫛目一組 （8本）	467	〃	〃	(84)	(68)	13	内外 ナデ 糸切り底	
441	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 暗赤褐色、砂粒含		468	〃	〃	(76)	(52)	13	内外 ナデ 切り離し不明	
442	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 明赤褐色、砂粒含		469	〃	〃	—	(68)	—	内外 ナデ 糸切り底	
443	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 暗赤褐色、砂粒含		470	〃	不明	184	—	—		
444	〃	〃	—	—	—	内 ナデ、灰色 外 灰白色、砂粒含		471	〃	〃	70	—	—		
445	〃	〃	—	—	—	内外 ナデ 茶褐色、砂粒含	櫛目縦 及び斜め	472	〃	〃	—		—		
446	〃	〃	—	—	—	内 ナデ、暗茶褐色 外 ナデ、灰黒色、砂粒含		476	在地系	鳴台	48	53	61	糸切り底	
447	土師器	坏	130	80	30 〜 32	内外 丁寧なナデ ヘラ切りのち板状圧痕		477	〃	鳴台	94	52	65	糸切り底	
448	〃	〃	—	(114)	—	内底　同心円の2条の凹線 糸切り底		478	〃	高坏 仏飯碗	61	29	50		
449	〃	〃	—	(82)	—	内底　不定方向のナデ 糸切り底		479	〃	碗	—	48	—		
450	〃	〃	—	(74)	—	内外 ナデ 糸切り底		480	〃	〃	—		—		
451	〃	〃	—	(90)	—	内外 ナデ 糸切り底		481	〃	碗	—	54	—		
452	〃	〃	—	(80)	—	内外 ナデ		482	〃	碗	—	47	—		
453	〃	〃	—	(114)	—	内外 ナデ 糸切り底		483	〃	蓋	57	／	35		
454	〃	〃	—	(90)	—	ヘラ切り底		484	〃	碗	92	36	37	内 見込蛇ノ目釉ハキ	
455	〃	〃	—	(86)	—	内外 ナデ 糸切り底		485	〃	〃	113	48	27		
456	〃	〃	—	(80)	—	内外 ナデ 糸切り底		486	〃	蓋	53	／	25		
457	〃	〃	—	83	—	内外 マメツ大 糸切り底		487	〃	〃	—	—	—	内 ヨコ方向のカキ目 外 平行タタキ	
458	〃	〃	—	(74)	—	糸切り底		488	〃	甕の胴部	—	—	—	内 指オサエのちナデ 外 平行タタキ	
459	〃	〃	—	(84)	—	ヘラ切り底	'	489	〃	甕の胴部	—	—	—	内 ナデ 外 平行タタキ	
460	〃	〃	—	(62)	—	糸切り底		490	〃	〃	—	—	—		

（　　）は推定

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考	挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	備考
491	在地系	甕の胴部	—	—	—	(内)ナデ (外)平行タタキ		494	在地系	猫鉢	30 6	—	—		
492	〃	甕の胴部	—	—	—	(内)ナナメ方向のナデ (外)平行タタキ		495	〃	〃	24 0	—	—		
493	〃							496	〃	〃	—	12 4	—		

挿図番号	種別	グリット	遺構名	品考	備考	挿図番号	種別	クリット	遺構名	品名	備考
497	鉄	F・10	ピット内	小柄		519	石	E・10	ピット(9)	砥石	
498	〃	F・10	ピット(85)			520	〃	E・7	2号溝排石内		
499	〃	E・5	土拡(№2)	釘		521	〃	F・10	3層	砥石	
500	〃	F・10	ピット(85)			522	〃	C・12	特殊土拡(№4)	砥石	
501	銅	C・9	大溝と3号溝の切り合い	かんざし		523	〃	D・8	3層	砥石	
502	〃	G・11	ピット(65)	小束柄		524	〃	D・4	ピット(1)	砥石	
503		E・11	ピット内			525	〃	C・2	11号溝	砥石	
504	銅	D・12		キセル(雁首)		526	〃	B・C-11	3号井戸内	砥石	
505	〃	H・7	大溝(試掘トレンチC)	キセル(雁首)		527	〃	E・11		砥石	
506	〃	D・11		キセル(雁首と吸口)		528	〃	E・12		砥石	
507						529	〃	E・8			
508	銅	D・11		キセル(雁首)		530	〃	I・7	大溝(試掘トレンチD)	硯	
509		D・10	7号溝	キセル(吸口)							
510	石	D・11	7号溝	砥石							
511	〃	D・11	ピット(22)	砥石							
512	〃	D・9	大溝	砥石							
513	〃	D・11	7号溝	砥石							
514	〃	E・6	ピット内	砥石							
515	〃	D・10	3層	砥石							
516	〃	C・11	4号溝	砥石							
517	〃	C・11	3層	砥石							
518	〃	G・11	3層	砥石							

挿図番号	種別	グリット	遺構	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
473	土錘	E・12	ピット内	4 0	1 1	0 3	3 76	
474	土錘	E・10	ピット内	5 2	1 6	0 55		両端に使用痕有
475	土錘	F・10		2 8	0 9	0 35		

番号	出土地点	時代	名称	初銭造年　西暦	径(cm)	量目(g)	備考
531	E-9　2号竪穴	唐	開元通宝	武徳4年　621年	2 48	2 68	
532	F-10 内		開○○○		2 43	2 96	
533	E-11 Pit内		○宋通宝		2 60	2 61	
534	E-9 Pit内	元	至大通宝	至大3年　1310年	2 34	2 57	
535	E-9 Ⅲ層	元	至大通宝		2 39	2 73	
536	E-10 Pit内	元	至大通宝		2 36	3 40	
537	E-10 Pit 内	元	至大通宝		2 16	2 11	
538	E-10 P 内	元	至大通宝		2 36	1 93	
539	E-11	元	至大通宝		2 33	2 95	
540	F-10 Pit	元	至大通宝		2 36	2 84	
541	F-10 Pit	元	至大通宝		2 31	1 59	
542	F-10 Pit	元	至大通宝		2 27	2 37	
543	F-10 P	元	至大通宝		2 38	2 47	
544	G-7　大溝、降下白ホラ中	元	至大通宝		2 33	3 63	
545	E-2　黒褐色層	明	洪武通宝	洪武元年　1368年	2 33	2 36	
546	E-8　大溝白ホラ層内	明	洪武通宝	洪武元年　1368年	2 45	2 53	
547	E-12 Pit内	明	洪武通宝		2 33	2 87	
548	F-9　カマト内	明	洪武通宝		2 32	2 63	
549	F-10 Pit 内	明	洪武通宝		2 36	3 29	
550	E-9　2号竪穴	明	永乗通宝	永乗6年　1408年	2 51	2 67	
551	E-9　2号 竪穴	明	永乗通宝		2 52	2 29	
552	D-8　№1　大溝、黒褐色層				2 47	2 68	
553	F-9　1号竪穴		天○○宝		2 48	2 20	
554	F-9　1号竪穴		洪○通○		2 44		
555	D-10	江戸	寛永通宝		2 46		
556	D-11	江戸	寛永通宝		2 32	1 77	
557	D-13 P 28	江戸	寛永通宝		2 28	1 83	
558	E-8 Pit 内	江戸	寛永通宝		2 28	2 10	
559	E-12	江戸	寛永通宝		2 37	2 38	

Ⅴ．まとめ

遺構・遺物について

松原第Ⅰ遺跡は中世から近世にかけての集落遺跡で遺構は多様であるが、遺構そのものの時期（時代）や遺構相互の相対的な関係を決定し遺跡の性格を少しでも把握したい。まず、松原地区第Ⅰ遺跡の第Ⅱ層（白ボラ）は文明期（1469～87）に桜島から噴出した降下軽石であると比定されている。遺構埋土中の白ボラの有無により次の３グループ(３時期)に分けられる。

グループＡ：埋土中に白ボラを含むもので、埋土が第Ⅲ層黒褐色砂質土。
大溝・２号溝・４号溝

グループＢ：埋土中に白ボラを含まないで、埋土が第Ⅲ層黒褐色砂質土。
１号溝・４号溝・５号溝・13号溝・１号竪穴・２号竪穴・３号竪穴・特殊土壙
１号土壙
（グループＢは白ボラ降灰前に遺構が埋積した場合と白ボラ降下後遺構が構築された場合が考えられる。）

グループＣ：埋土中に白ボラを含まないで、埋土が第Ⅲ層黒褐色砂質土と第Ⅰ層灰黒褐色土の混土。
３号溝・６号溝・７号溝・８号溝・９号溝・11号溝・14号溝・15号溝・

次に遺構相互の相対関係は切り合い状態から、２号溝が１号溝を３号溝が２号溝を５号溝が４号溝を12号溝が１号溝を９号溝が13号溝を31号土壙が１号溝をそれぞれ切っている。また、埋土の色調は１・２・４・６・13号溝が第Ⅲ層黒褐色砂質土で、３・５(＝10号溝)・７・８・９・11・15号溝が第Ⅲ層黒褐色砂質土と第Ⅰ層灰黒褐色土の混土に近い埋土を呈している。これらを古い順に並べると１号溝－２号溝・４号溝・６号溝・13号溝－３号溝・５号溝・７号溝・８号溝・９号溝・11号溝（12号溝不明）となる。

これらを基に遺跡の全体像を考えると、まず自然地形を利用して大溝を「」」型に廻らした館跡がある。これに付随したものとして１号溝と掘立柱建物跡等があり、１号溝は大溝から５～10mの間隔で並行して内走している。他、館跡内の掘立柱建物・1・2号井戸・1号井戸がある。この館跡の下限は大溝の埋土である白ボラ（堆積部位は上位から1/3程である）の堆積状況から15世紀後半よりかなり古いことがうかがえる。次に２号溝であるが、これは松原地区第Ⅲ遺跡発掘調査の１号溝と同一のもので６・７区を南北方向にほぼ直線的に走行し、北側Ｃ・７区で分岐し一方は北進し崖に達し他方は東へ屈曲し、またＪ・６区でも東へ折れ両方ともそのまま東走し現在残っている道路に達する。つまり、２号溝は東側の道路を利用し長方形（平行四辺形）に土地を区画している。この区画された面積は約5,000㎡程である。さらに北側崖と２号溝と道路によって長方形に区画された約1,000㎡強の敷地がある。ここは調査では2/3 程が

表３．大溝内出土

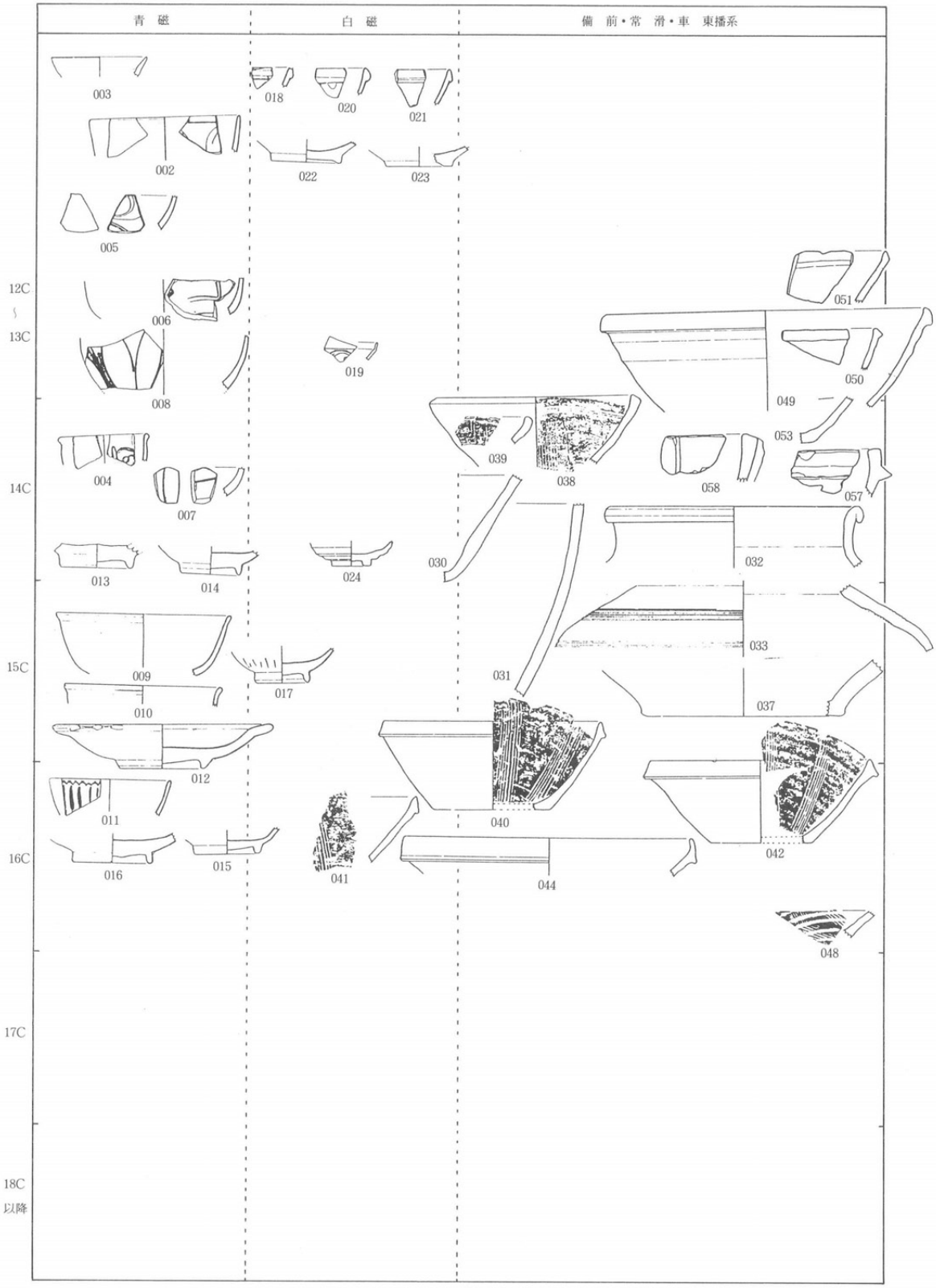

青磁
白磁
備前・常滑・東播系
12C
13C
14C
15C
16C
17C
18C
以降
003
002
005
006
008
004
007
013
014
009
010
012
011
016
015
018
020
021
022
023
019
024
017
041
051
050
049
053
039
038
058
057
030
032
033
031
037
040
042
044
048

表4

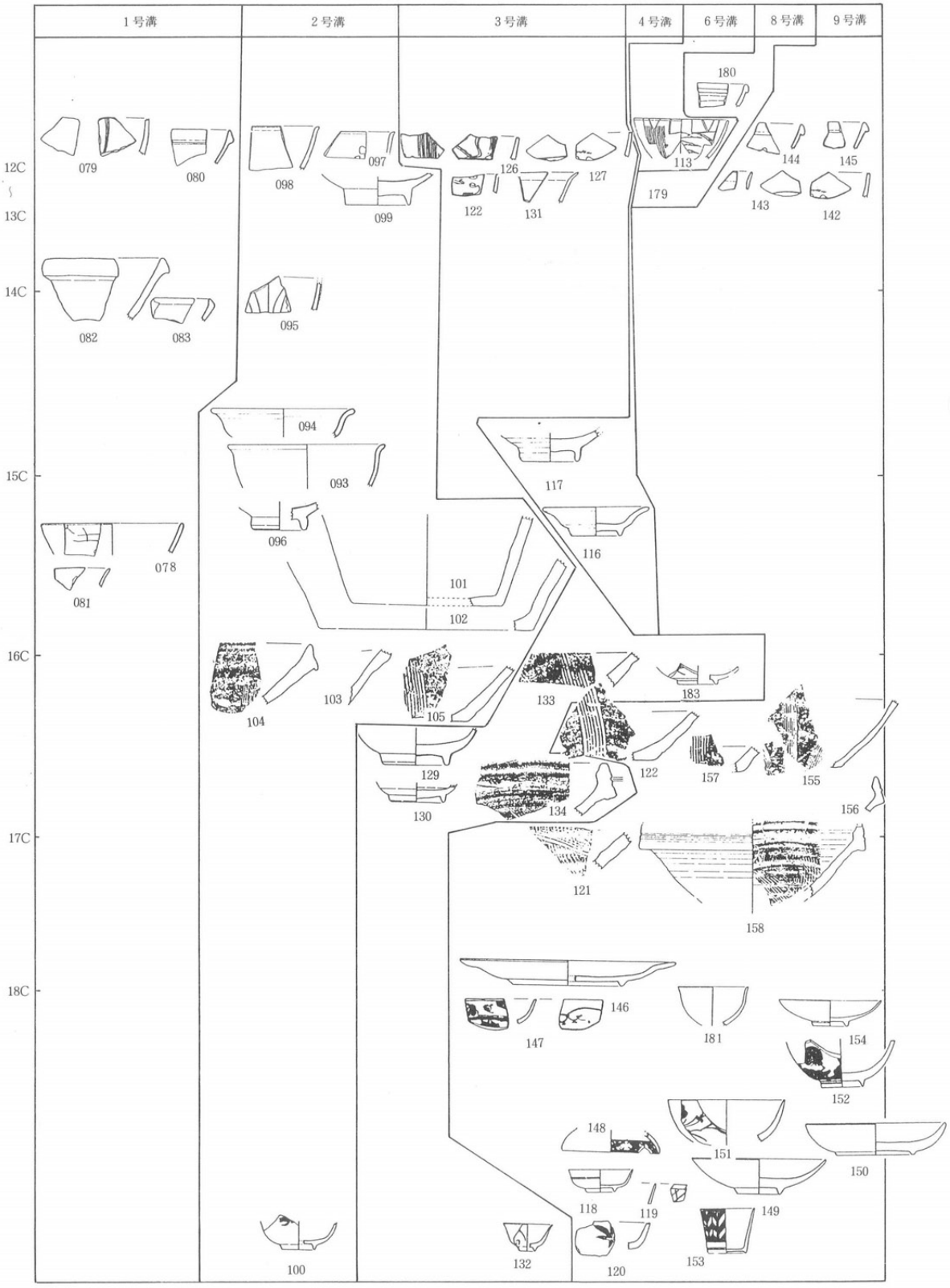
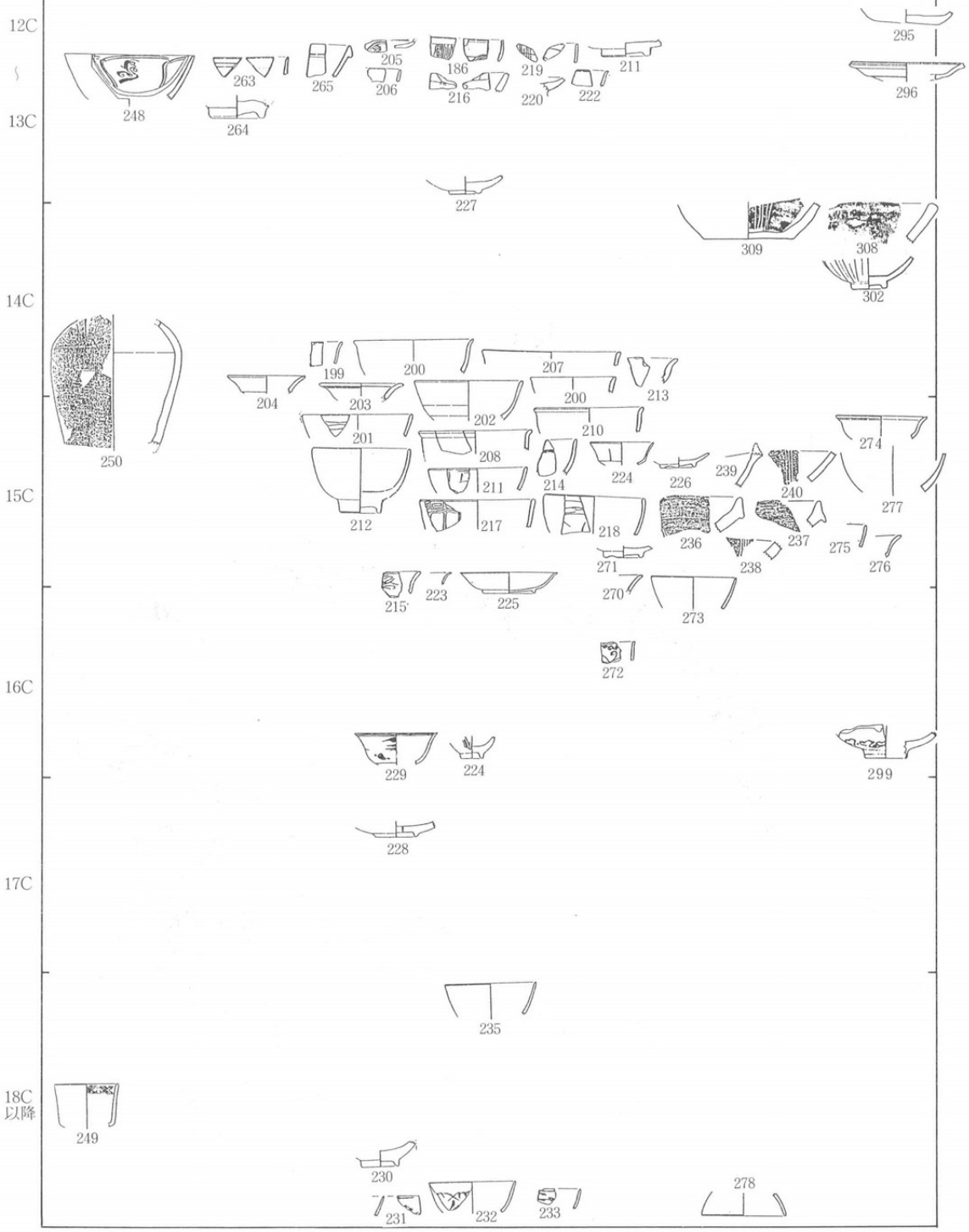
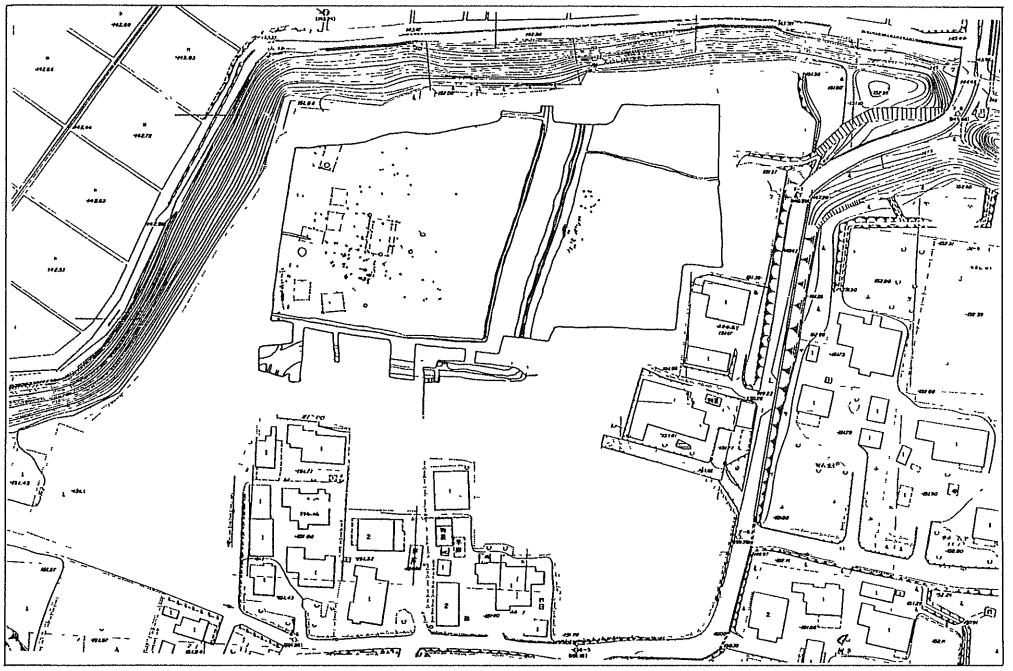

1号溝
2号溝
3号溝
4号溝
6号溝
8号溝
9号溝
12C
13C
14C
15C
16C
17C
18C
079
080
098
097
099
126
127
122
131
113
179
180
144
145
143
142
082
083
095
094
093
096
117
116
078
081
101
102
104
103
105
133
183
129
130
134
122
157
155
156
121
158
146
147
181
154
152
148
151
150
118
119
149
153
132
120
100

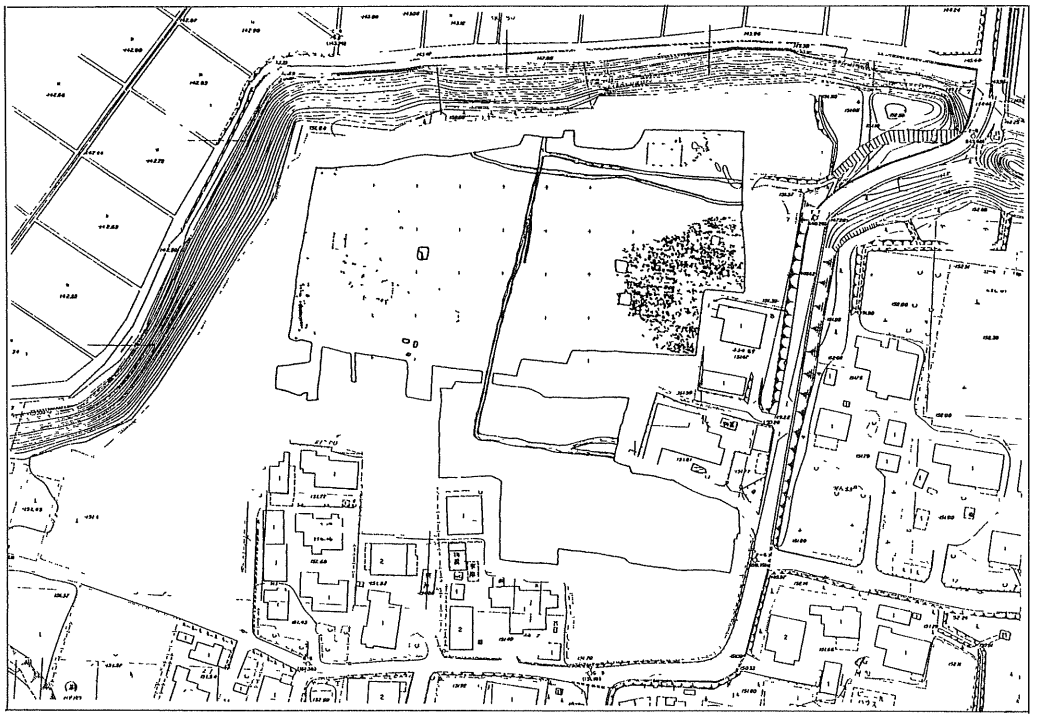
表5

3号・4号井戸　東側ピット群　9号・10号掘立柱建物　1号・2号・3号竪穴　土壙

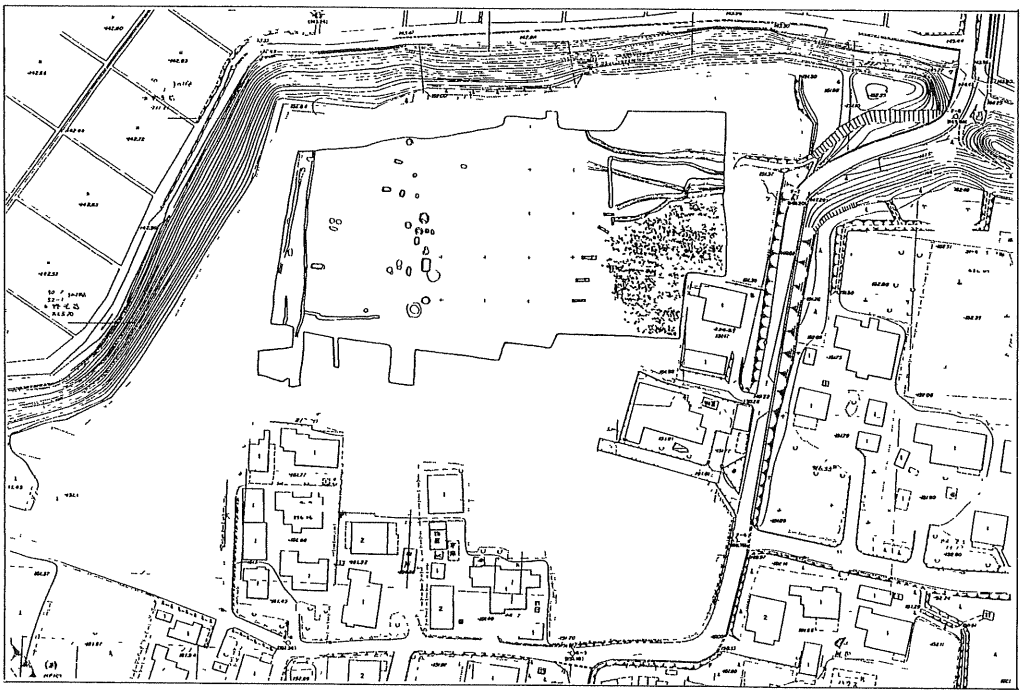




第１図：第Ⅰ期（大溝を廻らす館跡）



第２図：第Ⅱ期（２号溝に区画された館跡）



第３図：第Ⅲ期（グループＣを主とした掘立柱建物跡）

排土置場となり完掘していないが、調査範囲内に９号掘立柱建物と３号井戸が検出されている。これらも２号溝に白ボラが堆積していることから存在下限は15世紀後半まで下らない。さらに前述したとおり２号溝は１号溝より新しいため上限も館址存続時期以後であることがわかる。また、２号溝と同時期の遺構は出土遺物から10号掘立柱建物・１号竪穴・２号竪穴・３号竪穴（？）３号井戸・４号井戸等が考えられる。次に３号・６号・７号・８号・11号・14号・15号溝・５号井戸とそれらの周囲にある東側ピット群そして館址内にある土壙群である。これらは埋土から近世と思われる。

以上大まかな位置づけから今度は各々遺構内出土遺物からさらに細かな年代決定を試みたい。大溝内遺物（表３参照）をみると青・白磁から国内陶磁器・土師器などが出土し、遺物の年代は12～13世紀から16世紀前半までのものである。出土レベルは1／3程の部位までに多く集中しており廃棄後かなり時間が経過した後流れ込んだものと考えられる。しかし若干深いレベルのものもある。049(東播系捏鉢）は13世紀前半で大溝床面より30㎝ほどで出土していることから遺棄直後堆積したものだと考えられる。また、１号溝からも12世紀末～13世紀前半の東播系捏鉢（082・083）が出土している。他006(青磁：画花文）018(白磁：玉縁口縁）や東播系捏鉢が中位より下層で出土している。これらの出土状況より大溝の存続期間（年代）を13世紀後半と位置づけたい。次に２号溝を主体として区画された5,000㎡と1,000㎡の各々の遺構内より出土した遺物をみてみる。（表４・５参照）まず、5,000㎡の方は 10号 掘立柱建物及び東側ピット群（並ばなかった柱穴）からの遺物は12～13世紀と14～15世紀の青・白磁と14～15世紀の備前

等で下限は14～15世紀である。1,000㎡の方では３号井戸内の遺物は検出面から12～13世紀の青磁碗（248)が、最深部から14～15世紀の常滑壺（250）土師器（262）が出土している。９号掘立柱建物からは12～13世紀の青磁碗(186）が１点、14～15世紀の青・白磁が多数出土している。２号溝からは12～13世紀や14～15世紀の青・白磁や14～15世紀の備前・常滑等が出土している。以上から２号溝等により構成された遺構の存続期間14世紀後半から15世紀前半に比定されると思われる。（表４•５参照）次にグループＣでは、12～13世紀の青・白磁が３・７・８号溝から、15世紀後半～16世紀前半の青磁・15世紀の備前・16世紀の青花が３号溝から出土し、15世紀～16世紀前半の備前、17世紀以降の伊万里染付が７号溝から出土している。また、東側ピット群からは17世紀以降の染付も出土していることから、中世から近世にかけて断続的に生活が営まれていたようだ。以上からグループＣは17世紀以降19世紀末まで存続していたと思われる。

簡潔に述べると、

第Ⅰ期（13世紀後半）　：大溝を廻らす館跡
第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）：２号溝によって区画された館跡
第Ⅲ期（16・17世紀～19世紀）　：グループＣを主とした掘立柱建物跡

となる。これら第Ⅰ期～第Ⅲ期に具体的に都城盆地を舞台に活躍した勢力を明らかにすることはできない。若干の史料や昭和63年度遺跡詳細分布調査（市内北東部）から高木屋敷跡（高木町）の周辺から60基ほどの軽石製の五輪塔が出土していることなどから、鎌倉時代には寺院等の活動が営まれていたようだ。また、児玉屋敷跡(野々美谷町)は『四方掘有…』とあり、岩満屋敷跡（岩満町）は水田を見下ろす台地縁辺に立地しているようで、松原地区第Ⅰ遺跡のⅠ期に類似している。第Ⅰ期は大溝を巡らしたり青・白磁等の舶載陶磁器の出土をみるとそれ[注1)]相当の勢力を有した居館跡と思われる。第Ⅱ期は敷地の規模や出土遺物から在地領主の屋敷跡ではないかと推定される。また、第Ⅰ期は大溝(空掘)・溝・掘立柱建物・井戸から、第Ⅱ期は溝・掘立柱建物・竪穴遺構（倉庫）・井戸から館が構成されている。

（矢部）

注１）山田　渉『都城市城の歴史的環境の概要』都城市文化財調査報告書第６集 1987

参考文献
中井　均『中世城館の発生展間』「物質文化」48号物質文化研究所
小和田哲男『戦国考古学の視点』「季刊考古学」26号雄山閣
「宮崎県学園都市遺跡発掘調査報告書」第２集 宮崎県教育委員会 1985
「城郭研究特集号」帝京大学山梨文化財研究所報 1988
宇野隆夫「後半期の須恵器」

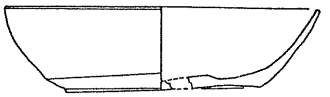
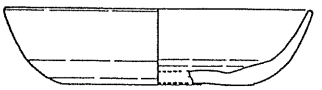
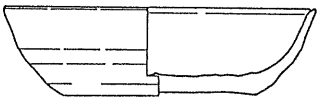
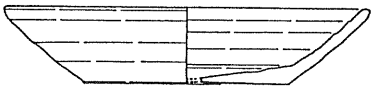
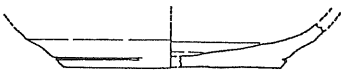
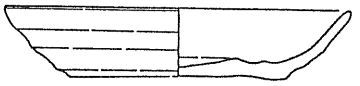
土師器について

松原地区第Ⅰ遺跡では土師器片約300点が出土し、その中で実測可能な破片は108点である。実測分の遺構別出土数、実測分の坏と小皿の数、実測分のヘラ切り底と糸切り底の数は表６のとおりである。

以下実測可能な坏と小皿を大まかではあるが次のとおり坏を６分類７細分、小皿を６分類９細分した。まず、坏をⅠ類、小皿をⅡ類とし底部の切り離しの違いによってヘラ切り底（A）糸切り底（B）とした。そして、坏（Ⅰ）はヘラ切り底（A）を３形態に糸切り底（B）を３形態に分類した。Ⅰ・A・１類は底部から口縁部へ直線的に立ち上がるもの。Ⅰ・A・２類は底部から体部への立ち上がりに段を有するもの。Ⅰ・A・３類は底部から体部へ内湾ぎみに立ち上がるもの。Ⅰ・B・１類は底部から口縁部へ直線的に立ち上がるもので、a 類は器高が高く器壁が薄い（一様）もの、b 類は器高が低いわりには口径が大きい大型のものである。Ⅰ・B・２類は底部から体部への立ち上がりに段を有するもの。Ⅰ・B・３類は底部から体部へ内湾ぎみに広がりながら立ち上がり、体部内外に稜線を有するものである。小皿はヘラ切り底を３分類し、Ⅱ・A・１類は体部から口縁にかけて直線的に急峻に立ち上がるもの。Ⅱ・A・２類は体部から口縁にかけて外反し口縁が先細りする。Ⅱ・A・３類は底部から口縁にかけて内湾ぎみに立ち上がるもの。糸切り底も同様で、Ⅱ・B・１類は体部から口縁にかけて直線的に立ち上がるもので、a 類は立ち上がりが急峻なもので底が凹凸なもの、b 類は立ち上がりが急峻なもので底が平担なもの、c 類は口が広がるものである。Ⅱ・B・２類は底部から外反し口縁が先細りで底が厚手がa 類、薄手がb 類である。Ⅱ・B・３類は底部から口縁にかけて内湾ぎみに立ち上がり器壁が厚手のものに分類した。

遺構名	実測分	器種		底部切り離し		
		坏	小皿	ヘラ切り	糸切り	不明
大溝	18	10	8	1	15	2
1号溝	7	5	2	3	3	1
2号溝	6	5	1	1	5	0
3号溝	5	3	2	1	4	0
13号溝	1	1	0	1	0	0
東地区ピット内	1	0	1	0	1	0
西地区ピット内	5	3	2	3	1	1
9号掘立	5	1	4	0	4	1
1号井戸	2	1	1	1	0	1
3号井戸	11	6	5	0	8	3
4号井戸	3	1	2	0	3	0
特殊土壙	11	7	4	1	10	0
9号土壙	1	0	1	0	1	0
11号土壙	1	1	0	0	0	1
14号土壙	5	3	2	2	3	0
16号土壙	1	0	1	1	0	0
20号土壙	1	0	1	0	1	0
22号土壙	1	1	0	1	0	0
一般(包含層)	23	16	7	4	16	3
計	108	64	44	20	75	13

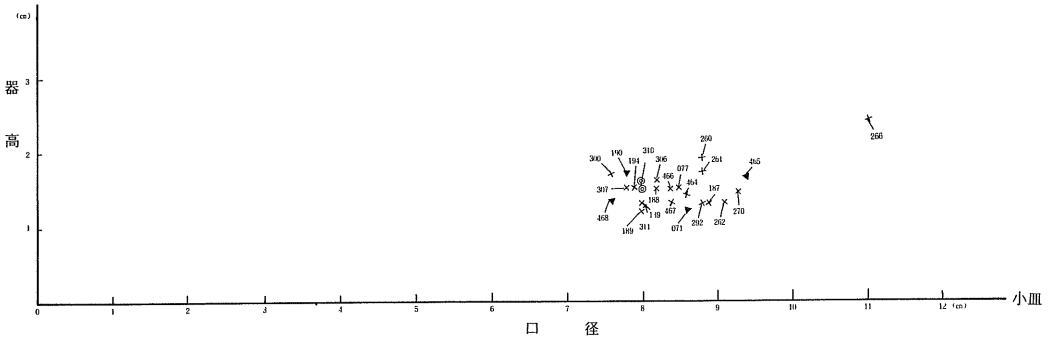
表６　土師器実測分出土状況

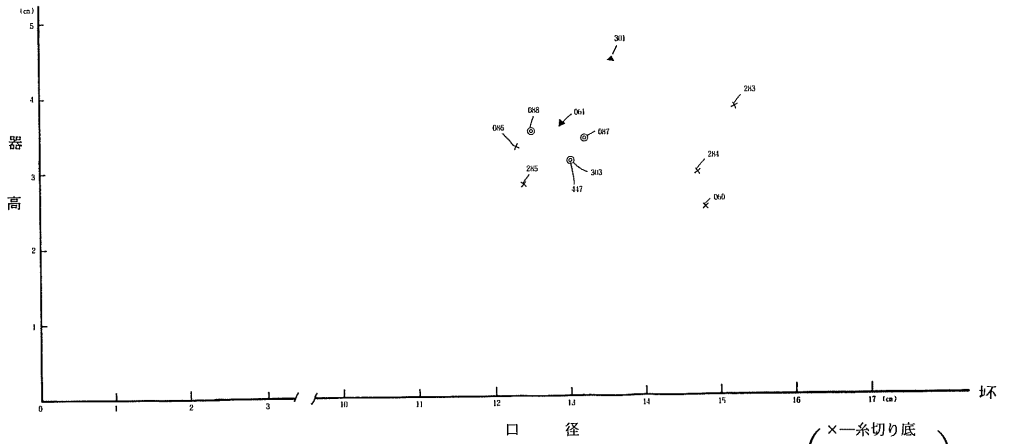
種別	底	分類	特　　徴	形　　態		
I	A	1	底部から口縁部へかけて直線的に立ち上がるもの			
		2	底部から体部への立ち上がりに段を有するもの			
		3	底部から体部へ内湾ぎみに立ち上がるもの			
	B	1	底部から口縁部へかけて直線的に立ち上がるもの	a	器高が高い器壁が薄く一様	
				b	器高が底い口径が大きく大型	
		2	底部から体部への立ち上がりに段を有するもの			
		3	底部から体部へ内湾ぎみに立ち上がり、口径が大きいもの			

土師器・坏分類表

種別	底	分類	特　徴	細分	特　徴	形　態
Ⅱ	A	1	直線的に立ち上がり急峻なもの			
		2	体部から口縁にかけて外反し、口縁が先細りする			
		3	底部から口縁にかけて内湾ぎみに立ち上がるもの			
	B	1	直線的に立ち上がるもの	a	立ち上がりが急峻底が凹凸	
				b	立ち上がりが急峻底が平担	
				c	口が広がるもの	
		2	体部から口縁にかけて外反し、口縁が先細りするもの	a	底が厚手	
				b	底が薄手	
		3	体部から口縁にかて内湾ぎみに立ち上がり厚手			

土師器・小皿分類表





×—糸切り底
◎—ヘラ切り底
▲—不 明

表７　土師器法量分布表

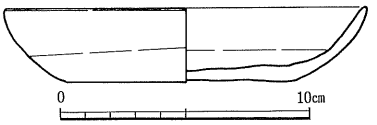
坏について、Ⅰ・A・１類とⅠ・B・1a 類、Ⅰ・A・２類とⅠ・B・２類の違いは基本的には底部の切り離しの相違によるもので器形は酷似している。Ⅰ・A・１類の出土は086 ・087（１号溝)、435(C・６区)、190(E・４区土壙)、312(F・５区土壙)、115(13号溝）で大きく言えば435.190.312.115 は館址内からの出土とみることができる。Ⅰ・B・1a 類の出土は085(１号溝)、060(大溝)である。また、Ⅰ・A・２類の出土は065(大溝)、140(３号溝)、195(E・４区ピット)、455(D・３区)、462(C・６区）で、Ⅰ・B・２類の出土は192(E・４区土壙）で、これらも館址内からの出土とみることができる。次に、Ⅰ・B・３類は146(１号溝)、283 284.285（特殊土壙)、436（C・９区)、452・456（C・11区）で、Ⅰ・B・1b 類の出土は059(大溝)、191(C・10区ピット）で、出土遺構は特殊土壙が最も多く、他大溝、１号溝、２号溝及び３号井戸からと調査区東側C・９区、C・11区である。これらⅠ・B・３類とⅠ・B・1b 類の特徴は底部の切り離しが糸切りでロクロ成形痕と思われる器面内外の稜と底部に同心

円状の凹凸を有していること。相違点は立ち上がりの違いによることである。

小皿について、Ⅱ・B・1c 類の出土は187（9号掘立柱建物)、262(3号井戸)、290・292（特殊土壙）である。262は3号井戸最深部より250(常滑壺)と共伴している。Ⅰ・B・3類とⅡ・B・1c 類は特殊土壙内出土、成形痕等の類似によりセット関係（一括資料）として捉えることができると思われる。また、Ⅱ・A・1類(256)やⅡ・B・1a 類(187・194・306)のように立ち上がりが急峻になる方がⅡ・B・1c 類より古いと考えられる。

ところで、1号溝は館を構成する遺構の1つであるが埋土に白ボラは堆積していない。しかし、大溝・2号溝に白ボラの堆積がみられることは、1号溝は排絶後白ボラの降下前にはすでに埋積している。言い換えれば、検出面を除けば流れ込みなどを考える必要がなく1号溝からの出土遺物はある程度時間的に限定することができると言える。

まず、具体的に年代を限定できるものとして250(常滑壺）は14世紀後半から15世紀前半に位置づけられている。このことからⅠ・B・3類とⅡ・B・1c 類は同時期に比定でき特殊土壙も14世紀後半から15世紀前半ごろに、つまり2号溝の時期に在在した可能性がある。次に、Ⅰ・A・1類とⅠ・B・1a 類及びⅠ・A・2類とⅠ・B・2類の坏とⅡ・A・1類とⅡ・B・1a 類及びⅡ・A・2類とⅡ・B・1a 類の小皿は出土遺構から13世紀後半に比定でき、ヘラ切りから糸切りへの転換も13世紀後半に漸移的に移行したのではないかと思われる。また、松原地区第Ⅳ遺跡(注1)の2号溝から右記の土師器坏が出土している。2号溝は規則性をもち埋土は第Ⅲ層黒褐色土で、共伴遺物は櫛描文の青磁碗や内面見込みにヘラによる片彫りの花文を有する龍泉窯系の青磁小皿などである。この坏は第Ⅰ遺跡の分類ではⅠ・A・3類の器形と同じく内湾ぎみに立ち上がり、底部の切り離しは糸切りである。このことから、Ⅰ・A・3類にもヘラ切りと糸切りが存在し、松原地区第Ⅳ遺跡2号溝の共伴遺物からⅠ・A・3類も13世紀代の後半に編年することができると思われる。



松原第Ⅳ遺跡出土土師器

（矢部）

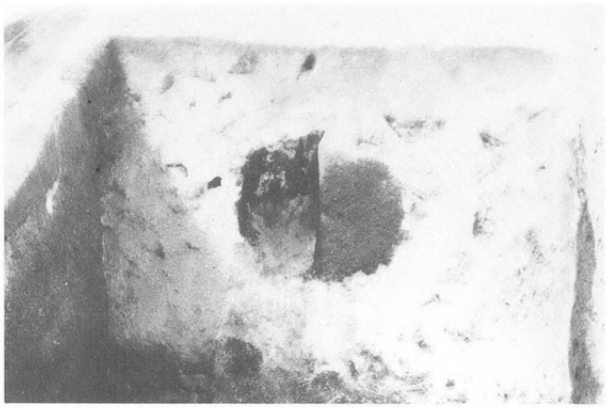
注1）松原地区第Ⅳ遺跡は昭和62年度発掘調査を実施し、調査担当である桒畑光博氏の許可を得て土師器坏を掲載した。

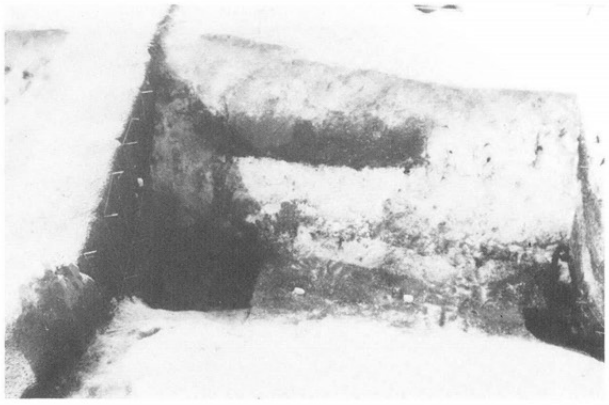
参考文献

「宮崎学園都市発掘調査報告書」第2集 宮崎県教育委員会 1985
『山内石塔群』宮崎学園都市発掘調査報告書 第1集 宮崎県教育委員会 1984
『伐株山城跡』 大分県玖珠町教育委員会 1984

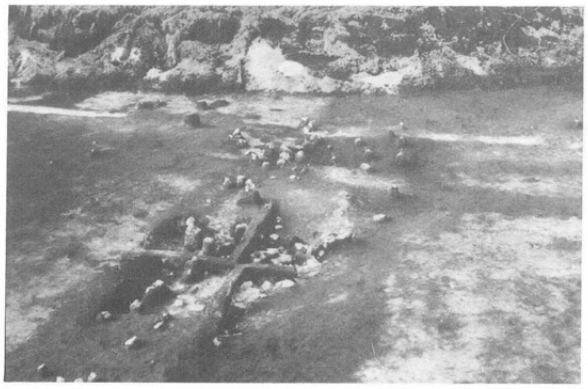
PL. 3　松原第Ⅰ・Ⅱ遺跡航空写真（1/3,000）

PL．4　松原第Ⅰ遺跡航空写真（1／750）

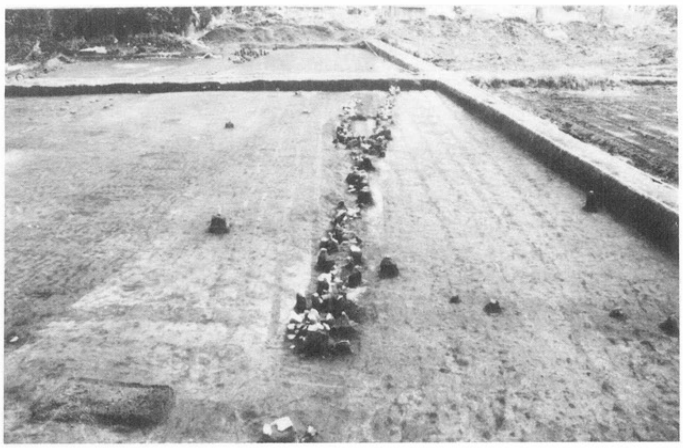


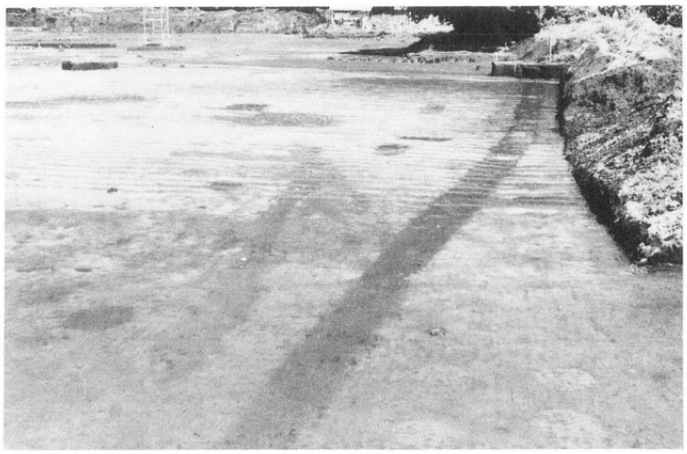


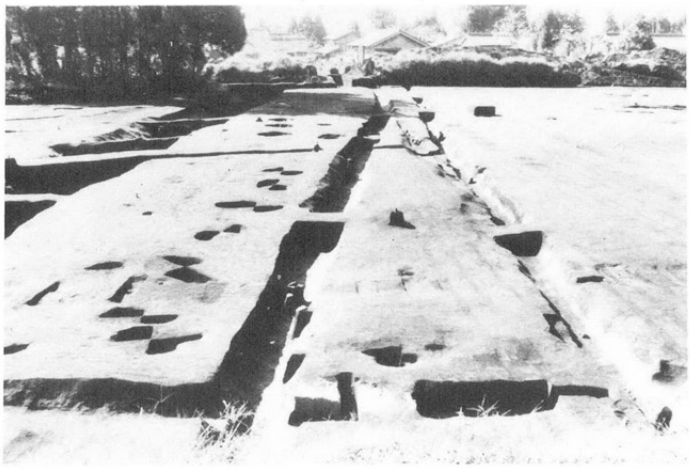
PL. 5　松原第Ⅰ遺跡大溝全景及び側壁落込み



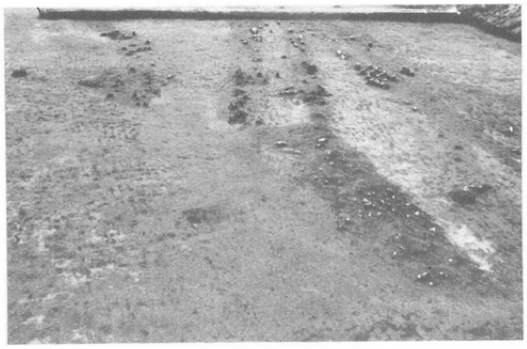
PL. 6 松原第Ⅰ遺跡大溝内遺物出土状況







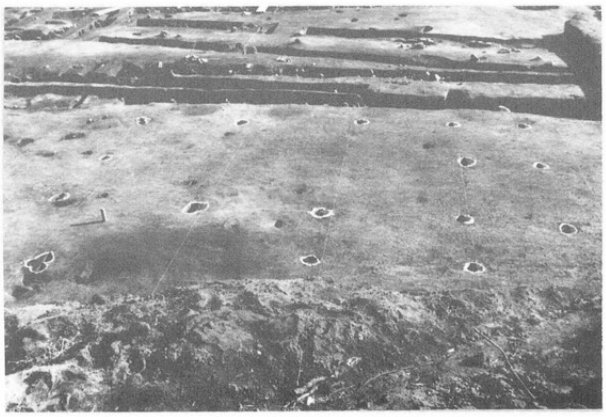
PL. 7　松原第Ⅰ遺跡大溝・1号・2号溝全景



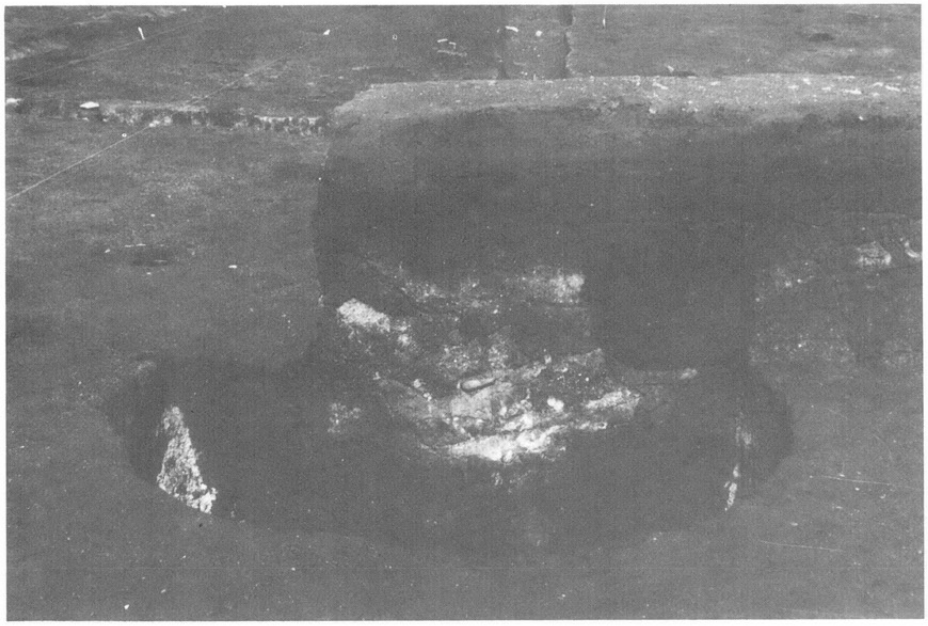
PL. 8　松原第Ⅰ遺跡大溝・溝検出状況

PL. 9　松原第Ⅰ遺跡西側地区溝検出及び完堀状況

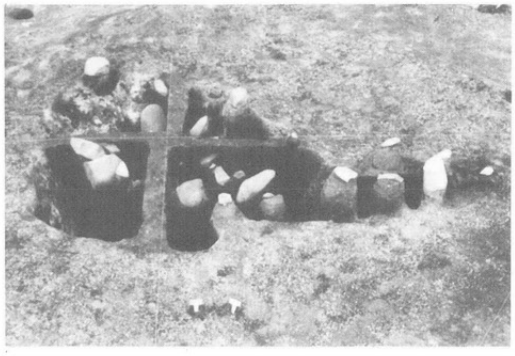
PL. 10 松原第Ⅰ遺跡西側地区土壙及び柱穴出土状況

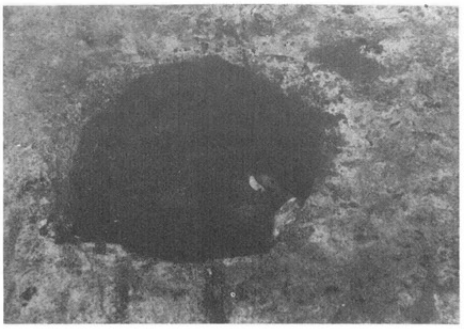


PL. 11 松原第Ⅰ遺跡東側地区柱穴出土状況



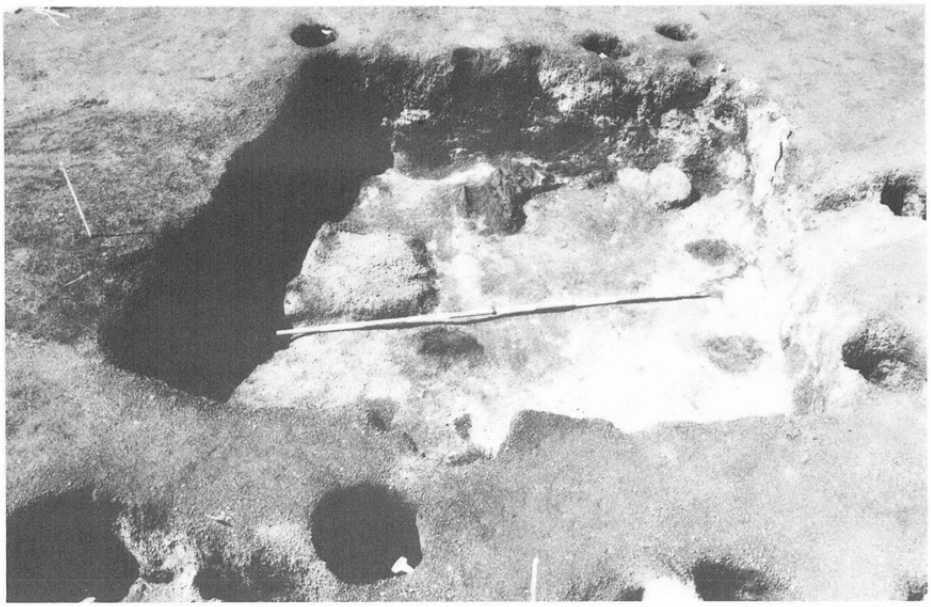
PL. 12 松原第Ⅰ遺跡 2号井戸





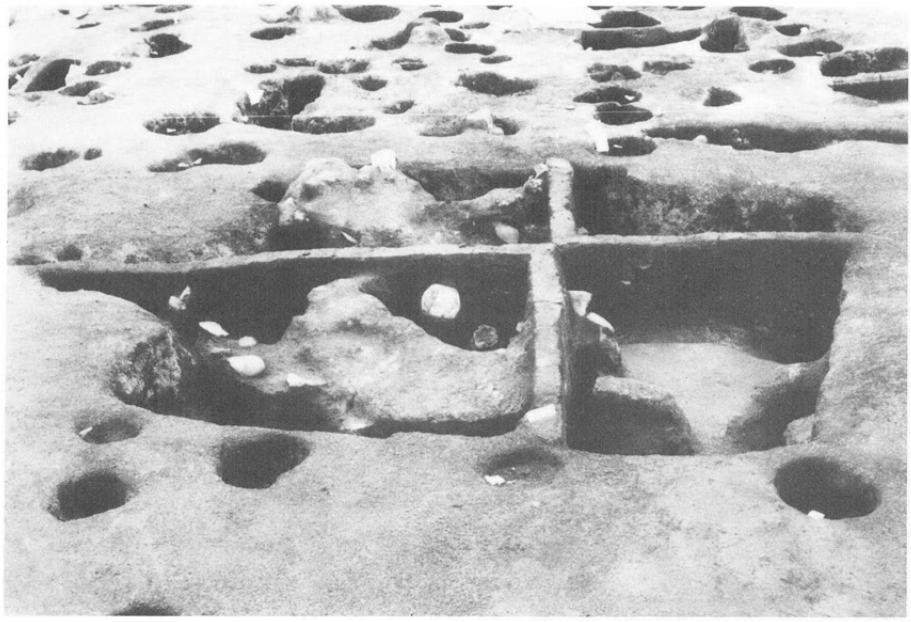
PL. 13 松原第Ⅰ遺跡3号井戸

PL. 14 松原第Ⅰ遺跡 4号井戸

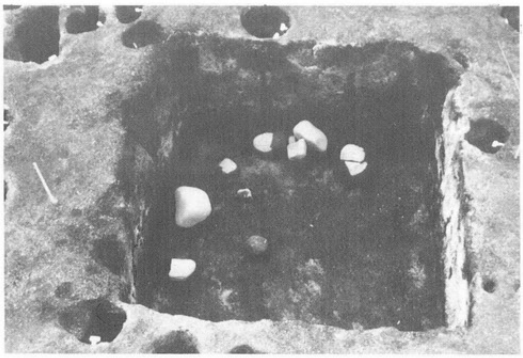


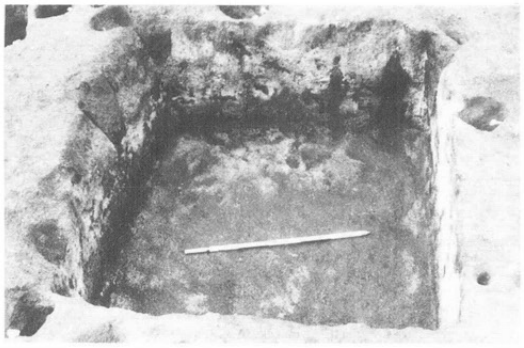
炭化物出土状況

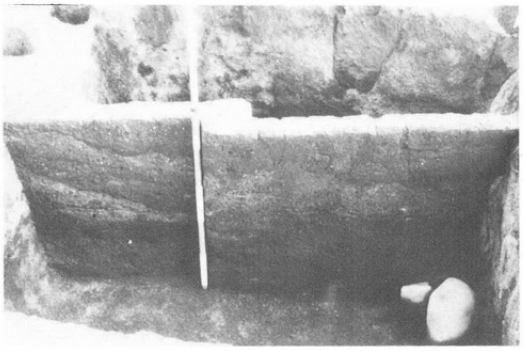
PL. 15 松原第Ⅰ遺跡1号竪穴遺構

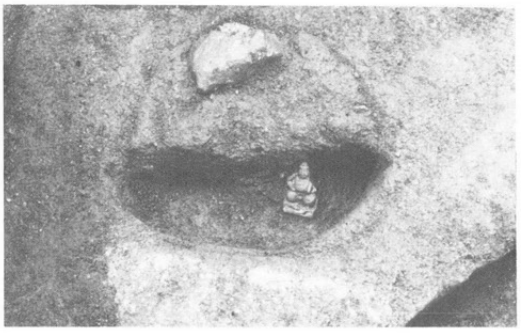


PL. 16 松原第Ⅰ遺跡2号竪穴遺構



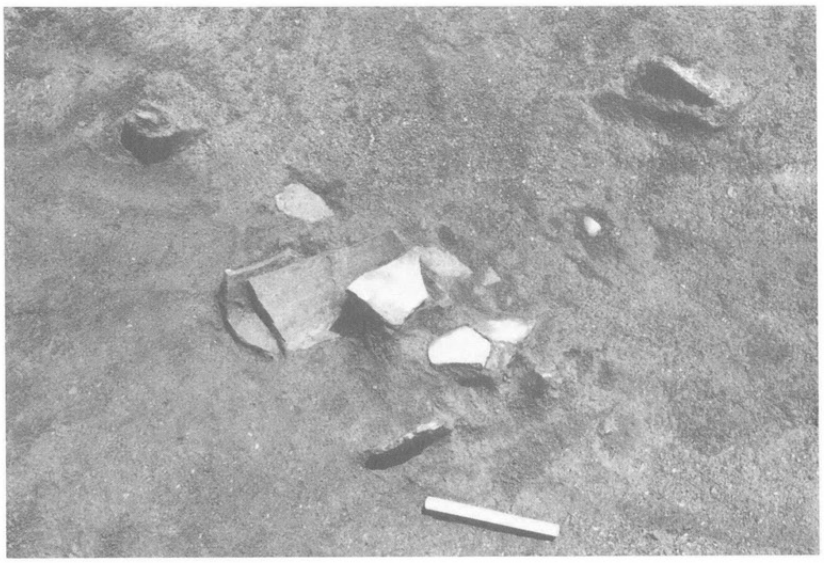




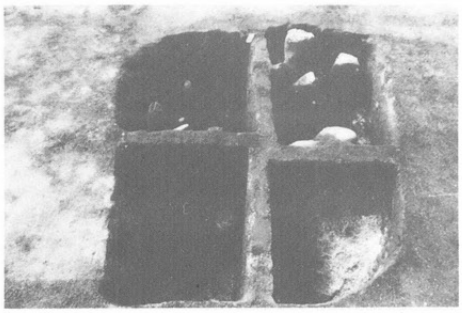


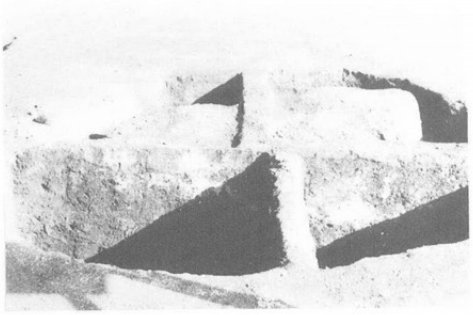
PL. 17 松原第Ⅰ遺跡3号竪穴遺構

PL. 18 松原第Ⅰ遺跡特殊土壙

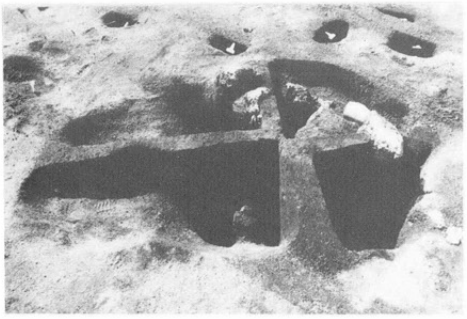


PL. 19 松原第Ⅰ遺跡1号土壙及び遺物出土状況

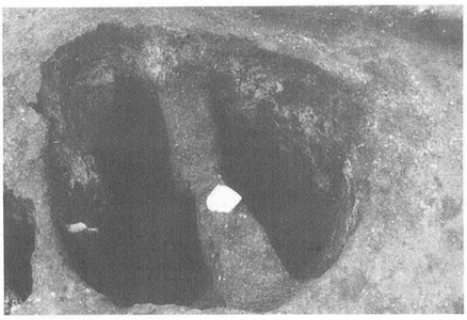




No.20土壙

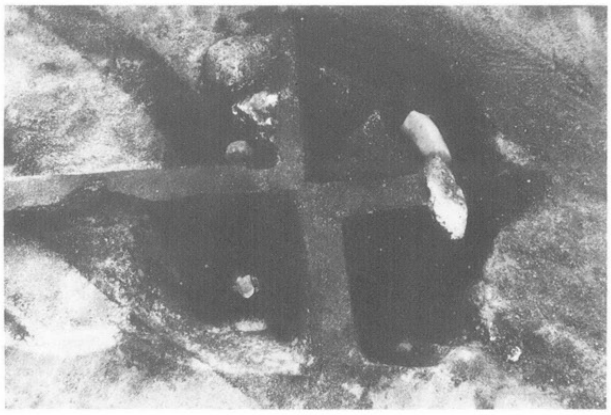


No.24土壙

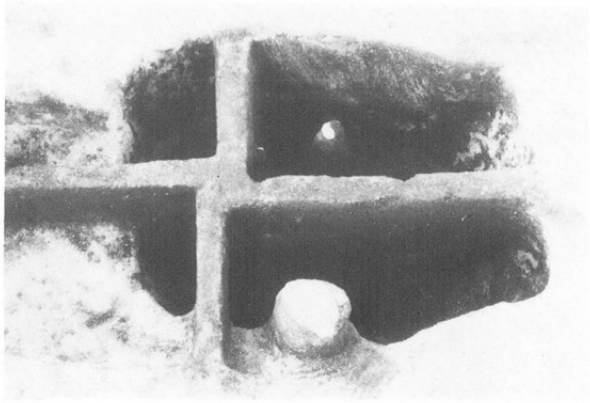


PL. 20 松原第Ⅰ遺跡22号・20号・23号・24号土壙

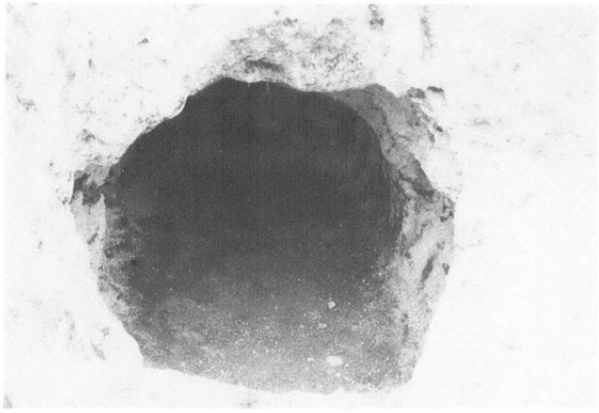
No.23土壙



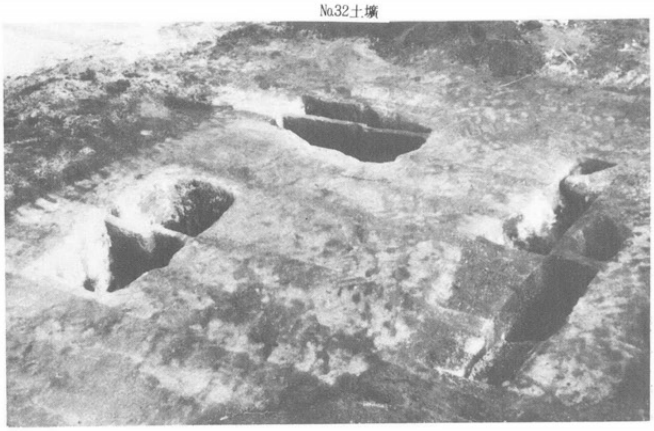
No.24土壙

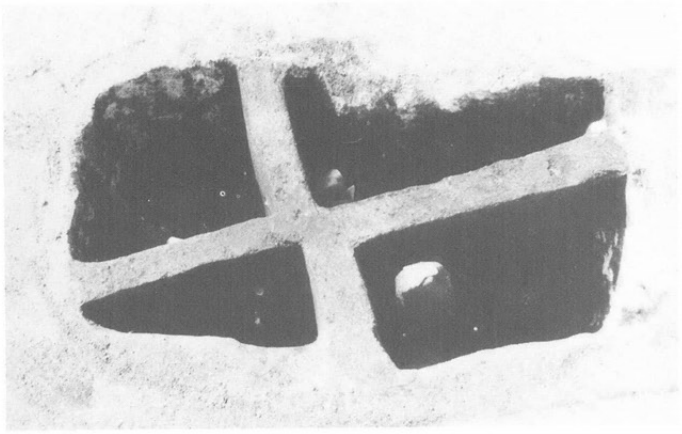


No.18土壙

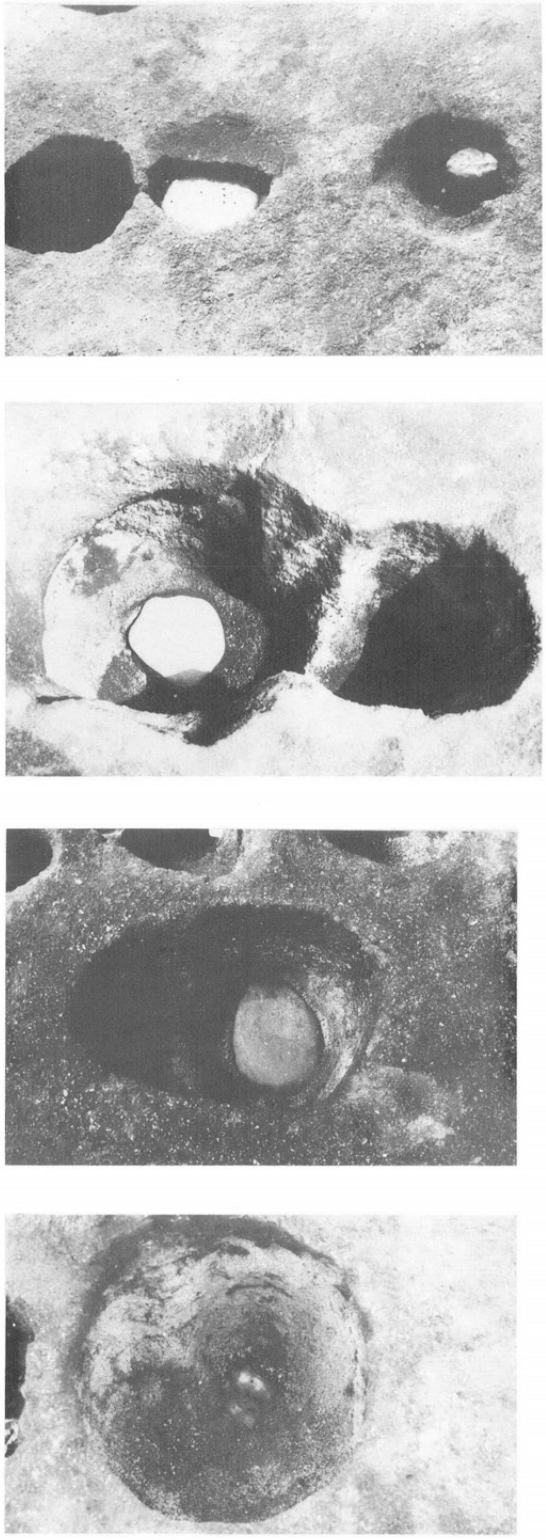


PL. 21 松原第Ⅰ遺跡土壙23号・24号・18号



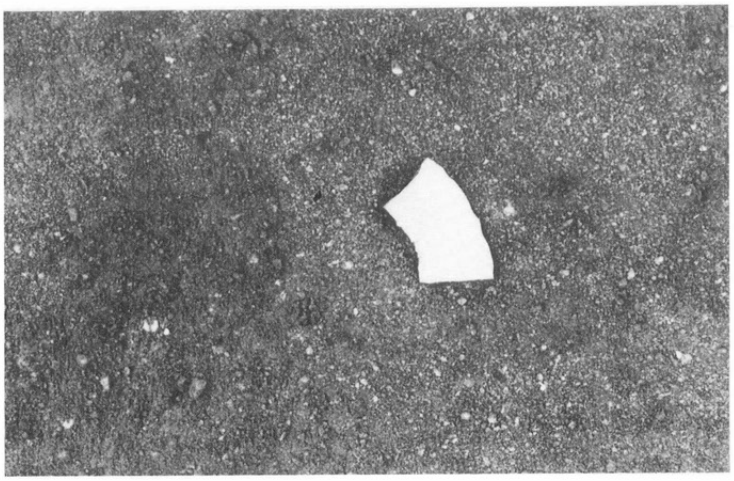


PL. 22 松原第Ⅰ遺跡土壙30号・31号・32号

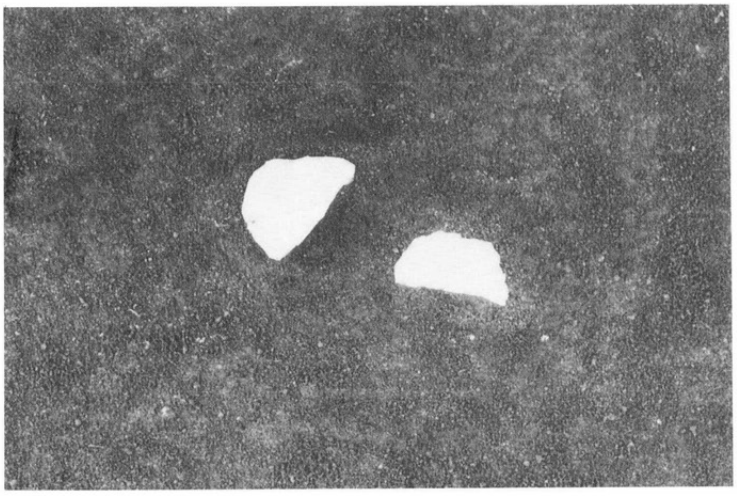


PL. 23 松原第Ⅰ遺跡西側地区柱穴出土状況

大溝・白ボラ上

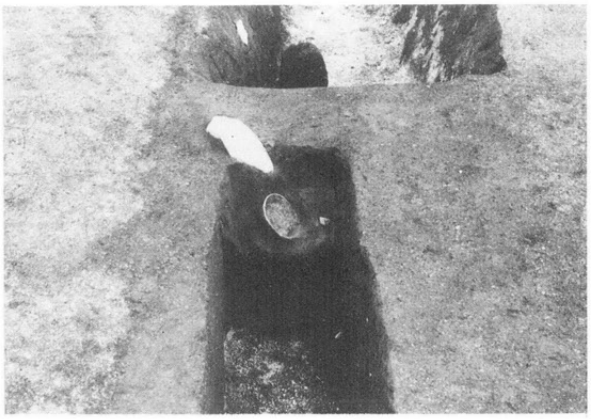


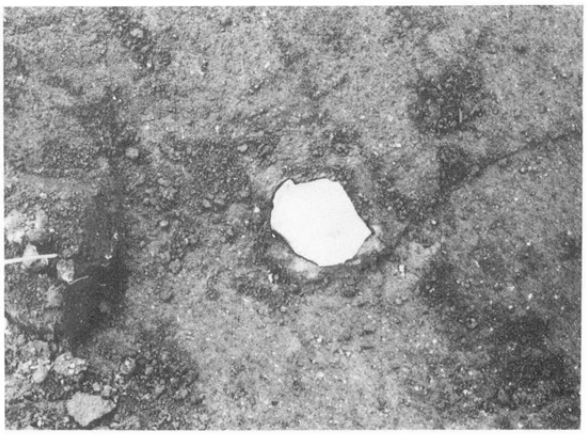
大溝・白ボラ上



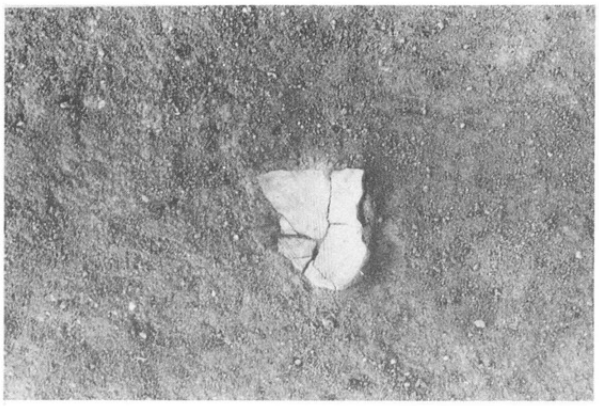
大溝・床面直上

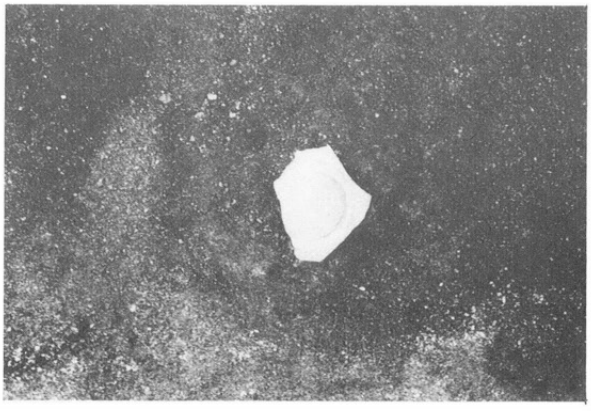
PL. 24 松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況—1



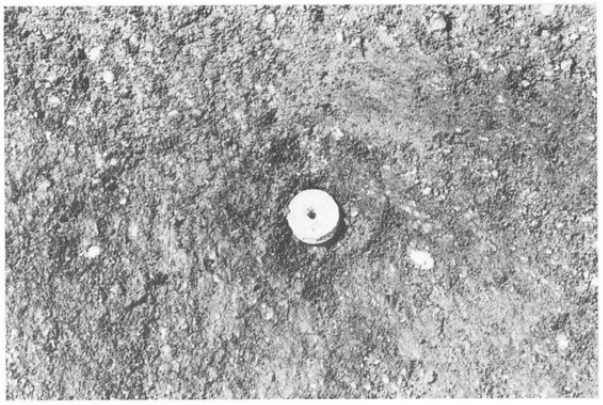


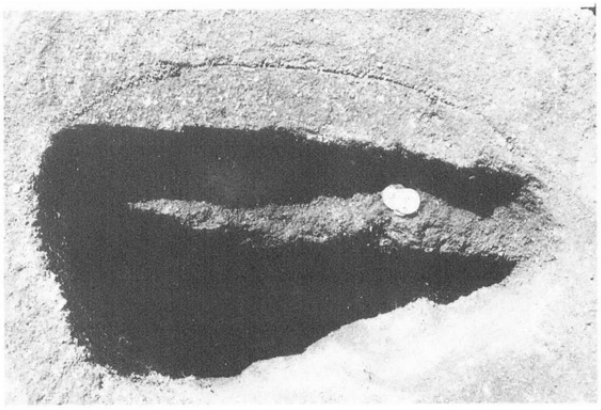
PL. 25 松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況—2

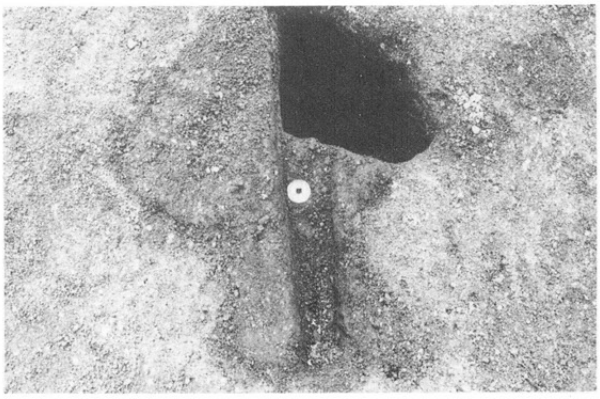




PL. 26 松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況―3

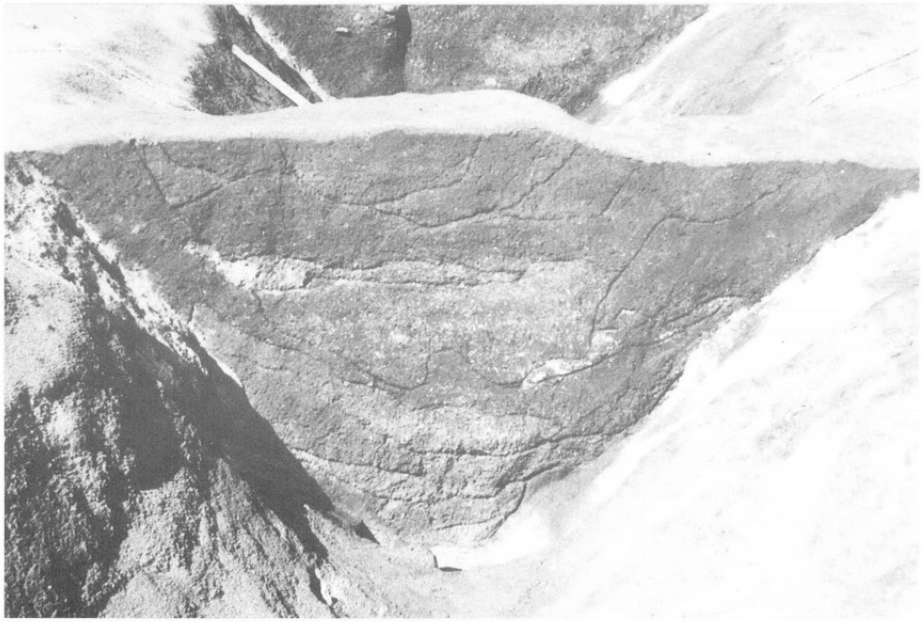




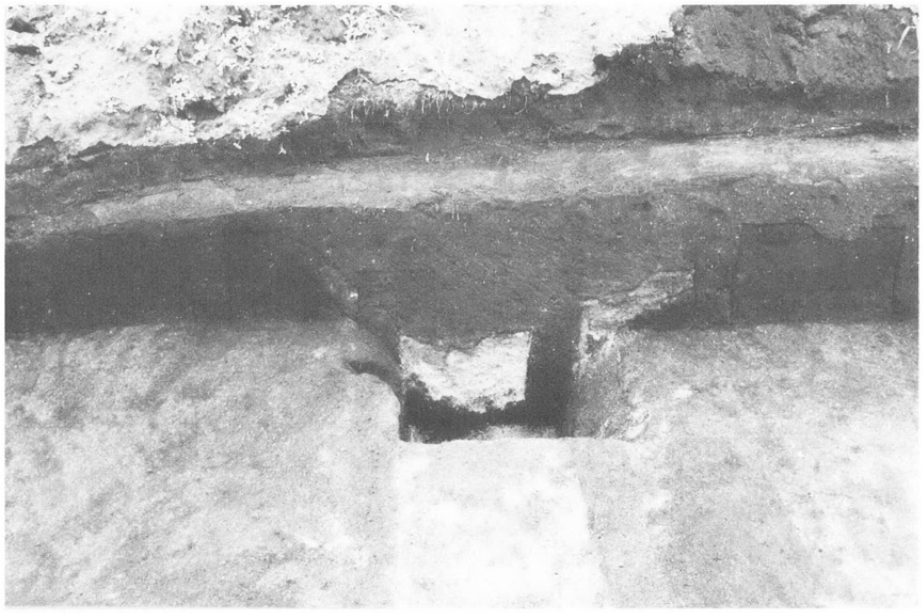


PL. 27 松原第Ⅰ遺跡遺物出土状況—4

白ボラ堆積状況

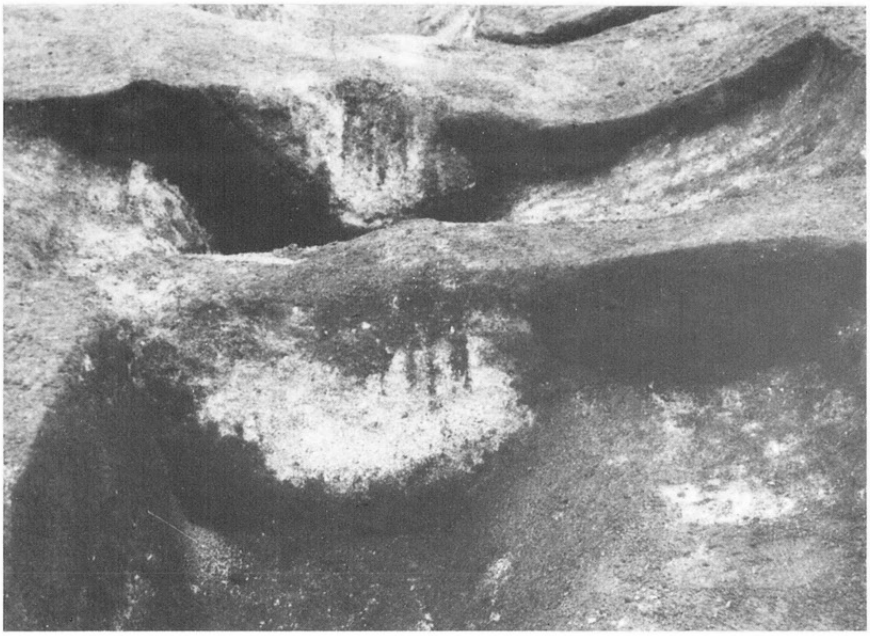


PL. 28 松原第 I 遺跡遺物大溝セクション

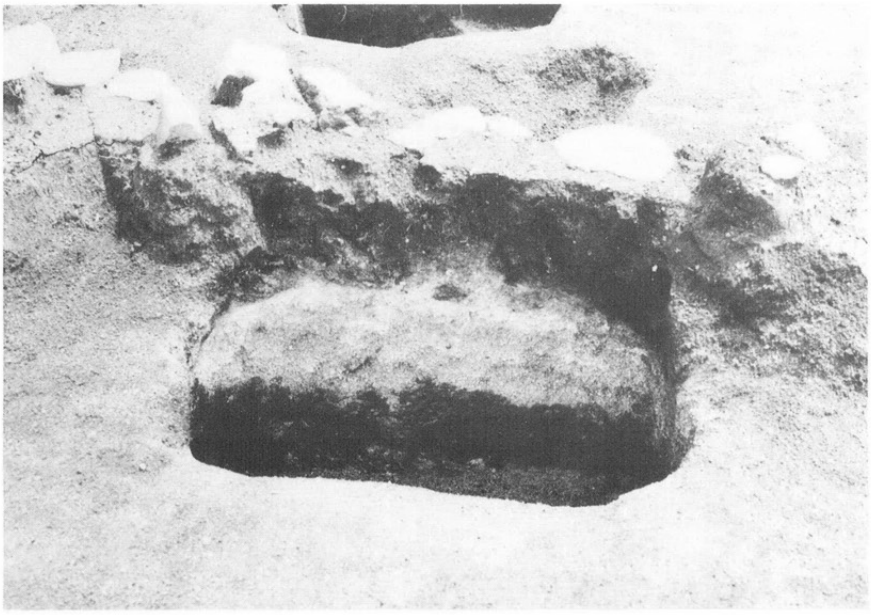


PL. 29 松原第Ⅰ遺跡遺物 2号溝セクション

2号溝白ボラ堆積状況

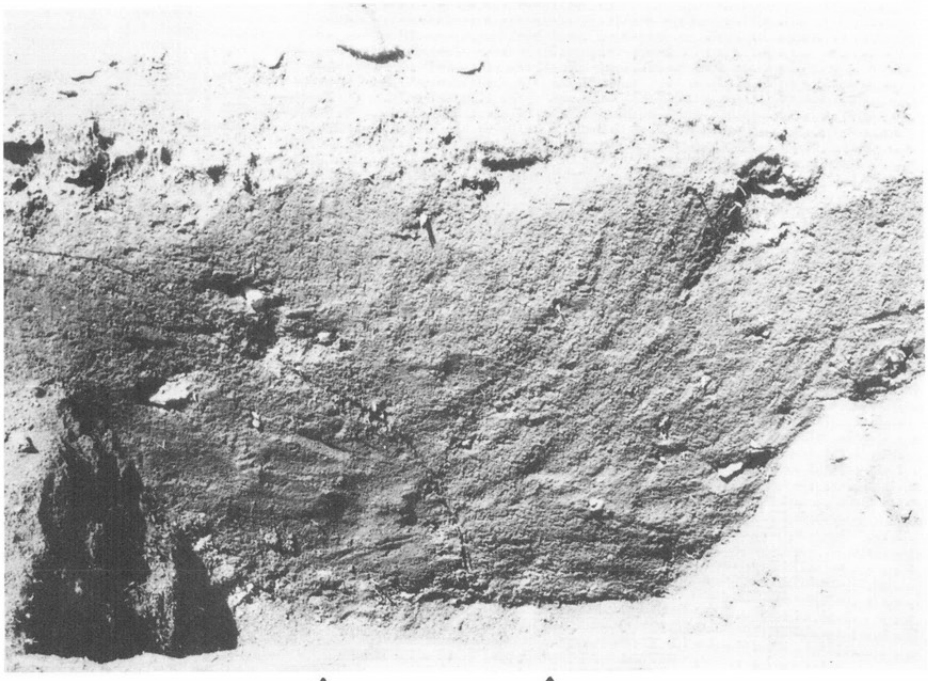


廃棄石群と
2号溝出土状況



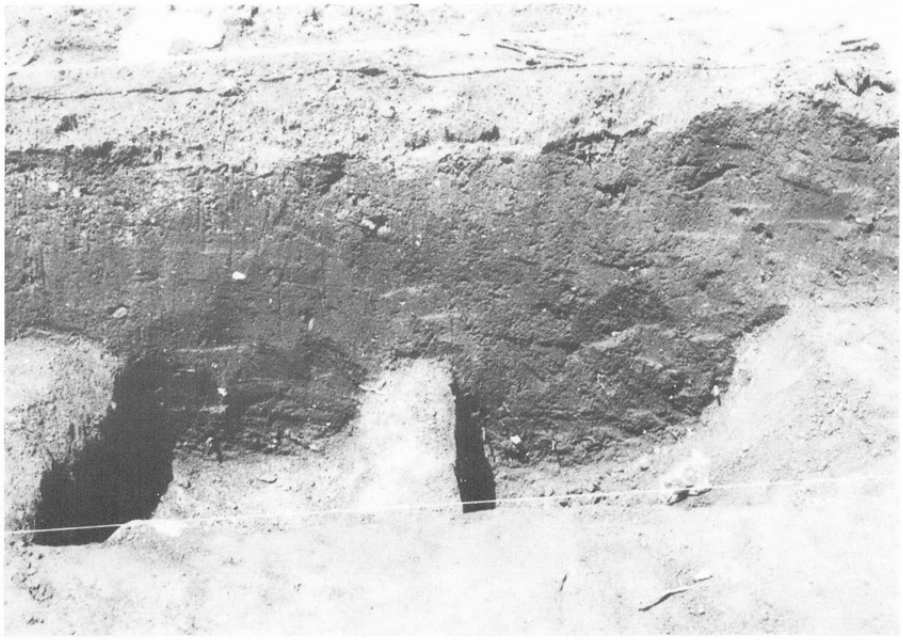
PL. 30 松原第Ⅰ遺跡遺物 2号溝

C－9区
2・3号溝切り
合い状況



2号溝　　3号溝

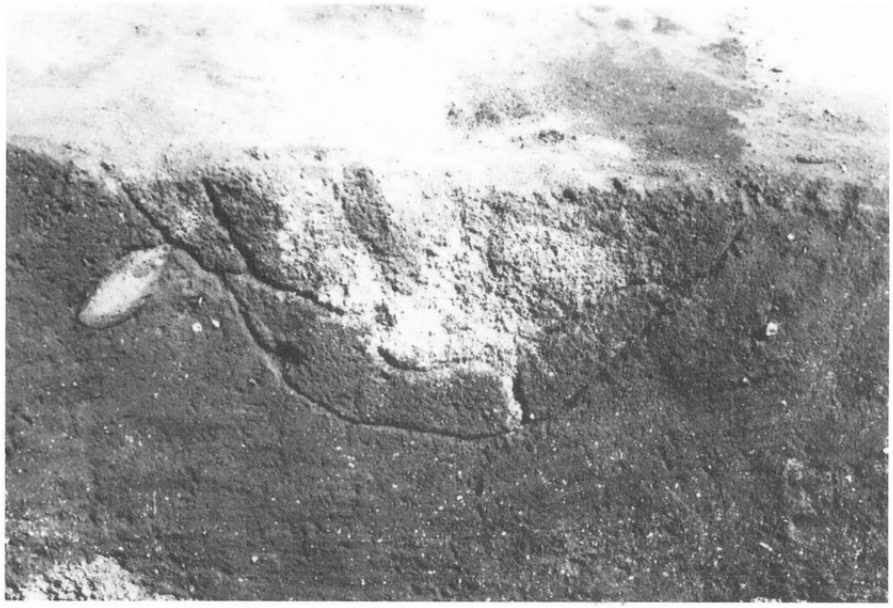
C－9区
4・5号溝切り
合い状況



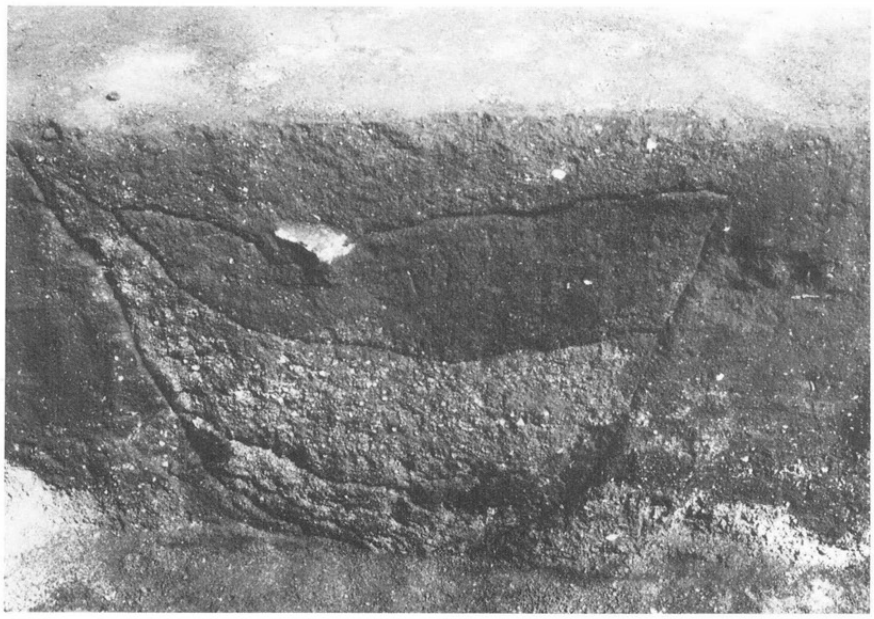
5号溝　　4号溝

PL. 31 松原第Ⅰ遺跡遺物 2号・3号溝及び4号・5号溝切り合い状況

大溝内 2号溝(東より)



大溝内 3号溝(東より)



PL. 32 松原第Ⅰ遺跡遺物 2号・3号溝

002

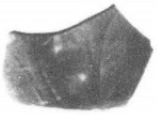
003

004

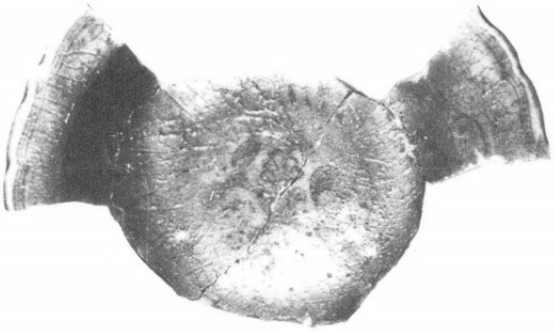
005

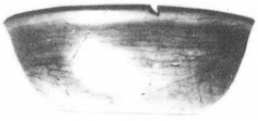
006

007



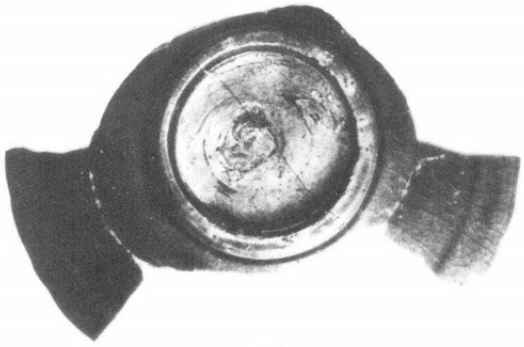
008





009

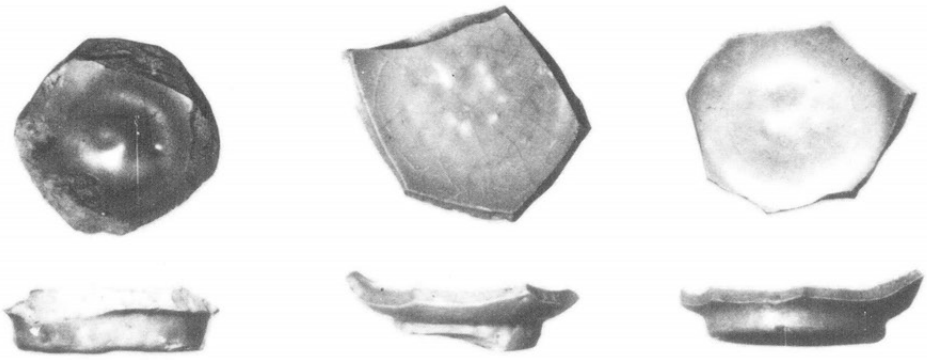
010



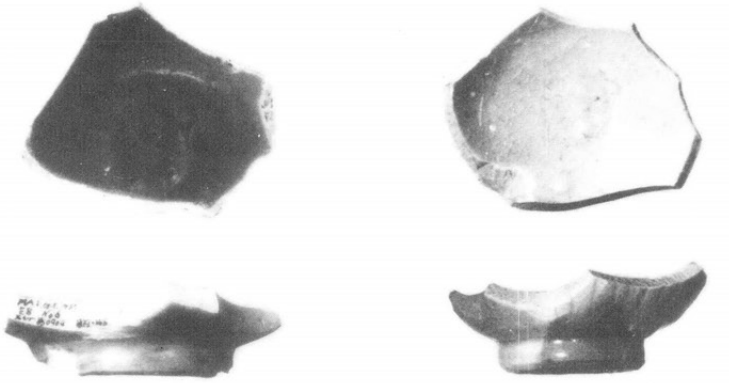
012

011

PL. 33　松原第Ⅰ大溝内出土遺物-1



013　014　015

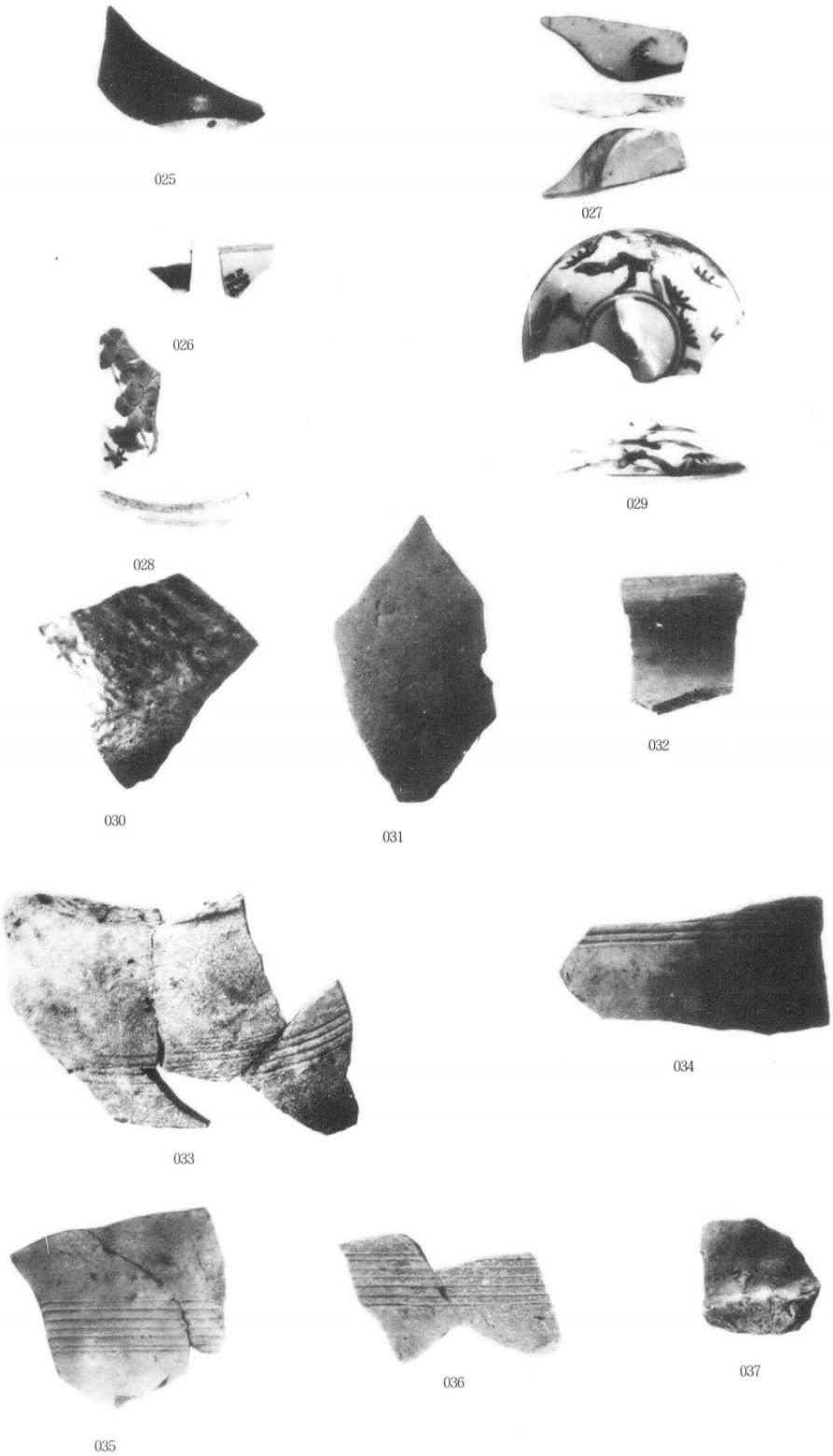


016　017

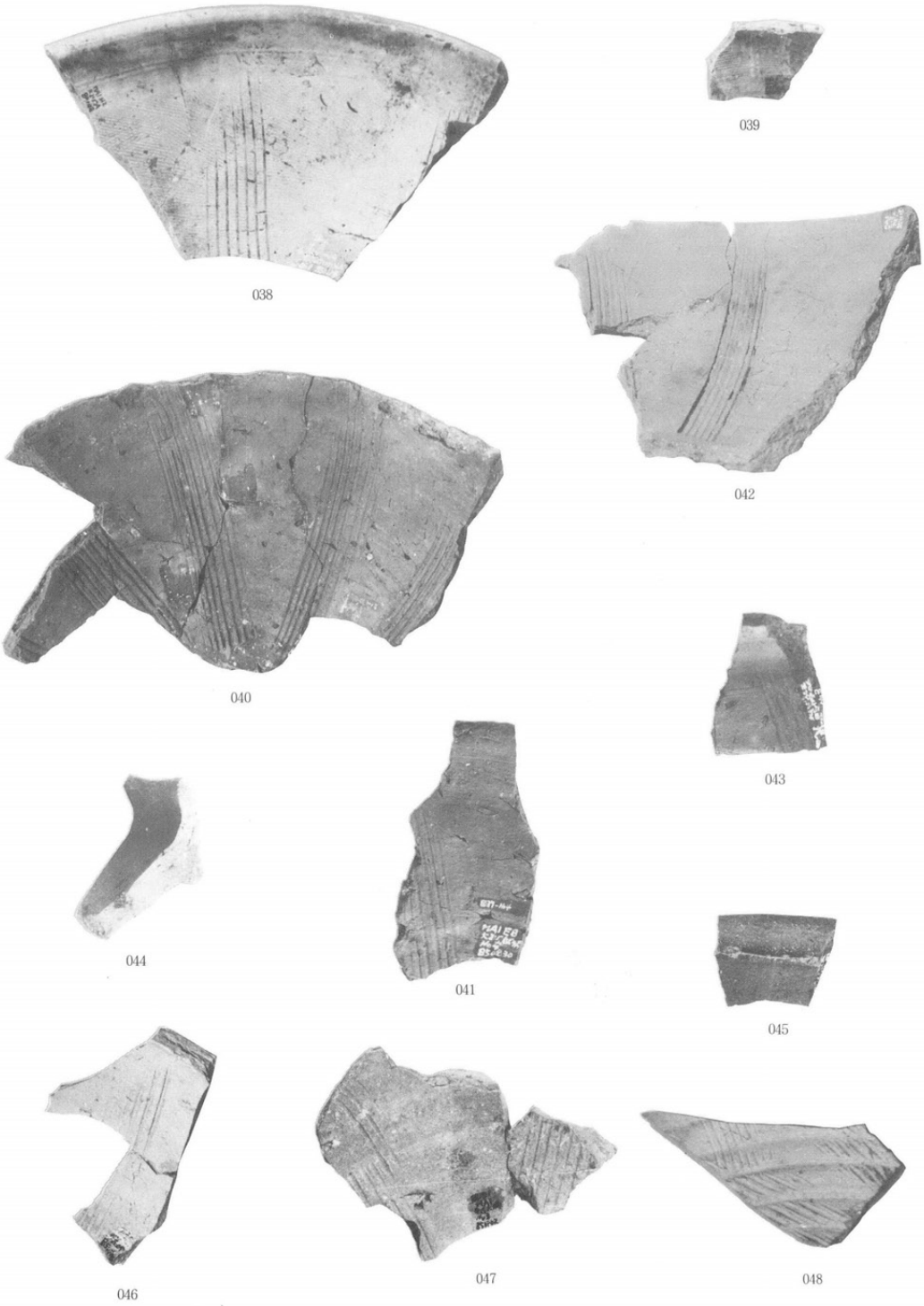
018　019　020　021

022　023　024

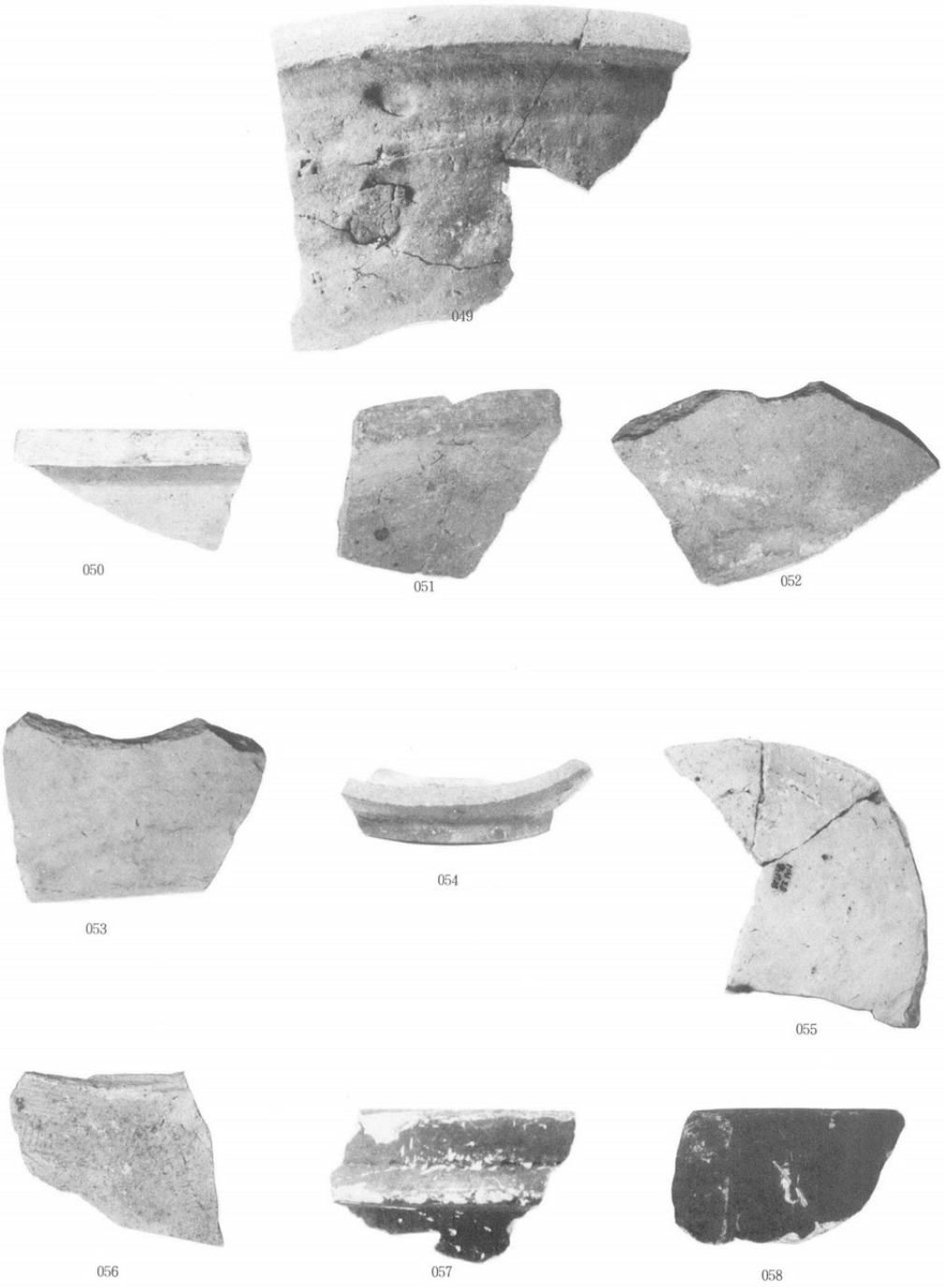
PL. 34　松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物-2



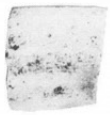
ＰＬ．35　松原第Ｉ遺跡大溝内出土遺物-3・4



ＰＬ．36　松原第Ｉ遺跡大溝内出土遺物-5

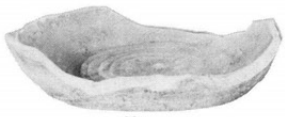


PL. 37 松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物―6



059

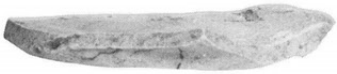
060



061

062

063



064

065

066

067

068

069

070

071

072

073

074

075

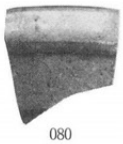
076

077

PL. 38 松原第Ⅰ遺跡大溝内出土遺物―7

078

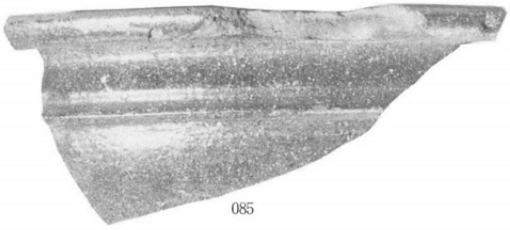
079


080

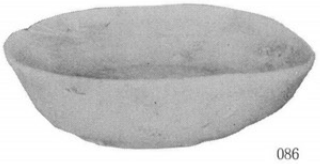
082

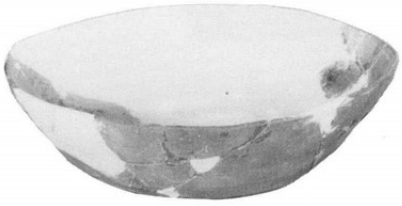
083

081

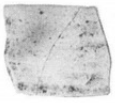

085

084


086


087

088

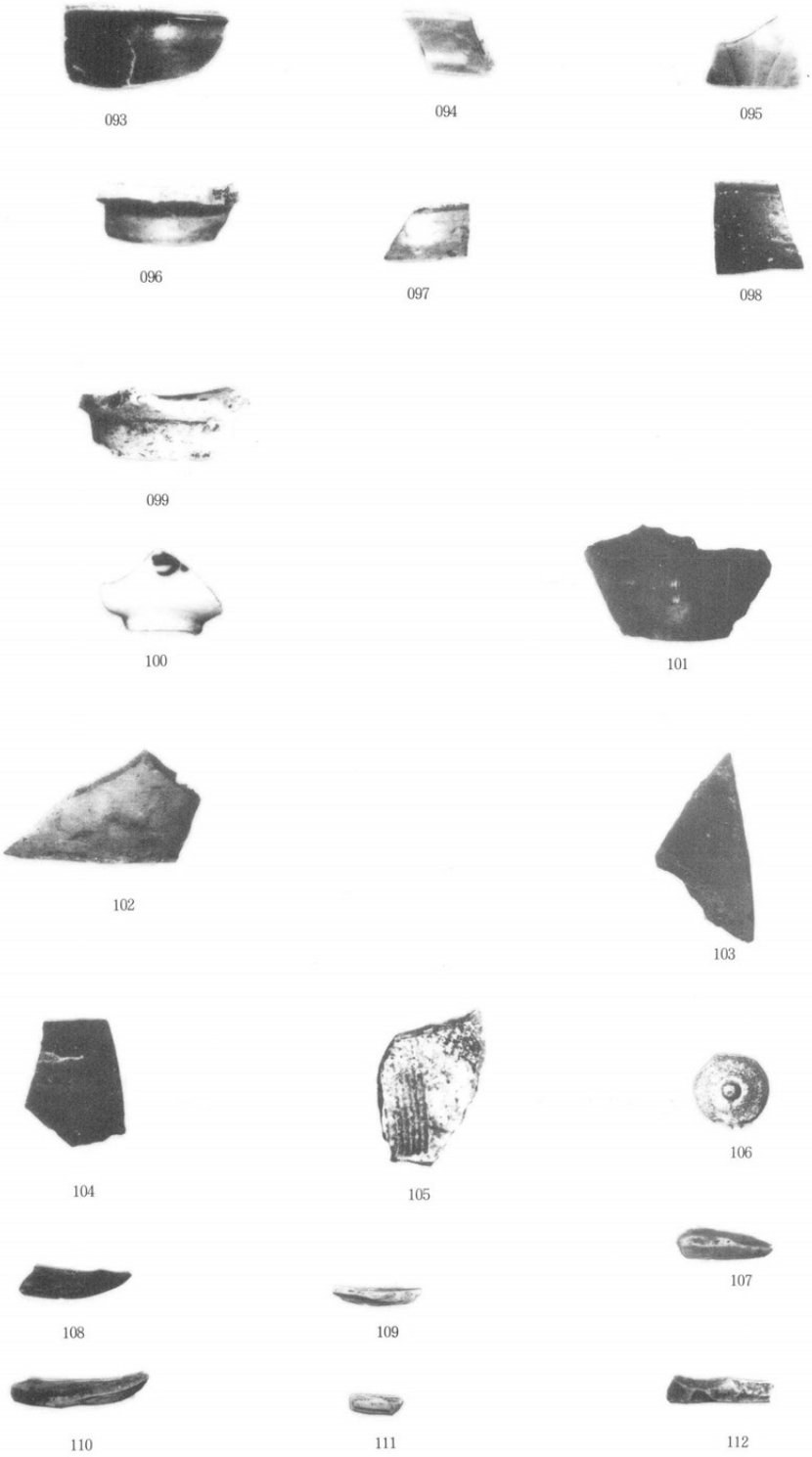

089

090

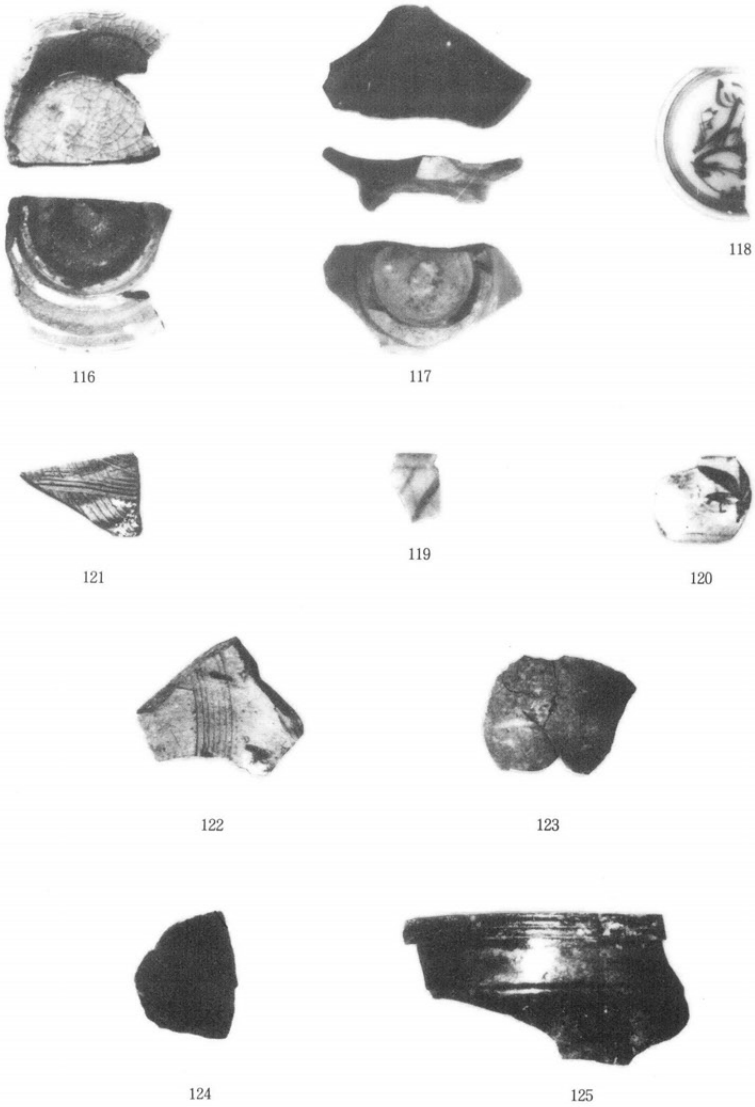
091

092

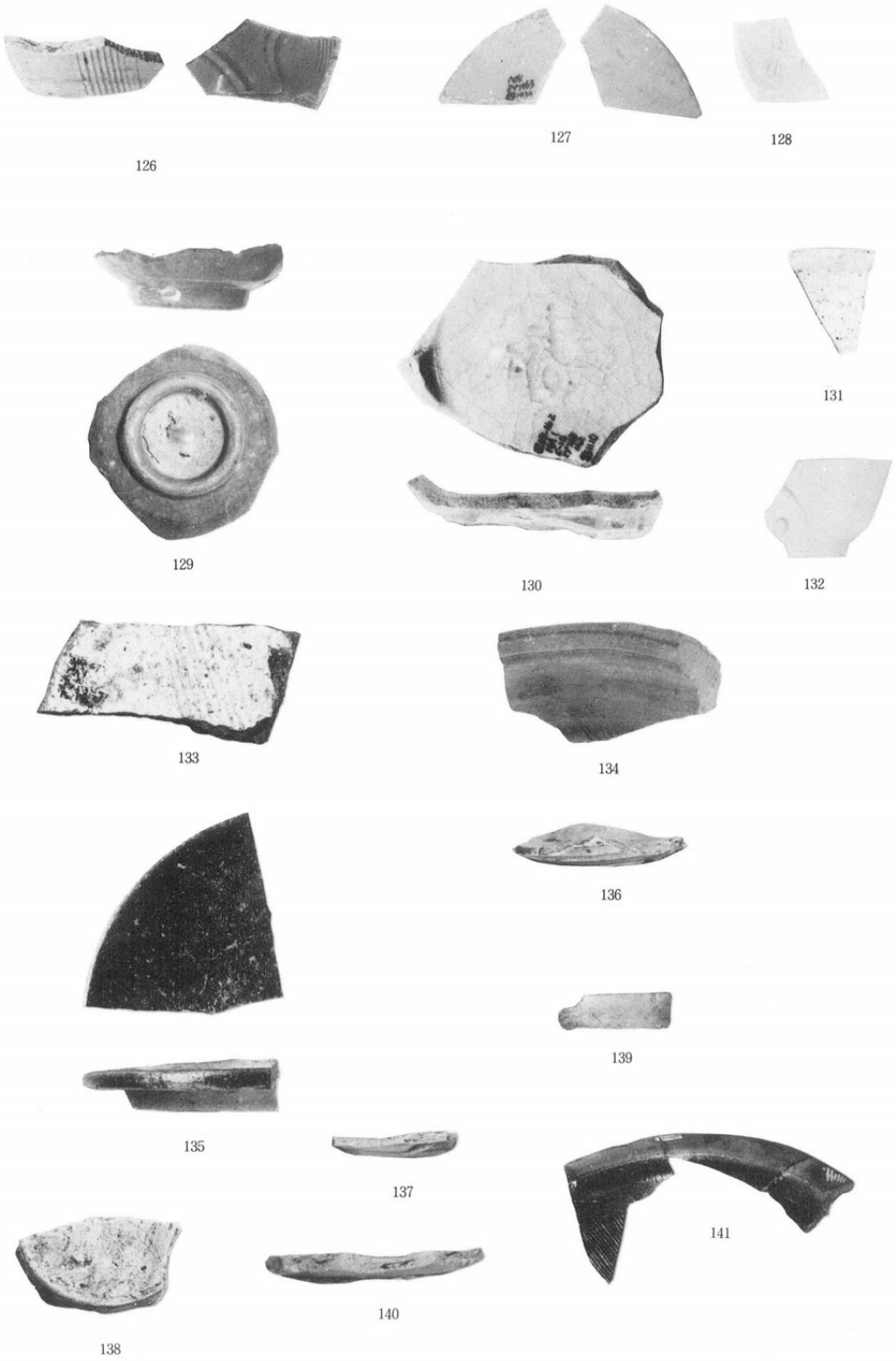
PL. 39 松原第Ⅰ遺跡1号溝内出土遺物



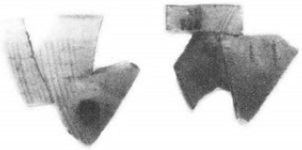
PL. 40 松原第Ⅰ遺跡2号溝内出土遺物



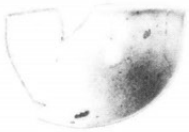
ＰＬ．41　松原第Ｉ遺跡４号溝内出土遺物



PL. 42 松原第Ⅰ遺跡溝3号・5号溝内出土遺物



113



114

115

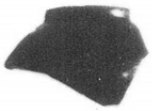
192

193

194

195

196



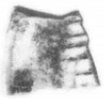
197

198

297

298

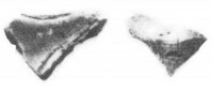
295



296

269

ＰＬ．43　松原第Ｉ遺跡６・13号溝、５号井戸、21号、26号土壙及び西側ピット群内出土遺物



142

143

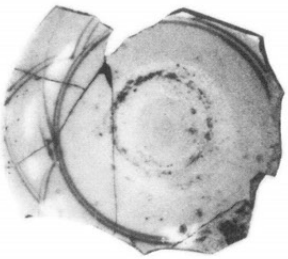
144

145

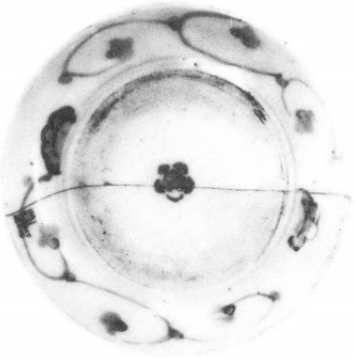
147

146

148

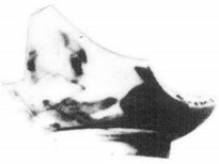


149



150

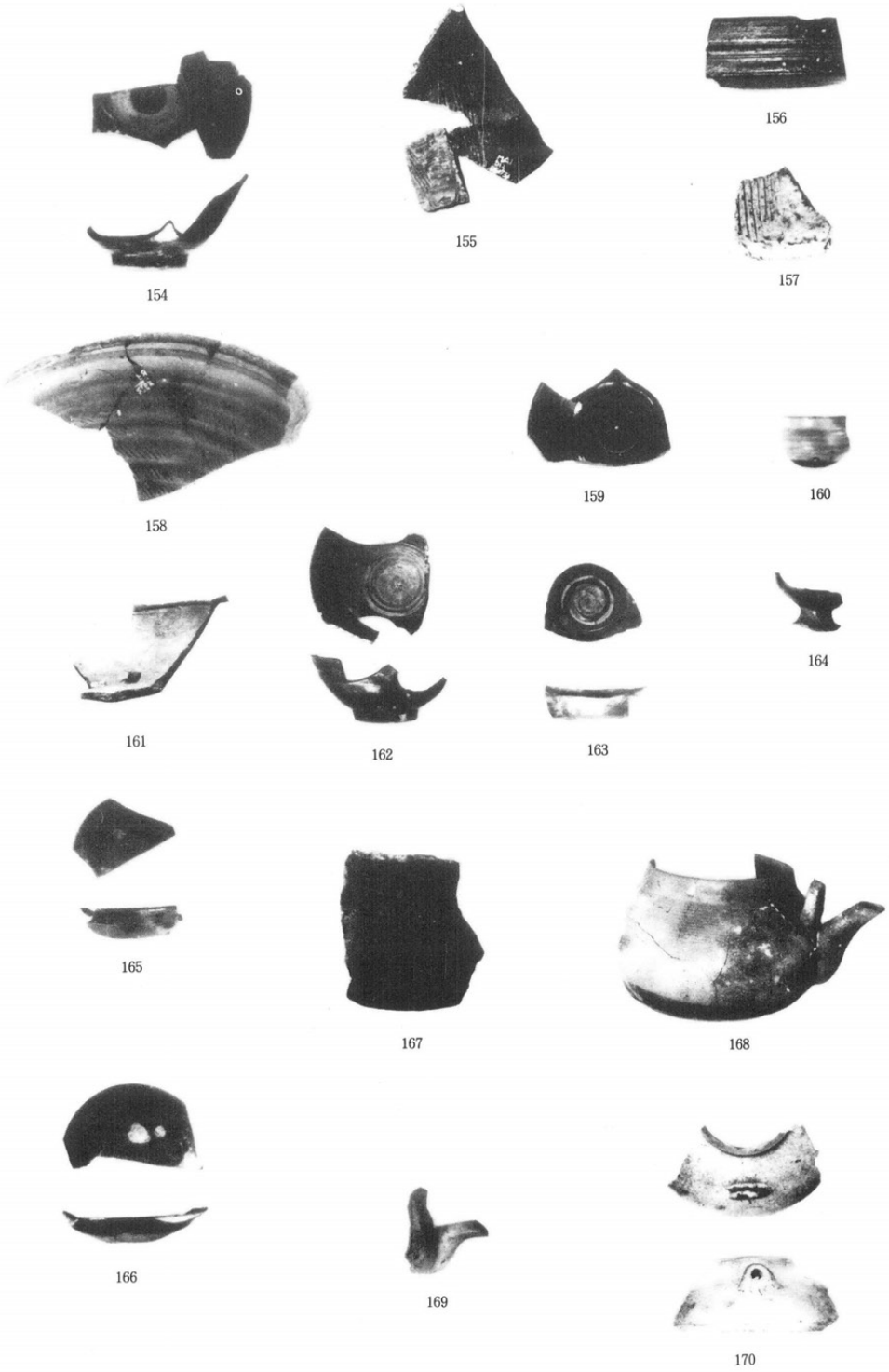
151



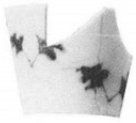
152

153

ＰＬ．44　松原第Ｉ遺跡７号溝内出土遺物-1



ＰＬ．45　松原第Ｉ遺跡７号溝内出土遺物-2



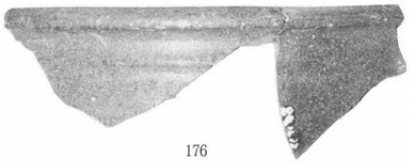
171

172

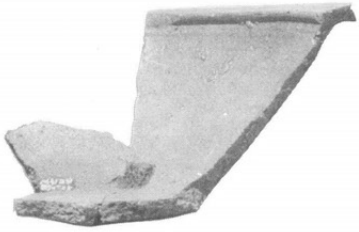
174

173

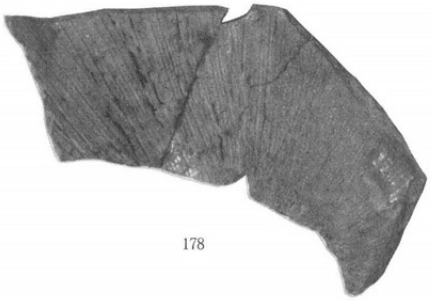
175



176



177

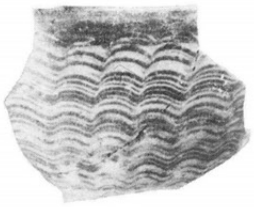


178

PL. 46 松原第Ⅰ遺跡7号溝内出土遺物-3

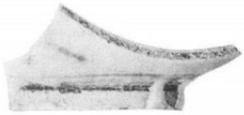
179

180



181

182

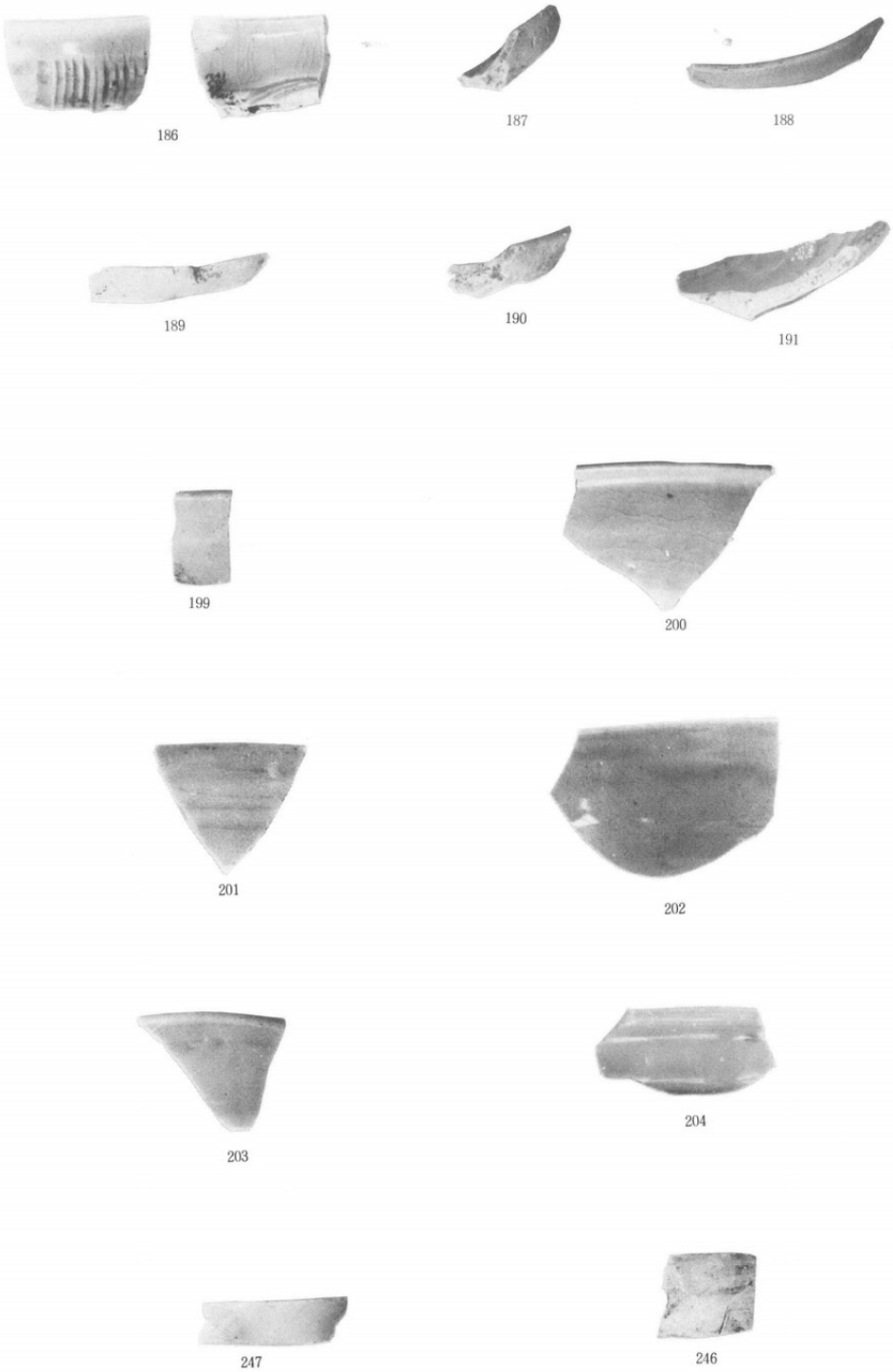


183

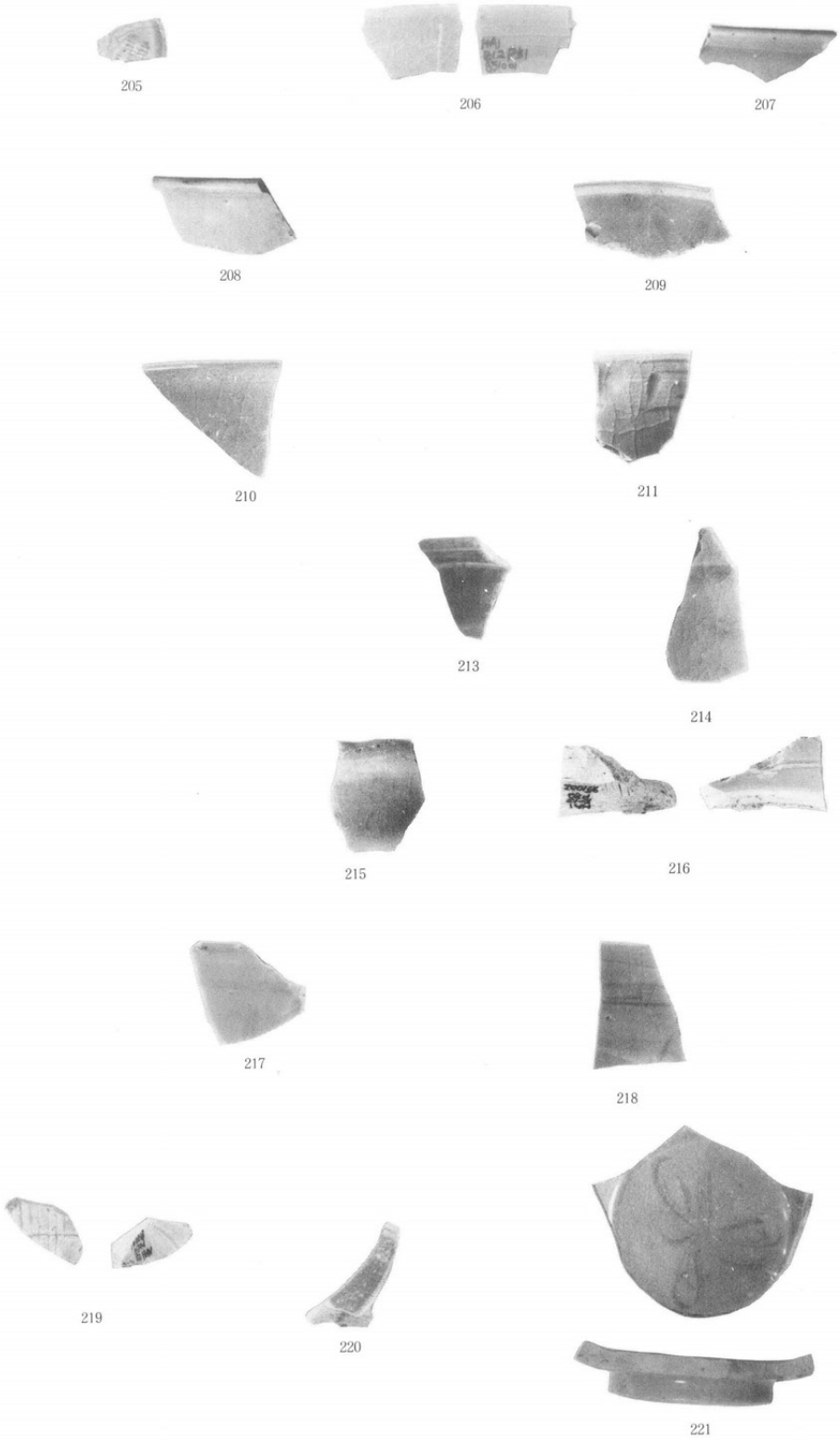
184

185

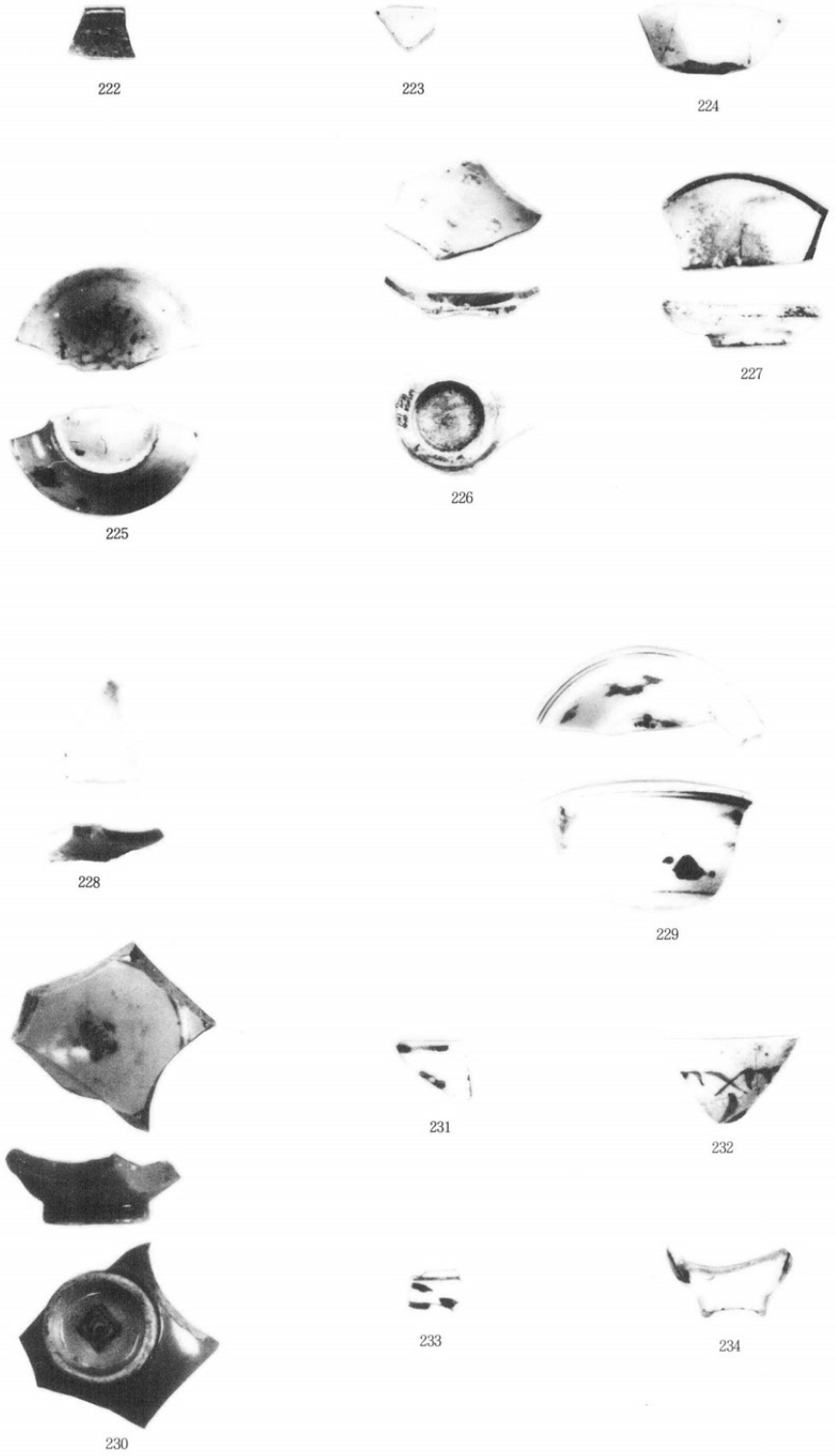
PL. 47 松原第Ⅰ遺跡８号・９号・11号溝内出土遺物



PL. 48 松原第Ⅰ遺跡掘立柱建物柱穴及び1号井戸内出土遺物



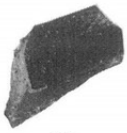
PL. 49 松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物―1



ＰＬ．50　松原第Ｉ遺跡東側ピット内出土遺物-2

235

236



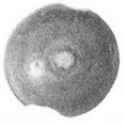
237

238

239

240

241



243

244

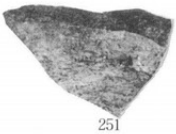
245

PL. 51 松原第Ⅰ遺跡東側ピット内出土遺物―3

248

249

250



251

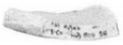
252

253

254

255

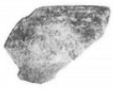
256



257

258

259

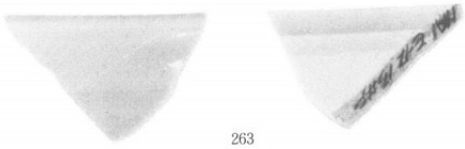


260

261

262

PL. 52 松原第Ⅰ遺跡3号井戸内出土遺物



263

264

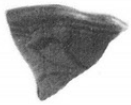
265

266

267

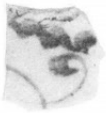
268

PL. 53 松原第Ⅰ遺跡4号井戸内出土遺物

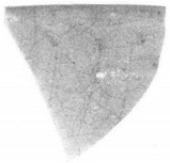


270

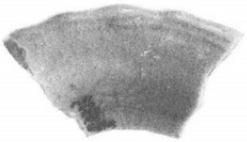
271



272

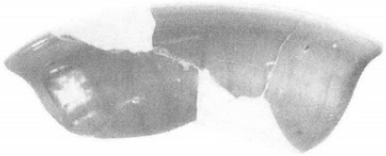


273

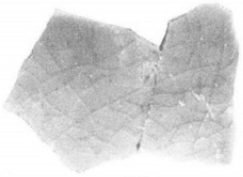


276

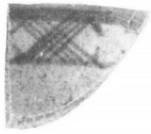
275



274



277



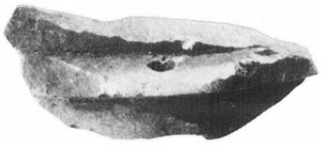
278

279

PL. 54 松原第Ⅰ遺跡1号・2号・3号竪穴遺構内出土遺物

280

281


282

283

284

285

286

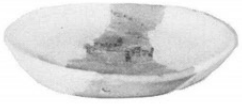
287

288

289

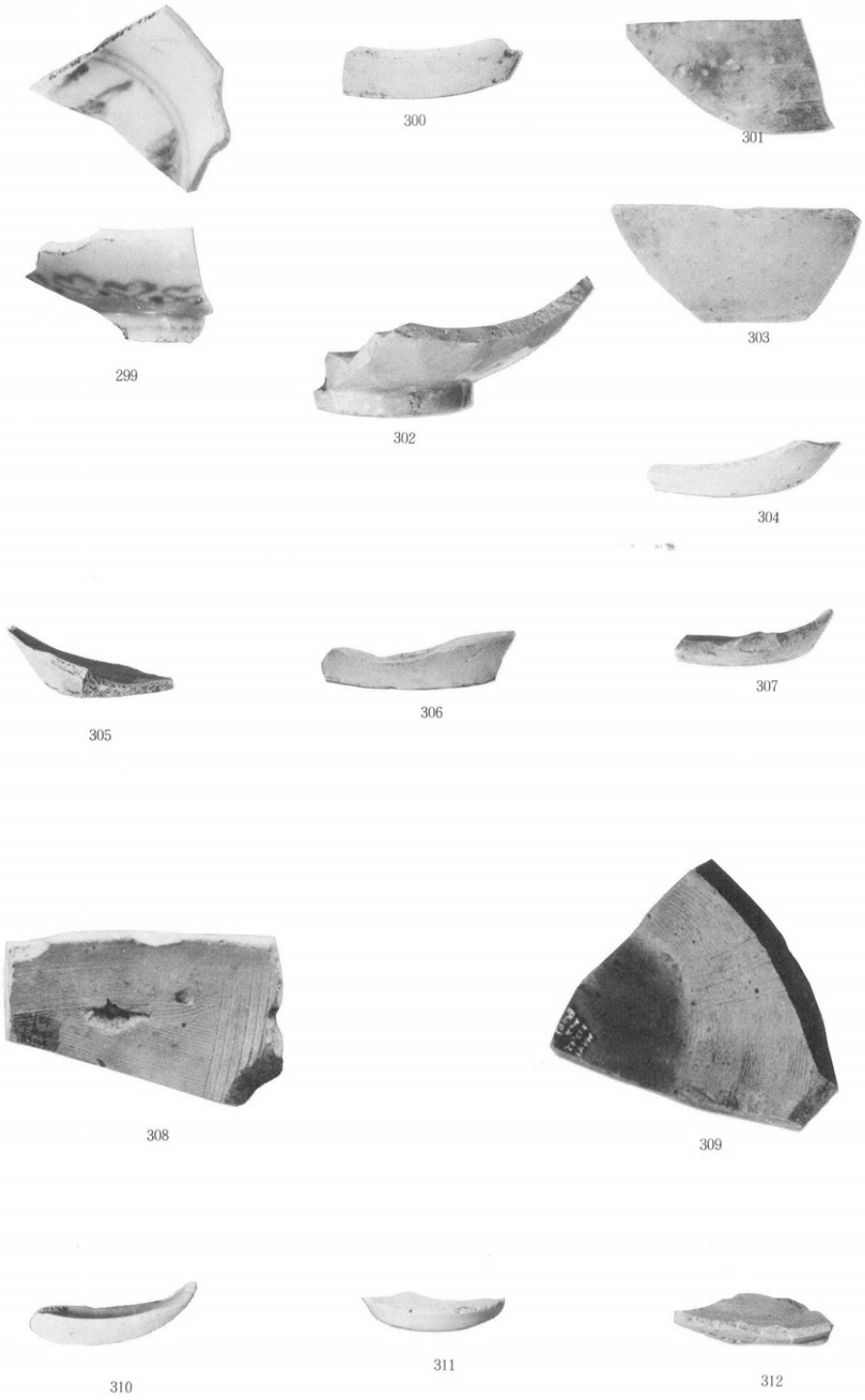
290

291

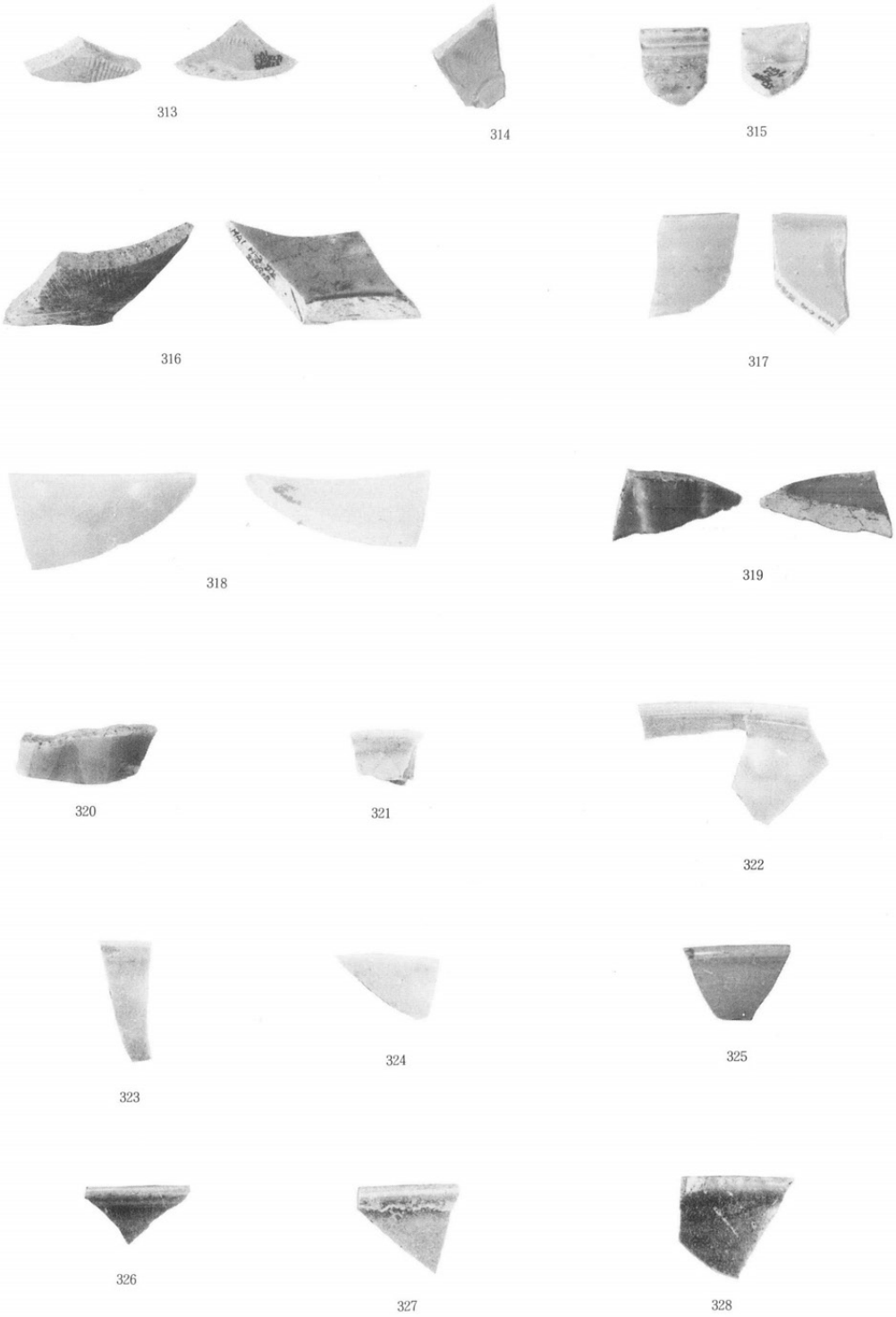

292

293

PL. 55 松原第Ⅰ遺跡特殊土壙内出土遺物



PL. 56 松原第Ⅰ遺跡土壙内出土遺物



PL. 57 松原第Ⅰ遺跡出土遺物—青磁 1